

量地指南

自一
至五

後編

七十三考
共二

△ 1
5195
2止



門 41
號 5195
卷 2

量地指南後篇序



嗚乎天地之道尚德而右功
算數以功之所由起也故古聖
人列之六藝豈可忽之乎執力
南源昌弘為人博厚其才敏
捷銳意算數焦思斲之窮日之

越三山
高田
印

早稻田大學圖書館
藏 26.6.7 雙書

量地指南後篇序

力一旦豁然曰其妙矣於是
著量地說三篇曰行小世又
化後篇藏諸帳中未示人而卒
其子定興一日奉其書踵余門
再拜曰為人子者不隕家業之
為大矣故敢續之上梓請子
以文冠其首乃受親其書

搜討摛摭揅讀鈞隱緒之
地乎尺寸物以何乎抄忽包羅
不泄纖悉無遺宛然如示諸
掌上法算數之至大而昌
弘之勤也何不與人共焉蓋
立之而朽昌弘固而為也故羅

絡諸氏之異同別決而得其中非夫貪常嗜瑣者之屬於百曠日窺其鹽豉在是亦揉一隅背馳乎此則中傷子昌弘昌弘既悟術而疾既寧學事而終可謂不

幸矣而其子續之以敷同志余以姻屬且嘉其勤曰序之以釋弟子首于時寬政丁巳七月上浣
武陵丸山久敬叙



皇也皆百後篇序

をりふ者。皆かゝるごとく。いふあり。昌弘書より
 之事。更ふ違ふこと。近年丹波の美作
 輿地之書を綴りて。その後。むらさき
 関り。鳴呼の体。をいふ。更。制。をいふ。是。を。用。ん。と
 稱。也。且。天。城。の。制。定。も。あ。り。是。を。用。ん。と
 する。も。方。が。也。尤。天。城。を。辨。して。心。算。し。て。多
 多。の。か。ら。ぬ。と。い。ふ。事。は。遠。く。て。い。ふ。事
 中。事。は。天。城。を。辨。し。て。心。算。し。て。い。ふ。事。は。遠
 仍。今。試。し。て。之。法。を。例。し。て。考。へ。る。事。は。亦。如。斯。の
 大。異。を。あ。り

一 是も折角前後為御名總て一百九十一之際

前編五十八條
後編百卅五條

是をいふ。是も折角前後為御名總て一百九十一之際
 片をり。故て他も當じ。いふ。改。め。船。路。の。考。城。圖。の
 傳。北。極。の。試。遠。里。此。動。一。本。の。御。極。傳。の。御。名。は
 諸。流。と。い。ふ。大。事。な。事。は。御。極。の。所。に。あ。り。と。い
 ども。世。に。此。部。を。御。極。と。い。ふ。事。は。亦。如。斯。の。御。名。は
 然。る。事。は。亦。如。斯。の。御。名。は。亦。如。斯。の。御。名。は。亦。如。斯。の。御。名。は
 圓。圖。要。用。此。傳。小。説。極。積。の。傳。上。の。事。は。亦。如。斯。の。御。名。は
 傳。理。則。實。例。の。傳。流。儀。道。統。の。傳。等。を。於。て。い
 考。へ。御。極。の。印。證。の。底。蘊。を。い。ふ。事。は。亦。如。斯。の。御。名。は
 難。し。く。い。ふ。事。は。亦。如。斯。の。御。名。は。亦。如。斯。の。御。名。は。亦。如。斯。の。御。名。は
 たり。諸。事。子。謹。に。國。圖。の。御。名。を。傳。へ。ん。と。い
 御。名。を。傳。へ。ん。と。い。ふ。事。は。亦。如。斯。の。御。名。は。亦。如。斯。の。御。名。は。亦。如。斯。の。御。名。は

於とあて勿也。是予が術をよめりて邪秘す
るふ河くも。恐くく人ほ學を好む
こと好りふてちりる

寶曆四甲戌夏六月 村井蕪道子昌弘識



量地指南後篇稿之總目次

▲卷之一 雜品解 術名二十一條

- 一 規矩全書上卷術名
- 二 規矩全書中卷術名
- 三 規矩全書下卷術名
- 四 同流三四書之術名
- 五 別卷術名異
- 六 一本術術名異
- 七 寸尺用捨
- 八 算法用捨
- 九 現差用捨
- 十 九例定格
- 十一 分基發法
- 十二 見盤大成
- 十三 盤切用法
- 十四 古盤繼用法
- 十五 不拘器物
- 十六 寸尺之用
- 十七 己尺之用
- 十八 大圖寫之用
- 十九 收器之用
- 二十 舊器之號
- 二十一 新器之號

▲卷之二 器用解 術名二十六條

- 一 磁石切要並見込様
- 二 指針塵
- 三 指針塵
- 四 隱針塵
- 五 順逆振様

六高下振樣七振分八隱銘九逆磁石十忍磁石十一立覽器

十二小丸之用 十三中丸之用 十四大丸之用 十五方維圓盤

十六元器之用 十七分度之用 十八渾發之用

十九方尺之用 二十磁試定木 二十一折紙之用 二十二隨川器之用

二十三虎法器之用 二十四圖寫器之用 二十五間竿之用

二十六間紙之用

卷之三極傳解 術名二十七條

一夜中間町 二船路之考 四術 五並船路器械

七遠里之考 八並遠里之矩 九北極之考

十真矩之繩 二術 十一地形高低 三術 十二極中不中片極

十三土手陰知木高一術 十四大高指何分

十五向指真矩二術 十六自服指真矩 十七天守櫓知居所

三用山表裏 四寫山形 五賣山形

六求山斜登 七知山厚

卷之四算勘術 術名二十九條

一算勘之辨 二器械之制 三町見術名

四四町見之辨 五並平町見 六上町見 七下町見 八向町見

九廣遠町見二術 十乱面町見 十一知遠近

十二知廣狹遠近 十三並扇矩 十四知山廣程 十五并直立

十六知物高並別術 十七知谷深 十八量井深二術

十九知水深二術 二十折竹術三術 二十一量流物

二十二量行程 二十三量兩高下

卷之五渾發術 術名二十二條

一渾發功用 二算理渾發並三四五之矩 三四圓理二術

- 七六 徑矢弦二術
- 八 坪誥
- 九 步誥二術
- 十 錐形
- 十一 平面遠近
- 十二 斜面遠近
- 十三 正面廣狹
- 十四 斜面廣狹
- 十五 摸望之間町
- 十六 知諸高下
- 十七 極諸高下
- 十八 天口
- 十九 地口
- 二十 天口異
- 二十一 地口異
- 二十二 覓先
- 二十三 覓跡
- 二十四 草結
- 二十五 水月
- 二十六 樣脚
- 二十七 樣体
- 二十八 白浪
- 二十九 猥獲
- 三十 開扇
- 三十一 方鏡

總計五卷術名百三十五條

量地指南後編稿之總目次終

量地指南後篇卷之一

勢南 處士 村井昌弘編述

雜品解

一 規矩全書上卷術名

前傳 本傳

○空眼註法 ○分數註開地 ○度量註目的 ○見込註視法

○平町註正開方 ○兩斜進退註斜開方 ○前後進退註後當

○不動知遠註大元方 ○隔沼河註兩開方 ○極中不中註一

○知雙註開方 ○寸尺用捨註品解 ○算法用捨註品解 ○三四五矩註渾

○直極註量盤 ○知山高註量高方 ○知谷深註二術方 ○知

量地指南後篇卷一

兩山差註兩山註○知谷幅木丈註明山註○知地形高下註極

○指望之間註無的註間竿打樣註器註○座而地取註暗指註

○直之繩張註極註○陰之目的註重開方註○知前面廣註正註面註

○夜之見樣註極註○磁石振樣註器註○磁石見樣註器註○城

圖註四知註○國圖註極註○遠里積註極註○北極積註極註○船

路積註極註○道具之制註雜註○

右上卷術名の目錄なり。是を以て大畧量地術尽せりといふも。古來其師範する人謾小秘奥を傳へしを悟りて教海の式小前中後の三等とて。同術と粗精與三回小講習せしと見へり。此旨予を取用せざる処なりといふも。姑く古法乃

書面小隨て此小抄出す。覽者此趣を察せしむ

一規矩全書中卷術名後傳別傳

○平町註正開方註○前後進退註當開方註○左右進退註正註面註

不動知間數註規矩註○大真矩註神速註○隔沼河開註正註當註

○極中不中註雙開方註○中不中片極註極註○寸尺用捨註雜註

○算法用捨註雜註○三四五矩註渾註○知山之高註谷註四註

極直註立註○進退之山註量高註○兩山之差註兩山註○谷底

知地幅註同知方註○指望間町註無的註○坐而地取註開指註

間竿步樣註器註○直之繩張註極註○蔭之目的註量開方註○知

前面廣註正面註開方註○前面要用註開方註○夜中見様註傳解註○摸

城形註傳解註○摸國郡註傳解註○現差用捨註品註○凡例之格註雜

品註○目的目積註攢眼註○分棊發法註品註解

右中卷術名の目次大畧上卷の標目小同。是教諭の法小前後精粗の別あり故なり。取も予が取用せざる所なりといへども暫く古法の目次小随て前篇小論せざるものとて後篇小述ふ。見る者贅言として訝るこゝなりと

三

一規矩全書下卷術名極傳極要註

○大丸番付註器註用解註○方維大圓註器註用解註○真磁石註器註用解註○忍磁

石註器註用解註○圖寫屈伸註品註解註○不拘器物註品註解註○收用器註品註解註

○舊器号註品註解註○圓知平町註山註初註○前面進退註正註面註○

真矩繩張註傳解註○真繩真矩技註傳解註○前面一開註正註開註方註○

沿河真矩筋違註正註斜註○沿河筋違重註正註斜註○土手陰知註正註開註方註○

木高註傳解註○向指真矩註傳解註○同從脇而指之註傳解註○指高註傳解註○

何分註傳解註○山谷一開註山註谷註方註○真沿河註山註谷註一開方註○山上谷註山註上註谷註

底知木高註山註谷註方註○數知方註方註

右下卷術名の標目も又上卷中卷の術名と同がれ物多し。是も講習小精粗ありゆへなり。勿論予が取用せざる所なりと之も。前篇小記さるるものとば。後篇よのづから右小云々

四 同流三四書之術名異

- 用合度知高註極 ○山用表裏註極 ○責山同 ○寫山同
- 知山厚同 ○天守櫓知居所同 ○向真中日陰指同
- 聚不盡同 ○求山登垂

右同流三四書の術名異ハ好事の者の所為ありて一向取用所方いと云るも前小云る意味カる也小是小贅す

五 一別卷術名異

- 寸尺之用註雜 ○已尺之用同 ○折紙法註器 ○見盤大
- 盤切法同 ○盤繼法同
- 成註雜 ○盤註雜

六 一本術術名異

右別卷術名異ハ往々前卷の標目と同一と云も其名異なりをりて是小贅す

- 圓理渾発註渾 ○算理渾発同 ○步誥同 ○坪誥同
- 方錐同 ○平錐同 ○山形同 ○菱形同 ○片狭同
- 徑矢弦同 ○渾発之働同 ○遠近平町同 ○遠近筋違同
- 前面廣狹同 ○望之間同 ○高下同 ○極高下同
- 天口同 ○地口同 ○覓先同 ○覓跡同 ○様脚同 ○様
- 体同 ○白浪同 ○水月同 ○草結同 ○猥獲同 ○開扇同

○方鏡上

右一本術術名異ハ規矩全書二三の書の目次小隨て是と記す見者標目の混雜を訝るこなるれ
大凡此六件の條目百三十餘前篇四十六條後篇八十四條ハ規矩全書其外規矩術同流三四家の書を以て校量して各均したる也
右余とば不艾不足とばこを補ふ猶三四書小洩るこも
とば不益の目次といへも捨ずして此後篇五卷中に論ず是
學者をして他の異目りりても畢竟無益の説なること知ら
るゝ為ならんと察すべし

寸尺用捨

凡町見術おねのて里町反間を量るハ皆渾癸の事なり寸尺小拘ることなり然ども寸尺ハ里町反間の基本なり敢て

算法用捨

捨るを小りゆ故小寸尺用捨と云へる用捨とは用る小非す捨る母ありざるれ謂なり其理と委く云へ曲尺にて量時ハ厘毛以下不尽小出來て眼力に及ぶことり渾癸を量るるハ番算なる故母割餘といふことなり故母渾癸を以て遠近廣狹高低も小計り知るこも町見術の常と云ふれども丈尺長る物を計る小至てハ渾癸のこ又近遠を以て曲尺を用て量るの速なるハ志る茲と以て此条と掲る

算法用捨とも又寸尺用捨の理も同也町見の支業に於て算法を用いずとも害をたふ似たりされども算法は數量の根元なり捨るにあらば因て用るふあり捨るは假令ハ渾癸を遠程一里の開除を求るも其里

と三十六小割。その心を一町づつ三十引。残り六町を三百六十間と知る。此内と十間づつ三十引。又残り六十間あるを二間づつ三十小割時ハ一里の三十分ハ一町十二間をうづめて知る。も渾癸をハ迂遠なる。算法をハ三十六町を一町づつ三十引。残り三百六十間を二十小除る時ハ即十二間と知る。是に初の一町を加へて一町十二間也。この大業速うかる故。小至極ハ算法捨るべ

現差用捨

現差用捨といふハ。此小於て毫厘の違ある。彼小至て丈尺の差とかるものなり。又此小於て丈尺の違あり。これを彼小至て寸分の害とかるものなり。是を用捨と云。尤止とて得ざる此法なり。其害とかるものハ。盤面の墨線渾

癸の量口圖形の模寫等なり。其害とかるものハ。里町及間の増減なり。里町反間ハ。假令ハ開餘を求ると。其間數其目印も。十間一尺なり。又ハ九間五尺ありても。共小十間と用て深害なり。況郡国の圖を。五十九間六十一間を俱小一町。小用るも其妨なり。然るも止とて得ざる。此も。好むもの。及むる也。總て細密の。差を用ひ。疎遠の。差を捨るをいふなり。

凡例定格

古法云。凡例定格とらふハ。小差を論ぜざるをいふ。其の詳たる。左小記す。 糺寸尺則不論厘毫 糺間數則不論寸分

尺不論厘毫 寸不論毫 遠則捨寸 近則捨分

糺町數則不論丈尺
遠則捨丈
糺里數則不論反間
遠則捨反
糺大里則不論町里
近則捨間
六里捨里
小里捨町

分基發法

古法云分基發法といふ。今用る間町里の本をいふ
とたり。古云粟以小粒發分分即發寸尺間丈町里
也云云

間 昔ハ六尺五寸
今ハ六尺なり

町 六十間を古法三千六百歩を以て田畑の二町の
積と爲其外面を以て道規の町と爲

里 昔ハ五十町を用ひ今ハ三十六丁を
一里と爲唐路ハ六丁を一里と爲

地周 九万里但唐路を和路面一万里五千里也
是大塊の一周なり

地徑 二万八千里を和路東西の貫也於南北
三千里の有延故爲鷄卵

地度 昔四十三里余今四十一里半六町なり
各和路を天地共三百六十度を用ひ

右地周地徑地度の三條無替の言たりとも。古法より
存せり故ふ是ふ贅す

見盤大成

是他流ふ秘する所の一名目なり。然ども此法術毎ふ備ハ
せり。何ぞ秘訣といふや。量地指南前篇中卷下
卷每術を見て考ふる

盤切用法

盤切の法刺盤法のよりして總て盤面を約やく量る法なり
占法小山谷刺盤平町刺盤二方なり。先山谷の術をつとふ
假令平町を求る丈數百丈ふ後ふ見込の五を割付る
これ割合せかたといふ。留より百丈量も残る分を切捨

三と量るかるを。是山谷割盤の法。又平町
 筋違等伐勤ると見。開場小至つと見通
 小問るしつと見。盤の面の角を見通を
 あくも成難し。其時ハ盤の向の端條會
 にならずして向も口出来る故。手前より
 真矩を取て盤を割て條會を作し量るべし。是を平町割
 盤といふ

盤繼用法

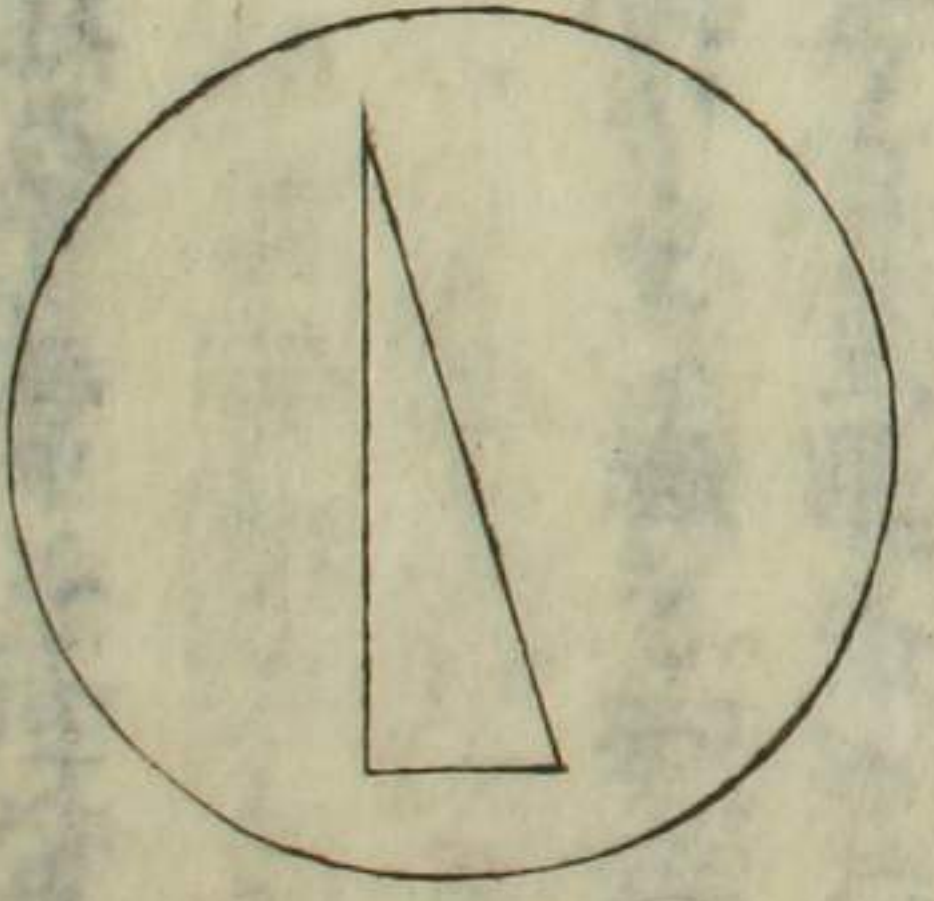
盤繼といふ。遠境累隔なる業を勤て盤二面
 換し。足さる時。外の盤を併せ繼て用るをいふなり
 前篇より予う所謂併盤といふ是なり。前條より
 迷る所の割盤法。又此條小云。此の併盤法共に



五

不拘器物

前篇小委々く出たも。其に別傳の條目小秘訣なり。其
 記分故小贅言を述て學者の問を塞ぐ
 器物小不拘といハ。町見術の諸器物有合さると見ハ。何ふか
 ら。外面平かなる物を用て見盤定木のてし。其用を
 かくといふてあり。或ハ定木あつて。見盤さるる時。膳
 盆の類もて用也。但圖のてし。其中めて見込見通と
 して。墨を引と見ハ。盤面小其形出來する
 かり。或ハ盤あつて定木をさす時ハ。糸と
 針とを用也。或ハ忍等を求ると見。器
 物小拘る時ハ。萬物障となつて。求が。亦
 器物を放る意ある時ハ。其用全かず。その



地ふろしある萬物を即道具に用るの理あり。常ふ工夫す
る。是が爲小收用器なり

寸尺之用

寸尺の用とふハ大凡寸尺ハ規矩術の拘りざる所とい共
又用る所なり。今茲寸尺ハ寸尺を用ゆべきとす。其故ハ一本術用法小云く。二尺と五寸と。種の口と四倍す
とふなり。意ハ二尺を五寸とす。方尺二尺を五寸の長さ
と心得し。種の口を四倍すとハ。渾癸也。種を夾むる
口を四倍すとす。是を方尺も渾癸も俱ふ同寸
分ふかる。二尺乃方尺を五寸とす。時種と夾む
る口二分あり。是を八分の口と作り。二尺を計る。理の當
然なり。但し。傳法也。門弟子として思ふることの

丸渾癸の口をひらく。量むば。量むとや。故に
か。縮むなり。其終ふ二分の小口。長き方尺二尺
を量むば。厘毛に至て。治定の分らざる。依て。方尺

已尺之用

已尺の用とふ。一已の身体を悉く寸尺とす。ト
なり。意ハ。指尺ハ五寸。腕尺ハ二尺五寸
なり。指尺ハ五寸。腕尺ハ四尺八寸。腕尺ハ
一尋ハ五尺二寸。等。兼て。設置をのみ。其外空眼。先知乃
類をのみ。而後作法の。堅木をなして。其業を發行
す。是一本術大要至極の全法なり

圖寫屈伸之用

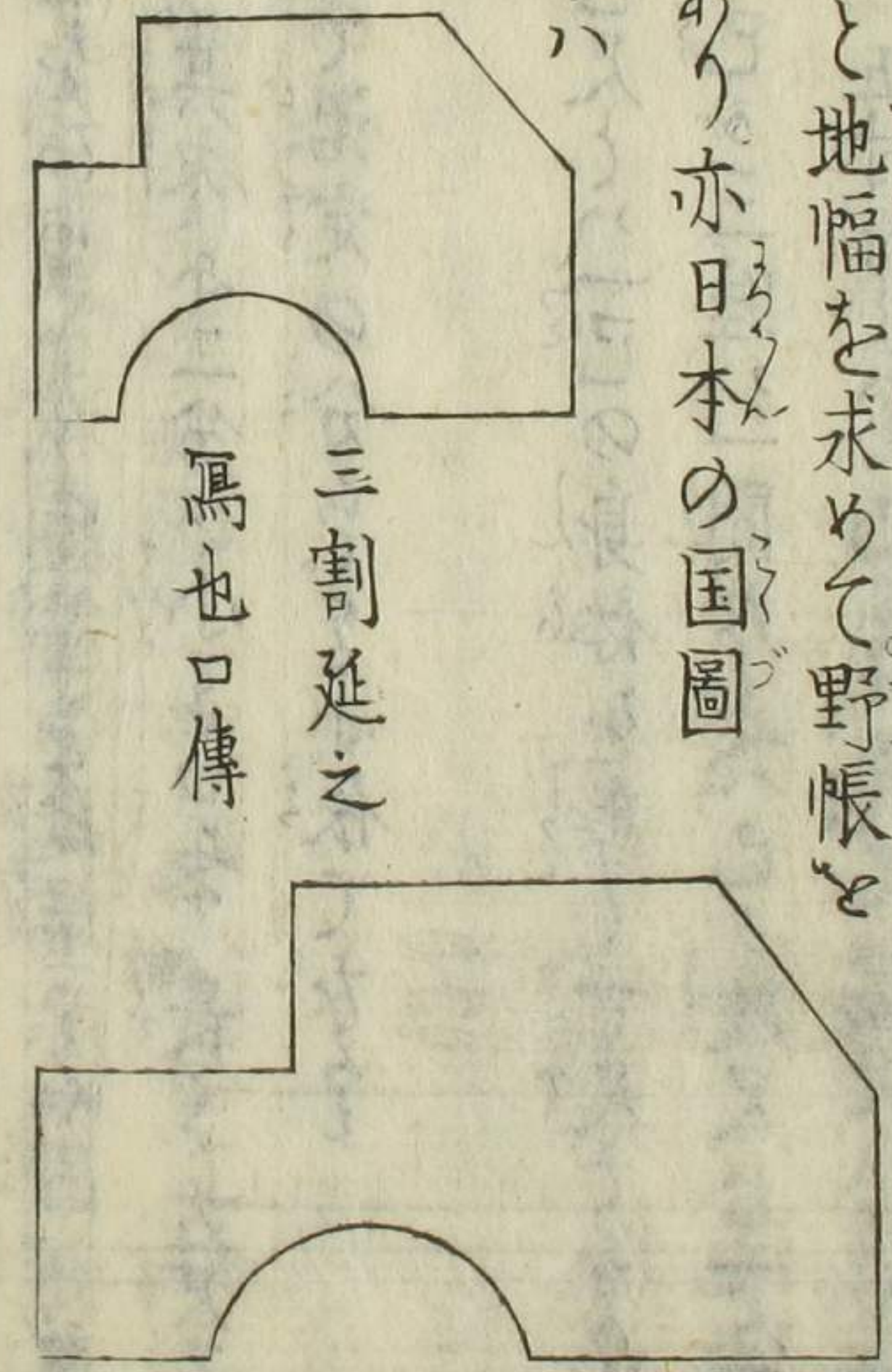
圖寫屈伸の用とふハ。古傳云。分間の圖を屈伸する。ハ。寸

尺を用るなり。角寫と意順の矩を用るなり。蓋至極の角寫の秘傳有り。或ハ三分一。或ハ四分一。亦ハ何割等増減ハ寸尺小拘ず。渾癸を以て寫す。速うかり。但其かたふ以て働さ。時宜小うづ。口傳云云

又或傳云。国圖城圖等と延縮する。ハ假小紙の方より。分度を以て。方角と地幅を求めて。野帳と仕立て寫取る。亦日本の国圖

等の矩小合さる形ハ假小歩割を用

ひてうけし。事有り。口傳あり

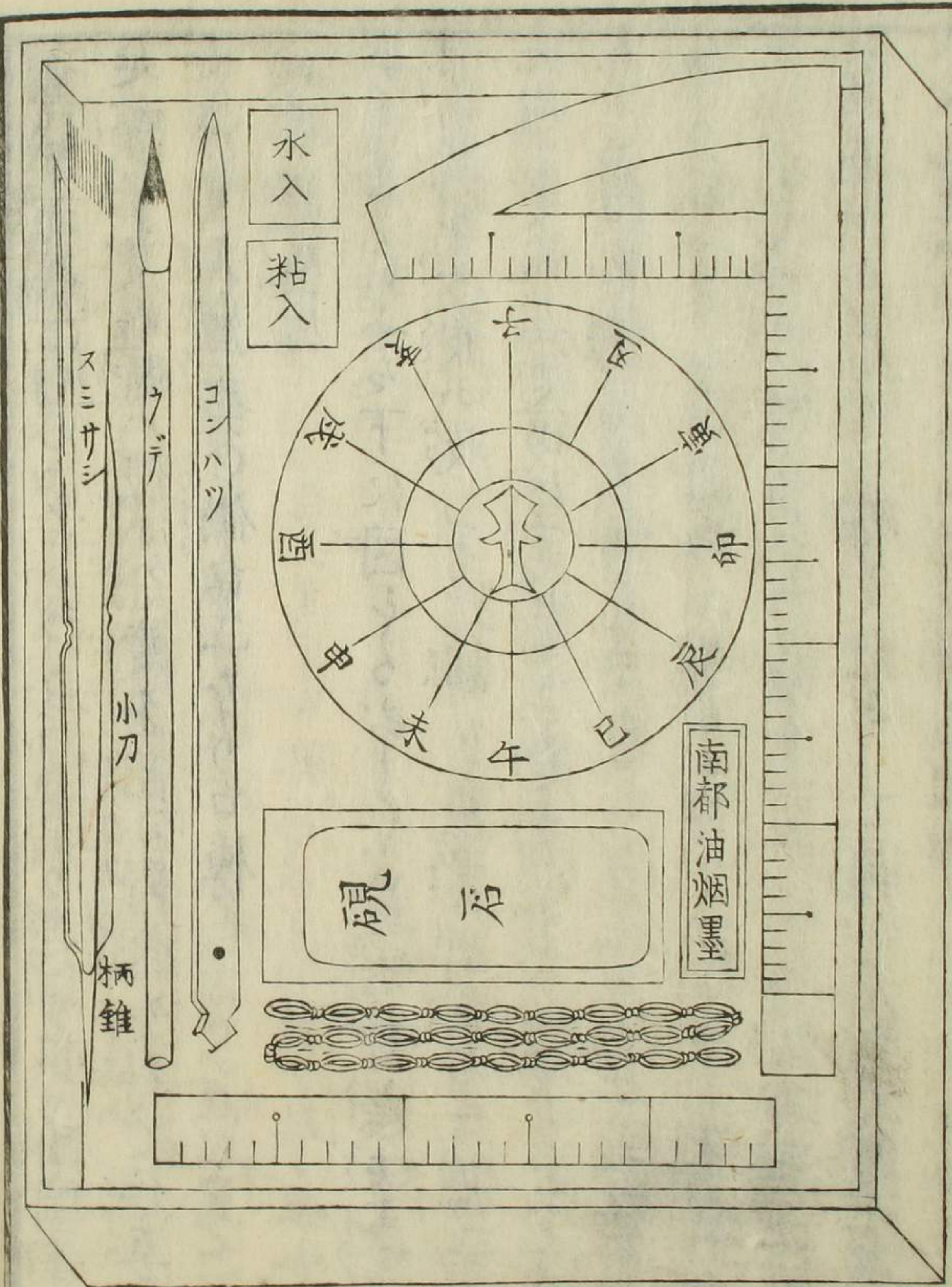


一傳云。渾癸の働を以て。或ハ城圖等の延縮亦ハ国圖等の延縮をかりし時ハ。假小分度を用。野帳を得て仕立て。各渾癸の働第一なり。口傳

九

收用器之用

收用器といふは。下に図をみる。量地術急速要用の器械を一箱小收し。其制法云。箱の板ら何しても。其人の望小任す。春慶カ。小塗。大さハ内矩。堅六寸。横五寸。蓋を指入。即量盤小。此内小收る品。十二種あり。分度。矩。渾癸。小丸。方尺。横手。墨。慈。硯。墨。筆。水。入。粘。入。紙。裁。の小刀等。小刀ハ柄を鋭めて。錐小用也。又別小錐と入るも。心小任す。



二 舊器之號

- 貨度轆輪
- 貨彈覽天
- 圓盤
- 星刻
- 以寸多羅比
- 復寫
- 羅字坐
- 漏墨
- 意順矩
- 方圖器
- 星尺

十六方位をり模寫の器なりといふ
 按ずる新制の小九九等の用法も同とす
 天尺を量る器なりといふ
 同上其用不辨
 星上圭とも名くといふ
 船中の器用とも其法知くど
 模寫の器
 十六方位の磁針なり
 新制の墨悠よ均とす
 換国の器といふ
 同上
 天尺を量る器なり

量地指南儀篇卷一

十六

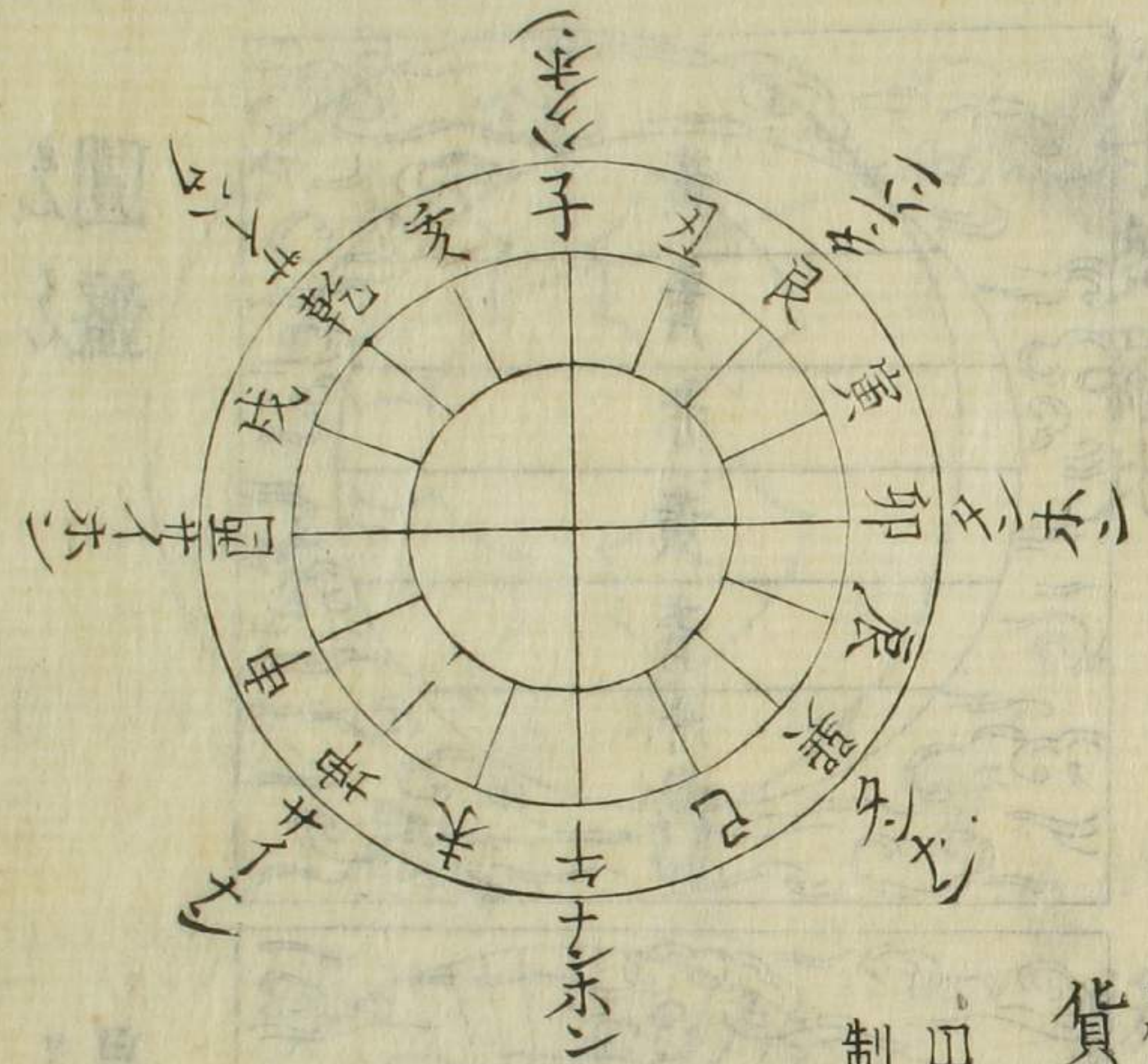
○日刻

日影を量るの器なり

右十二種ハ粗予が見聞する処なり。其の品阿須多羅以
 与加呂士惠牟須加呂士加苗太加路兜渾癸寸天経天緯標
 木など云々の有り。其制法と不辨故小圖せぬ。又羅経方針指北
 方と云。古小所謂羅字坐と云。吾邦當時用る処の磁針
 小同じなり。抑此術吾邦流布の始粗此旧器物を用ること有と云
 ども。異邦の人の其便利と云ふ事。是は因てあれ
 ば。其器物廢して吾邦今の量地者流今に於てハ旧器の号と云
 知者なし。此故小初学の者往々小其器名と聞傳て怪と思ふと
 云ふ。其疑惑と散じ。其用法の失せしこと知れぬ。為に爰小圖
 を著して當流の學者小示す。

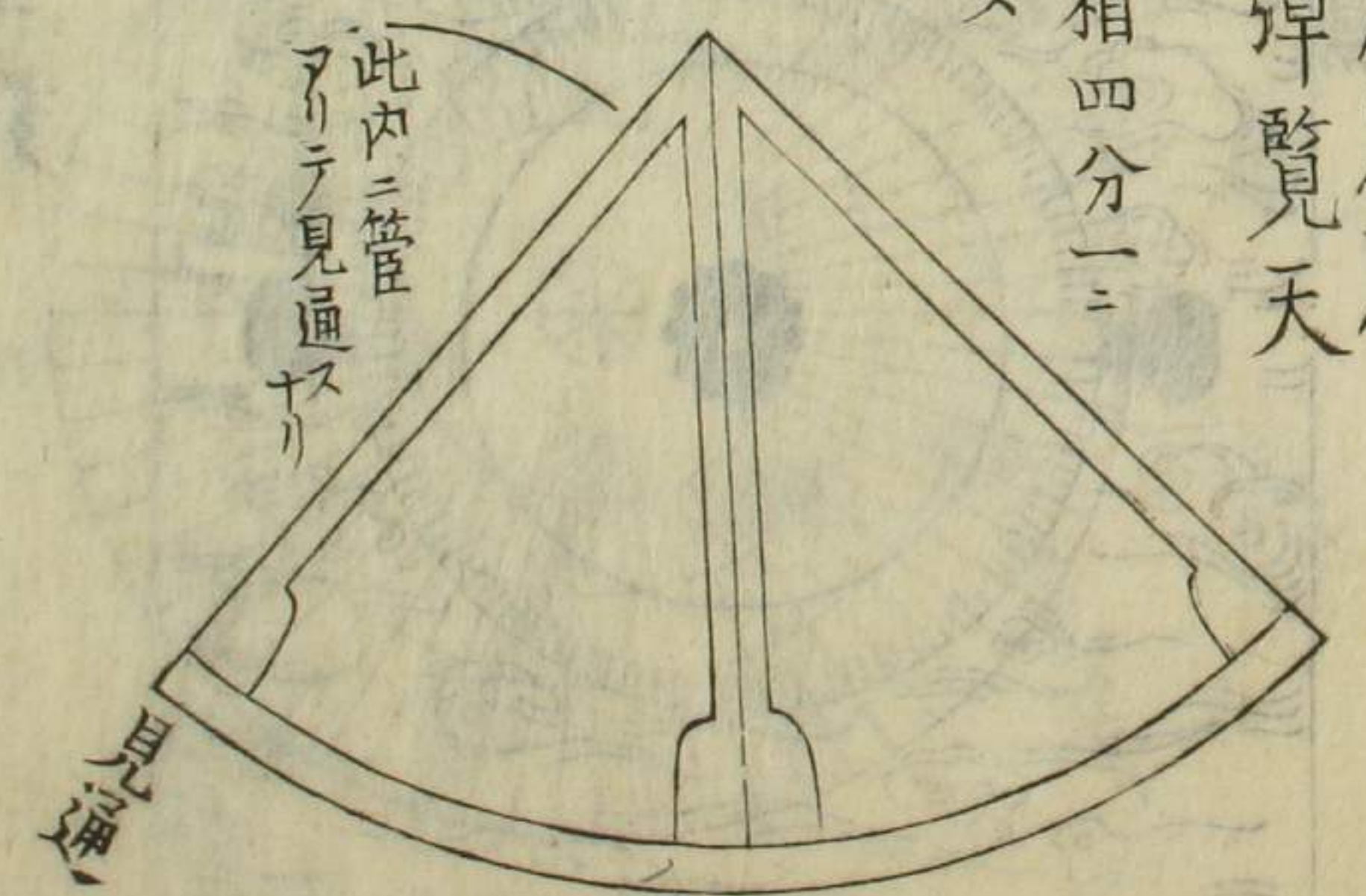
右の器械其名のりくくを當時のりを用ひず

貨度輪

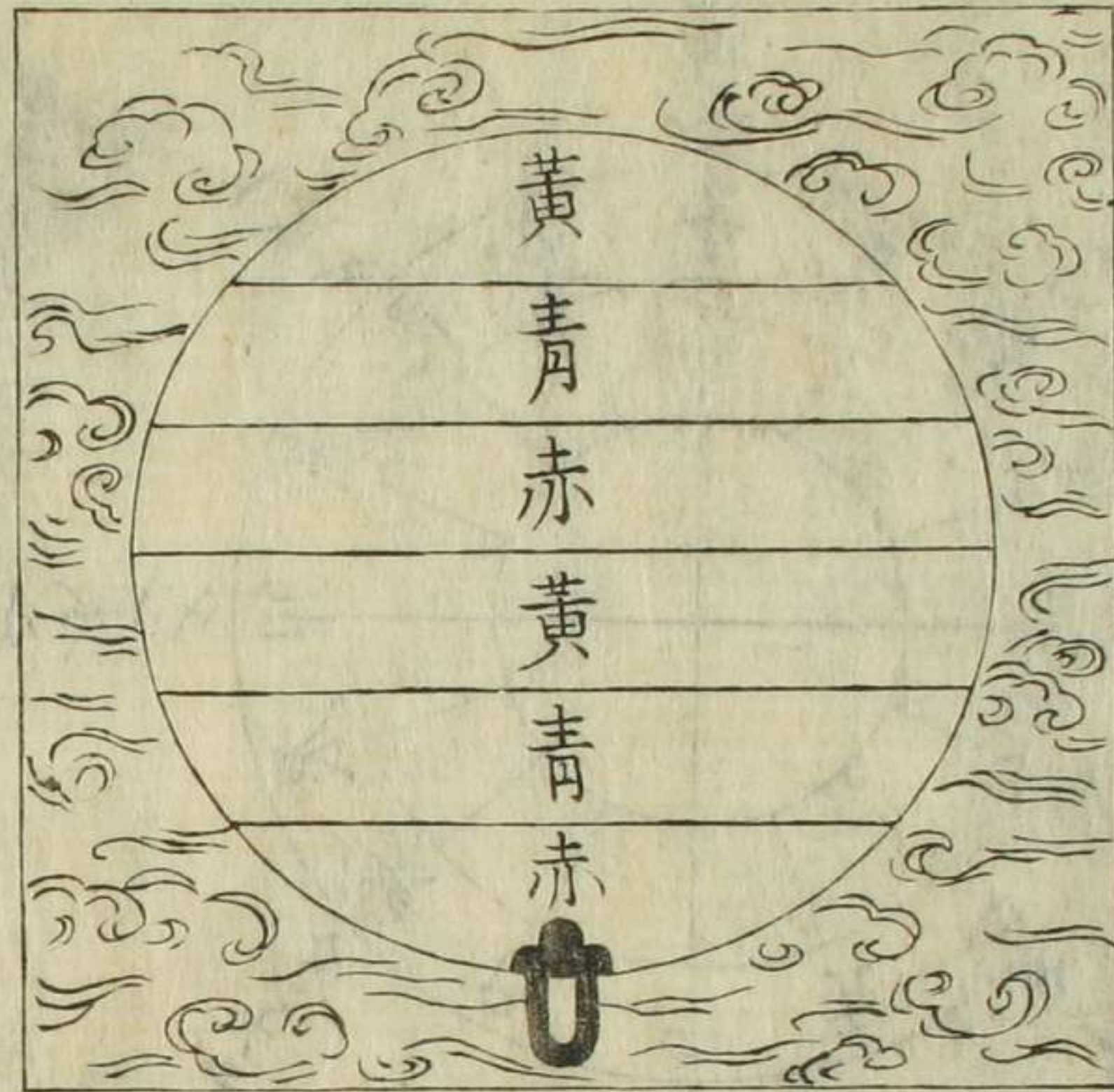


貨彈覽天

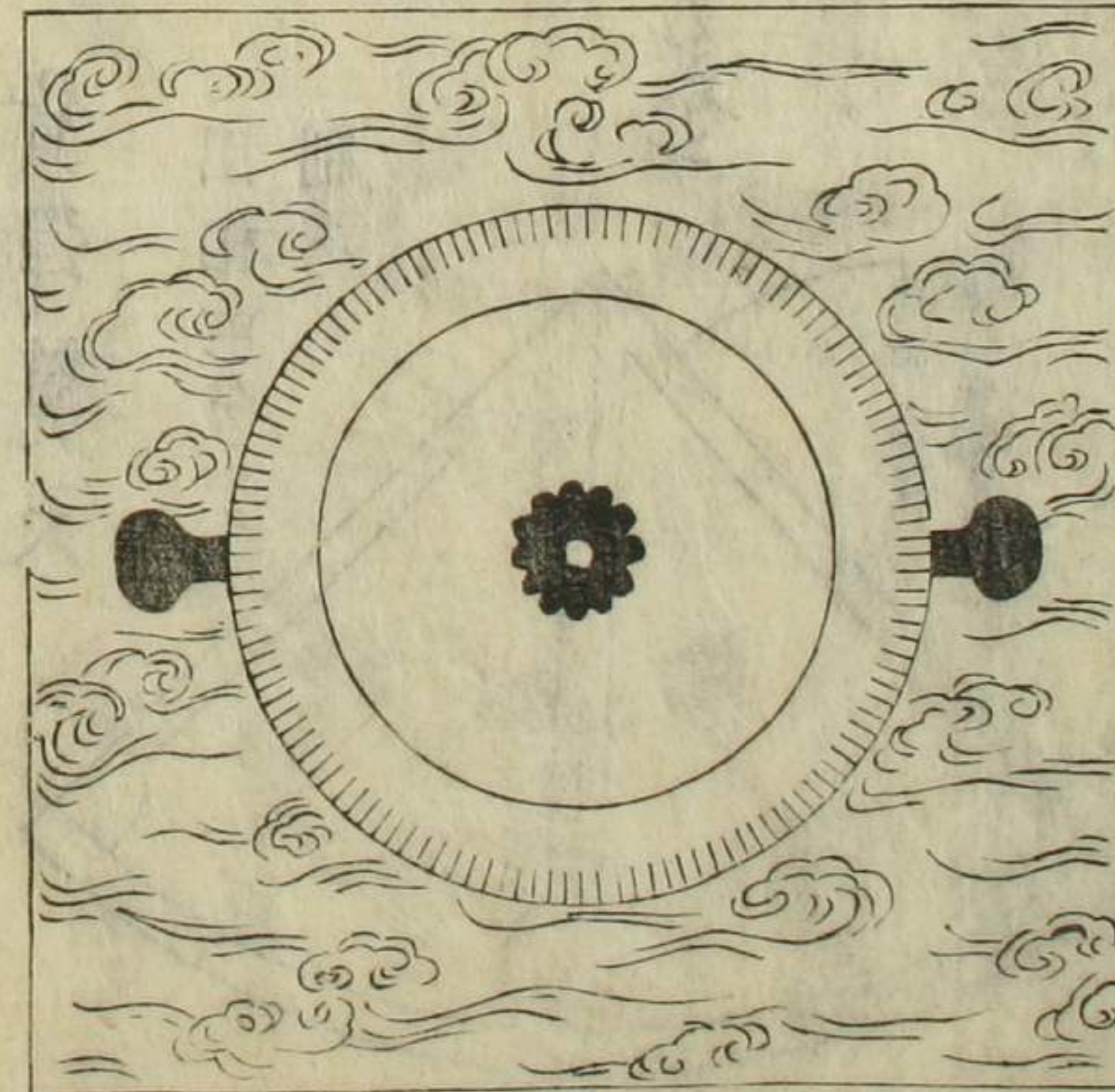
山相四分一ニ制ス



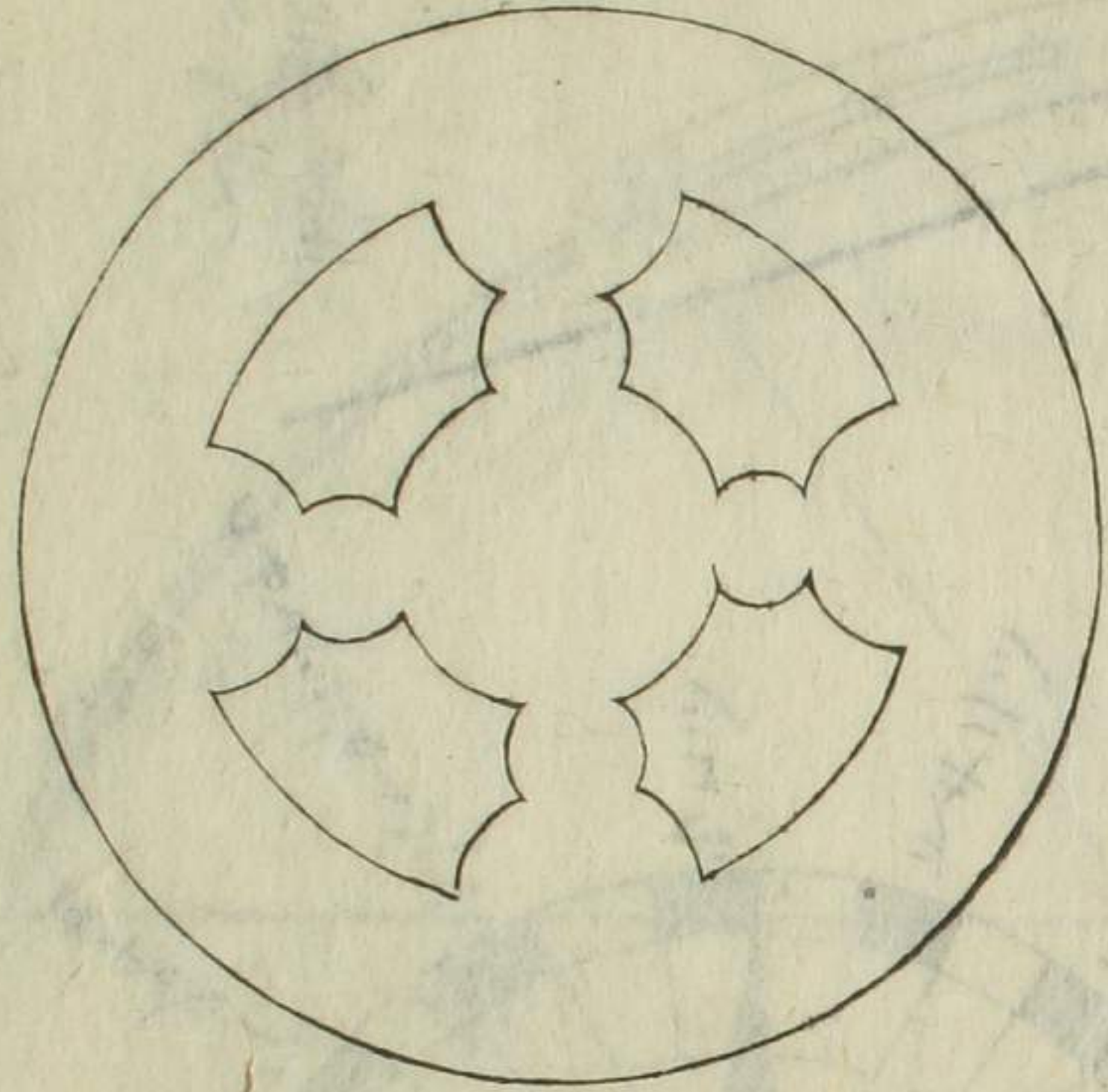
圓盤まへ



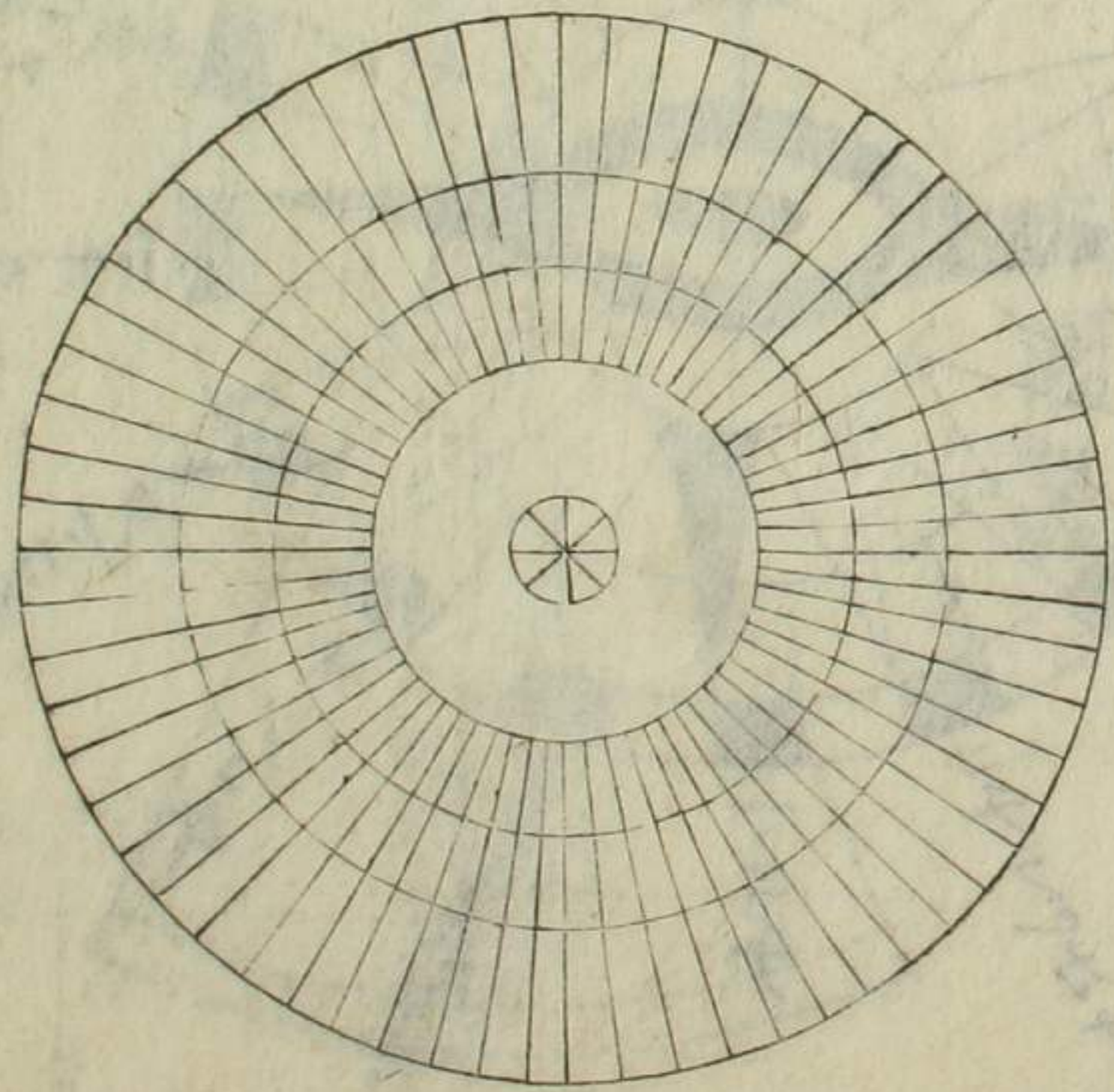
星刻せいこく



以寸多羅比いすちたらひ



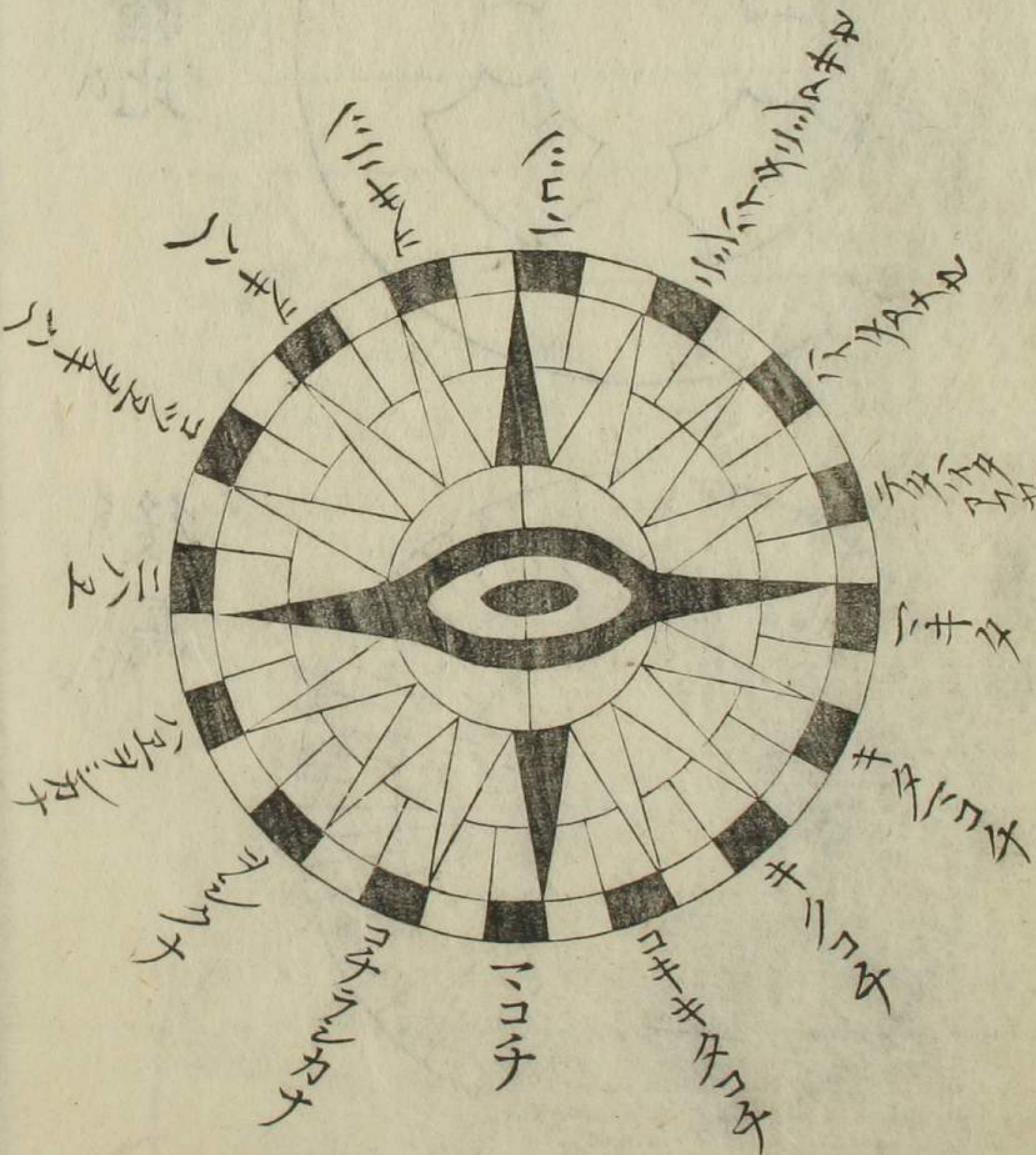
後寫ごて



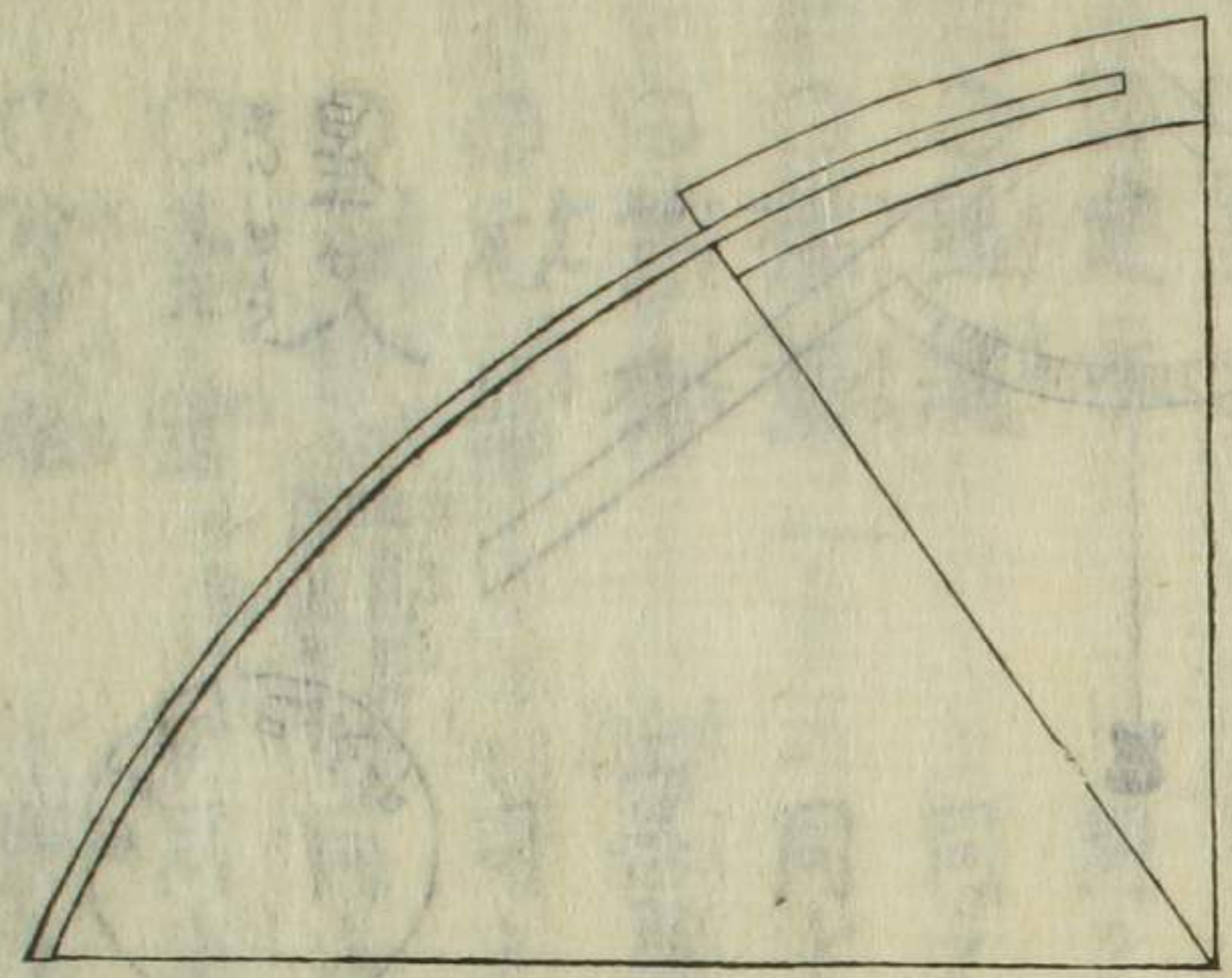
漏墨



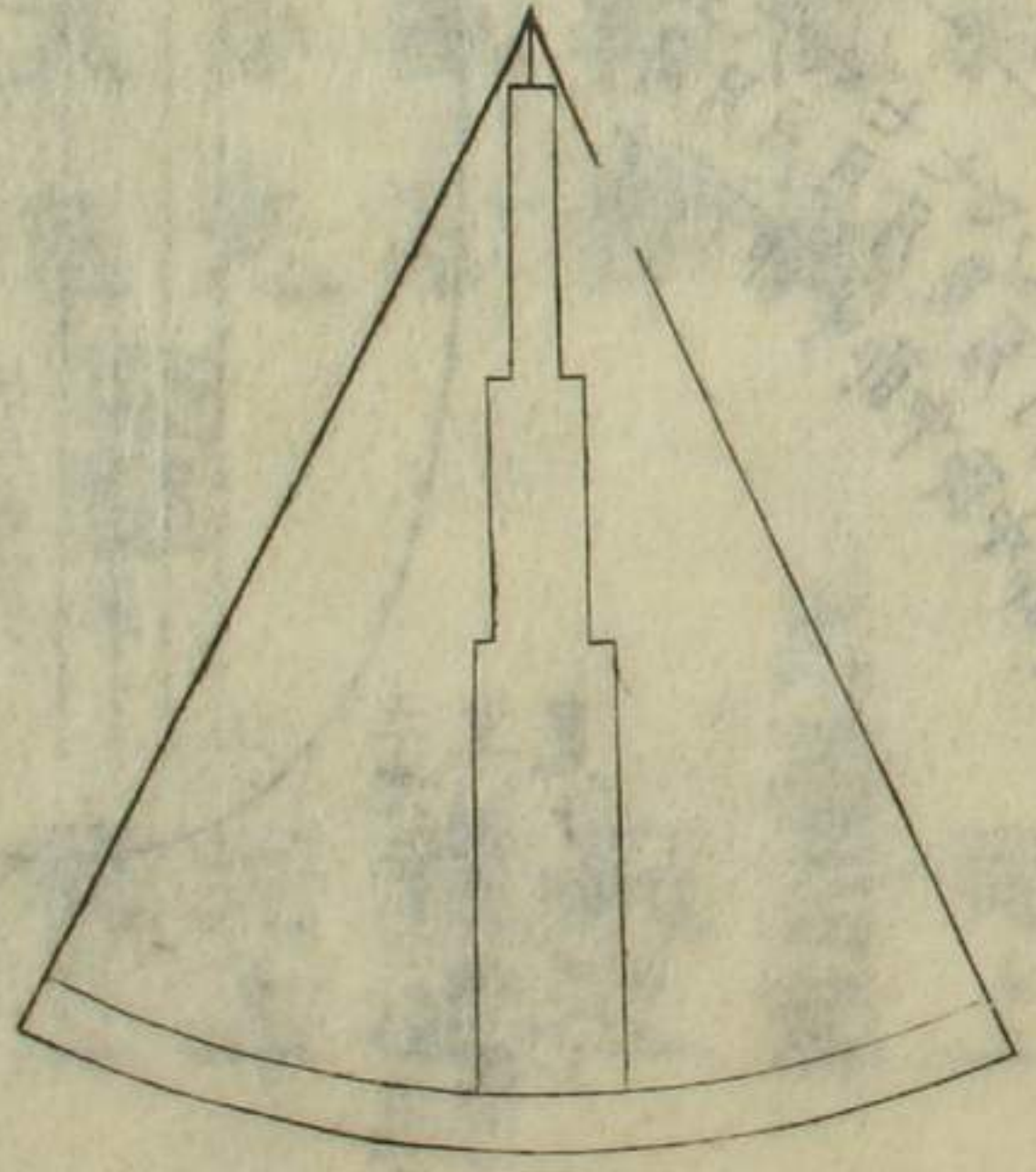
羅字坐



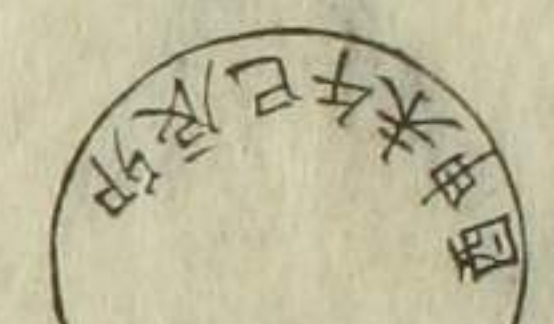
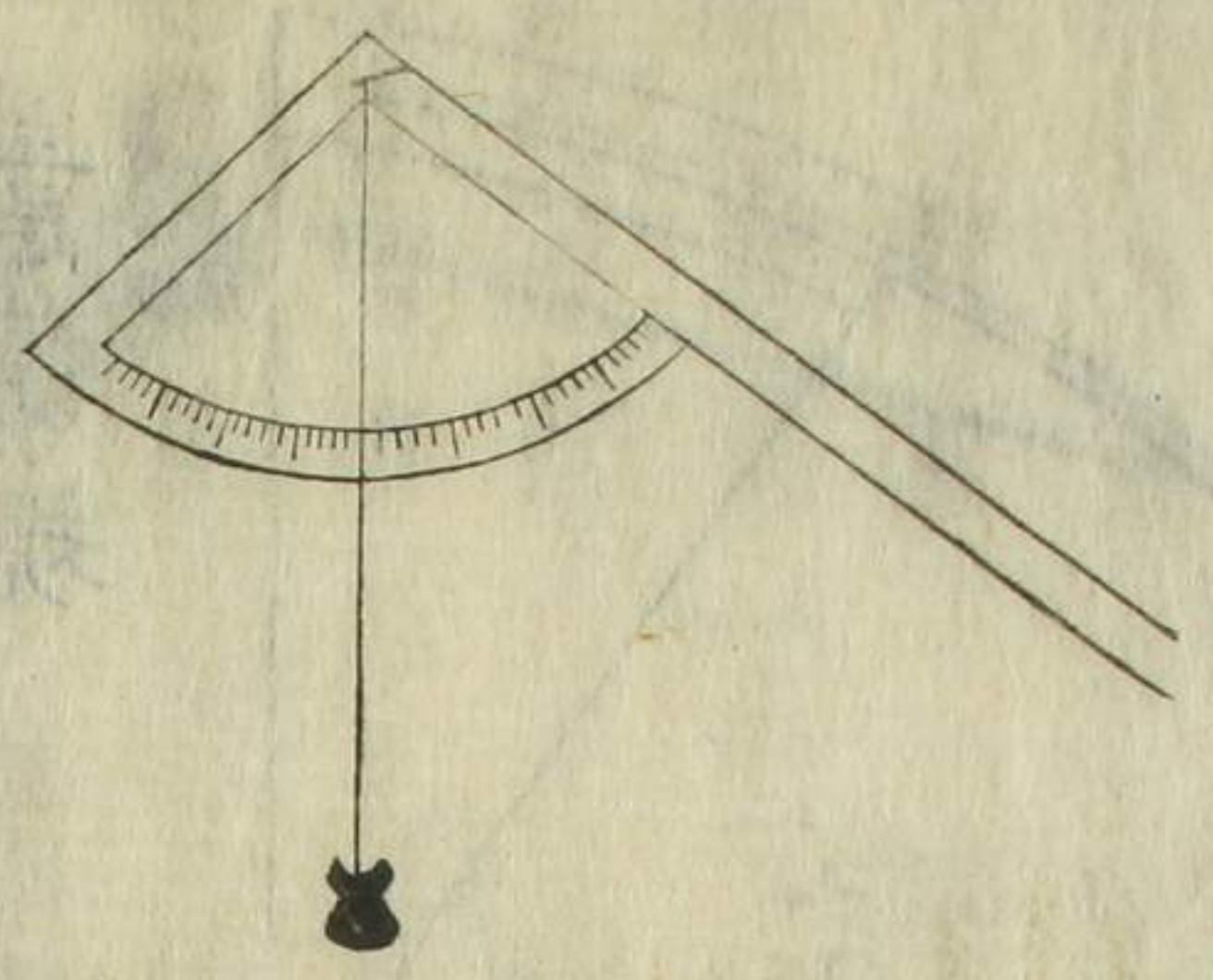
意順規



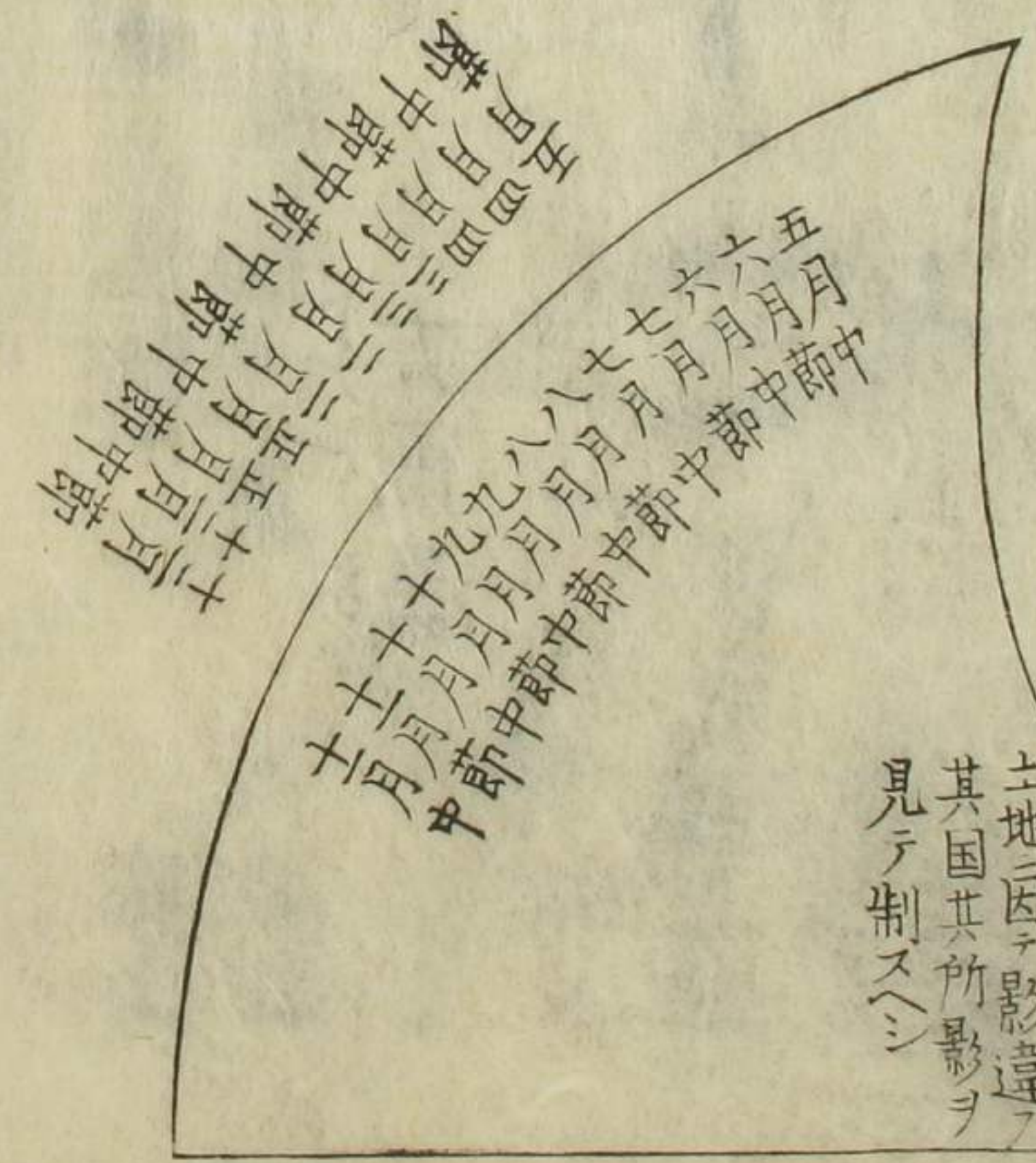
方圖器



星尺



日刻



土地因テ影違フ
其国其所影ヲ
見テ制スヘシ

一新器之號

○ 圖寫器	○ 分度矩	○ 臺金	○ 思磁石	○ 元器	○ 管棹	○ 標檄	○ 錐繩	○ 定木	○ 鈞玉	○ 渾發
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
○ 隨川器	○ 虎法器	○ 大丸	○ 小丸	○ 磁石	○ 輪棹	○ 間棹	○ 和久	○ 間繩	○ 垂針	○ 見盤
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上

出前編又器用解

出器用解

出器用解

○方尺 並試定規 同上 ○折紙

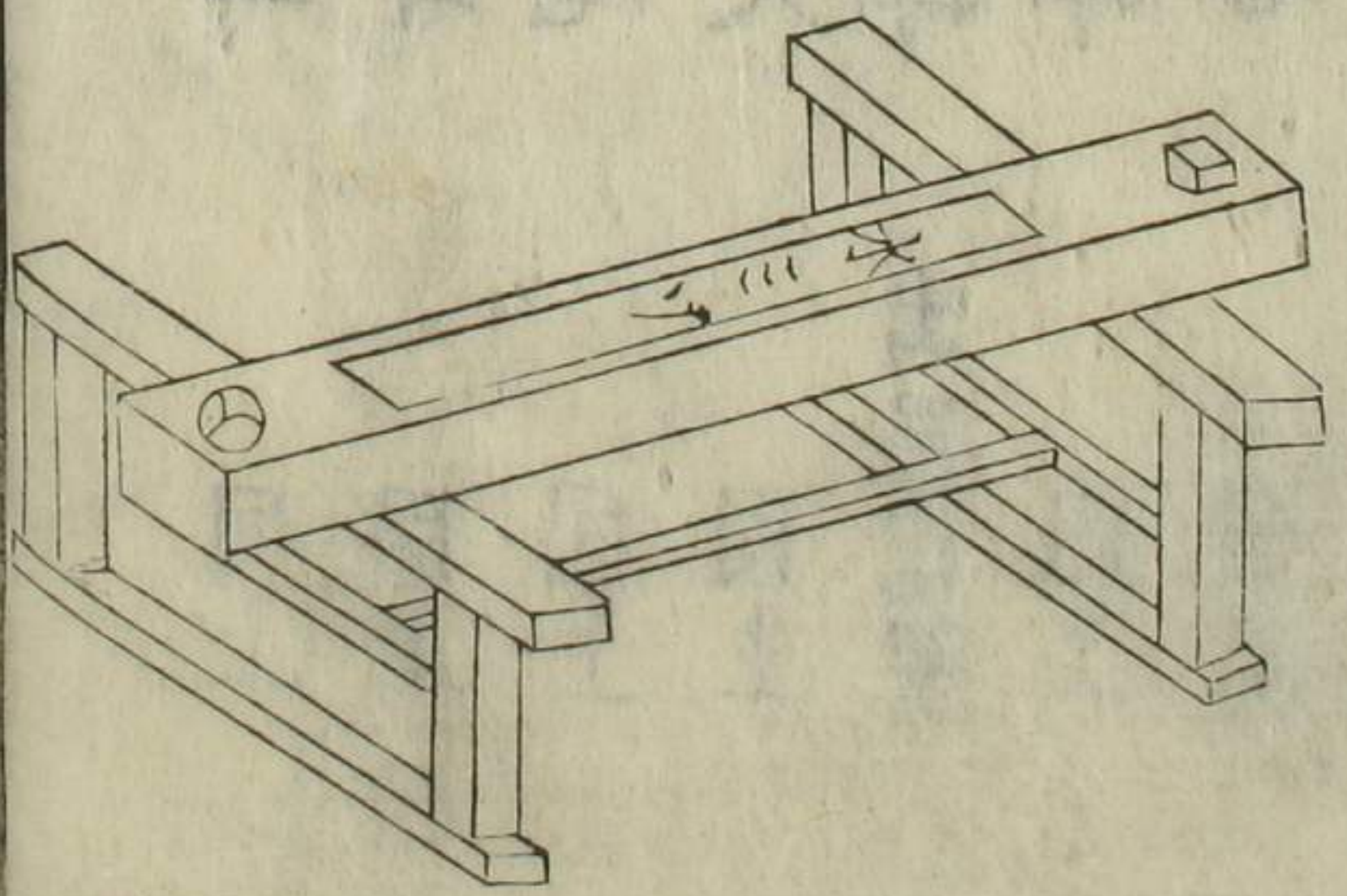
○火剗 出極傳解 ○湊渾笈

○度数 同上 ○遠里矩

○收用器 此章出前件 ○水平

同上 出極傳解 出于此章

水平の制角木を以て之。長六尺横五寸小閼木のどくく制。表面小長四尺横三寸深と一寸五分の水溝と穿ち前後小目當り高五寸此水溝より水と盛るなり。尤水平木下り、臺と設けて随分不直なりやうに臺の上へ上げ下げて方を極むる。臺の高さ好にふるべし。大方高さ



二尺より二尺五寸を吉とす。委ハ圖を見て知るべし

○水準 出于此章

水準の制長四尺横五寸厚と四寸の臺木小高さ三尺

方三寸の標木と立る。尤此標木を左右より助木と

施して少くは斜邪なきやうに

扱標木に糸系とかけらる。委ハ圖を見て知ア

○槽 出于此章

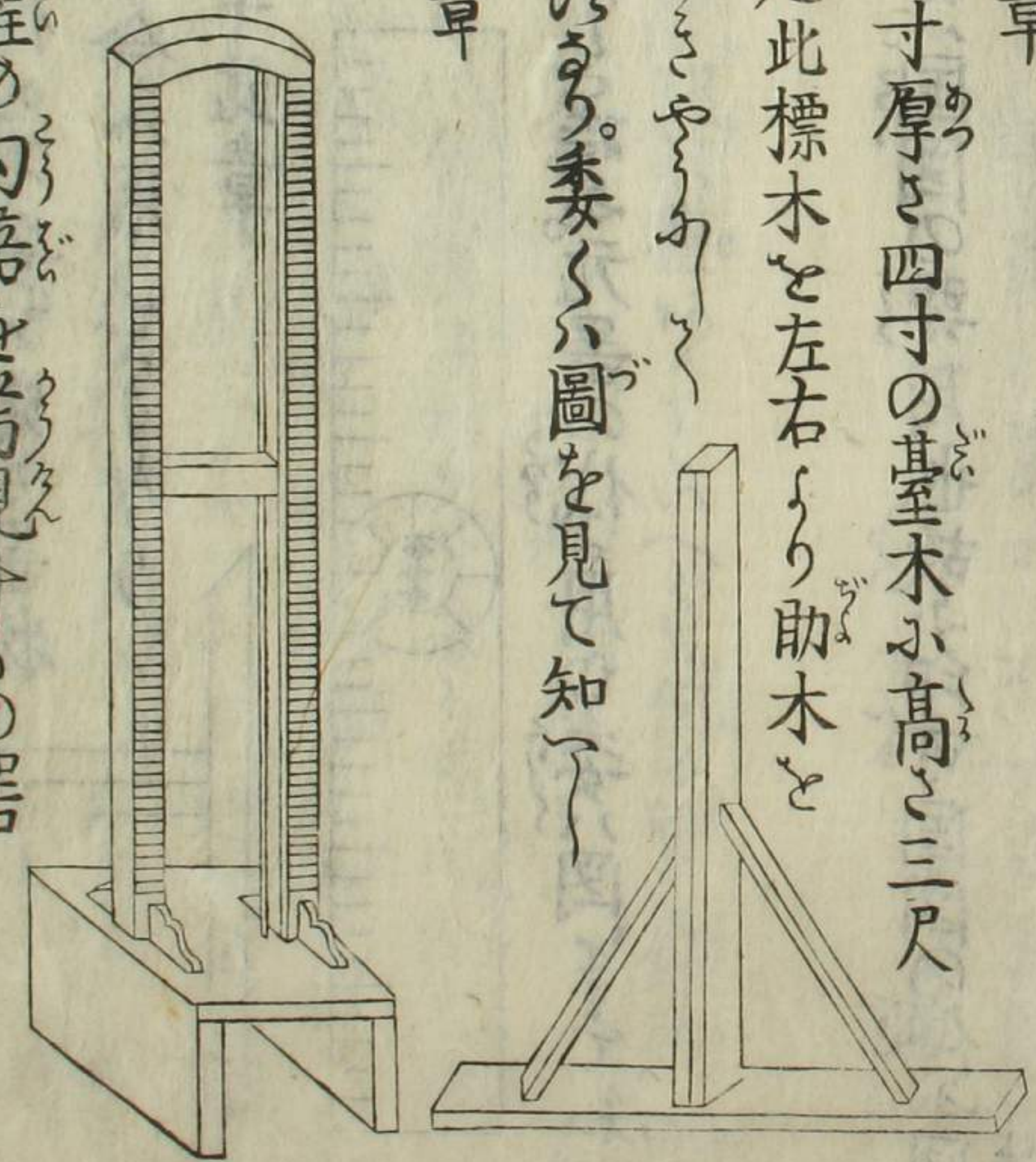
槽の制真鍮を以て

作る左右小曲尺の星

と計る高さ五寸元

器の桁上小載て高程の勾倍を考見するの器

なり。今專にこれを用ゆ。委ハ圖を按て知ふア



○膝

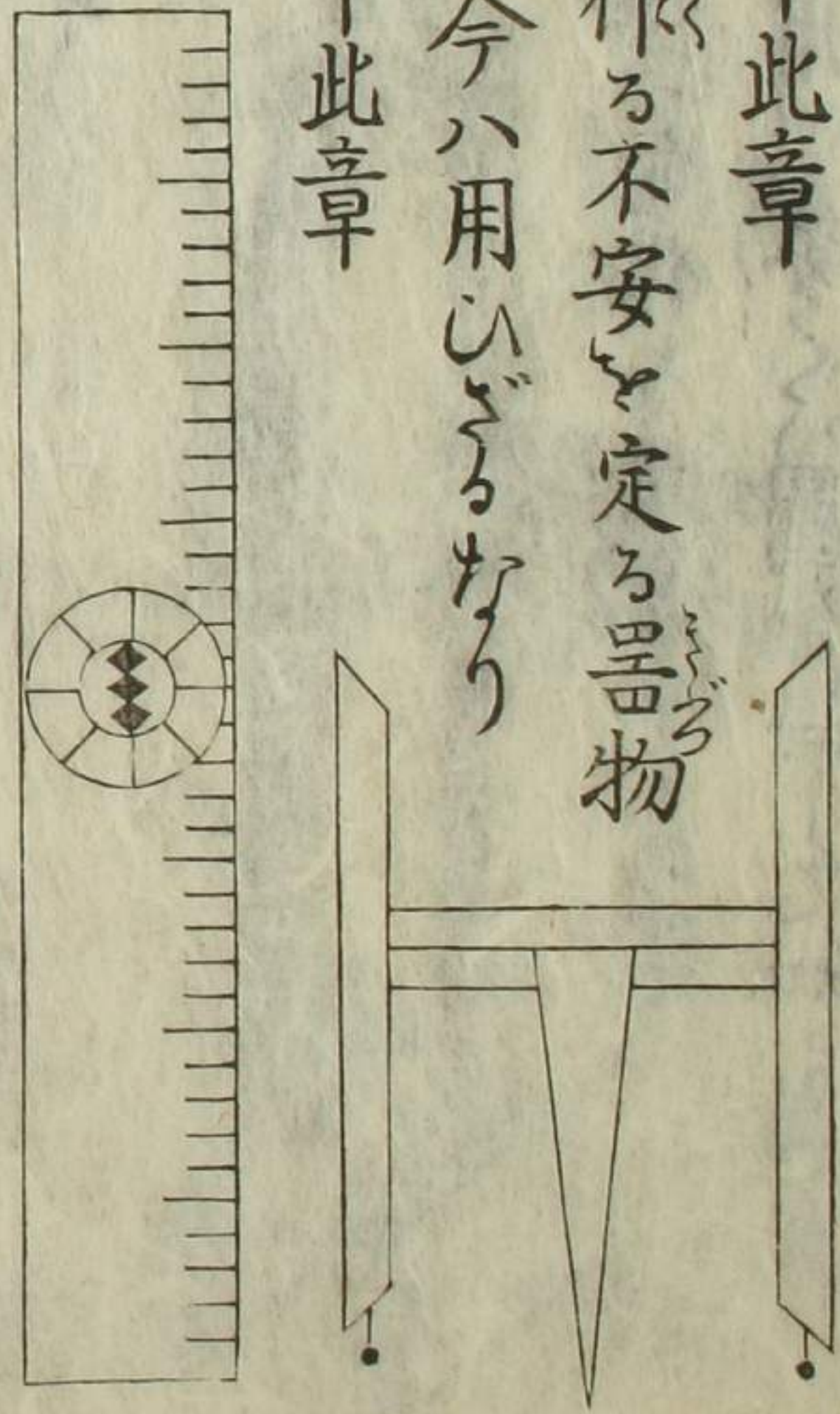
出干此章

膝の制真鍮を以て作る不安を定る器物
なり。不便利ゆへ今ハ用ひざるなり

○板定木

出干此章

板定木の制長一尺
五寸横二寸真中に



小丸を彫入る元器を時小元器の代よ用の委ハ図とて知べ

○種竿

○相圖懺

右種竿相圖懺二器ハ国図の要用也故ハ印可国図の傳ハ図

量地指南後篇卷之一終

量地指南後篇卷之二

勢南 處士 村井昌弘編述

器用解

磁石切用

大凡磁石を用るの品數種いろいろも何の時も針頭と子
の方小安して方位と定むるハ古今の極法なり

第一小見込様小口傳り。假令子れ支を求る時通俗大体を
午の線より子の線を見込て常なり。其事悪し。左すれを安
居分明なり。海ものなり。只小直上よりして見込む。前後
脇より見る時ハ外見ハ中るが如しといへども多分中らざるもの也
眼精散やすれ故なり。是を第一の習とせ
磁石の塵といふところ。或ハ振様小より。寫の十分も中り。又ハ

四

支の九分中も中るこつり。是眼目及むる処也。是と塵と云
なり。此所おそハ小差といへども。彼地おそハ里町お延る故ハ大差
とかる理なり。心を用ひて塵をたれやうにする
塵を隠すといふこつり。右ハ述るごとく。磁石ハ塵出るこつり
ども。大業のこつり。此語と捨て可扱とのなり。故ハ止と得ずして
必用る也。此器ハ圖形を成ふ至て分間おて少く心と用ゆる也
遠里遠町を小圖お寫せば。必分間縮るとのなり。茲ハ於て
自然ハ塵の隠る理もつり

五

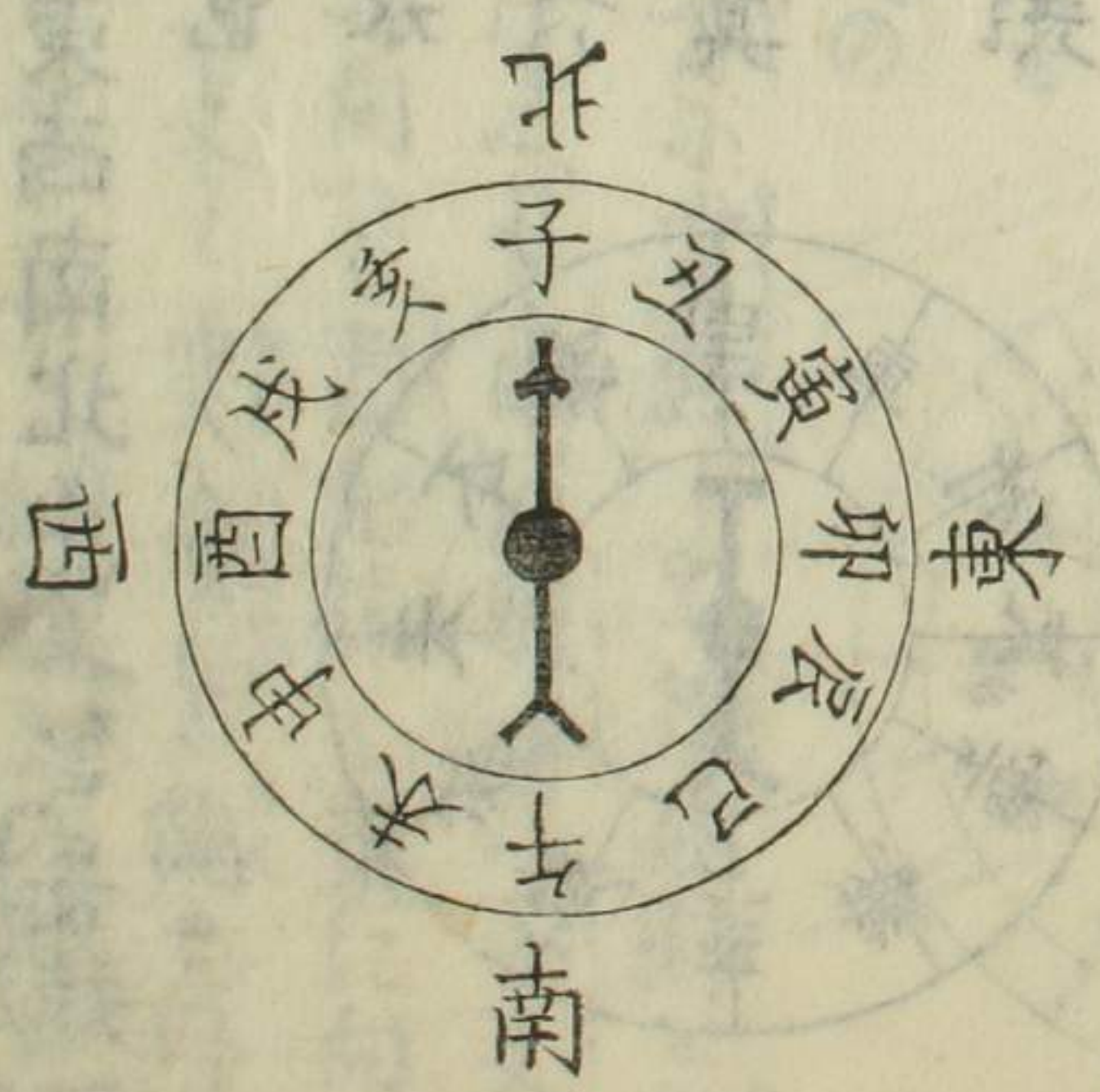
亦順逆の振様といふとあり。假令ハ左方右方と一度ハ量る
とれハ進も行る先の當支とハ順ハ用ひ。跡の當支をハ
逆ハ用るなり。或ハ子を午ハ用ひ。酉を卯ハ用るがごとく。是
なり。是逆なるがごとくといへども。實ハ順路を用る意也。此術

六

業に於て大益なり
又高下の地おおてハ振様別あり。凡て磁石ハ少しも傾く
時ハ。劔先太居物なり。故ハ山坂などお於て振れハ。規矩
元器櫓を用ひて。勾倍を寫して。其通を見込也。磁石とハ。少
しも傾るがごとく。安ハ居て

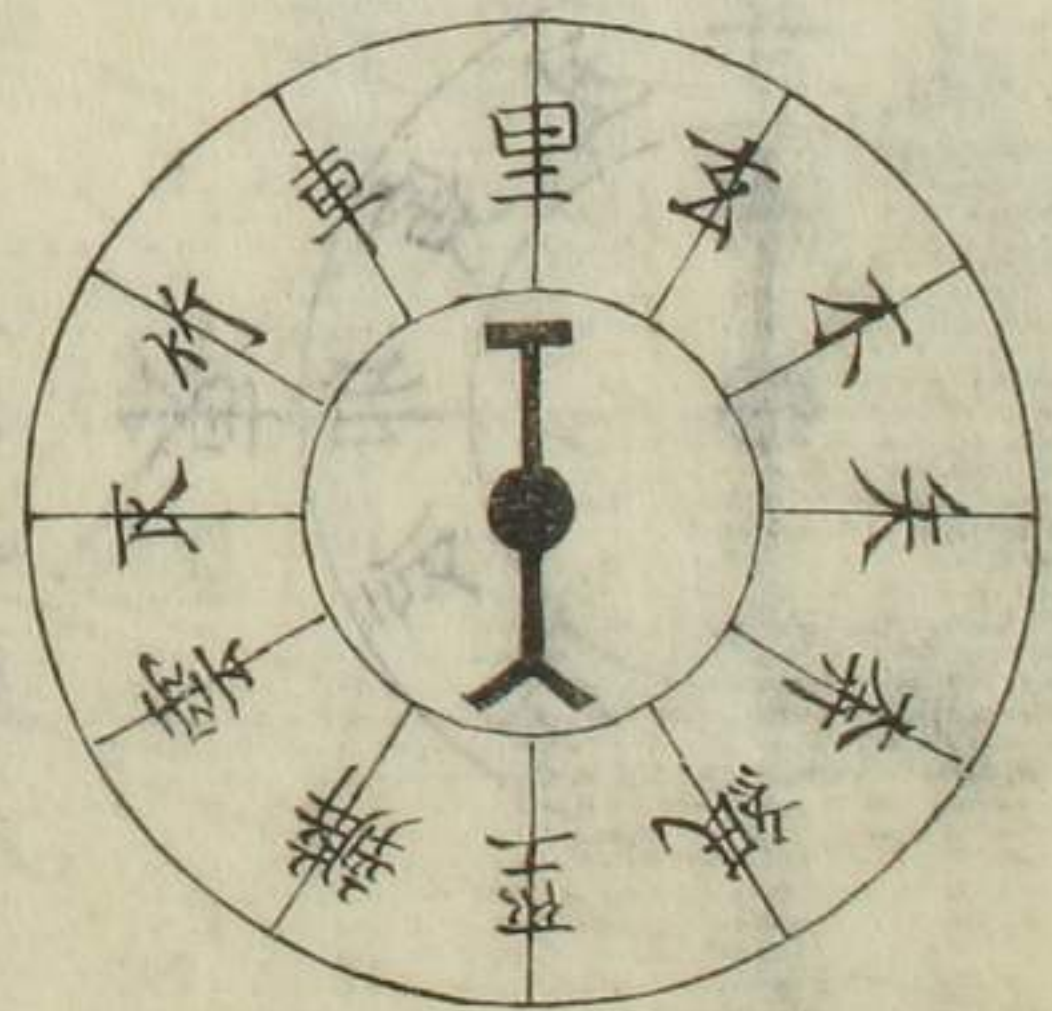
八

振るなり。亦振分といふと
つり。小業おて度々磁針と振
時ハ。微塵はりて顯るハ依て
是と厭して。所おより振出して
塵を一偏ハ聚めざるがごとく。ハ
なり。



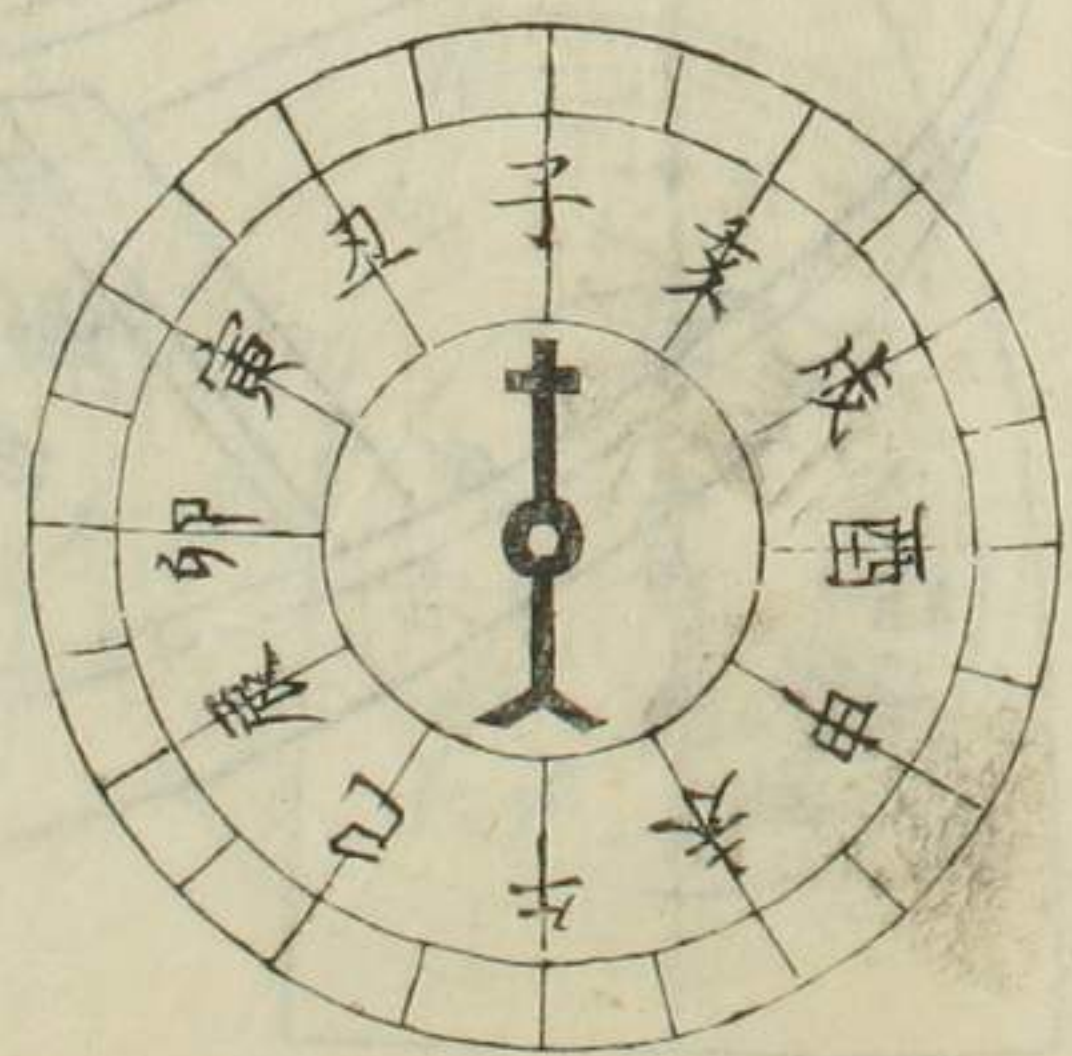
隱銘といふこつり。磁石の東西南北十二支ハ。隱語を以て

記す。是はいろいろ好事の作とつて、残るべき。他を愚ふ所の
 作りて、其の益なりとも見へば、其の東西南北とつて、長短輕
 重の四字に作る。是即子午卯酉也。
 是ハ易ヨ云。木者長。金者短。火者輕。水
 者重。といふ語あり。其基く外八支ハ
 車竹雲辨紙奔不玄の八字に替り、其
 字意を考ふる。甚笑ふ堪たり。
 逆磁石といふもの有り。逆目磁石共
 不常。不反して。十二支を左へ配り
 逆。居るもの有り。右の隱銘の條。述る所。即是なり。今初
 學隱字の解。これを通曉し。安んず。あやふ。正字と以て
 記す。此逆支。船路又ハ國圖。用ること多し。往々其用所。不



便利の用法を記す

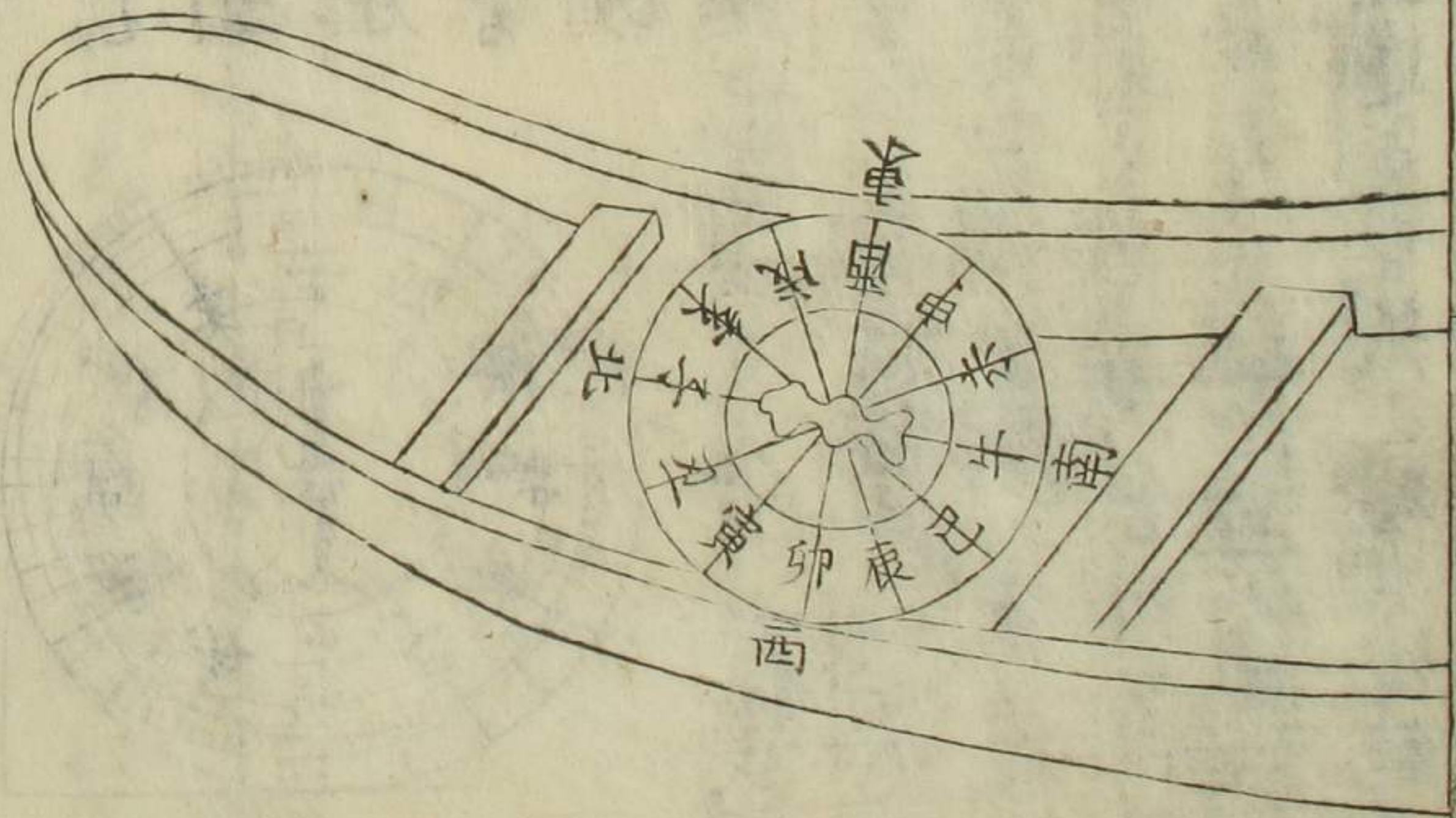
逆磁石といつて。左へ委く述べたるも
 其用船とつて。陸地ハ甚益
 あり。つらに。其制常例。不反して。左
 方へ十二支を配分し。方位を見る
 べき。に。扱方用を用る。此ハ何の



時も一先子支と磁針と。北方。當然して。後。磁針と欲
 する方。向。む。是其用なり。たとへば。南。北。験。時。ハ。子。支。ハ
 南。向。り。て。磁針。ハ。午。に。向。ふ。又。西。向。り。て。酉。を。指。し。東。に。向。り。て
 卯。を。指。す。磁針。と。四。方。配。分。の。十二支。と。交。會。を。論。せ。ば。以。て
 磁針の指と以て其欲する処。方。從。り。知。る。方。り。扱。船。上。の。用。と。云
 へ。海。中。へ。船。を。乗。出。さん。と。す。る。に。此。逆。支。を。紙。に。寫。し。磁針と

小船を正當の北に向ひて免
船中の平直なる所小張付壁言ハ
南方趣くんと欲せば其時ふつと
磁針の鋒の午支ふ當るや一船と
押廻し漕出す方と余是小効て
知るるを

忍磁石といふ器あり。是ハ密く小其
直程又ハ其地理を寫しそんを
時他人の見顯すこと厭ひて忍び
やふ事法なるとは法なり。或ハ此
器と立覽器ともいふ。小丸を臺小
仕掛て掌の内にて當支を振る



方角と求め。或ハ里町と知り。或も

圖形をあつたすれ業なり

右用法づれも忍の術也

古傳云凡国郡の形を尽す

いふも方角回町を求るふ。此術

を以て成すといふもあ。尤當

支と求め知ると本とい。間町と

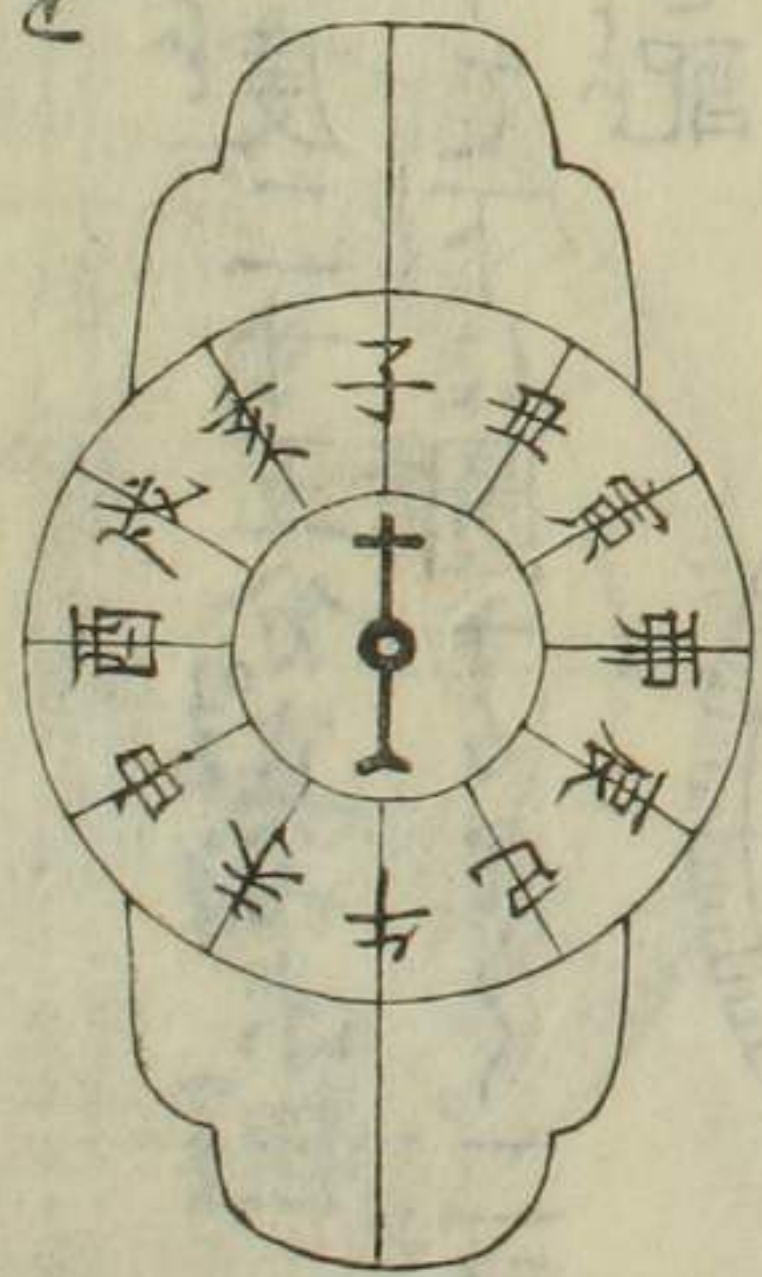
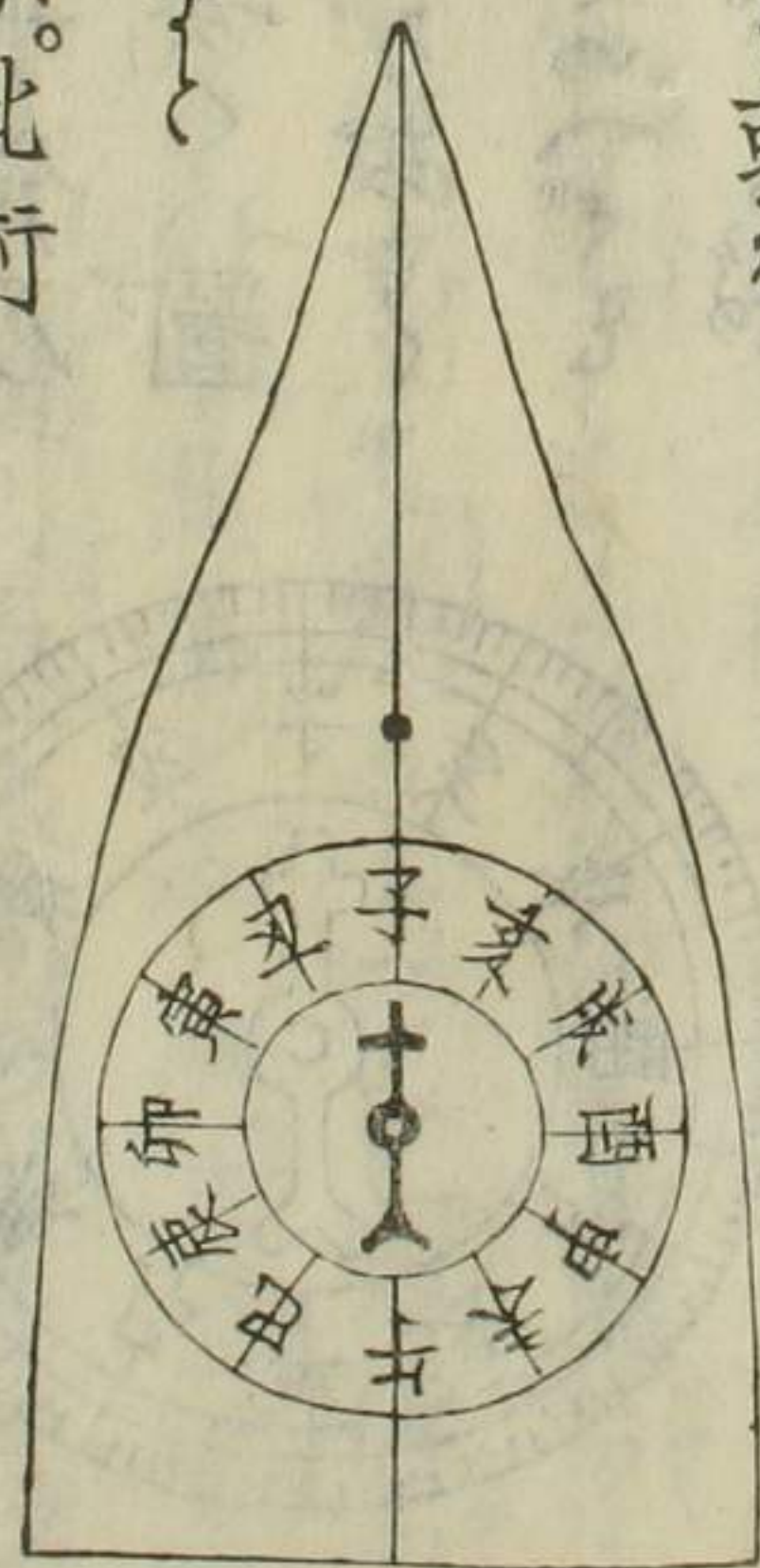
定るとい。歩行をもめて相試

む。さて忍の術ハ能陰藏とるを

專要とい。其事法慎むべし。又地里の量法時宜ふら。千変

万化の働さなり。免角一身規矩の術ハ満ざる。免ハ。免を

得が。尤筆談ハ尽す。口傳云云

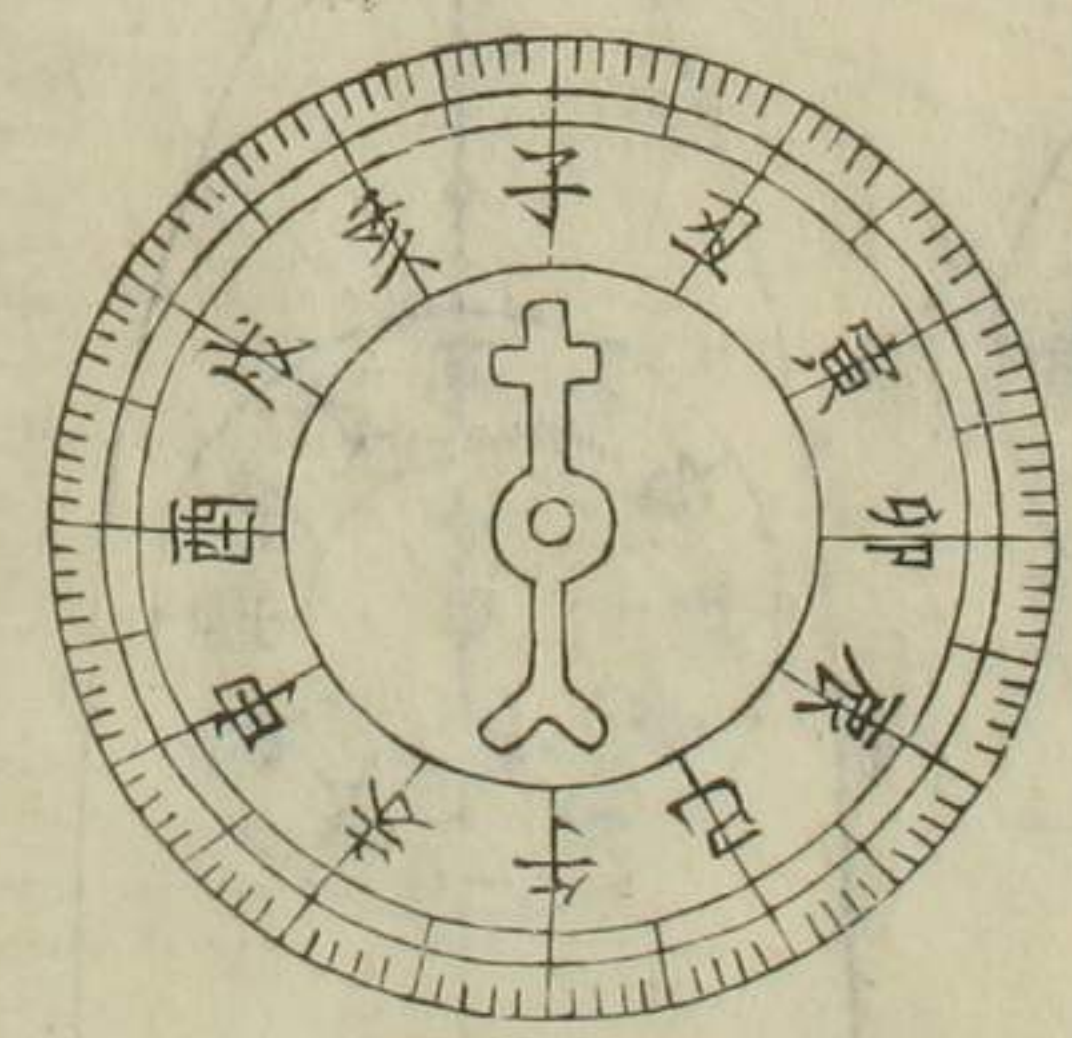


士

此器ハ胸小膺て用也。又杖の末小載て量る。立覽器と名け
らる。ハ立たう。小覽の意なり。常小用ひ馴て益あり。試
習ふる。

小丸之用

小丸ハ其制真鍮を以て作る。徑度二寸五分。真中小徑一寸
程磁針を藏る凹竅を穿つ。而して下に圖するごとく。二段の
間用を廻す。内の一段ハ十二支と配
當す。外の一段ハ一支毎に十分乃
線を刺し大略此のどく。委くハ圖
と見て辨ふる。扱右小述るごとく
全徑二寸五分大略なりといども
先ハ是と以て定法と知るべし。其

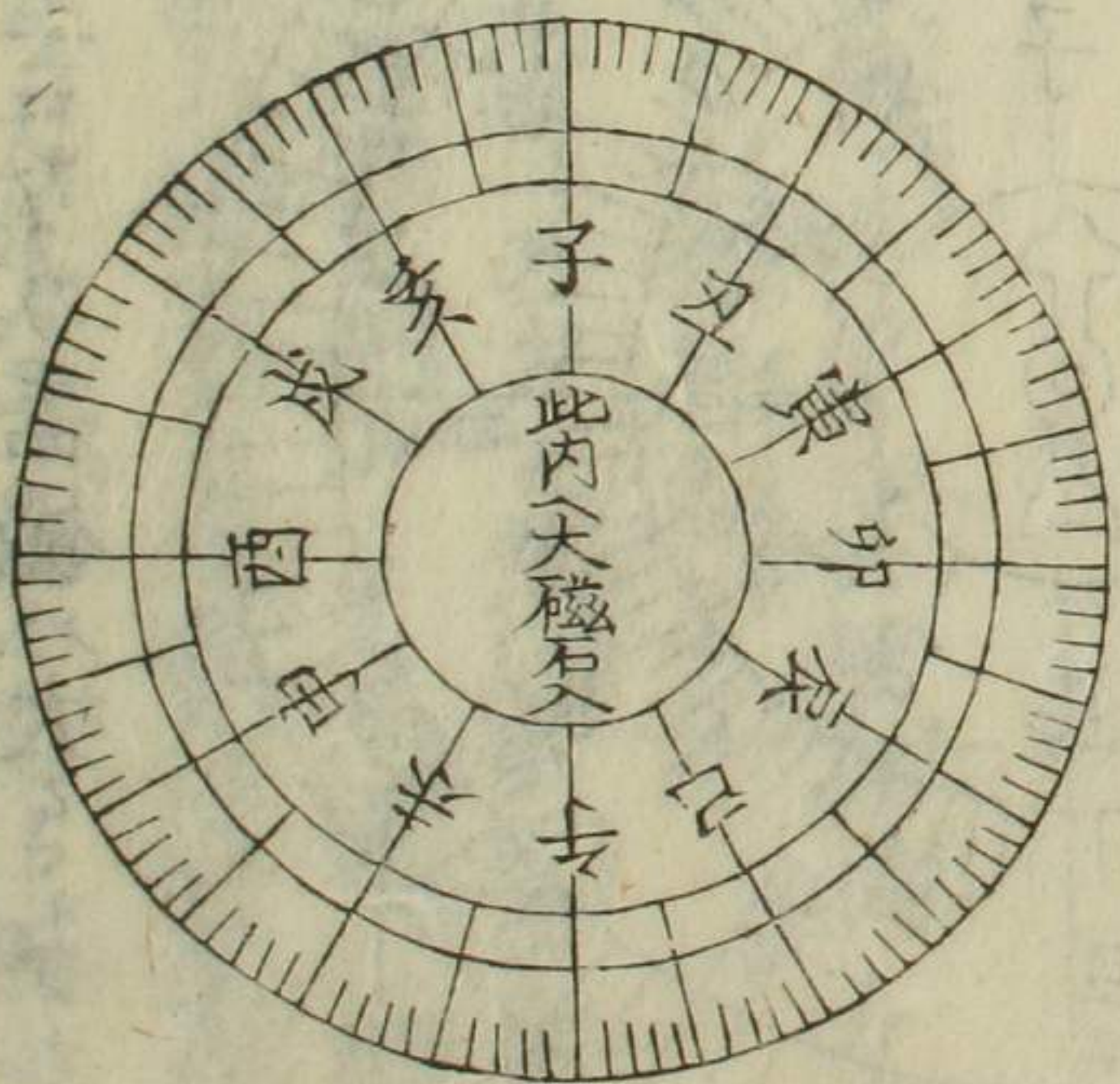


士

故ハ大丸ハ一尺徑一尺也。中丸ハ大丸の半減徑五寸也。然ハ小丸ハ
丸の半減。凹徑二寸五分也。是と定法となす。然るに其用品有
盤針術元器術ハ全く此器と用ずして扱ふもの。忍磁石立
覽器。隨川器。又ハ一本術等も其術皆此器と主とす。其用法ハ
各元器大丸中丸。忍磁石立覽器。隨川器。一本術の用法と以て
考へ知べし。煩くは爰小載す

中丸之用

赤銅真中と以て作る。又板目紙
なとて制しもあり。大磁石の下に
敷て大丸角と均くらん。但大業ハ
此中丸と小丸の代り用ひ。大丸
と別小徑一尺二三寸。四五寸。又

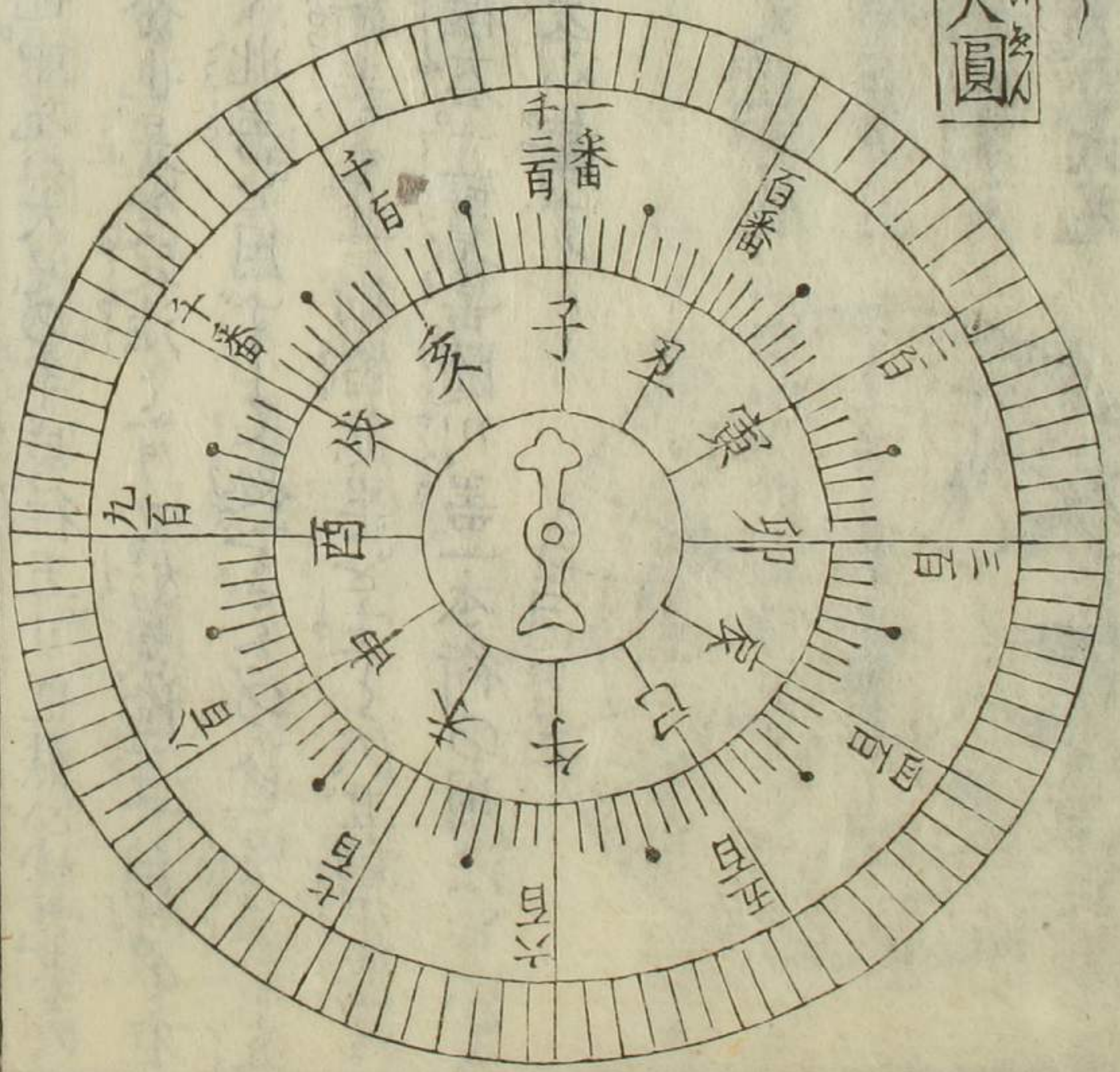


其品小より。徑二尺も制しつるが古かり。器械ハ大さなるに
あつてあつと知るべし

古

大丸之用並方維大圓

板を以て制す。徑一尺厚さ五六分。ま真鍮赤銅と以て制るも
可。或ハ板目紙と以て制す。小丸の下に布て用るも可なりと云り。其制小丸と大丸制する意の器なり。大場を勤るふ分厘毛速うふ

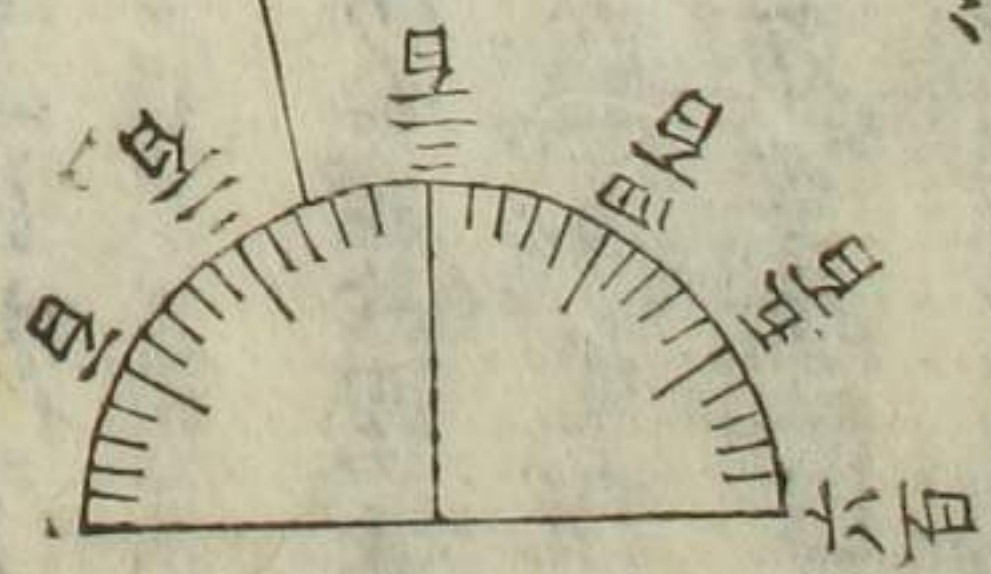


見る小便あり。依て大國の圖を制するも必用也。盤中に磁石を居るて勿論なり。圖のどく三段小圖を廻し。内小十
二支其次分線。其次ハ厘線なり。元器はどく針糸なり。元器のどく。横手ありて。回轉し安れや。に。臺を制す。此器を其臺に彫入ると。小丸を元器の上に施す。おと
知るなり

又云此大丸を半より折て用る轉法なり。其理徑捷なり
隨ふなり。又世ハ方維太目と云も一物別名なり
大丸の用といふハ先本場にて。大丸の一方と見込不當て圖の
おと。番附をせり。扱二目返も一を先みて見通し。開の
間數番附小記。扱本目當見返し。圖のどく番附とるなり也
何時かりとも。其術ハ右の通なり。大丸ハ至極小委し。故小磁

石小塵多^{ちり}子^こ時^{とき}に用^{もち}ひて益^{えき}多^{おほ}くといふ
 或^{ある}傳^{でん}ふ曰^{いは}磁石^{じしつ}の塵^{ちり}を論^{ろん}ずる時^{とき}ハ大丸^{だいがん}と以^もて番附^{ばんぷ}と用^{もち}ゆ形^{かたち}を
 未^まだ一^{ひと}但^{たゞ}二目^{にめ}返^{かへ}をも一^{ひと}不^ふ定^{ぢやう}る也^{なり}口傳^{くちでん}云^いふ
 其用法^{そのようほう}半徑^{はんけい}全体^{ぜんたい}兩圖^{りやうず}を顯^あす考^{かんが}へ

見込二百五十八番

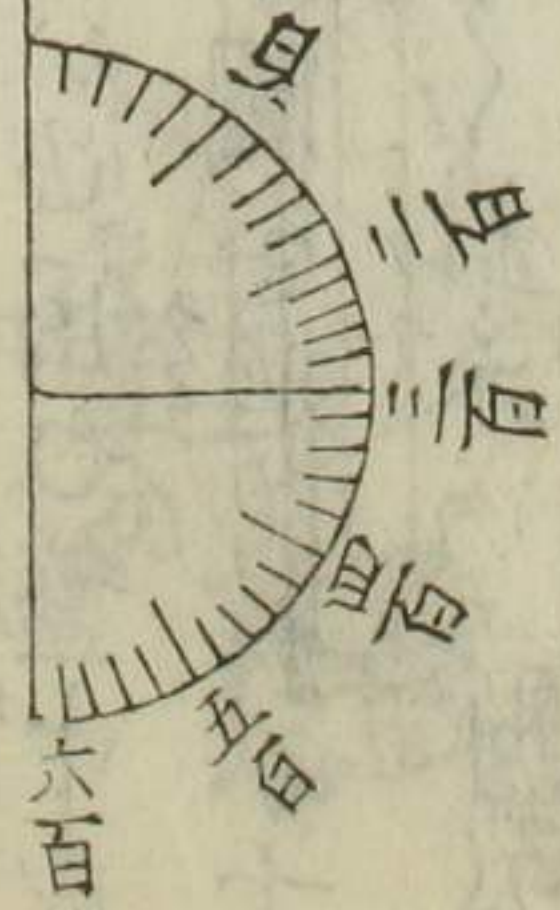


見込一番

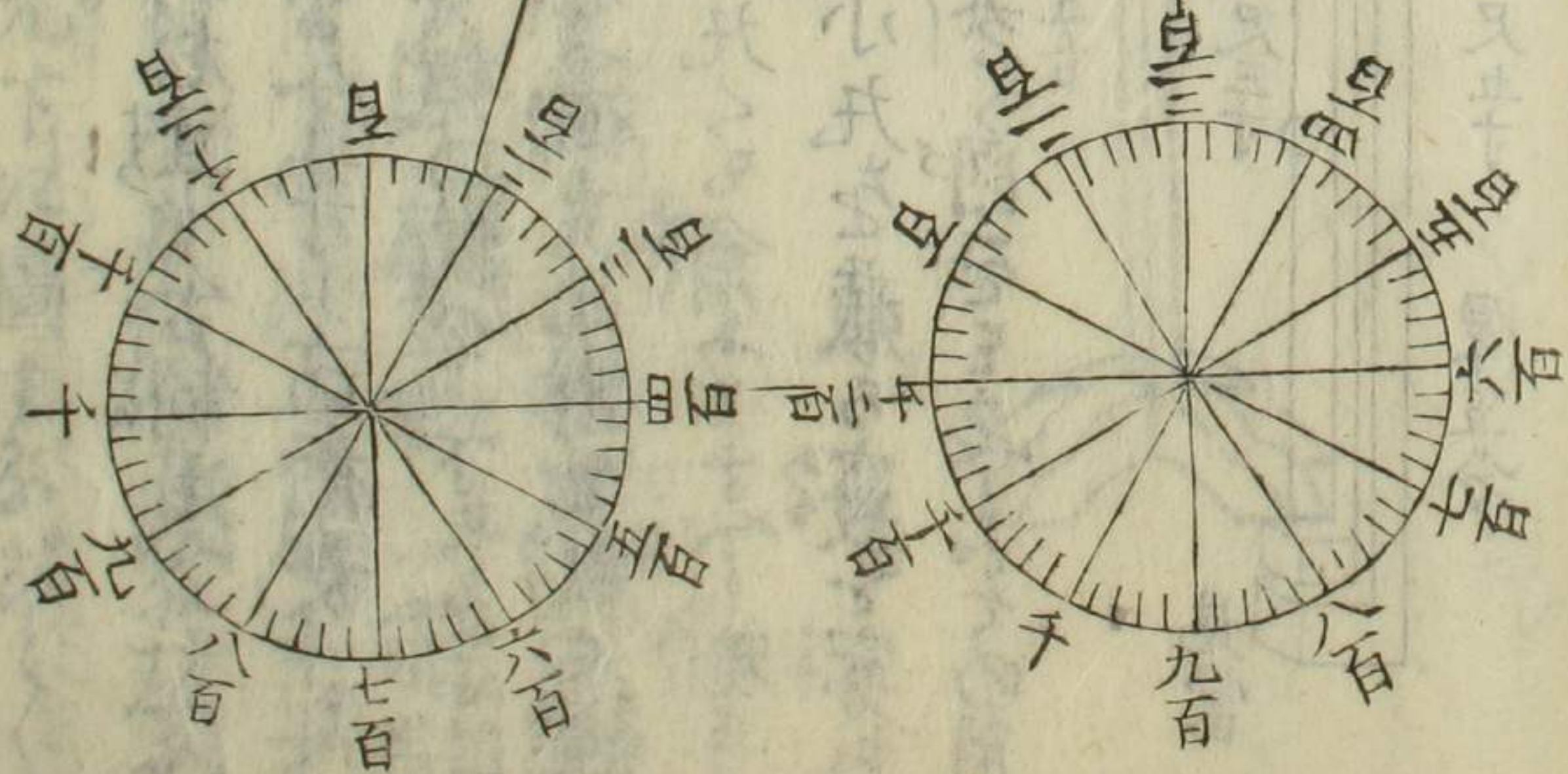
三百番
三尺四寸

見込二百五十八番

見込一番



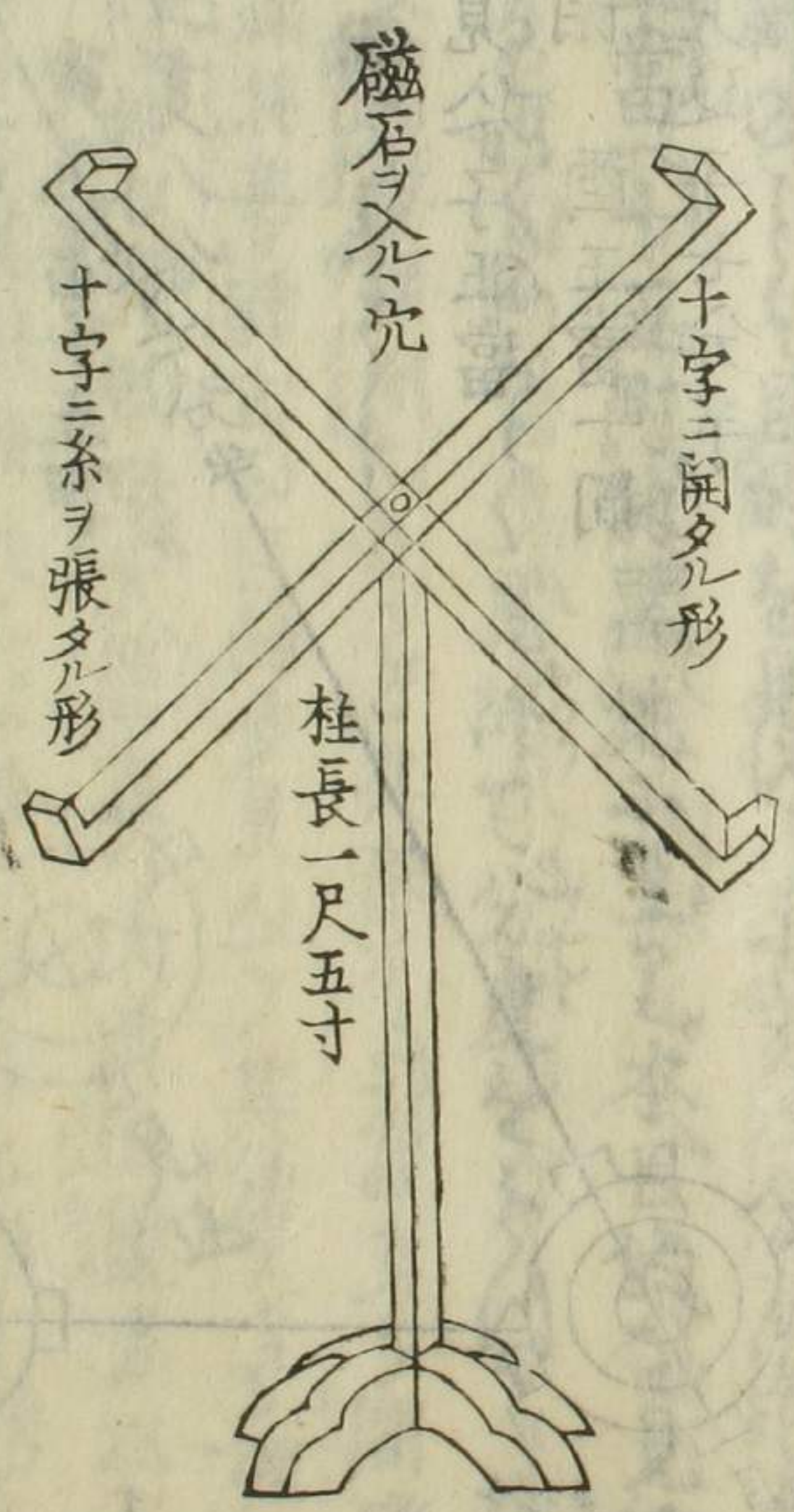
其用半徑ニ同シ故ニ贅セス



規矩元器之形

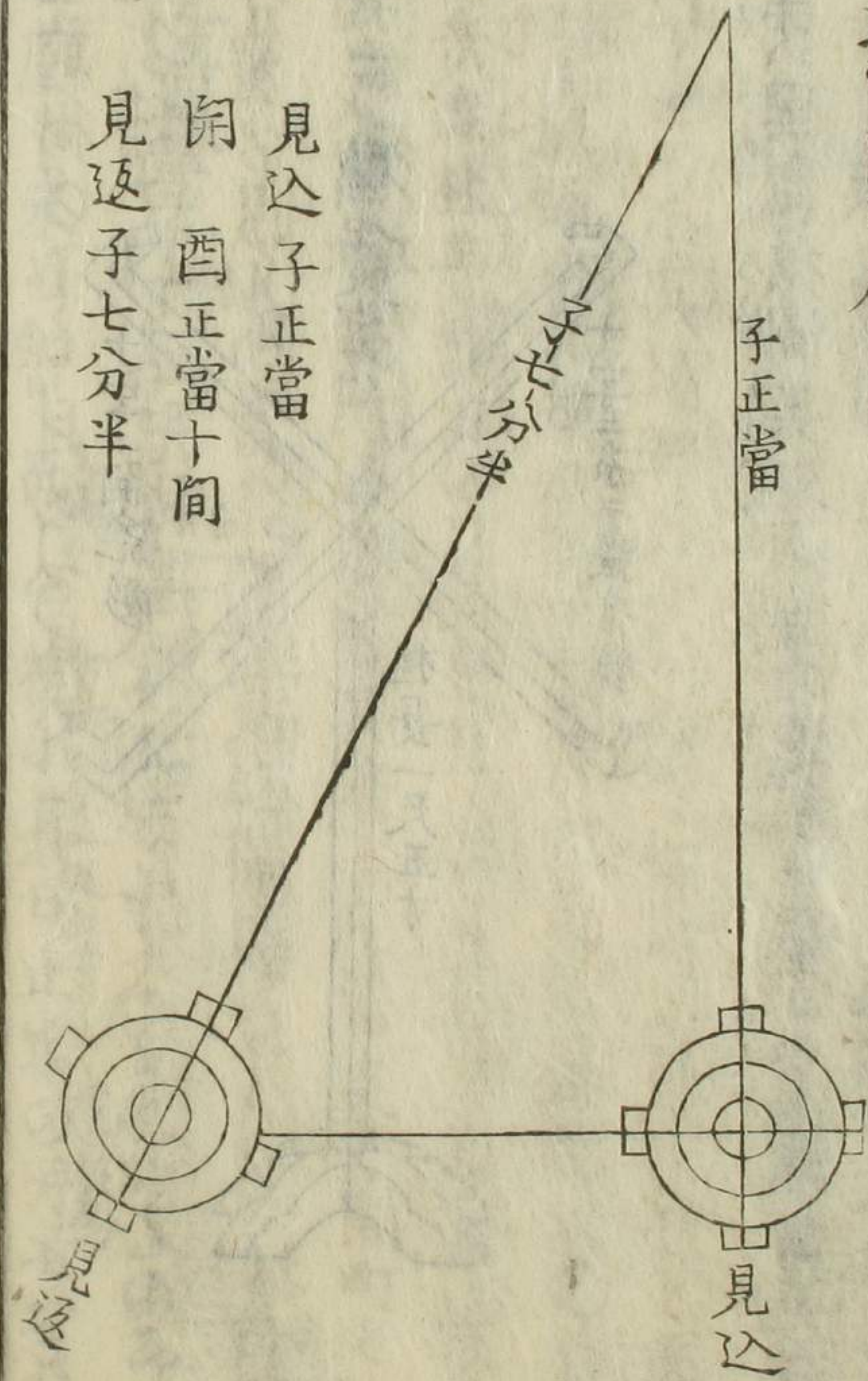
規矩元器ハ新古の二制あり。新制尤宜し。古制用べし。其新制ハ木ハ檜と吉と。下の桁長一尺五寸。上の桁長一尺三寸。上下開圖をたゞ。制す。桁の幅ハ上下とも。三寸三四分。厚さ五六分。其人の好み任す。此桁を載る柱。立柱の長さ一尺五寸。太さ方一寸。凡くも角もすべし。蜘蛛手臺あり。恰好に従ふ。扱十字の正中。小丸を藏る竅を穿ち。小丸を入れて。糸の折へ十字に張る。委く図をそへ。その用法の詳あること。即此下ふ記す。

規矩元器之形



凡此器ハ国圖城圖其外山海の遠程と量り。山林廣大の境を糾す。凡て大業に用る器なり。大丸山盤。大丸と小丸同器。其理一般なり。其用。小丸を十字に上ふ。施し。十字。開圖して。糸線を糾し。今其用をかん。今誠ふ。左ふ。一二の圖をちりて。以て。初學に示す。先下に圖す。ふ。お。く。

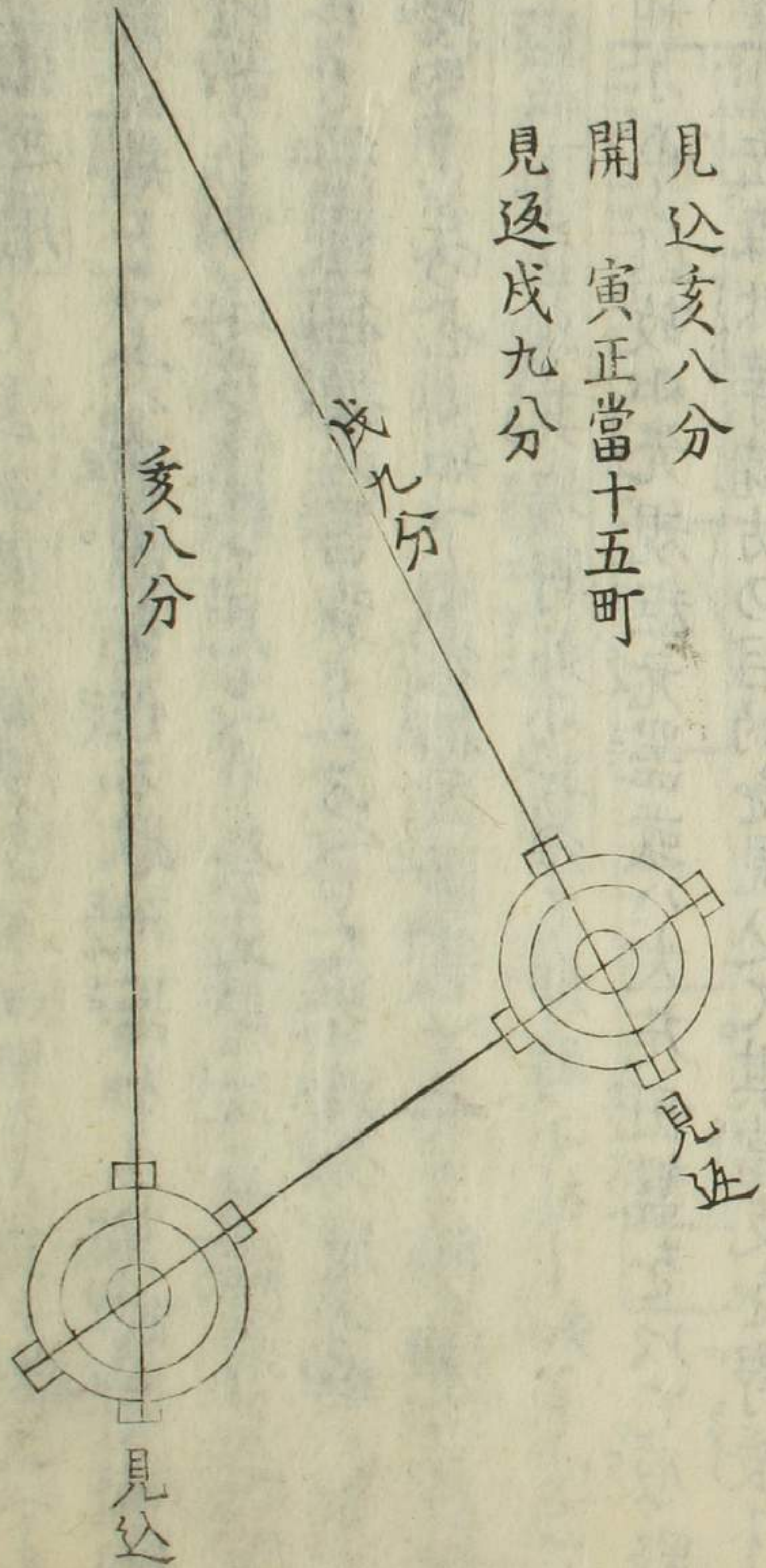
元器の本場小立て望所と見込て目的子の正面なり。その
 左の方横直小酉の正當へ開く。十間開場小至り。本目
 的を見返子七分半。かくのごとく見終つて後小圖のごとく分度
 の矩を以て圖を作るなり。



見込子正當
 開 酉正當十間
 見返子七分半

又術曰前術のごとく。目的を見込む。女八分なり。是よりと
 開地寅の正當へ十五町。扱開地小至り。本目的を見返すに
 戌の九分なり。かくのごとく見終つて分度を以て繪圖を
 作る。前術のごとく。

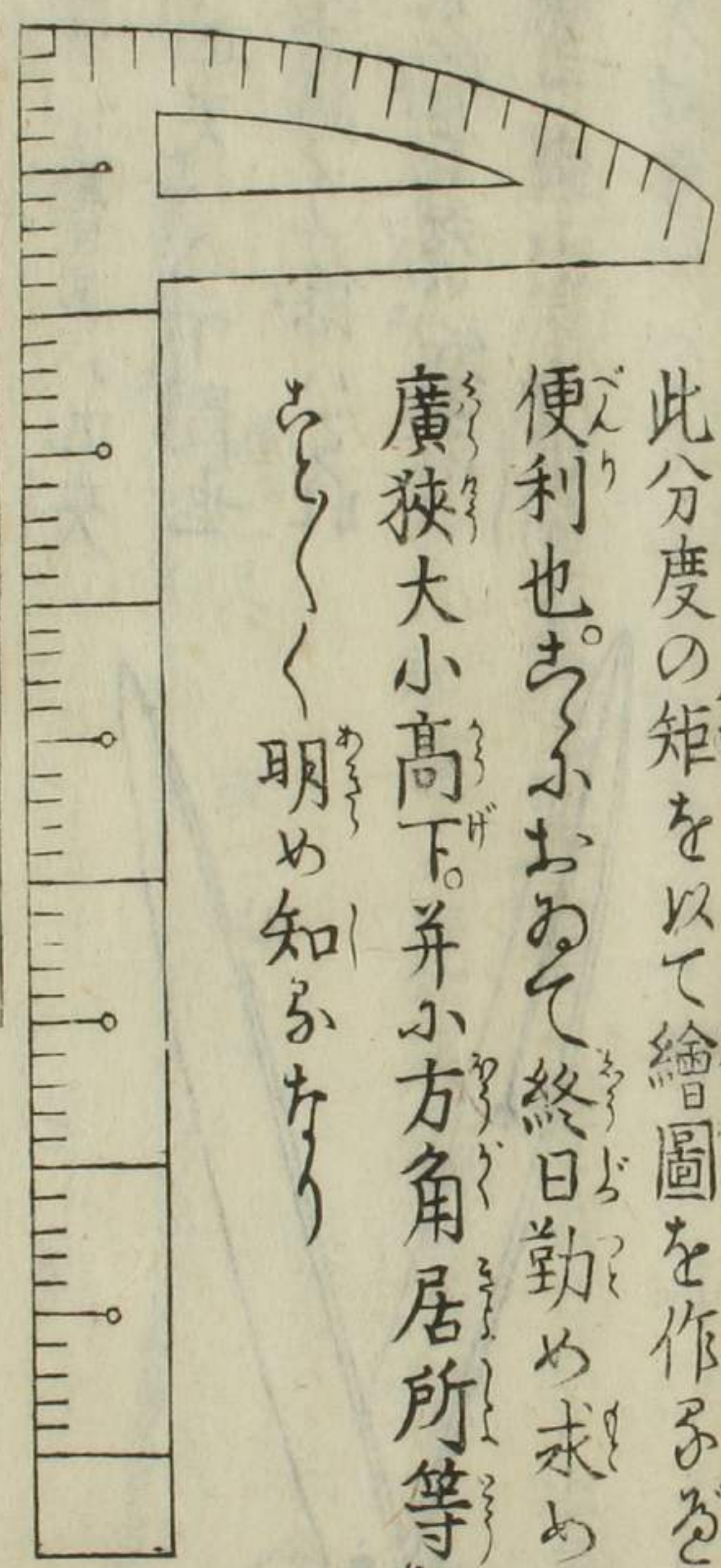
見込亥八分
 開 寅正當十五町
 見返戌九分



分度之用

分度の矩といふハ。繪圖を作る此神器なり。其制前編器
 械の部小委述たり。往て見るべし。今又虎法器圖寫器折紙
 方など繪圖徑捷の器多しといふも。皆此分度の矩より
 工支せしもの也と知べし。大凡國圖等と求る時ハ遠近廣狹
 大小高下も亦其場野外小おめて即時小糾し知し。還て
 便利小あはれ。故小先規矩元器或ハ大凡回盤を以て原野
 村里山岳森林等諸方の目的を見込て。其當支を野帳し
 記し置と。又開場幾所なりとも。其場どに當支と間町とも
 同く記し置と。見返の當支をも見込開場のどくくし野帳小
 記し置と。扱るれよると段々先々の場ふらする也。かくのどく
 終日幾度も求め知て而して後小其日止宿の所小おめて

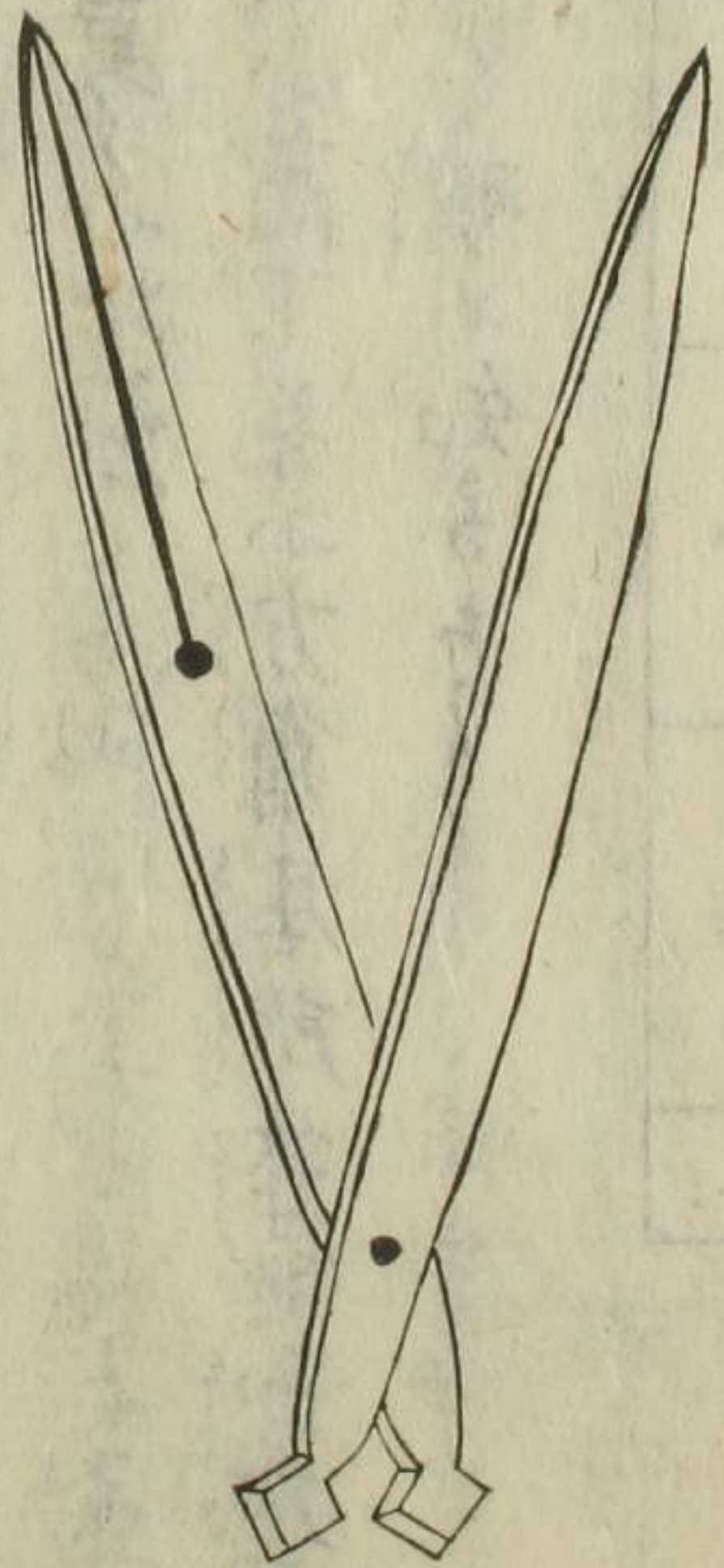
此分度の矩を以て繪圖を作る。その理
 便利也。あふおめて終日勤め求めたる遠近
 廣狹大小高下。并小方角居所等と即座小
 とくく明め知ふなり



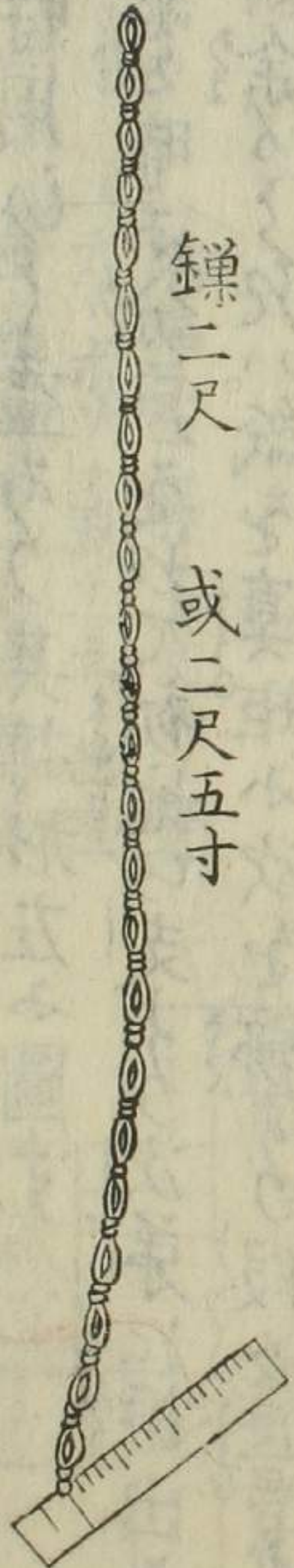
渾彘之用并類尺試定木之用

渾彘の用といふハ。此より彼遠程と求めんと欲する時。假令む向
 方小あは。一間の種と夾し見る小。方尺二尺の先なる渾彘の開口
 二分なり。向まむ此遠程百間なり。又五尺二寸を種として夾し
 見る小。方尺二尺の先なる渾彘の開口二分なり。向ふまむの遠程
 八十間なり。遠近高下廣狹淺深同理なり。宜く考ふべし

又向回小種となすべし間尺の知きたる物かた時ハ先何やとも
 目的を定め是を渾発の口やと夾と前へなりとも後へなり共或ハ
 進と或ハ退と其開場やと又以前の種と夾とて其差口を以て
 方尺を量て遠程を知るかると假令バ初小夾とたる開口二寸は
 後小進で夾とたる開口二寸五分は其差口五分を以て進たる
 間数二十間あはば五分の口を二十間と定め此口を以て初
 の二寸と量とハ四夾
 なる四夾ハ八十間也
 と知るぬり餘ハこれ
 としめて察知すべし



頼尺試定木の制近來好事の者種々の新作をなすといへども
 一得一失有り拘泥すべし今其二品の一やうを圖して勘
 考小備ふ余ハ準じく知るべし其用徃々小記す故ふやに
 贅せし



鎖二尺 或二尺五寸



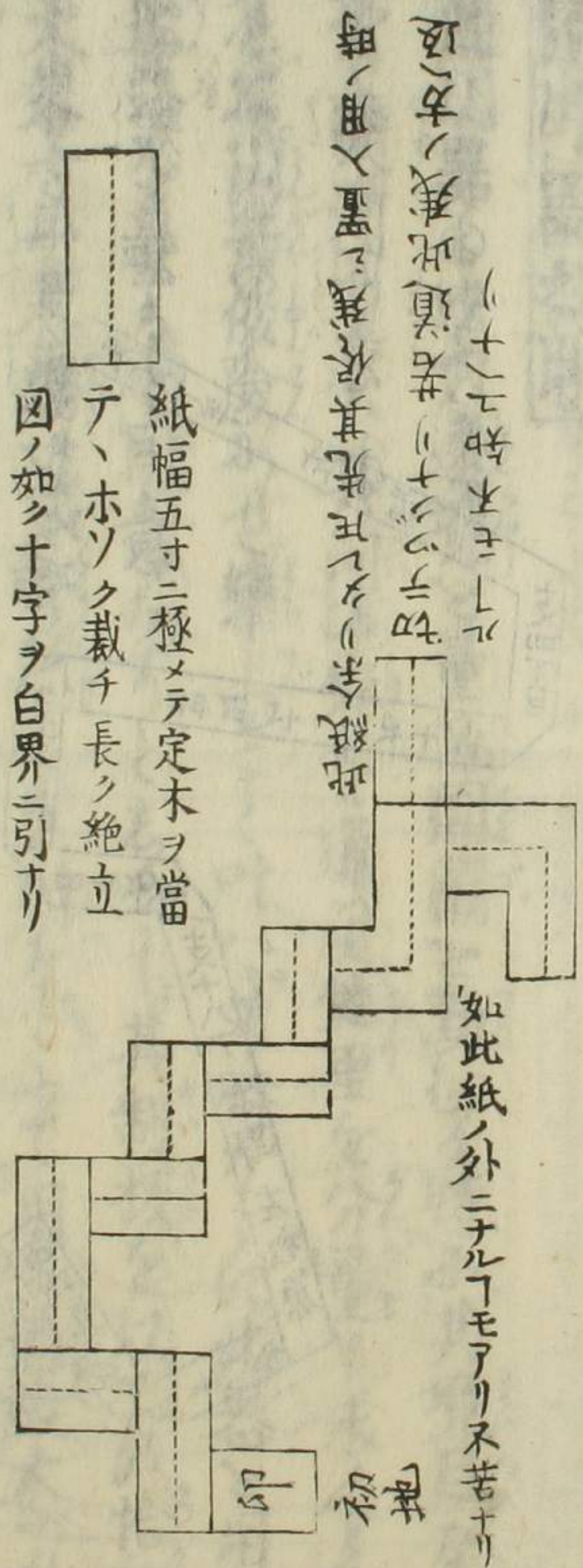
矩二寸五分或二寸 定木

折紙之用

折紙といふ紙を長く繼立て歩行なると立覽器を以て方位
 と定め是を折て其道程の曲直遠近を知術なり其用法ハ

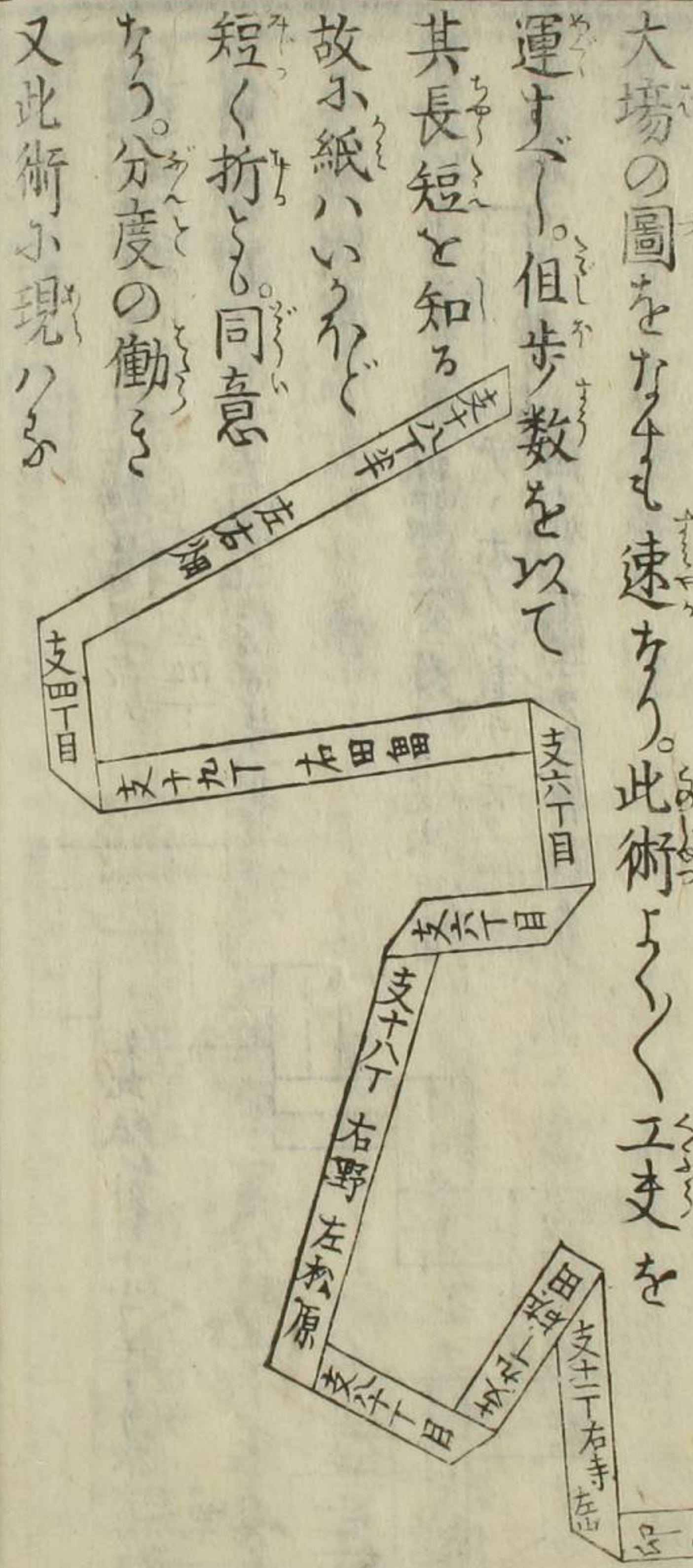
先程村西内等の厚紙を裁て。豎の正中に白界と引。我が
向ひたる初小磁石を以て方位を定め。夫より行歩不隨ひて
或ハ左右へ廻轉。或ハ斜正に進行すること。道路の曲直
應ト其形のどしに此紙を折て歩行なむ。路敷を以て其
町間と識。道路の屈曲。地理の大概を知ることなり。是他の
見聞を忍とれたの用。小備やことども。それのよむは遠境
国圖の時。用ひて益あり。其折形左の圖す

扱圖を認る時。小分度を以て。初地の支より次第に振出る曲
りて紙小余るとれたハ。紙を真矩小次を跡より段々置たり
四方にたまるや。小次てかり。然して圖出来する時。其大と
に紙を繼此折紙を其上。小重て斜をさす。小針を立。其
上より篋や。道筋を引かり



異傳云此術ハ忍の時。小用の出盤元器等の器物なくして。野町
の圖を得る術なり。其法程村紙西之内紙等の厚と裁幅一寸
程。小裁て。三四尺。小繼立。懐中して。假令ハ何方よりなりとも。圖
と仕立んと思ふ場より。曲目毎小其行路の形。小准して折。ア
か。のどし。圖す。ぐん地を画して。後小右の折紙を草圖の紙。上小

載折目毎の真中と地心と定めて針を以て突て形を寫す
 び。方角ハ初の地卯へ向う寅へ向う其格ハ應じて考る
 間町ハ足数少て記すべし。二人云合せて一人ハ立覽器と推乃へ
 忍磁石ともいふ方位を定め一人ハ折紙を勤かぐり歩数を記さ
 一物別名なり。外面よりハ徒歩行する体ハ見へ。然もいふあり
 大場の圖をなすも速かり。此術よりく工支を

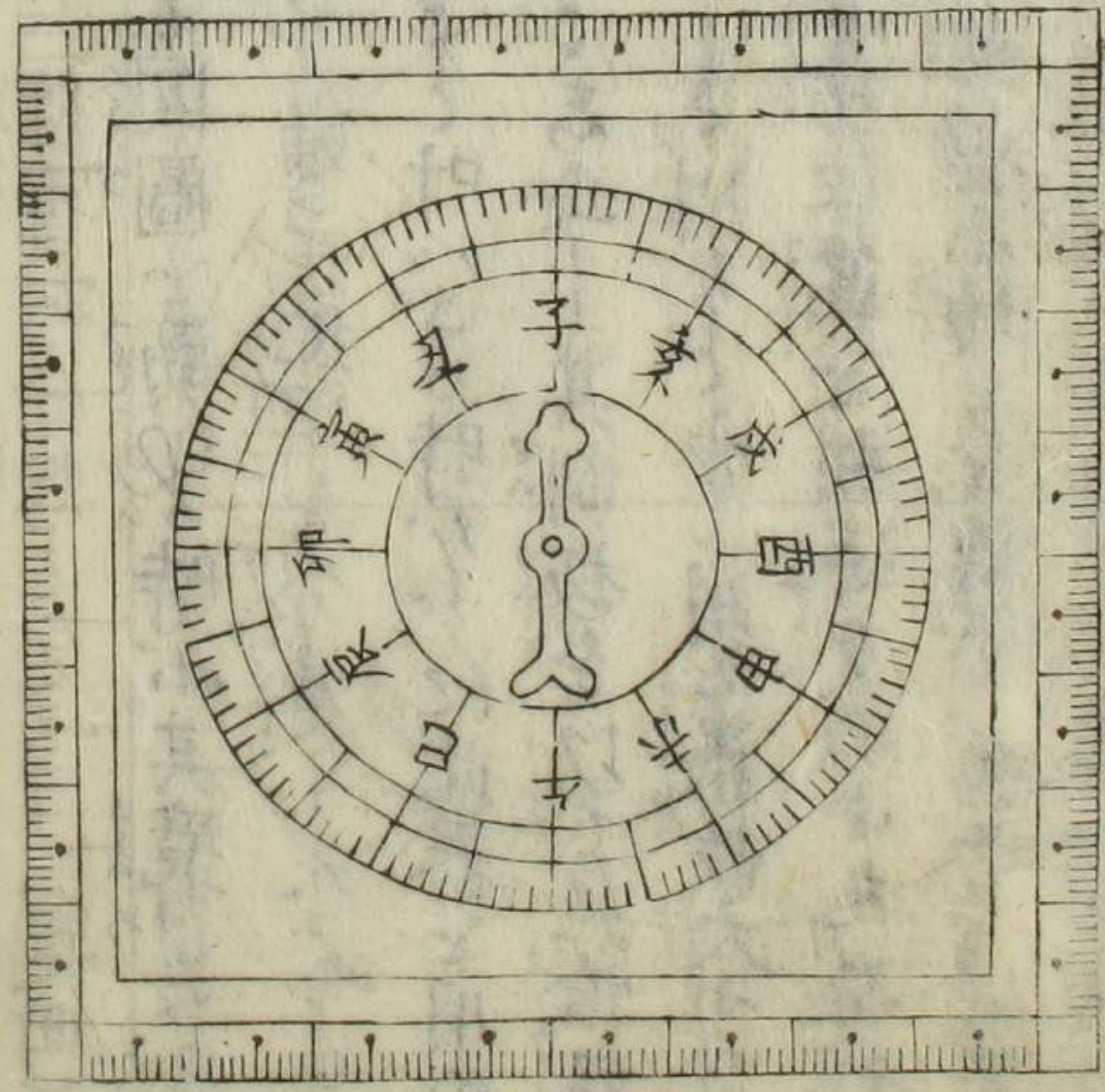


運す。但歩数を以て
 其長短と知る
 故小紙ハいろいろ
 短く折とも同意
 ちう。分度の働
 又此術ハ現ハ

隨川器之用

隨川器といふハ遠境と量る。國圖と勤り時ハ其境目など
 少て大河ありて其河の岸を通る。地里を分量し未んとす
 せば山岳俊険ありて攀上ること叶はざる時ハ此器と用の
 船路を量ると同意なりとあるべし。其制板を以てハ恰好
 大畧方一尺厚一寸許烈しと川をくめて用る器故大あり
 重とく吉といふ。図のどく正中に筋と引逆支の小丸磁針
 と彫入を両方に樋を穿ち。此樋ハ均しく線香を入る如くす
 是ハ両香を見合せて。恙なくんとして知らためなり
 其此器を用る法ハ先陸ありて。平町を勤りてなりとも
 又ハ間町を量つてなりとも。近辺の木ありて。岩ありて。目
 物物を船路の術ハ湊の種のどく。根発の口み合せ置板

船小なりとも筏小なりとも乗て。右の隨川器と船筏の真中へ居へ。扱乗出して目的へ種の渾焚の口の合時幾干間過ると知て水上幾町小線香幾分炷と香の炷程を定め。扱方角と直見して何の幾分へ幾町何の幾分へ幾町と野帳と総じらう。若渾焚の種とちがれた時ハ捨糸の法と用ぬらう。船路の度数と元來同時みりて方角と付け間町を其方角乃違毎に記すまでの異別あり總じて河ハ屈曲多きもの

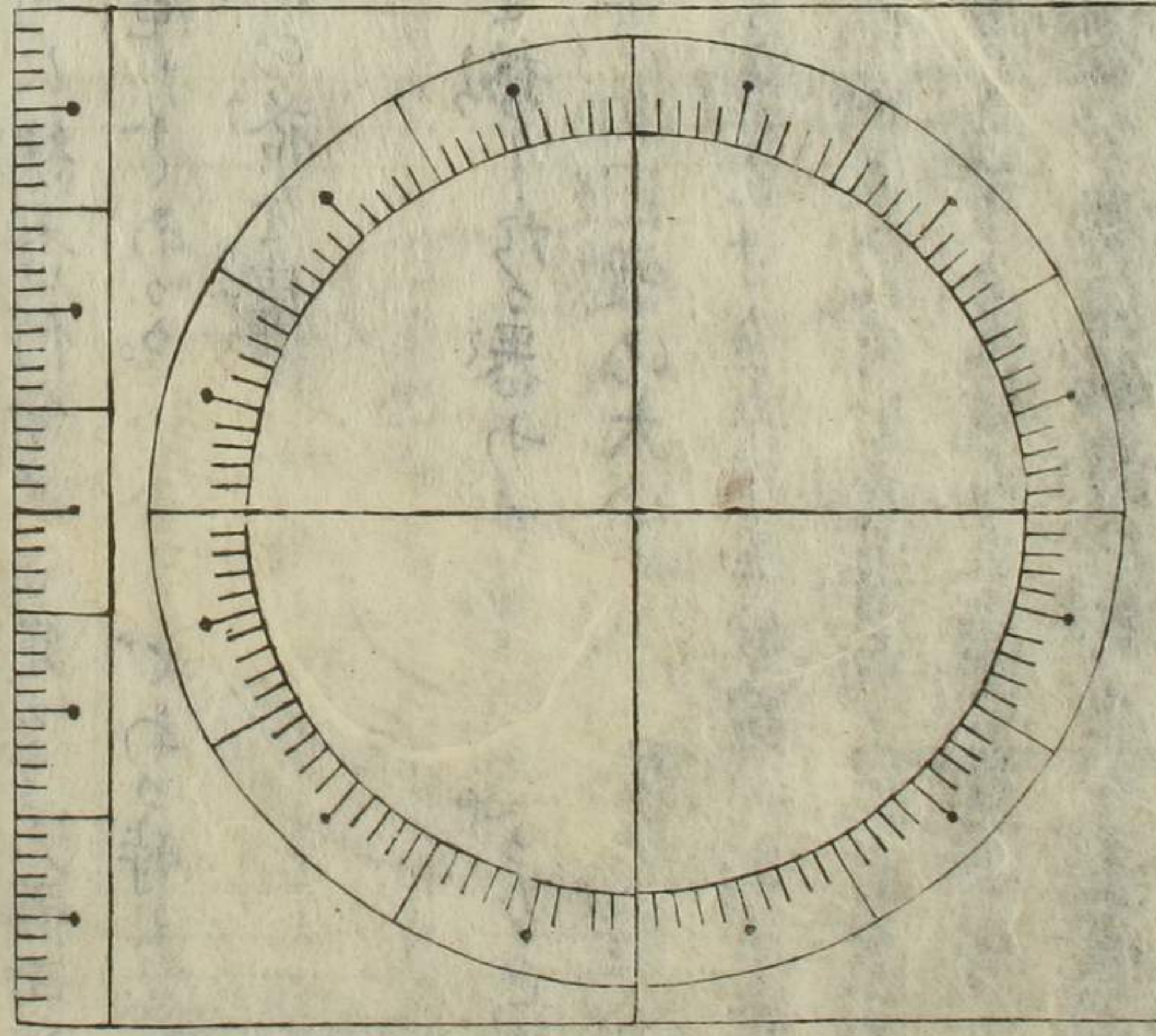


かりぬらう。初水上幾町に線香何分炷と定るとハ間町と短くして量ること可なり。滝などある。落合などある時ち船足速うなり。其とれハ用捨の格を專らすべし

虎法器之用

虎法器といふハ分度の理を移りたる器なり。業の速うなること分度小益す。其制作よ云方面山徑の大小ハ好む従い隨分板を選い。厚さ四分程小方五寸。五寸五分程小削。内ノ山周と鋸落小削。平常の曲尺の罫と盛付向ふ子と定め遣ふ故小圖の。星を付て子と定む。又正面の真中横に針を糸糸を引糸の。過地心分度の柄針の格なり。造様ハ図をなす時紙を虎法器の方面小合せて何十枚も切紙毎に十字と折帛。毎小星を付て向ふ子なり。野帳と以て

假令バ卯の五分へ十町とあり。右の幣一枚を取つて。虎法器の下に置に向ふ子と合せ。子丑寅卯と順支小繰り。卯の五分小針を立虎法器と取直して。曲尺の方まで十町を量りて。知る事。分度の。又次の分付へ至る時。右の幣尽ると此の外紙を方角と町と合やうに尤向子と外と合小繰合せて。又前のごく順支小繰て分と合せ取直して町と引分度より

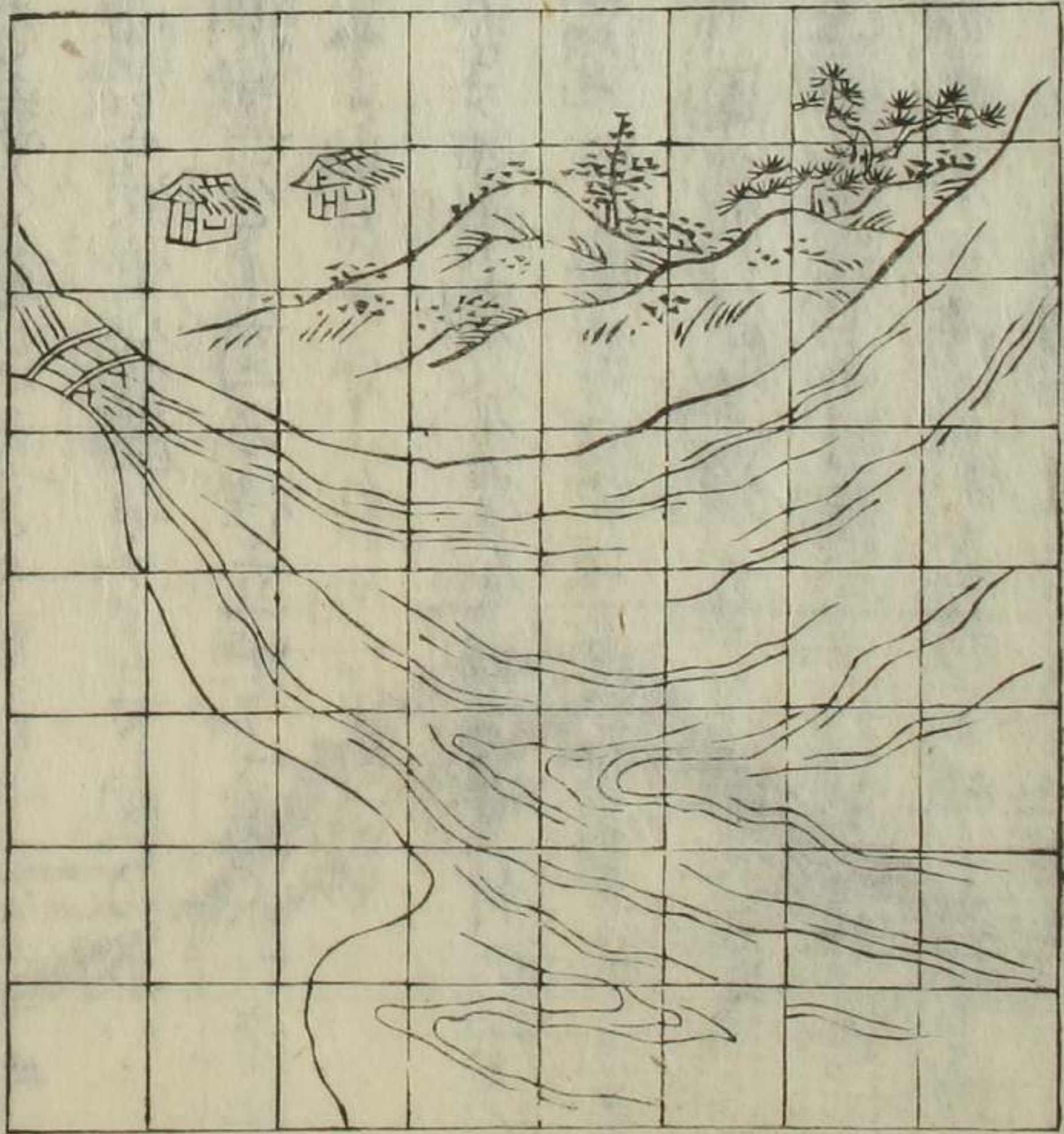


も事速う也。紙を小く切る。十字細して地心糸過合せ。此れ為方角。其上下圖を悉く繰立ると廣幣とて十字も差。此れ方角甚合セ難。故小分度ありても下図の紙ハ小可也。紙の盡る度々小繰立ると。図の仕立やうとて。切者有

圖寫器之用

圖寫器といふハ。左小圖するが如し。先分度を以て。分付のごく町里と白引して。次小墨と入る也。其用といふハ。野帳ふらある。圖風景と以て形を圖。道筋村里山川委く記して。草圖成就する時。是を清圖小寫さしむ。小目積めて。八分厘間町邊。こゝり。此故小圖寫器とくうはす。然る時ハ。少も差あり。其上假令五寸一里の図を二寸一里の積りあり。紙をちびひる等速うなりと

二分ウ三分四方ウデ小削
 ころ木と四角ホコウ一間を
 一寸づつとも五分づつとも定め
 て糸をもち草図の上ヨ置
 扱清図紙の上ヨも同寸の方
 と置く上ヨうつくつめの何
 処小山峯又川左ヨり幾
 目ホ家橋をど右の術の目
 とヨめて見あつせ又清図と
 拵一其格ホ段々うつ一術を
 除きて形色をもちらゆ一
 大を小まぢめ小を大
 のづつと術目をもちて
 考ふべし



五

間竿之用

其制極木を方一寸許る又ハ二寸五分二

寸小制るも何り。尤角小削至長と九尺小定む但一
 三尺づの所小胴金を入る此制前編小委一
 打様ハ圖のどく半間の所を組合せて通を定め
 ねと竿と打ど一但一本と用る也或ハ数町と打行と
 之をも曲ることなく一文字と得たるも然る時ハ平町の
 地幅を求るが如し亦五間とも目立たる坂ケと打
 時ハ先高を求りて是と鈎小用い扱堅小打て是を
 絃小用ひて別傳を以て股と求むべきなり。即地幅を
 求め知るなり
 又或傳小登竿箱竿といふこと何り。登竿ハ地形不直成
 所ヨて用の高所へ步行堅竿の継アなり



平地ハ繼竿也。棹ハ一間な六七尺。二間な六

一丈三尺。品より棹用ること。規矩の法なり

差かたを本とする也。繼竿ハ一本とて少く

箱竿ハ品より。二本も持てる

方に削る木棹より。寸尺を盛付

る。石壇たもと打と。登竿箱竿と豎

て知るハ三四五とも量るべし

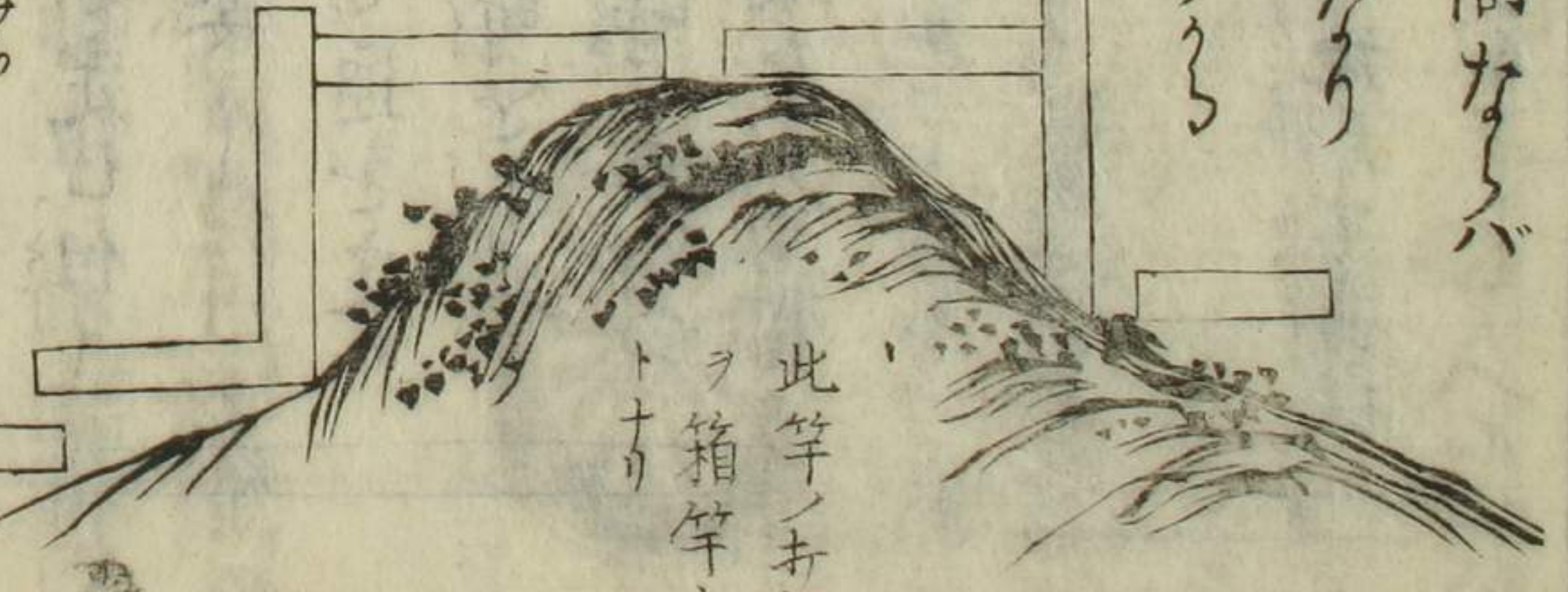
或人云此登竿箱竿ハ竿の制ふあは

おやりのことなり。上ハ所謂と混ぶる

又或傳小箱竿といふハ三尺づの所を

二本繼合するごとく制しるとりやと

輪竿といふ物なり。是器ハ九折りる山坂道ハ竿



此竿ハヤウ
ヲ箱竿ト云
トナリ

少ても繩少ても邪斜ありて。間丈齟齬出来る者也。この輪

棹を用るとは。少も間尺違ふなり。其制幅三寸輪六尺也

曲物なり。竹輪少ても作る。譬ハ其形木綿糸線繰出す車の如

なり。扱桎の木を心木小施し。左右より

二人少て轉するなり。一周一間と定む。尤

輪小印をなして。其所まで周ると

一間と知る。山坂道の用なり。藁研乃

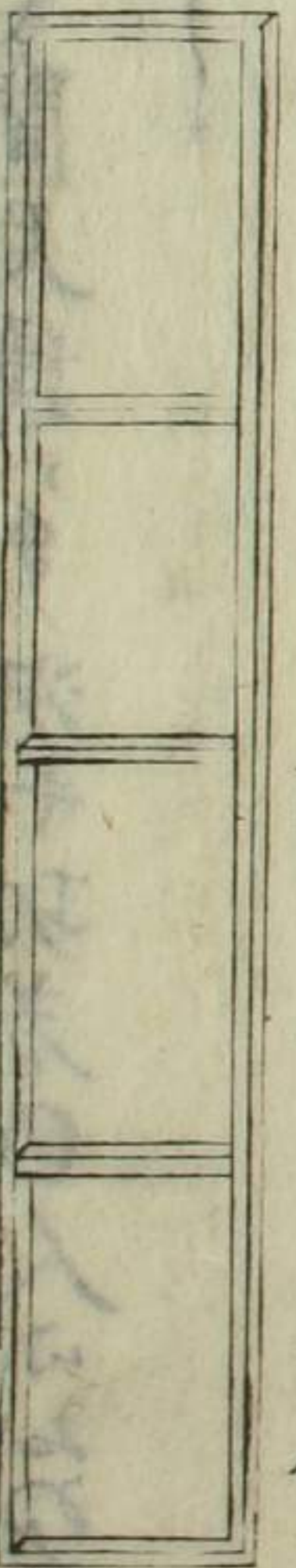
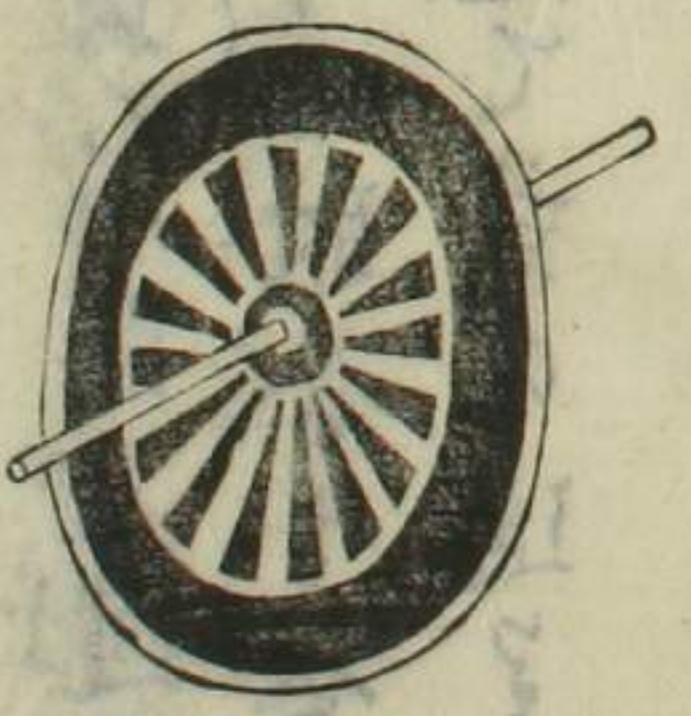
鋸のどく齒を薄くするハ悪し

箱竿といふものなり。此器ハ長一間横一尺。高三寸檜乃小

割をとつて作る此竿と二つも二つも設て小口を突合を

間を打ちたる。此箱竿

少町見を改る時ハ

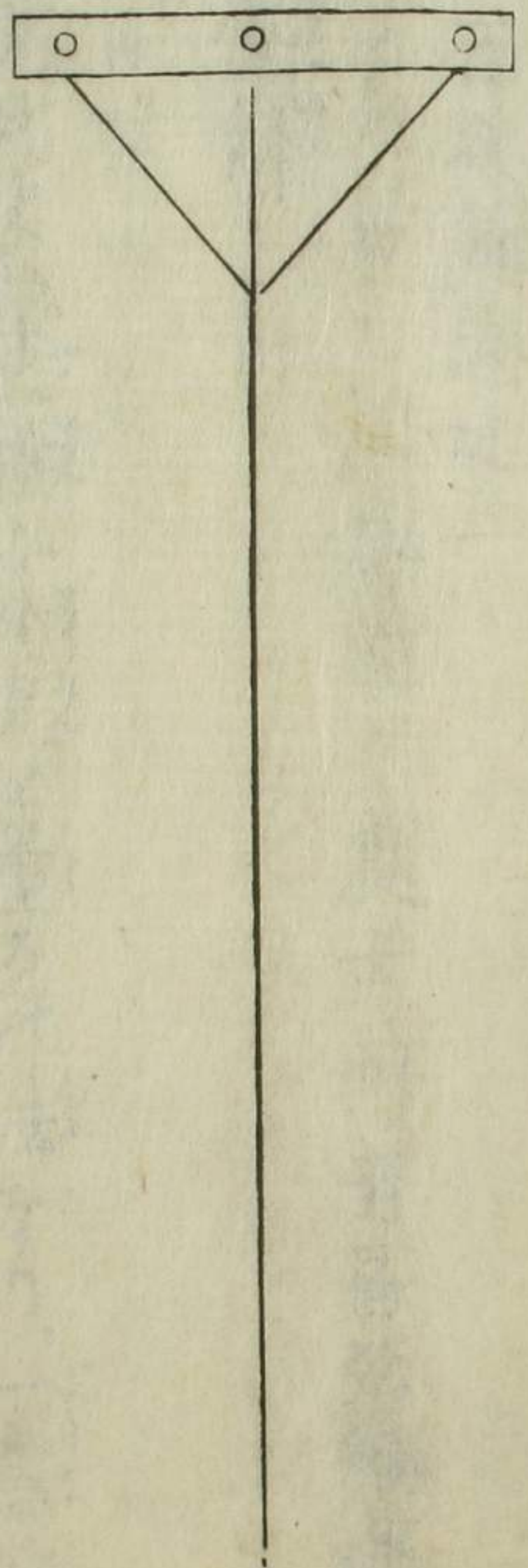


假令不切者といふも。間尺違はず。況や切者の人ふおのそ
とや所おとらう用めべし

間繩之用

間繩、極上金引の真苧と用ゆ。其例組様前編器械の部小
述べ随分堅く捻て。澁う蠟う塗て。湿氣の徹るごとく制
す。繩の張りの撓るごとくす。撓めば間尺違ふと
必す。左一間毎に白紙を紙結付て印と吻合する
大方ハ一町までありて。其より以上ハ又總て前の通り
張る

又錐繩といふものあり。左小圖を以て。形を平錐の
一間の竿の両端と正中。小間繩を三筋付て。此三筋の六
尺下あり。一緒小結び合せ。両端の二筋とは餘りとて捨



正中の一節と長くして。間繩小用也。是を以て正中の其
物小押當て繩を引ると。少しも斜なく。直にたる也。尤兩
端の繩何とせても。女も撓ると。直らざる。勿論也

量地指南後編卷之二終

量地指南後篇卷之三

勢南 處士 村井昌弘編述

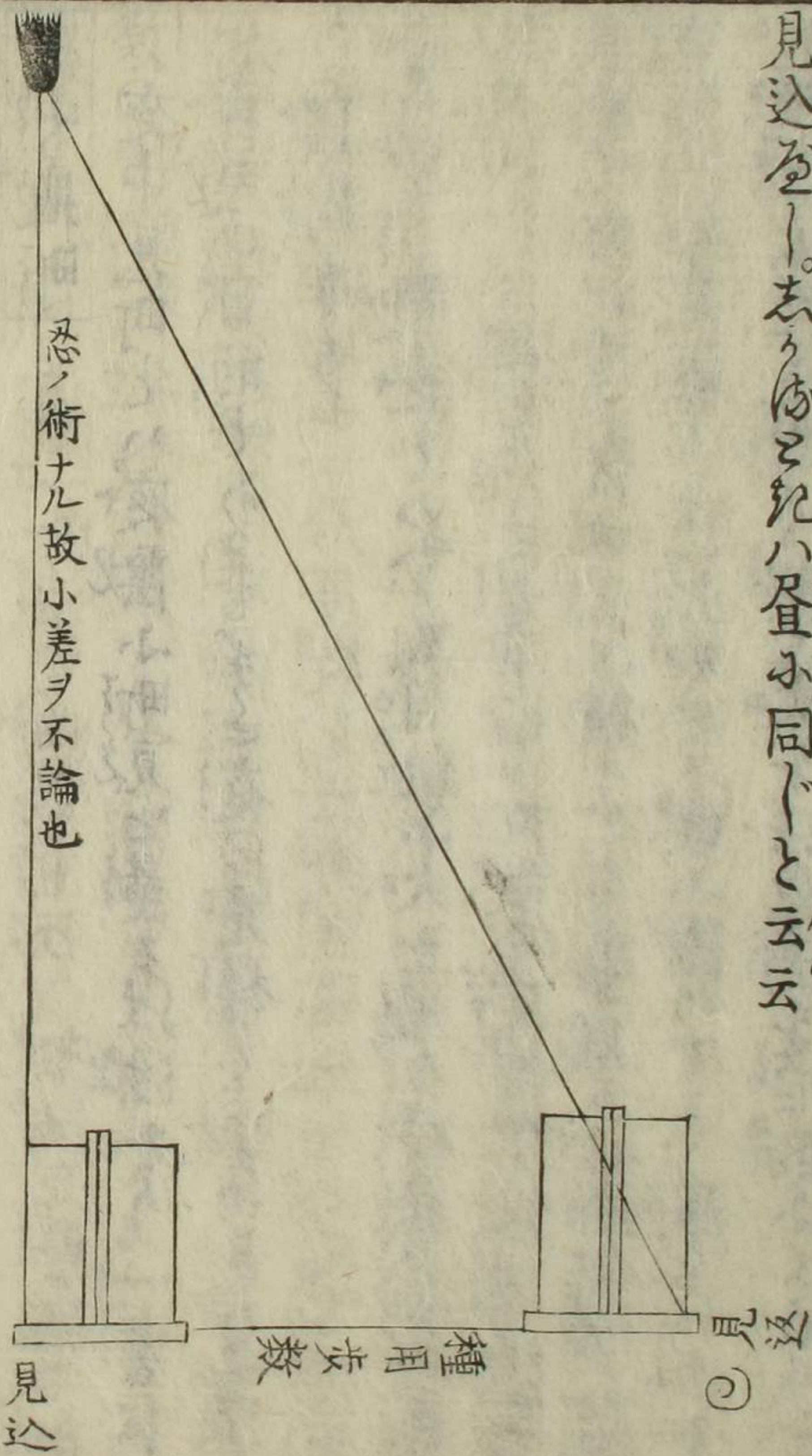
極傳解

夜中見町

夜中見町とは夜陰小町見と量る此法なり。一書に夜陰の目的とあるも。まゝこの夜の見様とらふとも。小同術なり。

古傳よ云闇夜といふも。目的小火を用る時ハ白昼ノ異ならず。但渾丸を以て量るが故ハ定規やの器小割を付て常に遠く尺寸分小摸してまゝと用る也。且手本闇時ハ見込見返とも。知かこゝ故小圖のごとく。線香又火繩等。あそを短く切て火を付け。是を目的小をらひて

見込を。志うはるは昼小同ぐと云云



又云右小火を用る時は見盤めても求め知る術あり。然る時は。渾癸を以て計ることも自由なり。或八十間開て一の割

に當るとは。遠さ十町なり。兼て試と知るなり。余は是と推て積るを。

船路之積

古傳曰海上を涉て曲節直徑の船路を量知の術なり。是ハ船路の要といふも同術なり。

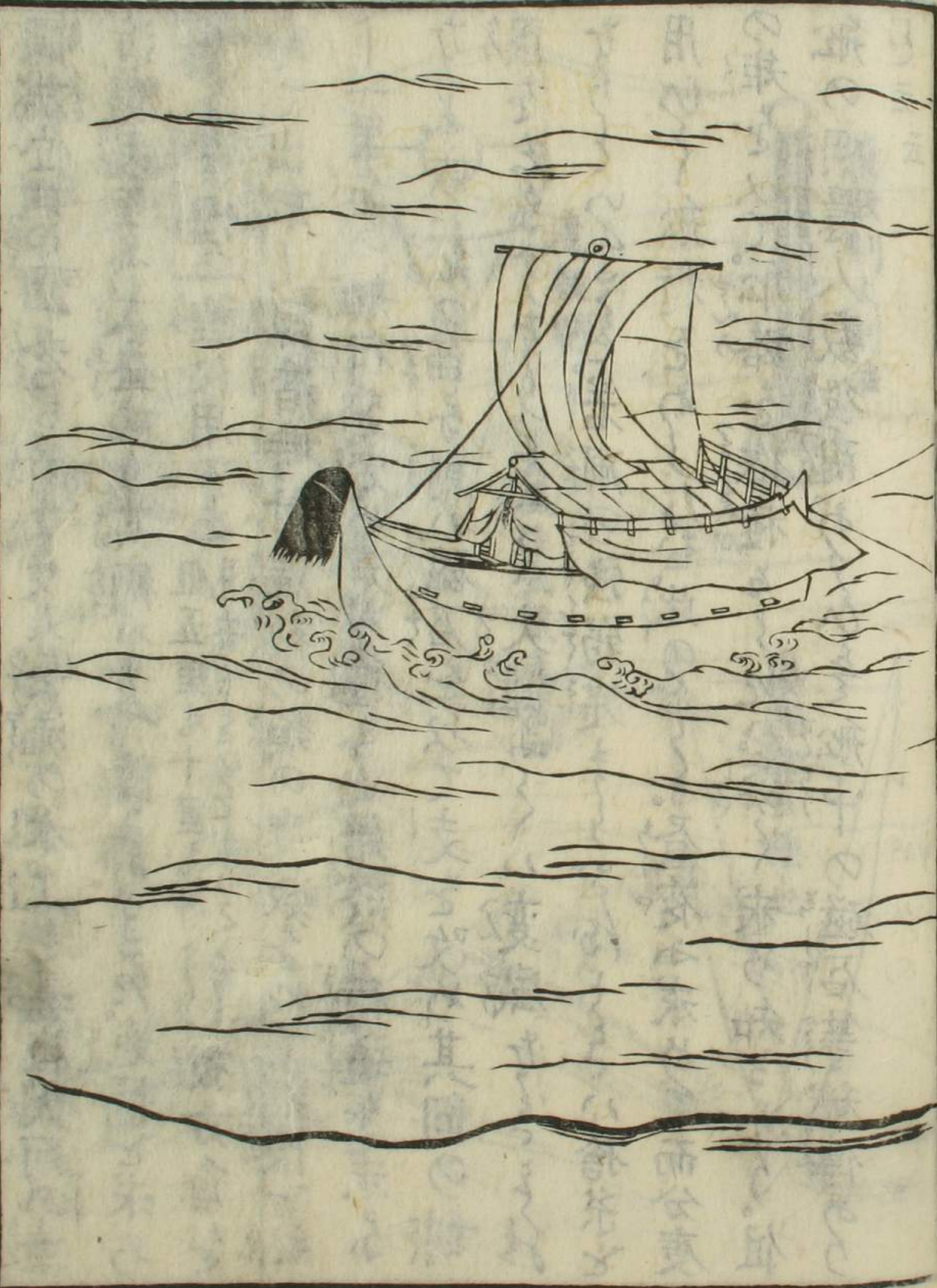
術曰先陸地小於て湊口の兩端の廣幅を求め。是を海上の種と爲。扱船中より度數を仕掛置磁針を以て。方位を極め。然して出船す。度數とハ線香土圭記歌傳聲捨糸等。何れも里數を試るは。品物をつまなり。勿論洋中にて。変風あることハ捨糸なり。何れも其船の走の様を懇み改むる。昼夜右の如く。怠屈すべし。曲徑路一次より。方位の町里を糺すこと。嚴重なるべし。然る遠路の船路曲道

直路掌杖指ぶぐくなくんと云云
 或傳曰湊より船出ざる以前近邊の山へ上る。湊まで凡町
 見を勤め何十町と知る。其種の口を違ひて扱長と二三
 尺許の竹を渾糞のてし拵へ湊の口は合せ要と能く置湊
 より船を漕出すは凡船立右の竹を以て湊の口とする。
 竹の開口湊の口合の時。最前陸まで町見を求る所
 の道程と均く舟走ると知るべし。是を湊の種といふ。度
 数の制度教といふ何れをもと以て船の走りて知るべし。圖
 のてし竹筒を拵へ寸分を盛付け内ふ線香と立置右に
 湊の種をとりて量つる。何十町ふ何分燃とて。是とえ
 るて一分ふ何町支す。一寸ふ何里走ると定置と線香の
 寸分と以て海上の道程を知る。火刻といふも又湊まで町見

量つるがごとく。湊の種を取がたるとさ。捨糸の法を用ひ其
 法繩何十町なりとも兼て積り認め置と是を船の舳に
 付け陸の岸小杖を立船を出さる前に右の繩と杖と結
 付置出船して繩の尽る時度数の制の線香と見て線香何
 分ふ何十町走るといふ。依定る。是を捨糸といふ。又洋中に
 て順風逆風とて変あるとハ捨糸も線香も始の試とは違
 べし。能々心得を

又或傳云量船路有益之地名曰湊岩石押滄波而必有干
 両端其両端之求幅而是用出船之種也得順風而洋中趨船
 少無止如陸地也蓋曲折而求知之乃船路之術也云云是又
 前条も同じと語たり。漢文のごとく記するまでのこと也

一傳云船路の積といふハ行舟の常道屈曲の徑程凡て地



幅方位を具小考る術なり。又長流の水上を尋ね大河の遠近を求る亦大益有り。其術ハまづ陸地あるを以て地幅と求め是を繫出の種に用る也。但五里も十里も沖より扱方角を得て出船。線香時計漏刻の類の度数を以て刻限と紀す。一里毎の航行を定め是を種とす。始終の行道を求るなり。或ハ船の曲分則ハ磁石を以て支を改め其間の刻限を定むすなり。是とて大灘やハ変風なるとも此なりといふも。若風の強弱定まらざれば捨糸を用いし船行をわすたむ此の如く。昼夜亦求めて而分度の矩を以て船路を作極るとは委く求め知るなり。但船の用意人数役附あつては船中の磁石等秘傳ありと云

六

度数制火刻法



淺渾発尺種也



度数制



天風法或風席尺云

或云此船中度数旧制也依無益今無此器云予未見之

七

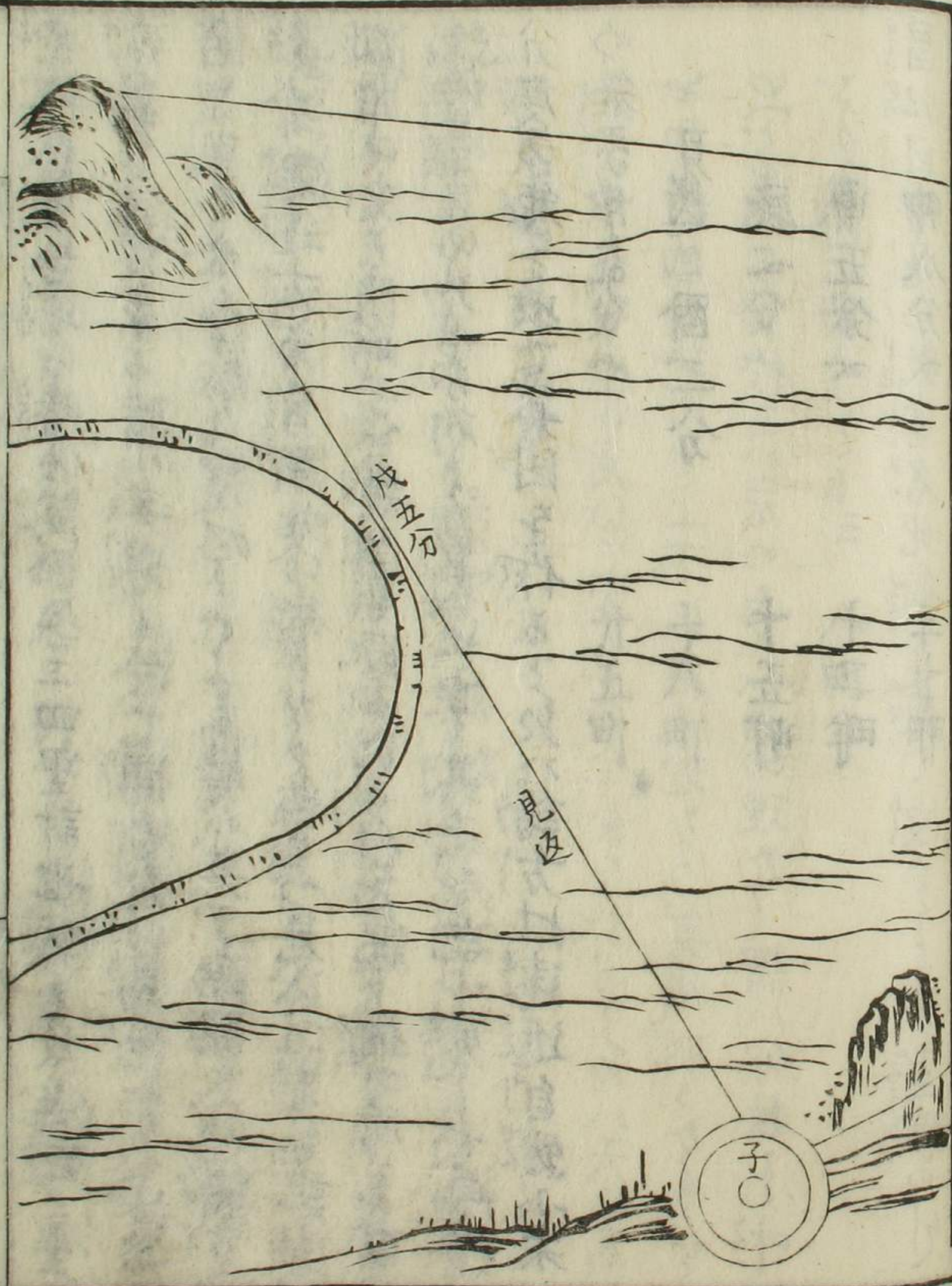
積遠里

積遠里といふも遠里の法といふも同術なり

此術ハ国の圖亦用るゝ多し。或ハ十里を求る時の開ハ凡十



圖二分



量地指南後編卷三

余町百里を求る時の間ハ九三四里計也然もは海岸より遠寫なぐ線求る時ハ其場は於て開る所の畝地なり故に開を重て求るあり。かくれくする時ハ其場に限り諸方より遠近方角自未知の術となる也。まず見込の支を記し、開の支と間町とを幾開も段々に心を記し、何の所より限らば見當の見ゆる所より見返して其支を記し、然してのら分度の矩を以て其図を作ると此ハ諸方ハ遠近自然未め知るなり。

見込 酉二分

辰へ 十五町

申五分へ 十二町

卯八分へ 二十町

申へ 十七町

辰三分へ 八町半

未二分へ 十一町

酉四分へ 十八町

申五分へ 廿五町

見返 戌五分

遠里矩といふものなり。国図の要法と云遠目的の條會慥なるをこれハ此術を用ひ目的の見込至て遠さるれば線會決うづゆること。間多き者なり。此術を以て勤る時ハ數百里といふも未は差さるなり。図の條線の會快さる時ハ針をこし糸を付て元の墨に隨て西方へ引合せ糸のうへ合て會はかるまで何尺も引べし定規をこし隨て墨

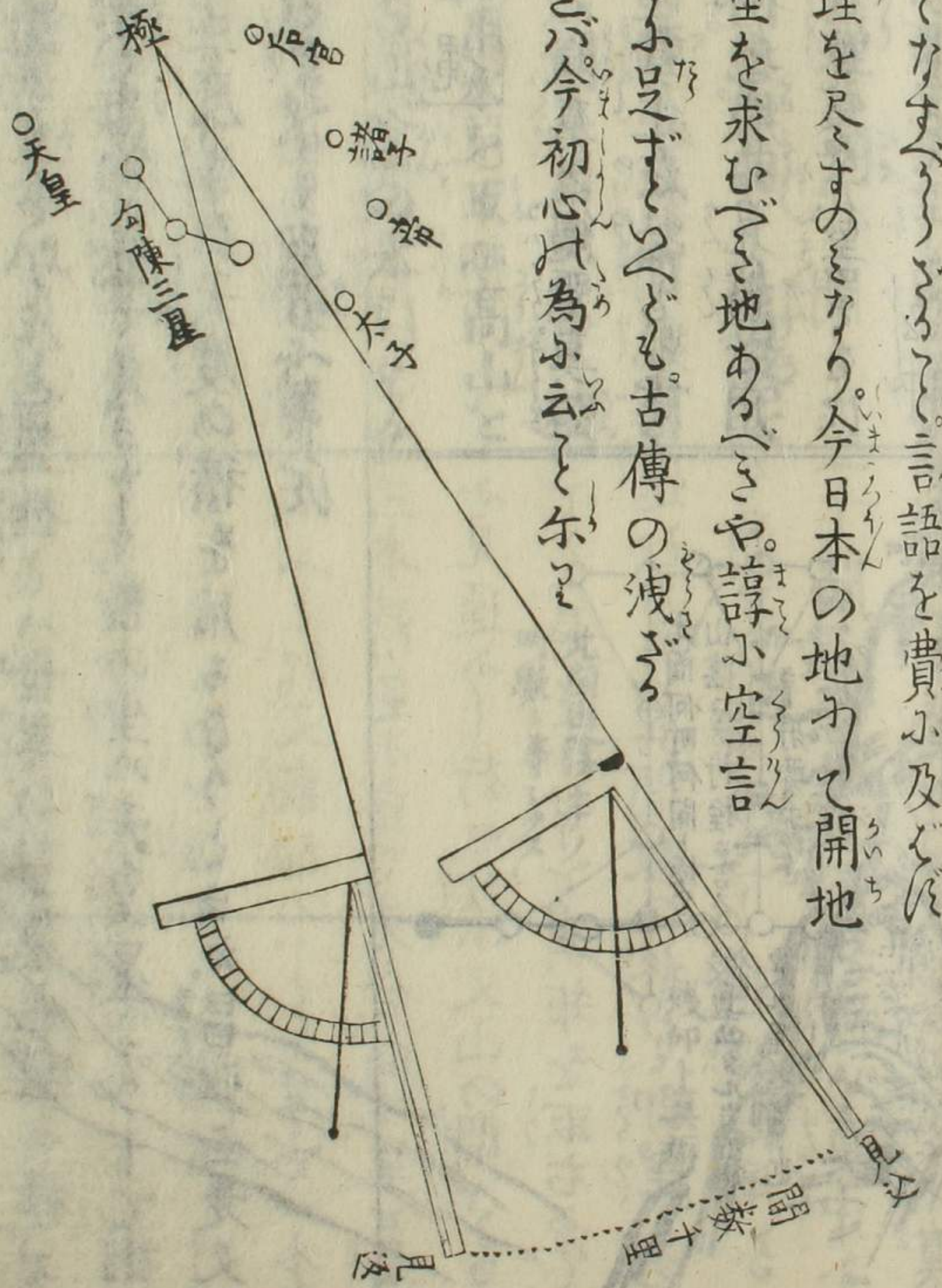
と引てハ。毛髮の差あるなり

試北極

古傳云天の高さを量る術なり。北極の積といふも同術也
 量天尺を以て北辰を見込て下糸の當る所を記し。數千里と
 趨る。又北辰を見込といハ必下糸の當る所を差出來す。其
 差の口を數千里小用ひて。下糸の全長を計るといハ。天の高
 さ知らなり。平町を上下に用る理なり。其術明なり。其
 いづも。小里に於てハ求めたるの理なり。謂ハ分数なり。叶
 ざらふ因てなり。と云

昌弘曰町見の數書名此術を載て洩すことなし。空理あり

定測となす。言語を費ふ及ぶ。唯其理を尽すのみなり。今日本の地ありて開地
 數千里を求む。地あるべし。或諄小空言
 論ず。不足す。古傳の洩る
 所を。今初心け為ふ。云と云



舊傳云天の高とハ極の坐までをいふことなり。無星の天ハ天文も論ずることなれ也。蓋極ハ世界の貫氣也。故に繞る所ハ星を以て極と定るなり。極の坐ハ天皇星よりして相去ること三度半。但天度の積を用るなりと云云。昌弘云是又無替の言なり用ゆべし

+

真矩繩

真之繩。真之繩張真矩之繩。真矩之杖と云も同術也。或ハ見盤と用ひ。又ハ見盤元器と云もに用ひずして竿と磁針と



以て量るることも有り。俱

小其理ハ同ト

此術ハ屈曲する道路と

直小作也。或ハ町屋割

屋敷割ふ用也。又ハ田

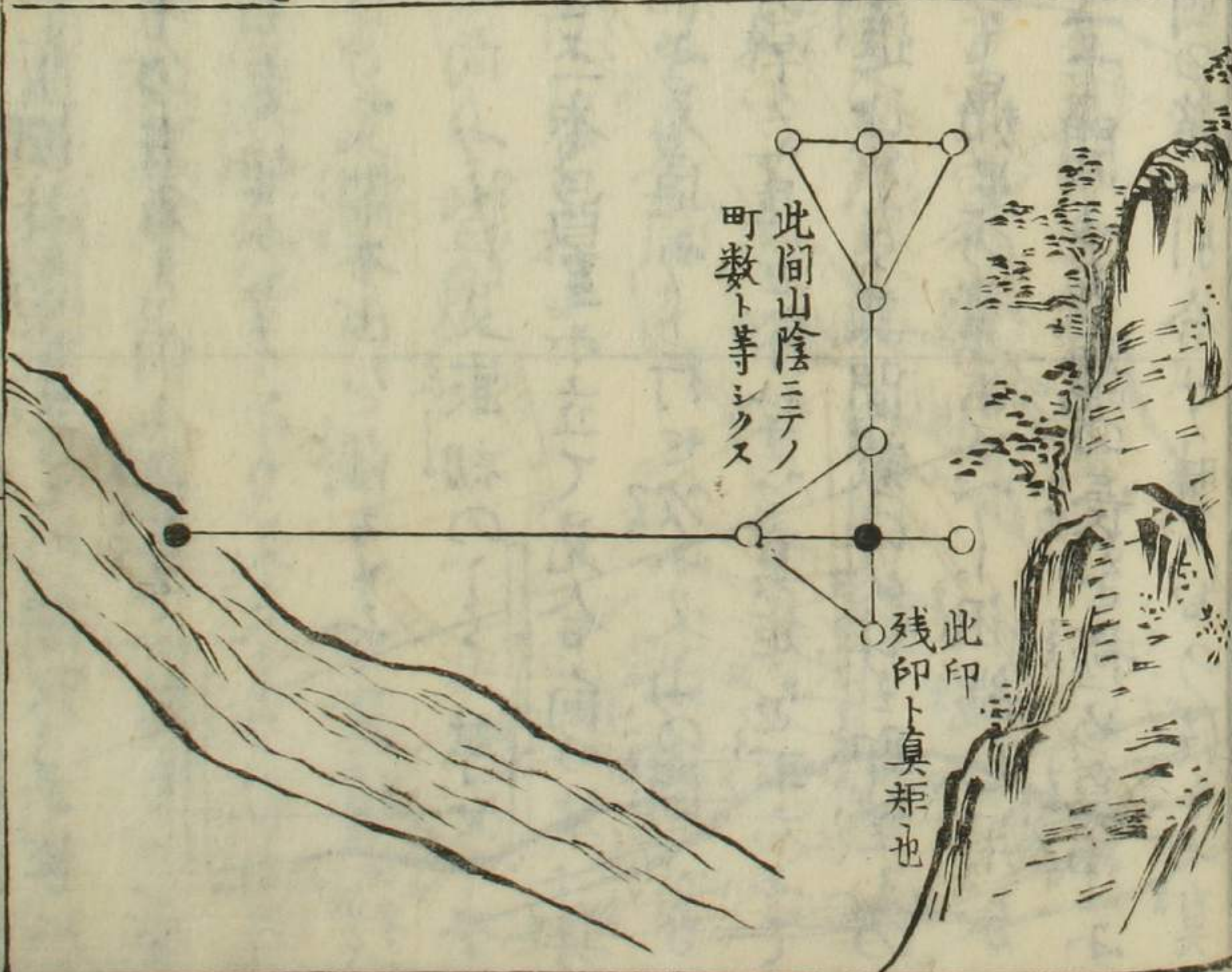
地の用水を取小高山と

穿ち山陰の水引する

こと有り。かやうの類小第

一と云ふなり也

術曰望の場所小竿を以て竹を以て立をいしより直矩小竿二本を以て段々小

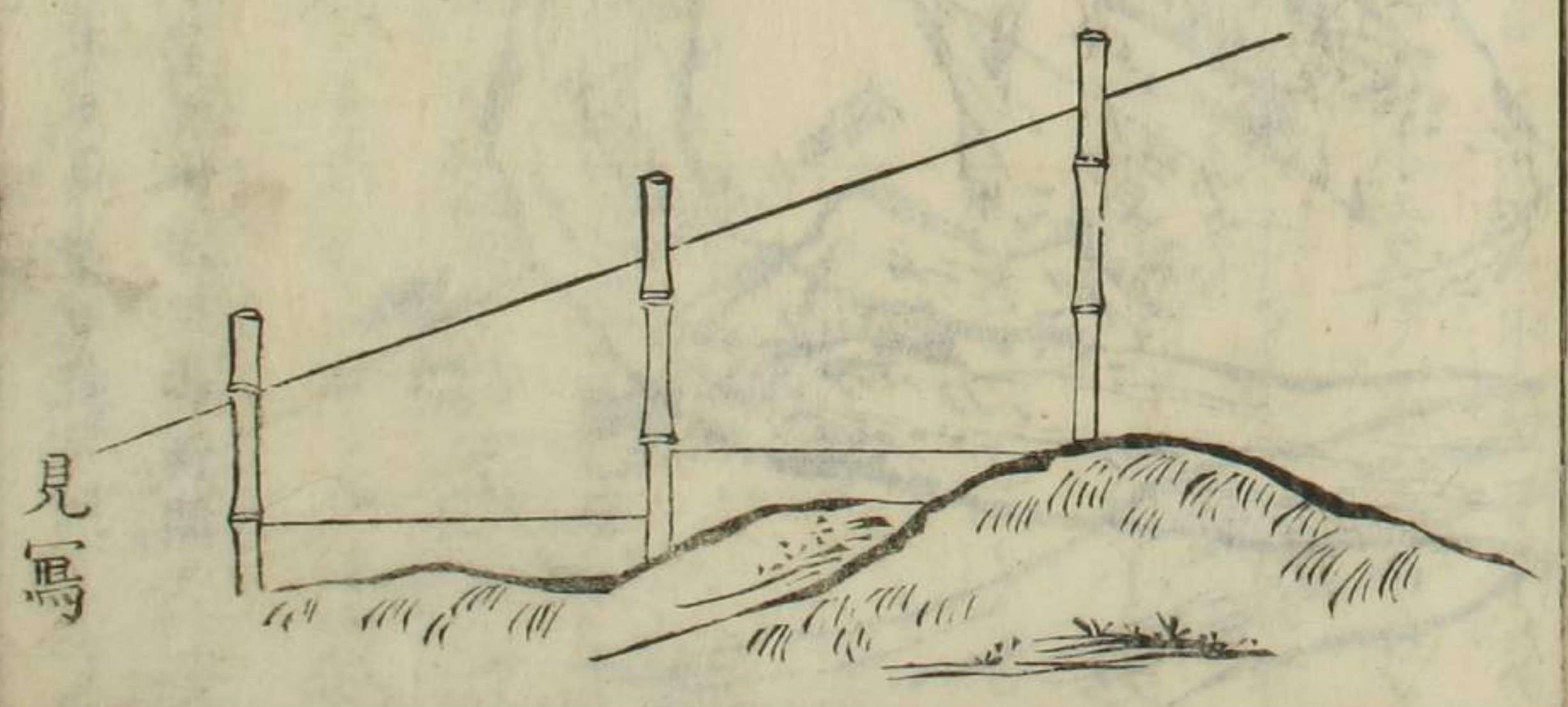


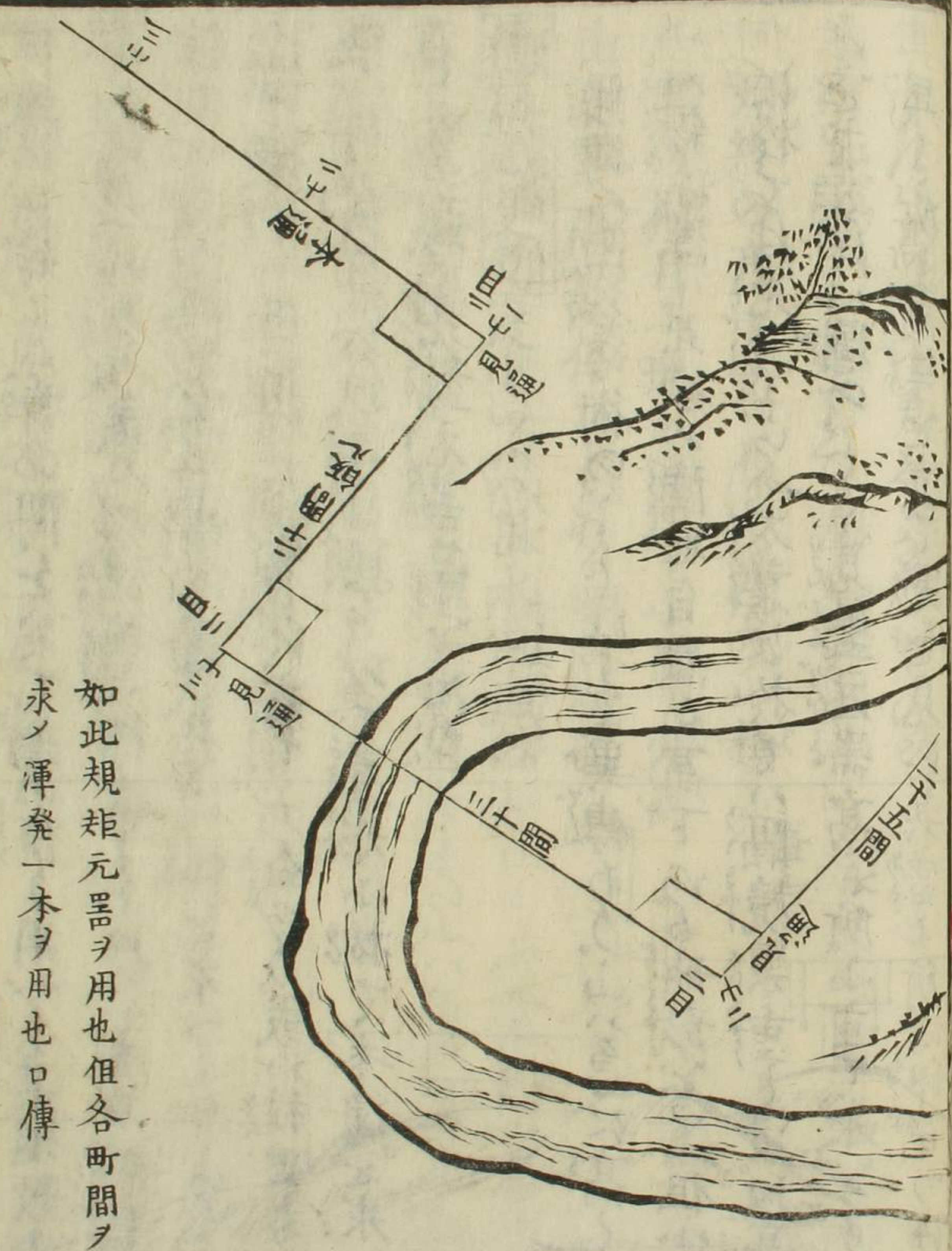
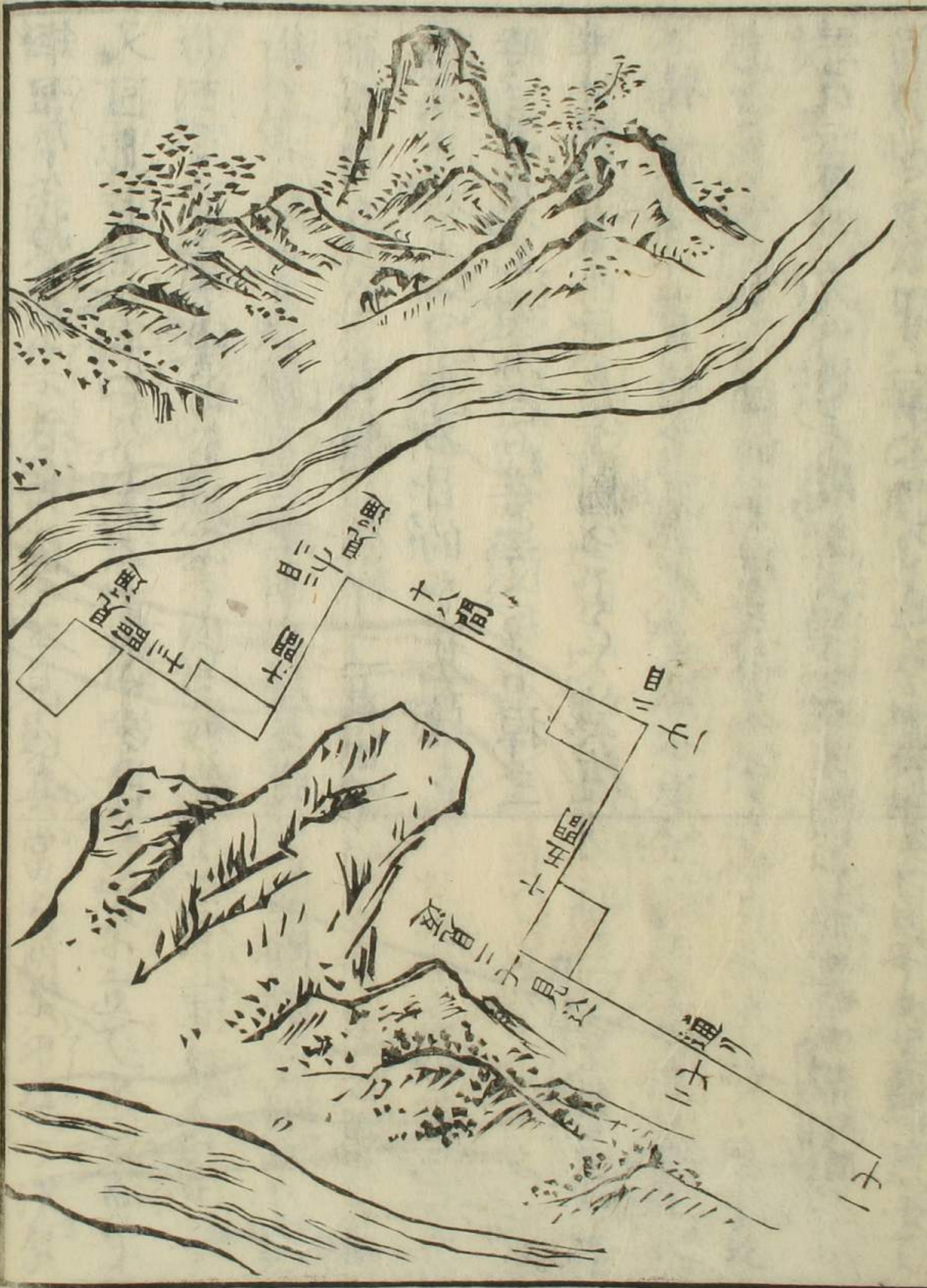
立替々々先へ見通し行なり。扱山際に至り引間たり。一本立て残す印なり。其竿の左右と向ふ。鼎足小竿を二本立て見合すれども向の竿も真矩ふちあり。又夫より最前の段々小竿と立替送りて。開る山を離るまで見通し行なり。扱開る山を離て横へ向ふと云。又最初の段々。竿と一本残し其竿の左右向へ竿と二本鼎足小立て。見合向の竿と真矩ふちりて段々初の段々小見通し行せ。次小又山の開る所に至て目的の方へ最初の方へ。鼎足小竿と真矩を取右めて山陰を勤る程間敷を進むなり。其間敷の終り即望みの場所と真矩なり。此所も鼎足の業あるべし。但繩を用ふし肝要なり。十間も二十間少と。繩の長を極め真中へ印を付て。先の竿へ打掛面の竿へ引合す時ハおのぼるる真

矩小なるぬり

士

又曰此術ハ此方より遠く見ても目的まで一文字の通を差すて求む術なり。或ハ直道等と求むれば此術を用るなり。古傳より棹二本とて求む行といへも若目的を見隠す時道と失ふ故小。これを改むる棹三本と以て求む行なり。圖のごとく望所小。棹一本と立目的を寫して又二本と立を。而後より目的を用るふ及ぶず蹟の一本を先へ送て段々小立替々々行なとあり。即一文字の通を極る也





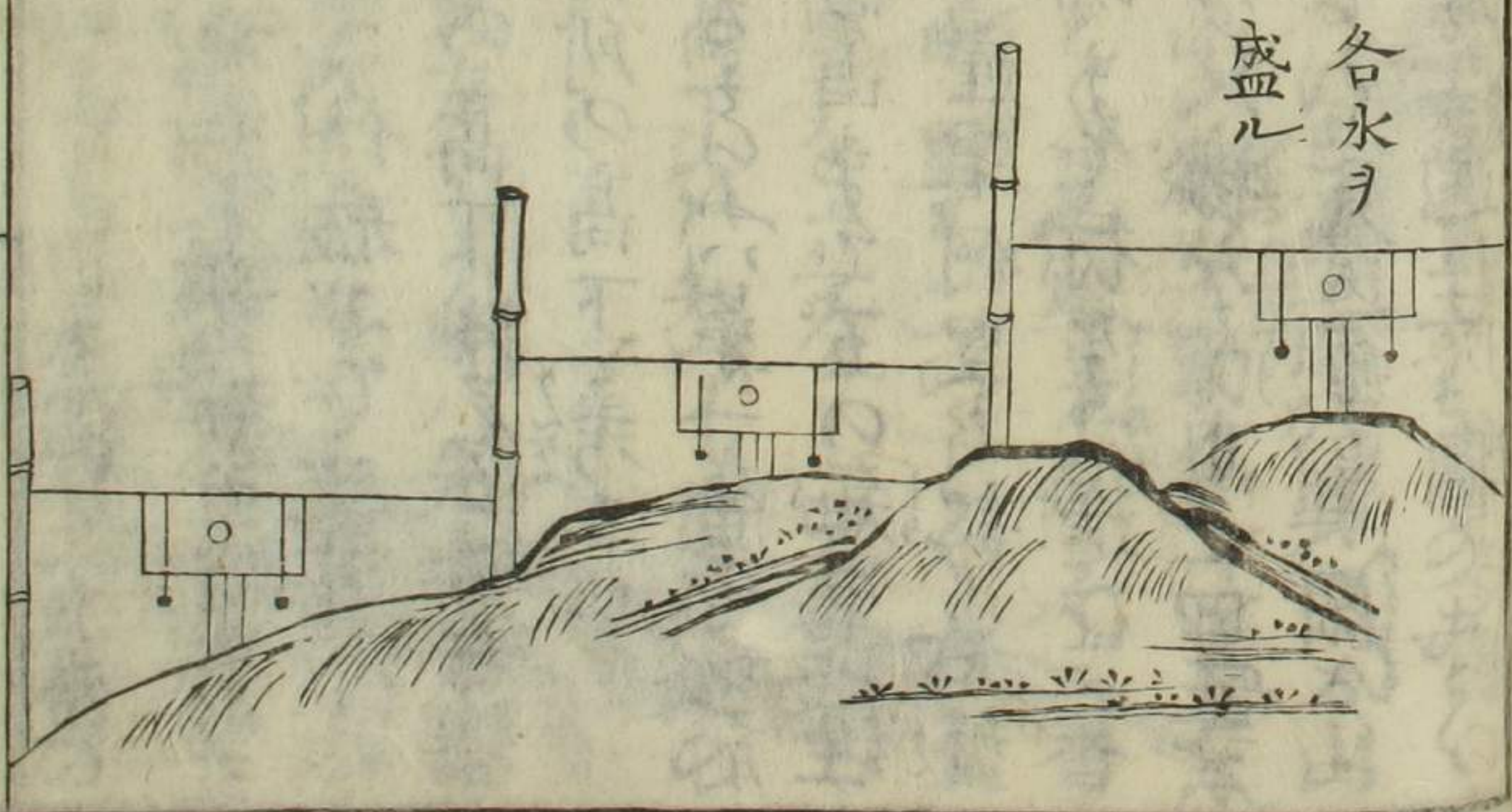
如此規矩元器ヲ用也但各町間ヲ
求ノ渾癸一本ヲ用也口傳

但地幅を知て、棹の間を定て繩の限り用べし。其繩數めて
遠くは求知たり。或ハ川泥等へ行當るれば、一本づ段々
越て川向へ通を寫し、跡の一本を以て川幅を求べし。其の
節渾筧一本を以て遠くは求て大益なり。或ハ村里木林
等へ行當るれば、二目返を以て直矩小按て本通を求り
しり。或ハ見盤元器等を用ひ

地形高低

此術ハ山谷の術のごとく、異傳あり。山ハ急に高く、谷
ハ斜小深し。此術ハ陸地自然小高下ある地形を以て、但小
に於ては見渡す。大業に於てハ隔境累重し。扱高下
を求るは、圖のごとく見盤元器高く所小立て。水とり
早き所小間等と立て、是を見込其當る所小印をつけ

これハ高下の差あるあり。其の
段々小送つて差とある時ハ
始終の高下各あり。或ハ類
書の術目小地形高下小事見
渡累隔累倍なり。あるも同術也
傳曰小夏見渡す。ハ用水田畑の
高下。又ハ屋敷等乃高下。輕と業也
然ながら若干の大業も勉む。其法
盤を豎にして、平直を極め、盤の上端小
定規を置見當りて高下は量る。其
所ハ棹を立て、見渡す。其盤尺と
棹小印を付て、其印の上より下り



其地の高下と云ふなり

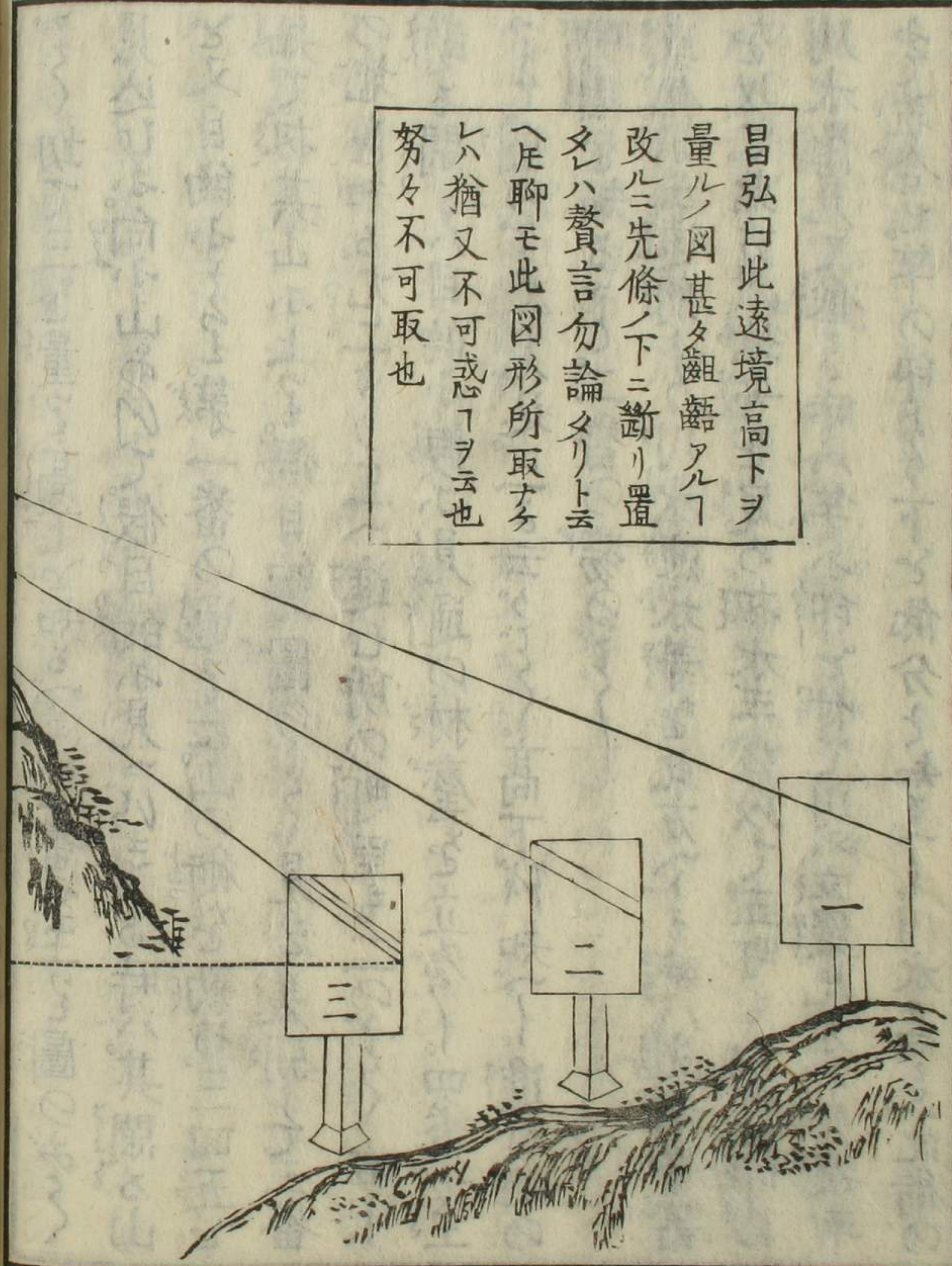
十一

又曰隔境累重と云ふ隣国の高下地形を量知る術なり
 尤大業あり故ふ盤小水と盛る体の仕形ありと云
 とも假令ハ江府より常列総州の高下はなる時を築
 波山を目的として山の高下を其所の高下と考る也
 右よ所謂隣國の高下地形を計ると云ふ第一番の場所
 ありて向上の平町を勉め假目當の山まで五の矩を極め
 山の術を勤め三の矩を極め四を量り何里と記し見盤
 小悉く盛つけ次の盤を立るは場まで行なり進むこと
 何里と町里と打て知る盤を立るは場なり高下と量る
 るは地なり二番に至る又圖のごく見込盤墨といふ
 其地の高下又目的の遠近あり差あり進む所の四を圖の

十二

ごとく切て二を量り高下と知るべし三番小至り圖のごく
 見込む向ふ山ありて假目的小見へば進む時ハ其閑る山
 と又目的小と第一番の通る山の術を勤め三四五と
 知て扱其山小上り假目的へ圖のごく見込差引して三番
 の地を知る尤二より三へ進む所の町里も二のごく右
 断る閑る目的小假小見通の材塵を立るなり四番小至
 りて圖のごく見込三よ云のごく高下は知べし進む處の
 町里を知るは二番の場のごく
 或傳ふ云遠所より川水池水等を此方へくる時ハ先水平器
 を以て此方ハ地安を定め扱水平弦以て五町も十町も印の
 川水を見て低る時ハ竿小印と付て川小立置此方より水平
 ありて眺合せ竿の印より下と低分と知るべし川水高とハ此術の

昌弘曰此遠境高下ヲ
量ルノ図甚々齟齬アル
改ルニ先條ノ下ニ斷リ置
クハ贅言勿論タリト云
ヘ尼聊モ此図形所取ヲ
トハ猶又不可惑ヲ云也
努々不可取也



還源を用い。水平と五六尺も高く臺を上げ。夫より川水
と見るを

又云彼方と此方と同直の地あり。水と水と水落と同一尺あり。水
樋の水もさうどくくに。上より押つけ水もさう理なりとも。勾配ぬ
るハ洪水のとれ悪し。水の流も程あり。其所の高さふか



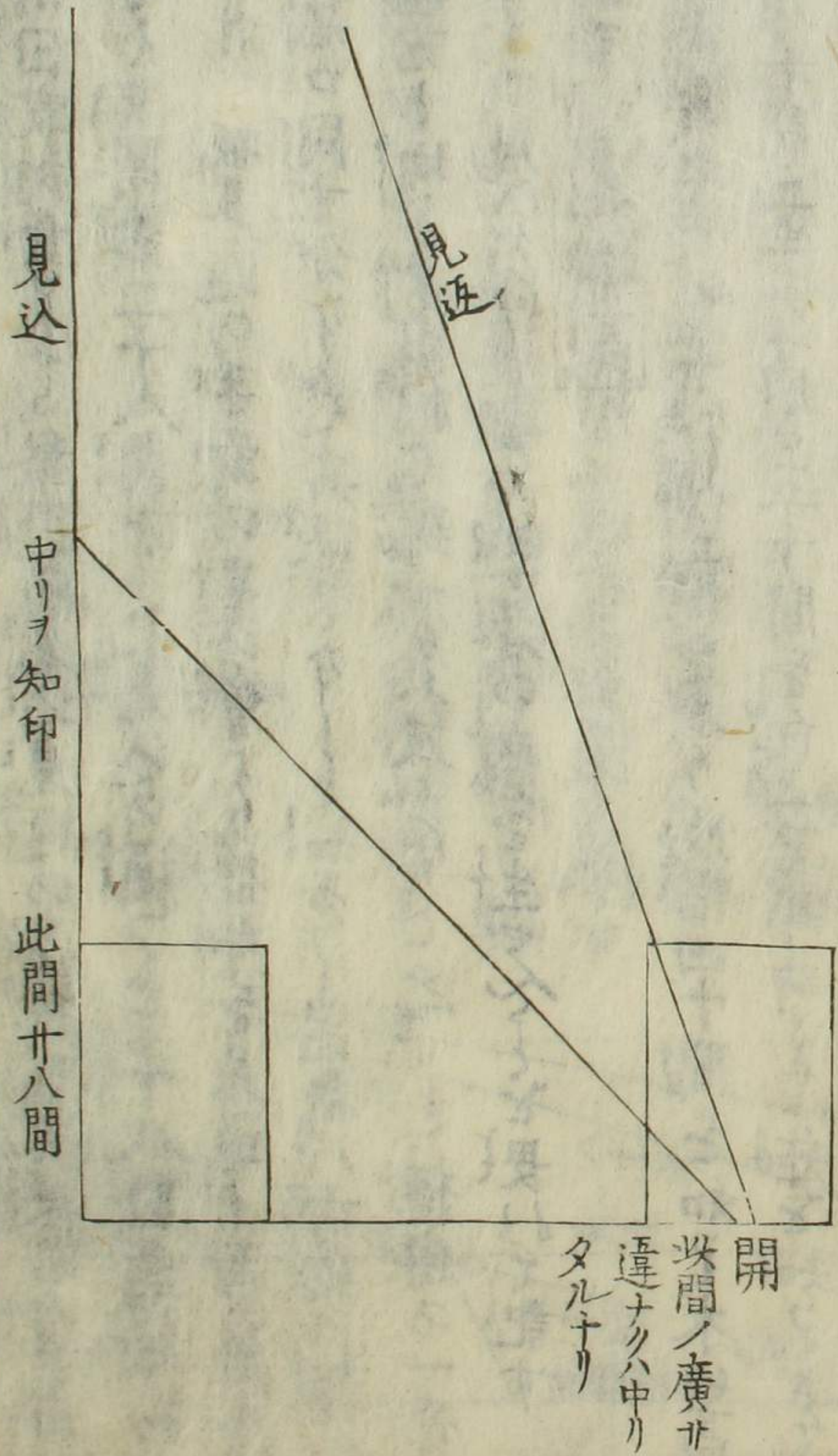
らびハ用ふ立ず。右十町も先^{さき}めて目的見定め^{めあて}わづくハ五町目と六町目に印^{しるし}の材^まを立夫^{たてう}と見通^{みとお}し。又五町目より向と見通^{みとお}し。遣違^{ちりちが}へ間と打心^{うちこころ}として中次^{ちゆうじ}の理^{ことわり}なり。又十町先^まめて横^{よこ}へかりこも斜^{かたむ}ふかりとも折曲^{せまが}。又十町も先の勾配^{こうはい}を見時^{みとき}ハ曲途^{まがじ}として三角^{さんかく}の矩^{かね}と耽合^{たんごう}せ。其後^{そのち}右の^{みぎ}に^に見通^{みとお}し。高下^{たかした}と知る。或^{ある}ハ家作^{やさく}の節礎^{せうそ}の高下^{たかした}。水盛^{みづも}水繩^{みづな}を引^ひこ。遠近^{とんじん}ともに同理^{どうり}なり。

又云谷^やを廻^{まわ}り向^{むか}ひの山^{やま}へ水^{みづ}を取^とる勾配^{こうはい}常に考置^{かんが}を^をり。又山とほりぬき山の前^{まへ}の川^{がは}を山の後^{うしろ}の田^いへ水^{みづ}の^の知事^{ちじ}。川より山の高^{たか}と積^つり。又田より山の高^{たか}積^つり。其高下^{たかした}として知るべし。或^{ある}ハ山の上^{うへ}より。前の川^{がは}。後の田^いの高下^{たかした}積^つりも善^よといふ。

左

中不中片極

此術^{このわざ}ハ假令^{たとへば}ハ寂初^{さむし}平町^{へいぢ}として量置^{りょうぢ}する遠程^{とんぢ}。若^も眼力^{がんりき}の誤^{あや}りなどあるくと疑^{うたが}ひ^をこ^とた^ふ。此術^{このわざ}を以^もて改正^{くわせい}する^をた^らハ中否^{ちゆうひ}立所^{たちどころ}ふあ^らり^らる



量地指針後篇卷三

十五

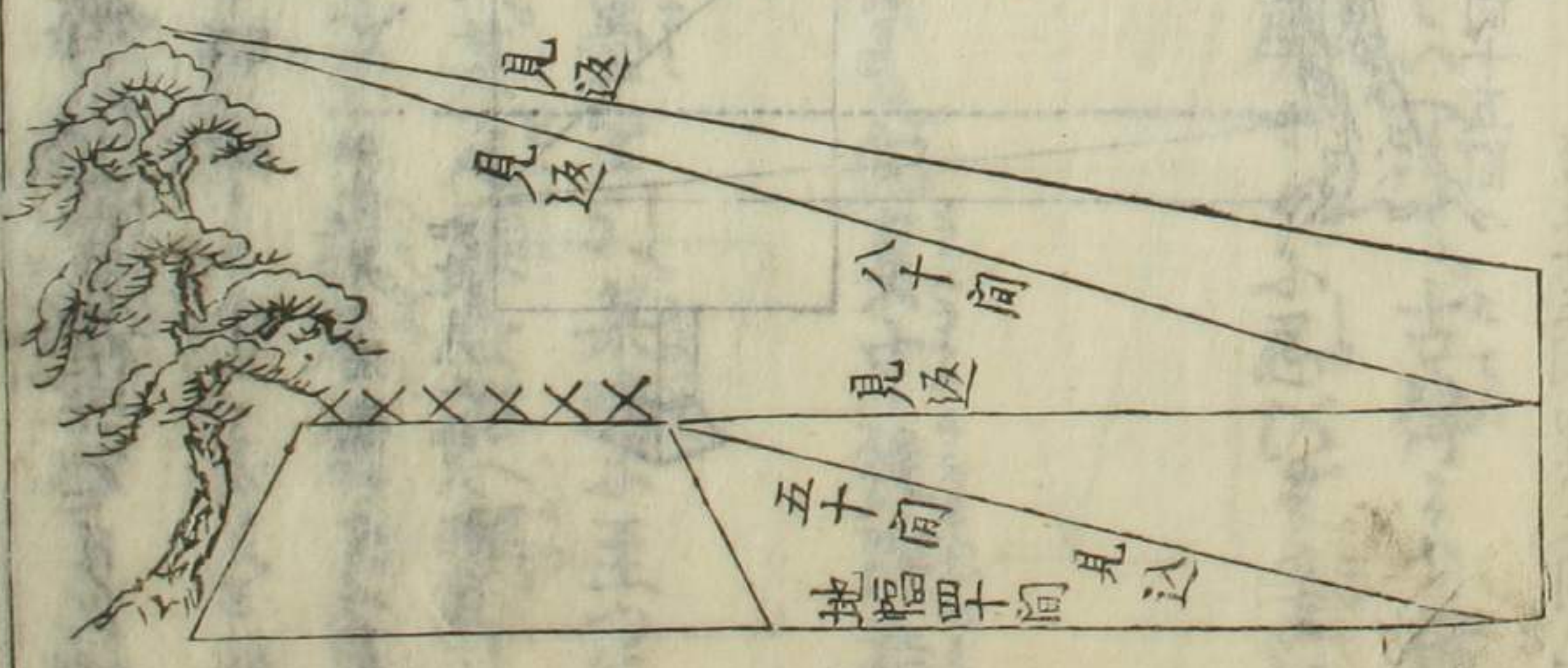
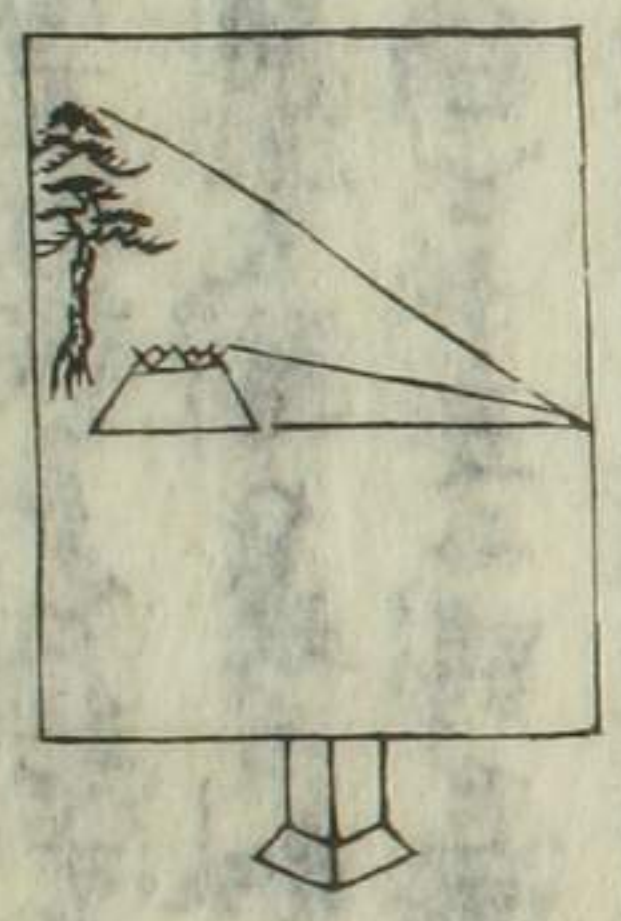
術曰寂初量^{しつしつ}する。盤^{ばん}面^{めん}の見^み込^こ見^み返^への墨^{ぼく}線^{せん}を其^{その}終^{しま}り置^おて假^{かり}令^しむ其^{その}開^{ひら}除^け二^に十^{じゅう}八^{はち}間^{かん}な^をん^ん。見^み込^この通^{とほ}りも二^に十^{じゅう}八^{はち}間^{かん}開^{ひら}除^けの印^{いん}と付^つて。扱^{さく}見^み返^への手^て前^{まへ}の墨^{ぼく}の會^あひ^あり。彼^{あつ}印^{いん}を見^み通^{とほ}り。面^{めん}の開^{ひら}除^けの諸^{しよ}口^{こう}同^{どう}寸^{すん}分^{ぶん}な^らず。其^{その}誤^{あや}り^あら^ずと知^しら^ず。此^{この}術^{じゆつ}ハ前^{ぜん}編^{へん}の知^ち雙^{じやう}開^{ひら}方^{かた}と均^なき^き度^どあ^らず。辨^わん^んず^らふ^ら及^{およ}ぶ^ぶと^しと^し。極^{ごく}傳^{でん}の^の一^{いち}條^{じょう}として用^{もち}ひ^ひが^がゆ^ゆく^くを^をば。學^{がく}者^{しや}の惑^{まど}を^を生^なぜ^ぜん^んと^と畏^{おそ}ひ^ひて^て記^きす

土手陰知木高

此^{この}術^{じゆつ}ハ土^ど手^ての上^{うへ}馬^ば踏^た五^ご間^{かん}を^をり。地^ち幅^{はく}四^し十^{じゅう}間^{かん}を^を知^しる。木^きの高^{たか}さ八^{はち}十^{じゅう}間^{かん}土^ど手^ての高^{たか}さ五^ご十^{じゅう}間^{かん}を^を向^{むか}上^かす。平^{へい}町^{ちやう}と^と知^しる。と^と盤^{ばん}を^を豎^{たて}め^めて。木^きの高^{たか}さ土^ど手^ての高^{たか}さ見^み込^こ見^み返^への墨^{ぼく}と^とい^いて。各^{おの}々^{おの}矩^{こま}や^や計^{はか}す。其^{その}盤^{ばん}ハ土^ど手^ての形^{かたち}と^とい^いて。右^{みぎ}の分^{ぶん}見^みと^とい^いて。木^きの高^{たか}さを^を知^しる。尤^{なほ}土^ど手^ての面^{めん}垂^た斜^{しゃ}同^{どう}に^にや^やう^うふ^ふこ^こし^しる^る時^{とき}ハ知^しら^ずと^とい^いて也^{なり}

七

又^{また}云^い此^{この}術^{じゆつ}ハ土^ど手^ての前^{ぜん}後^ご同^{どう}に^に勾^{こう}倍^{ばい}なり^{なり}時^{とき}小^こ求^{もと}む^む理^りを^をり。先^{まづ}土^ど手^ての根^ねを^を遠^{とほ}程^{ぢやう}と^と知^しる。扱^{さく}同^{どう}所^{しよ}より。向^{むか}上^かの平^{へい}町^{ちやう}を^を以^もて。木^き乃^{すなは}扱^{さく}す。空^{くう}の規^きを^を求^{もと}む。同^{どう}く土^ど手^ての上^{うへ}角^{かく}まで。空^{くう}の規^きを^を求^{もと}む。土^ど手^ての馬^ば路^ろの廣^{ひろ}さを^を知^しる。扱^{さく}右^{みぎ}の所^{しよ}ハ盤^{ばん}を^を豎^{たて}小^こ居^いへ。水^{みづ}浅^あ盛^もる^る要^{よう}と^と用^{もち}ひ^ひ見^み込^こて。各^{おの}々^{おの}墨^{ぼく}線^{せん}を^を引^ひ分^{ぶん}間^{かん}と^と発^はし^し。刺^さ盤^{ばん}を^を用^{もち}ひ^ひて。形^{かたち}と^と極^{ごく}る^る也^{なり}。古^こ傳^{でん}の^の終^{しま}り記^きす



量地并背後篇卷三

指高何分

此術ハ高下の誤つとと糺す術也但見盤をりら

假令ハ木の高十五間とも豫め求め知し時中の中さるると糺

さんせんと先其盤面の口と十五小割て墨と

引渡し扱其木の根より一間あつと

二間あても立木小目印と用の扱盤

と立て水ととり。盤面の引渡の墨

定木と當木小つけとも目印と見込

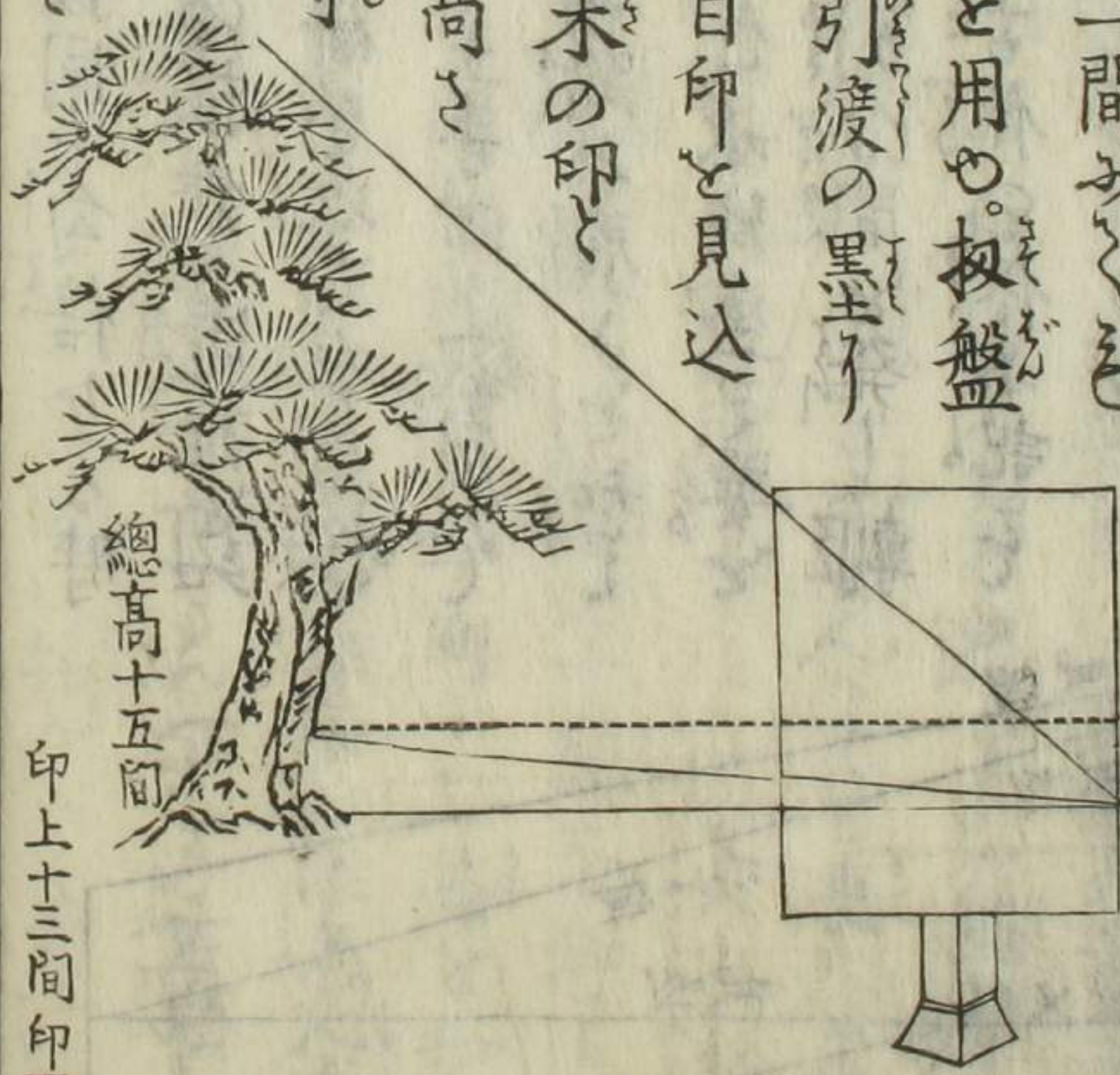
る。其盤面の墨と立木の印と

的當するは即木の高と

相違なりと知べ。或ハ天守

櫓の重々と糺し又三分一

五分一等はと指す。おそ



印上十三間印下二間也

鉄炮勾倍等用捨り

此術見盤術渾矣術とも小往々記す所といへども古傳より新

傳小至つ。皆是を奥儀の巻小載故小廢する小忍びず爰に

出す見者贅言を罵るおとなり

向指真矩

向指真矩といへども向正中と指とありも向真中從陰指

とありとも同術なり

術云向の両の真中と望と先初小真中小墨を引其場小至つて

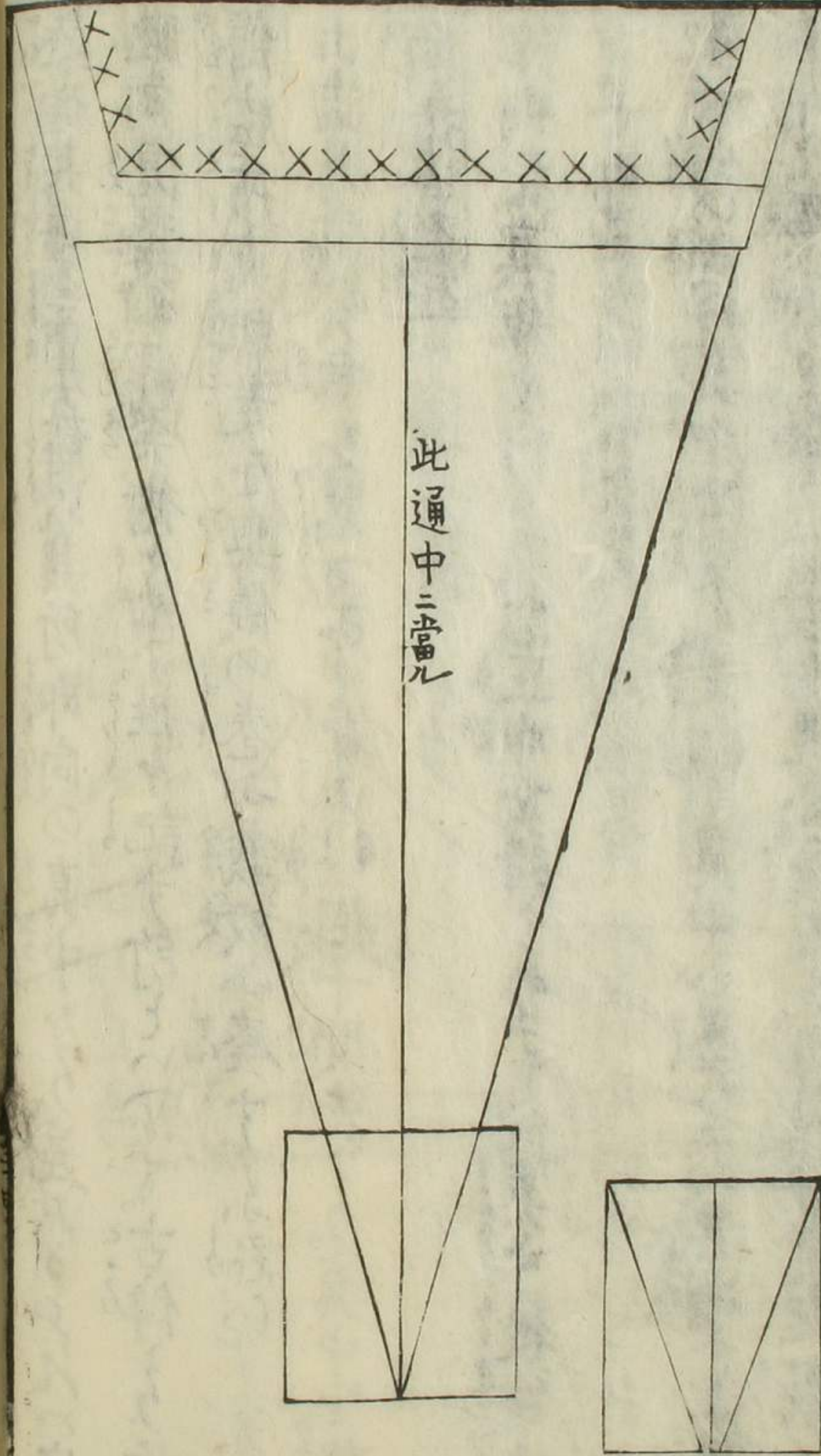
真中と思ふ所小盤を居左を見込墨を引其尾頭を右へ寫し

是小定木と當て見込當る処追よりて當るなり扱各當りて

得て中の墨小當る所向の中なり

又云盤の真中と割て墨を引大圖向の中程空眼を以てるを

求む。盤を居定木をとめて或ハ左の端を見込で墨とひそ
其口と右の方へ横め。墨を引是ハ定木を當て右の方を見



此通中ニ當ル

込也其通ハ中る時ハ其所即向の真中なり。差あるとんハ空
眼を以て板を動して定むるなり

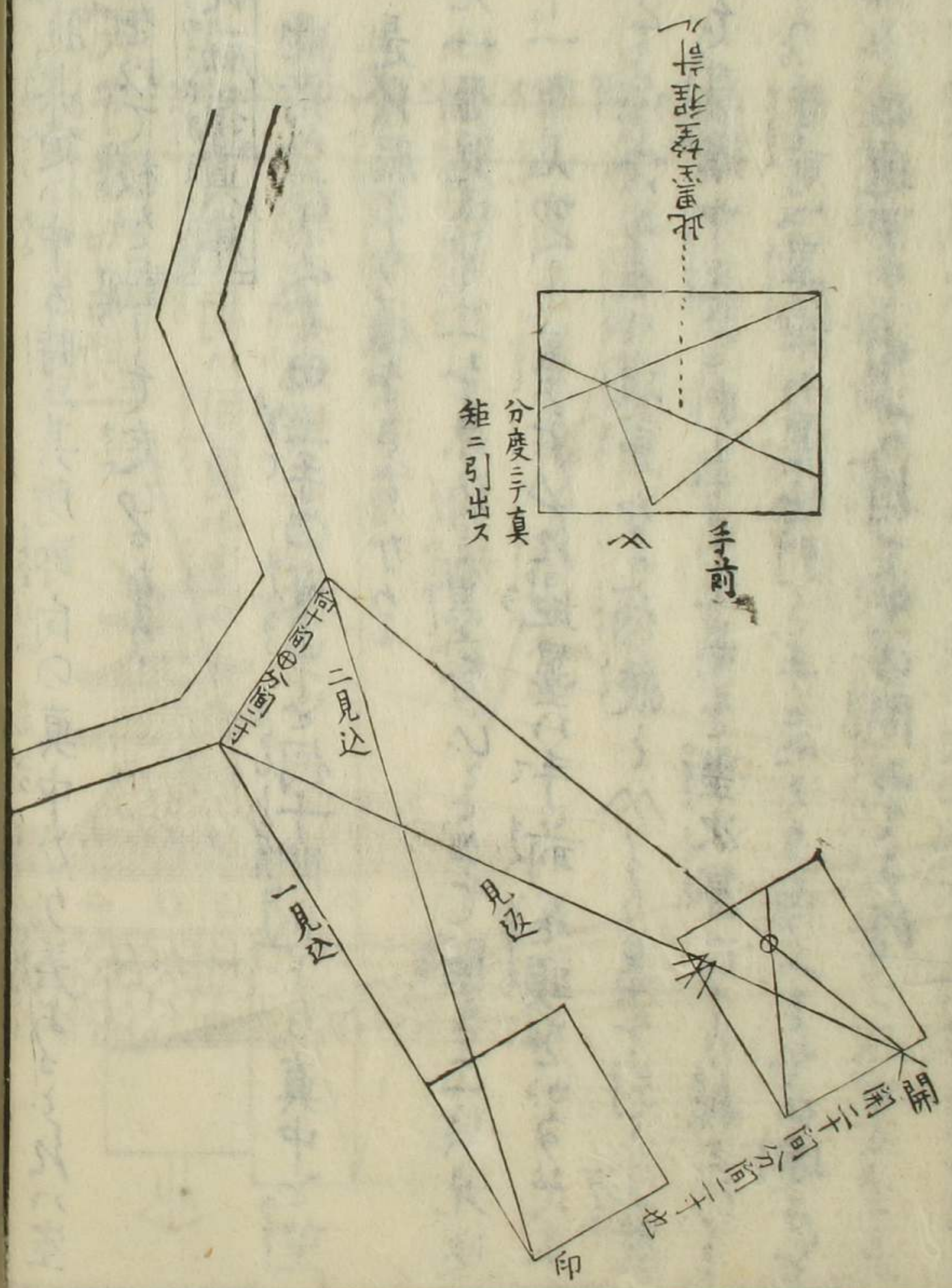
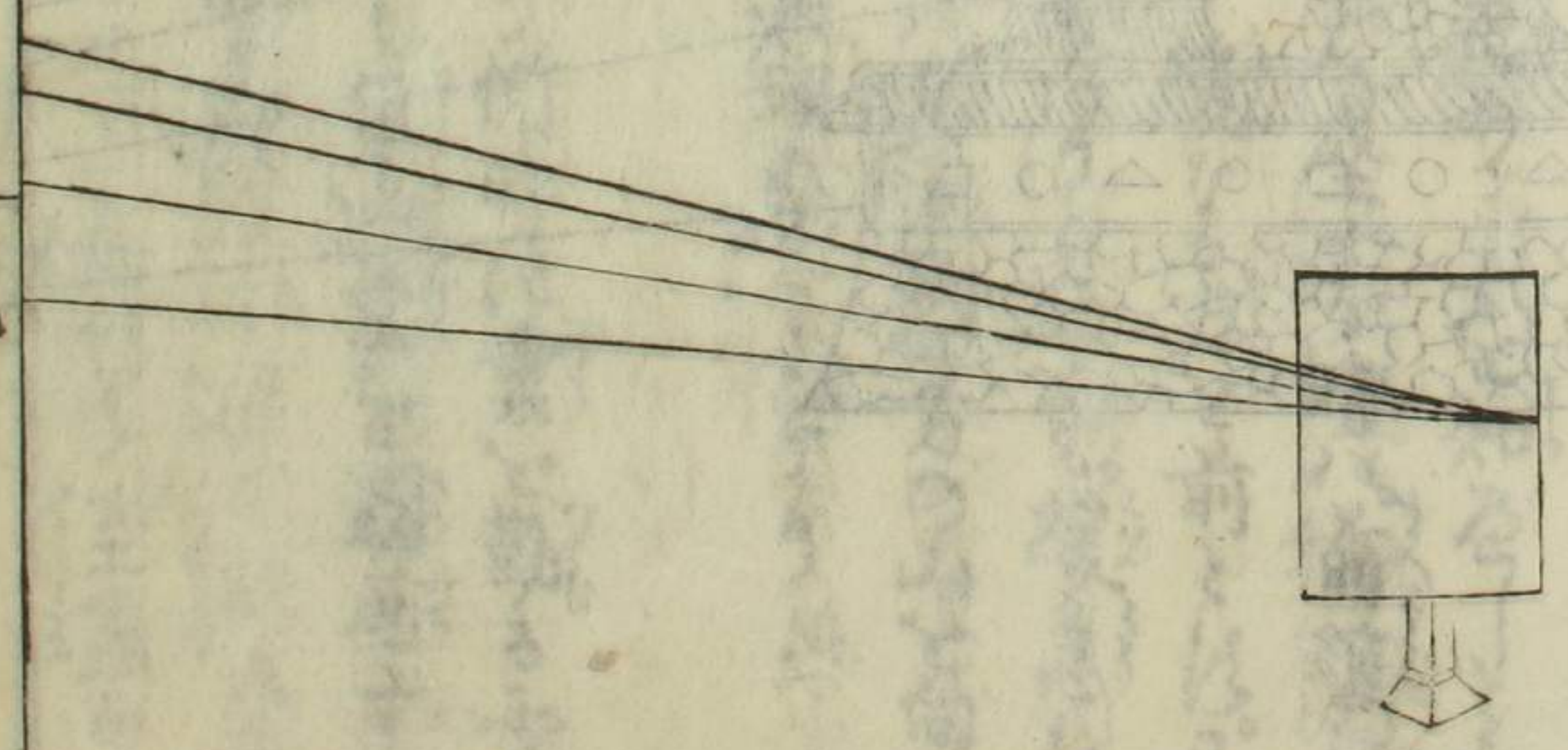
從脇指真矩

此術ハたゞむ田土手の真中を何十間先より真中と望
是ハ脇指より通をさすなり

先一を見込。二を見込。墨をひそ。さて開き二ハ見込
一を見込。墨をひれ。地墨ハ手前尾頭をかき込
し。向ハあきり次第なり。◎絞とハより墨を引。分度
も。真矩中墨を引出。此墨を望次第けり。扱の上
より。手前へ真矩ハ墨を引。手前より向ふまでの遠さを
知る。扱通して向ハ指て望の間あてよ

三 天守櫓知居所

一傳小此術ハ同通小重クそ
 見ゆる物の其地幅と高下を
 量知の術也云云
 昌弘云此術全体前編り所
 謂山高を知の術と同意也
 とつとも他流秘奥より條目
 に掲る故小學者の惑ひを
 曉さんぐたりふ一圖をなして
 是を示すと下のおこ



△ 天守棟上の高

○ 上より三重目屋上の高

× 矢倉棟上の高

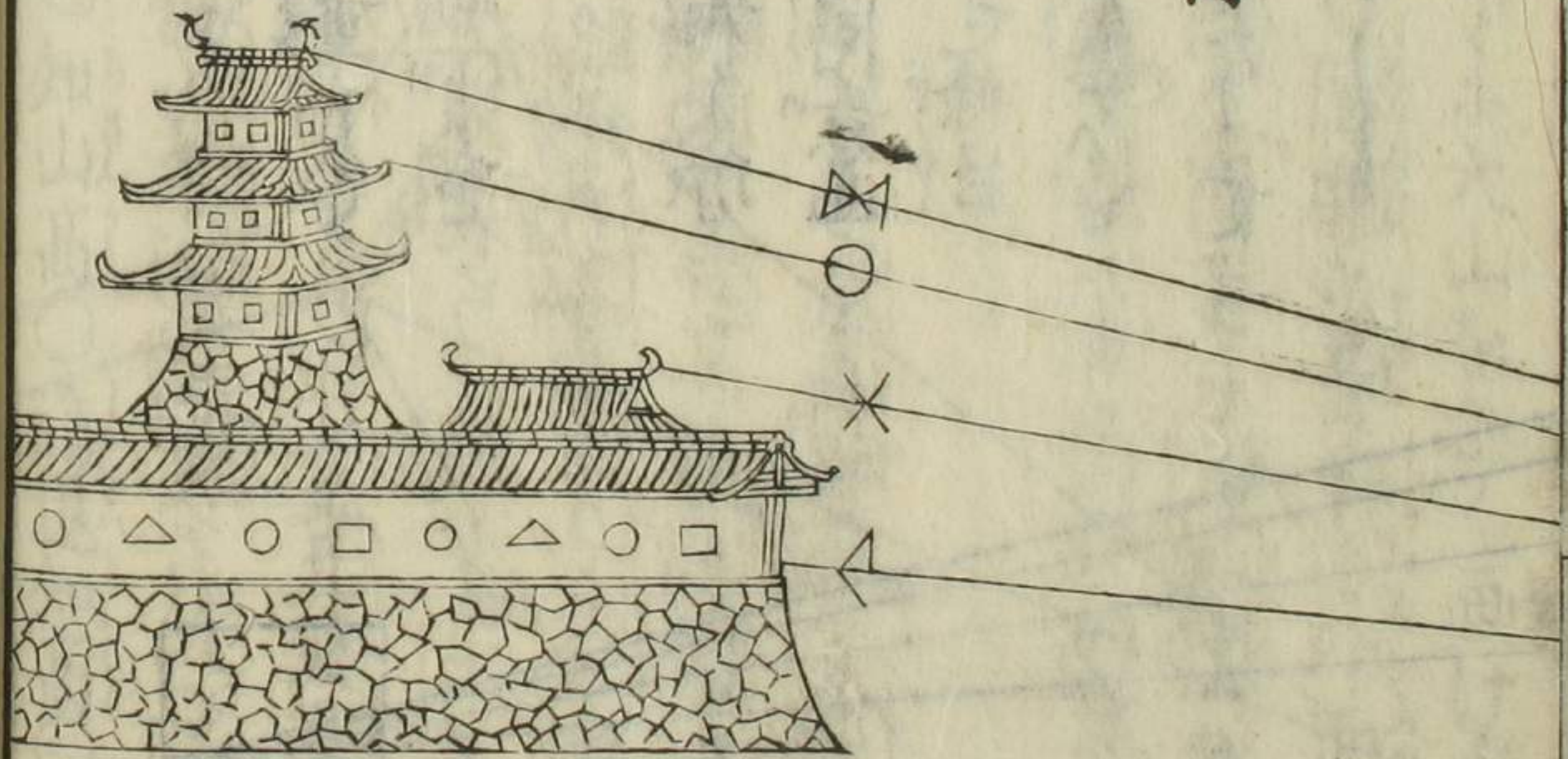
△ 土居上場の高

此圖天守なるは

五重なるべしなれば

煩しき故にほゞり

て三重とん



山用表裏

古傳云山の表裏を用るといふ山小裏表あることを知らざると之
 解して云山の表裏八人の座するごとし人座する時ハ前緩に
 志て後急なり故ハ急なる方後裏より緩なる方と前と後又
 東西南北の四方に陰陽に配分する理も然りとすも緩急を
 以て定るべきは其國小居てハ其國の四方の山と向ふ
 所皆表といふ可く宜し何ははけても其理あることなり

模山形

山の形と寫すといふハ無益のケ條なり何時に業と勤るも
 山の術ハ山の形と寫すといふことなり但山景を圖畫する
 ことハ是ハ輿地術のあづかる所小あり

山を責る

山を責るるとらふ六国の圖をどふ。大山を小く画けど空虚らりて如何をり。又大く圖すれば國郡も蔓つて外面の妨あり。因て大山ハ分間より小く高く圖するなり。先山の裏と画くともいひ。又雪を顯すともいひ。

求山之斜登

山の斜登を求るといふ目あり。是亦無益のケ條なり。但一遠里の高山を量るハ各別のこゝ。其外通例山と量るハ斜垂と知るとせざるはなりとある也。其法ハ條々山谷の術より見ゆ。知山厚。山の厚さといふハ山の根置地幅のこゝ。小変見渡直之繩真形の按をいふ術を以て考へ。故小筆舌を費さば。本傳ふ云。○山岳進退。○知山高。○進退知高。○知谷深。○

知而山之差。○知谷幅木丈。

極傳ふ云。○山谷一開。○知向山前山之差。○山上谷底知

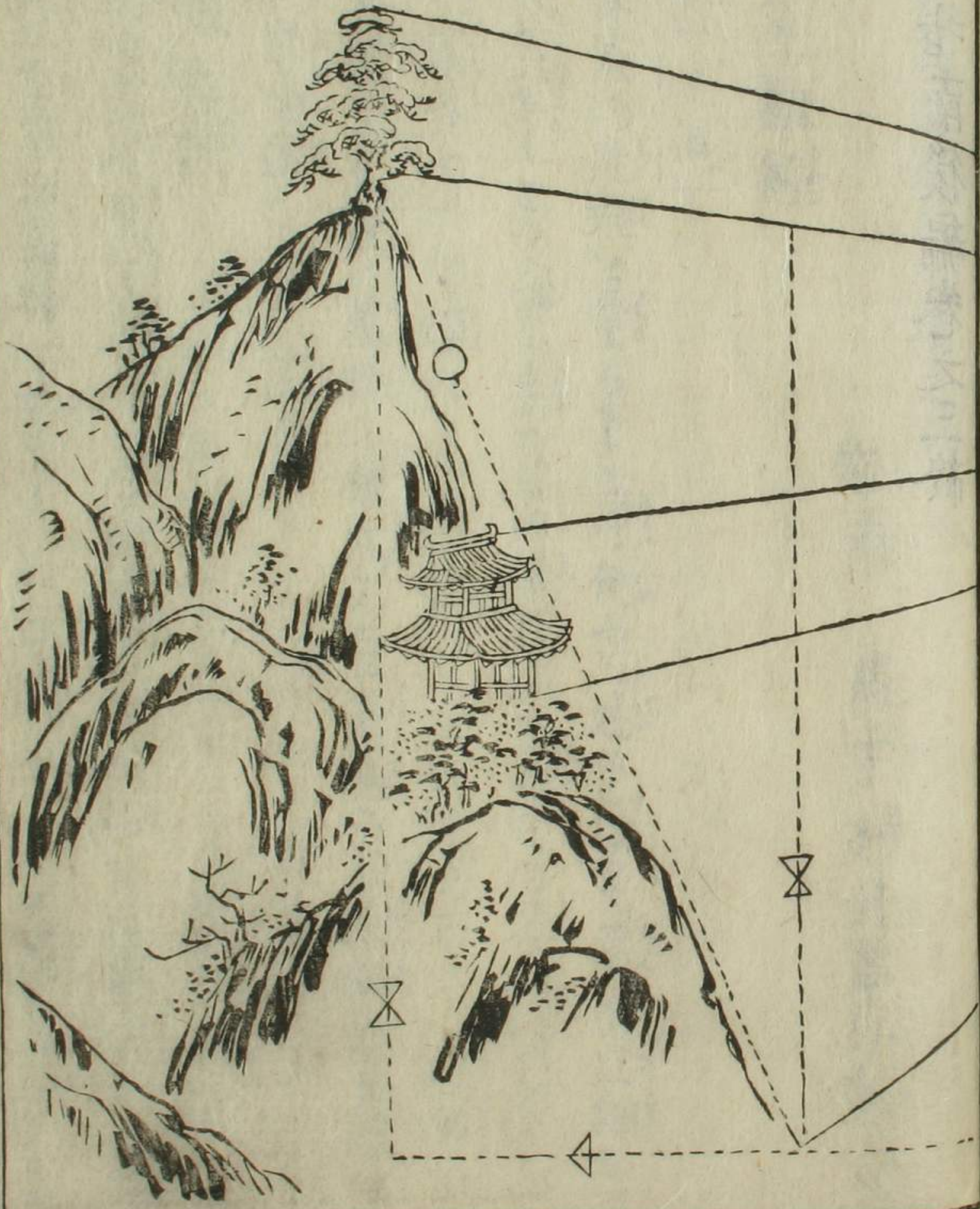
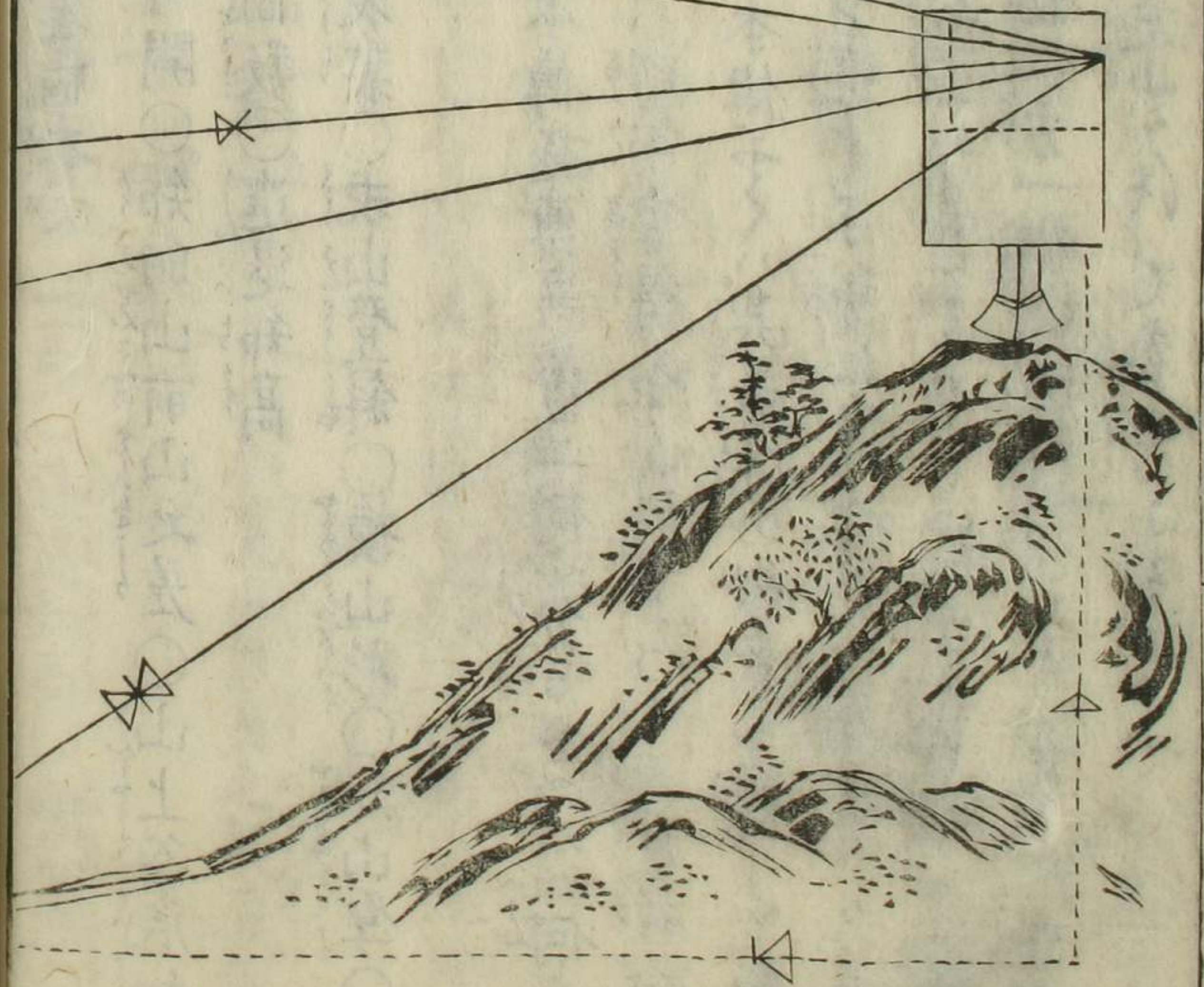
木高。○谷深所指間数。○進退知高。

異傳ふ云。○用山表裏。○求山登斜。○換山形。○知山厚。○

天守櫓知居所。

右山谷の數術を以て。本傳極傳異傳三術分るものハ如何と察する。都て山谷の術ハ初學會得た。これよりて再往教諭せんがごめたるべし。但又本傳まゝハ其量法の微意を隠して。極傳小おねを始めてこれを曉し。子弟に高ぶらんが為なる。甚しう。右山谷の術數方あるがごとく。といふも。皆予が前編小述る所の山谷數知方一術の中に明かなる。是がたり。前編の圖をみれば。是より法で参考ふべきなり。

○ハ山頂(空徑也)
 ×ハ山禁(空徑也)
 二法ハ種ニシテ假借也
 △ハ山頂ノ樹丈也
 ×ハ彼山ノ直立也
 △ハ此山ノ直立也
 ○ハ彼山ノ登斜也
 ×ハ中谷ノ直立也
 △ハ半腹ノ堂丈也
 △ハ此山ノ地徑也
 △ハ彼山ノ地徑也
 ×ハ此山ノ登斜也
 以上九種凡三種子
 間敷ヲ因シ渾發ヲ
 以テ量リ知ルナリ



量地指南後編卷之三終



量地指南後篇卷之四

勢南 處士 村井昌弘編述

算勘術

算勘之辨

算數家の地理と量ること。序例も迷るが、厳密巨細ある
と、九宜しといふ。去るも迂遠して急速の要用、
器物繁多めで勞煩なる。是に因て輿地家の取らる。勿論
なりといふ。數ハ萬物の根元。又吾量地の不捨術をば、今
其大畧と述べて左に記す

器械之制

算術家の町見其術少く、小器械の品も又多かり、其
理ハ量地家の器物に拘るといへども、其度ハ大小異なり、故に量

地者流といへども其制作と辨知せんばあるべし。茲とて
其大畧と左ふ摸して参考ふ便し
地板の制長サ三尺五寸厚サ一寸幅一尺二寸以上ふ制る板乃
両端の手前ふ釘穴と一ッ宛明やあり。是ハ釘とさし。水繩を
とらふたれなり

界引板の制檜の節なり。柱目の板なり。板悪くれば界引狂て
引くたれなり。板の長サ四尺厚サ五分幅一尺むらり四方とふ
矩ふ合せて直よ劑アて用るなり
間竿の制長サ六尺みして檜めて制る。一尺つ所の所ふ墨と以て
印とさる。方一寸二三分と節とに

表木の制ハ木にても竹みくも正直みして少も斜曲みと用も
長九尺つ二本五尺つ二本なり。木もて造らむ太サ方一寸二分
計り竹なりと。三寸四五分廻り。或は土口とに
水繩の制ハ葎糸を二ッ糾ふ合せて制するなり。又ハ大鷹の
織と用ゆべし。長さハ二十間許り。又一尺五寸つ々の繩四筋に
はる

槌定規の制木ハ朴木とてつてす。輕くは。長サ六尺一本。長
二尺五寸一本。大小二本あるべし。槌の深サ一寸二三分。幅一分計ふ
とべし
常定規の制木ハ檜や檜や用ゆ。長サ六尺一本。三尺一本。大小
二本あるなり。尺寸は盛付るも勿論なり

短矩 三寸矩なり。の制真鍮。又ハ鯨鬚と以て制る。曲尺の三寸
なるものあり。是を渾癸ふ代て用ゆ。長三寸と一町とささめ
五分と十間とに。是にけり界引の線を量るなり。渾癸の理に

違ちがふここなり
右器械大畧量地家の器物に準じて知るしる煩わづらしむ
其圖を省く。猶此外渾癸磁石小道具等あまあまとと通例つうれい
なるハ記しささに

町見術名

- 平町見と云ハ 平陸と量る方也遠近同術也
- 上町見と云ハ 山岳と量る方也高低同術也
- 下町見と云ハ 豁谷と量る方也淺深同術也
- 向町見と云ハ 彼面と量る方也廣狹同術也
- 右四件と四町見と云 高低と知る方也
- 高と知るしると云ハ 城圖を作る方也
- 繪圖町見と云ハ 混雜の品と量る方也
- 物陰町見と云ハ 物と隔て量る方也
- 地形高下と云ハ 地形の高低と知る方也

四

四町見辨

算數家の町見術しゆけんじゆつ。平町見へいしやけん。上町見かみしやけん。下町見したしやけん。向町見むかしやけんといふことあり。是を算家さんけめてハ。町見の父母ふぼととに尤故ゆゑあり。量地家りやうぢけといふこと其揆くわい一あり。然しかども算家の術ハ近遠きんゑんにして急速きよそくに用もちて為なす。量地家の術ハ徑捷けいせつにして即席すゝの要よと相あ成なす。其得失そのとくしつ同日どうじつの談だんふ非なず。其外町見の名なあり名目多おほくし。其そのいふこと時とき小臨のこりんて術名じゆつなととかかととのなとと一定いぢやうの法はふあり。故小四町見の外そのほかもも故ゆゑ記しささず。都みやこて量地家りやうぢけふおのの數者すうしやの術じゆつを用もちひひとといいふふも定まららととに。今いま初學者しよがくしや勘考くわんかうの爲ために

姑く唯四町見の法を茲に記す

五

平町見といふは遠近を志すの法なり。業をわろくわろく
とて其術作法を皆同じ。まづ地板を居て随分直と
極多々々。地板乃両端の穴より針をさす。此針は水繩
とまれば法けて。地板より五分上げ。水繩を張る
左方より釘二寸計を隔て水繩に印を付け。此印より
右の方ハ三尺隔て又印を付るなり。水繩ハ六尺まで。一丈
ありて若くはつゝさしども。みづりた。手廻りあり。
上り町見といふは高低を知るの法なり。業ハ品々わろ
て。其術作法ハいづれも同断なり。平町見の作法ハ
同じ。但し高サ一尺をわろくに臺とす。其上に地板を
置たり。

六

七

下り町見といふは。淺深を知るの法なり。業ハ色々に
て。其術作法ハいづれも同断なり。平町見の作法のご
とくして。地板を先下りに居るなり。水繩の張様。右同
断なり。板下りて。さす。あは。留れ釘をさすべし。

八

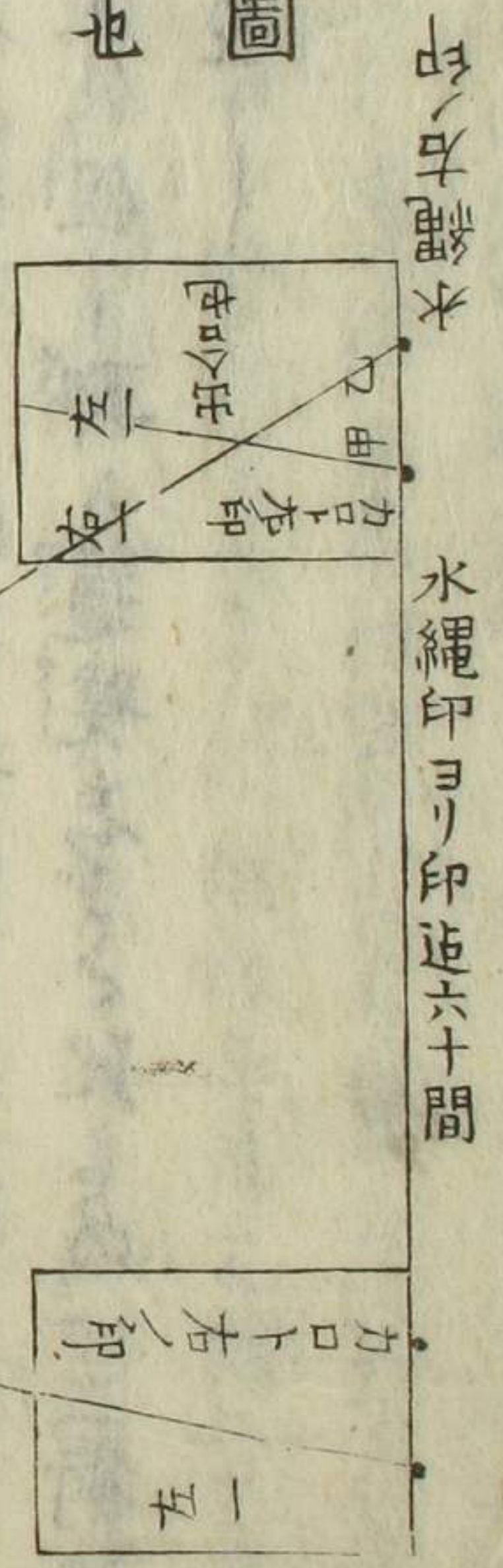
向町見といふハ。廣狹を知るの法なり。是も業ハ多々れ
ども。其術作法ハ。平町見。上町見。下町見。同断と知るじ
右に述るごとく。此外の術名をあまり。さす。といへども
何も此四術の理を。め。押究む。あ。な。ハ。辨
び。に。わ。ら。ぬ。但し。聊。通。曉。と。し。て。一。二。術。と。後
小。掲。ぐ。見。る。る。

平所見之圖

遠近術也

短矩左ノ印ヨリ出合迄ト甲ノ
 通り等へ計ル此遠サハ水繩ノ
 左ノ印ヨリ向ノ目アテマデノ
 遠サナリ
 短矩右ノ印ヨリ出合迄ト乙ノ
 通り等へ分ル此遠サハ水繩ノ
 右ノ印ヨリ向ノ目アテマデノ
 遠サナリ

向目當

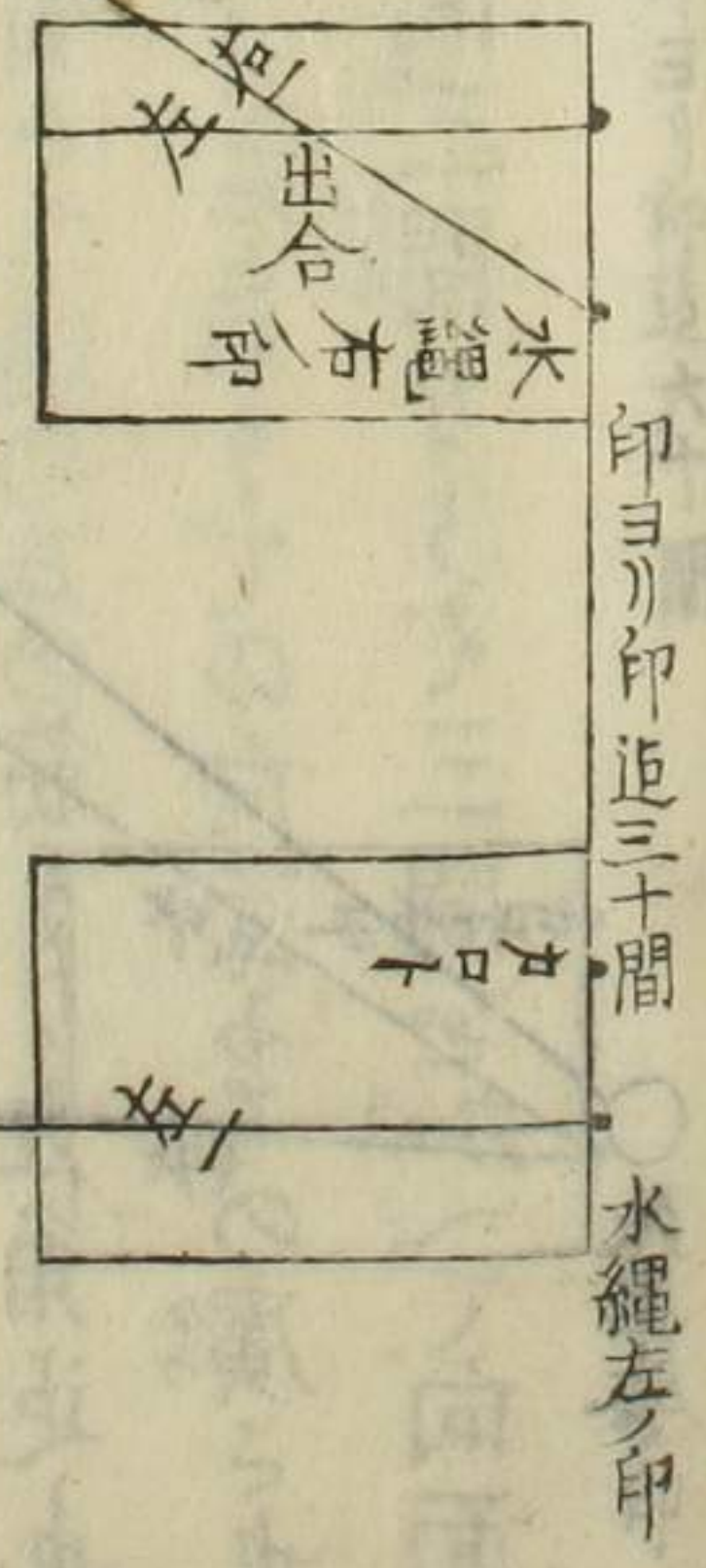


上町見之圖

高低術也

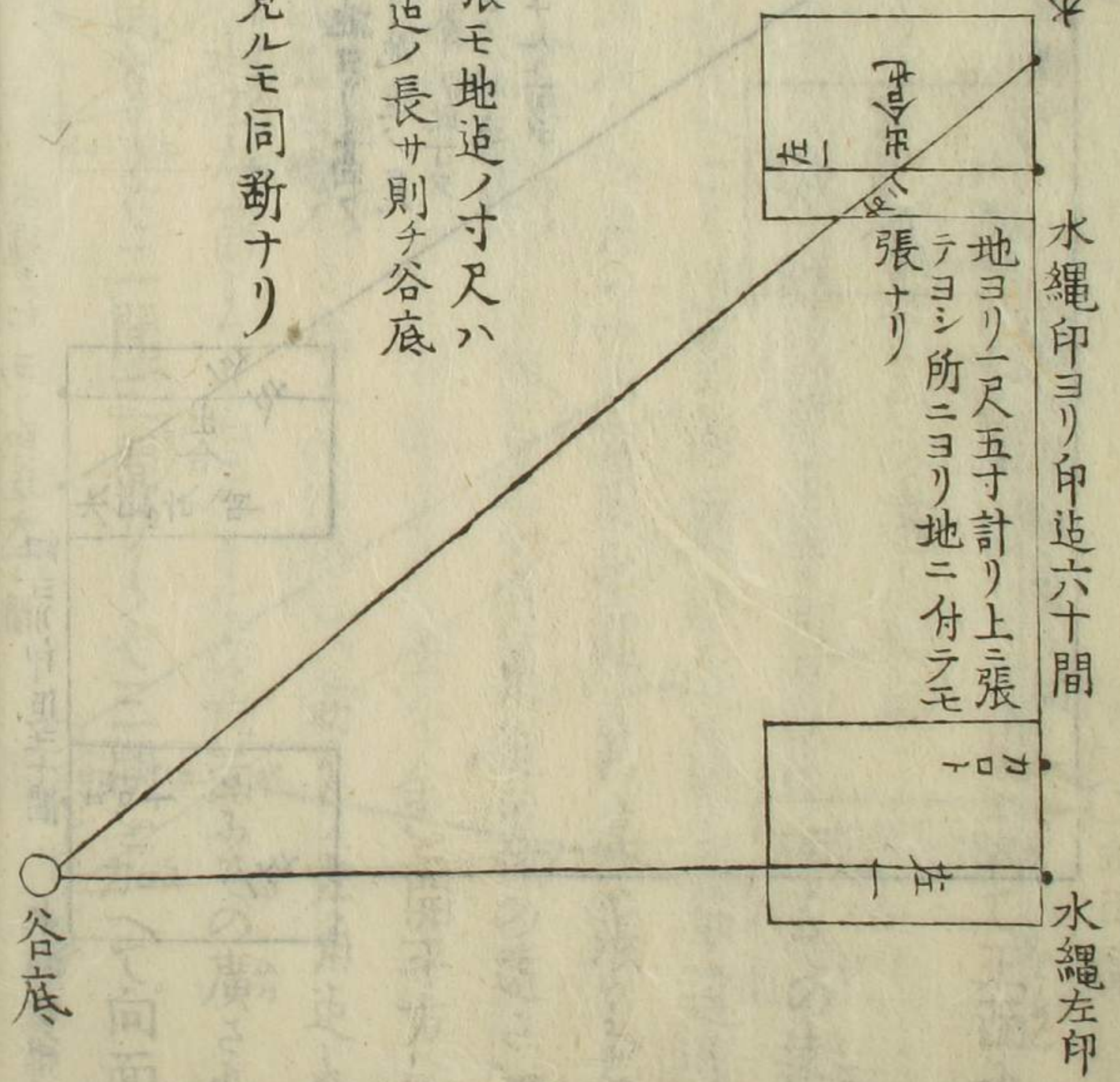
水繩一尺五寸計ヲ地ヨリ高ク
 張ニヨツテ水繩ヨリ地迄ノ見
 通弦ノ如クニ何尺ト知テ此寸ヲ
 出合へ加ヘテ則地ヨリ峠迄ノ
 遠サトシルナリ急ナル上リヲ
 見ルモ同斷ナリ

山峠



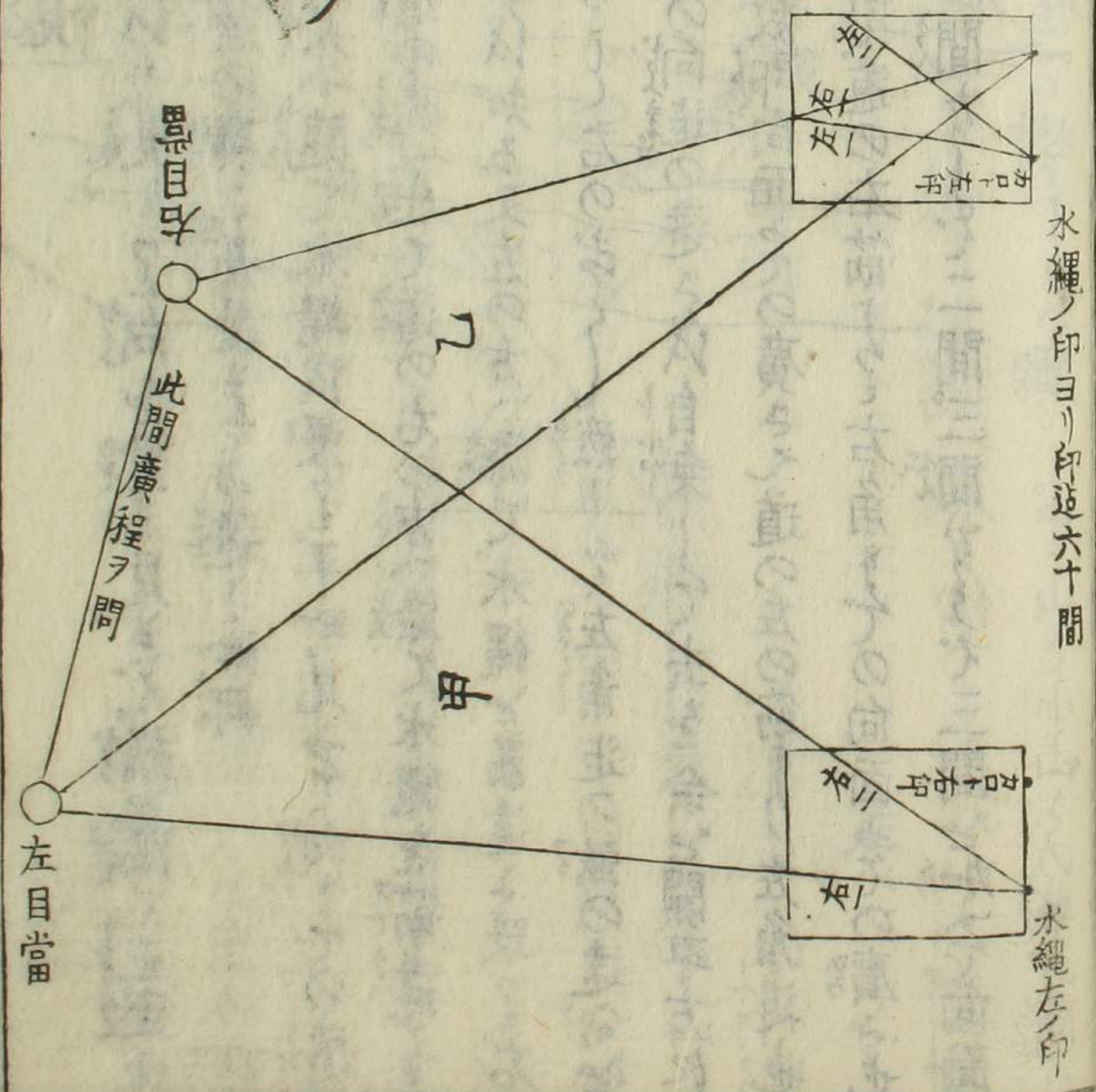
下町見之圖 淺深術也

水繩ヲ高く張モ地迫ノ寸尺ハ
不入ナリ出合迄ノ長サ則チ谷底
ヘノ遠サナリ
急ナル下リヲ見ルモ同断ナリ



向町見之圖 廣狹術也

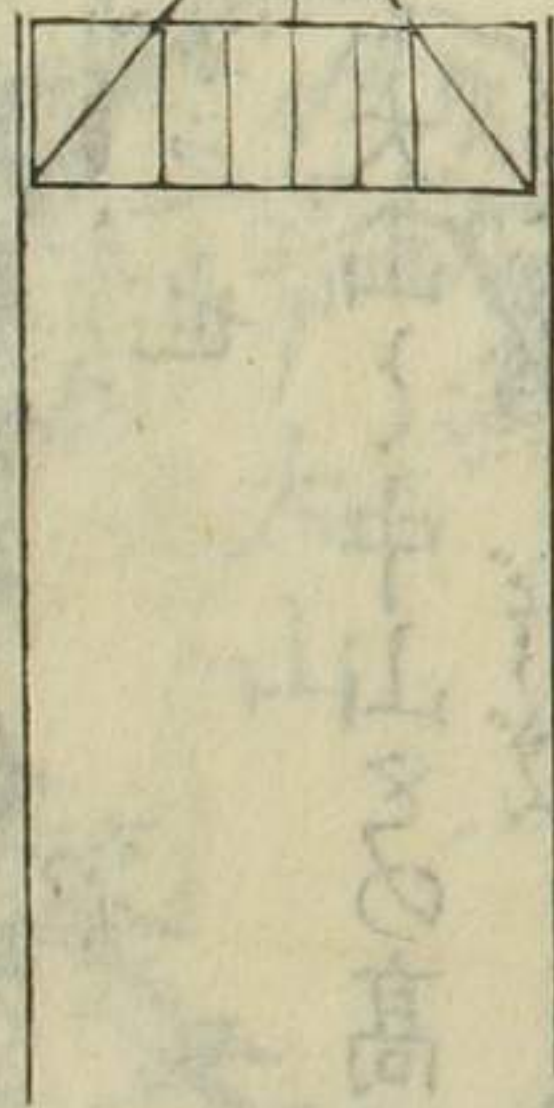
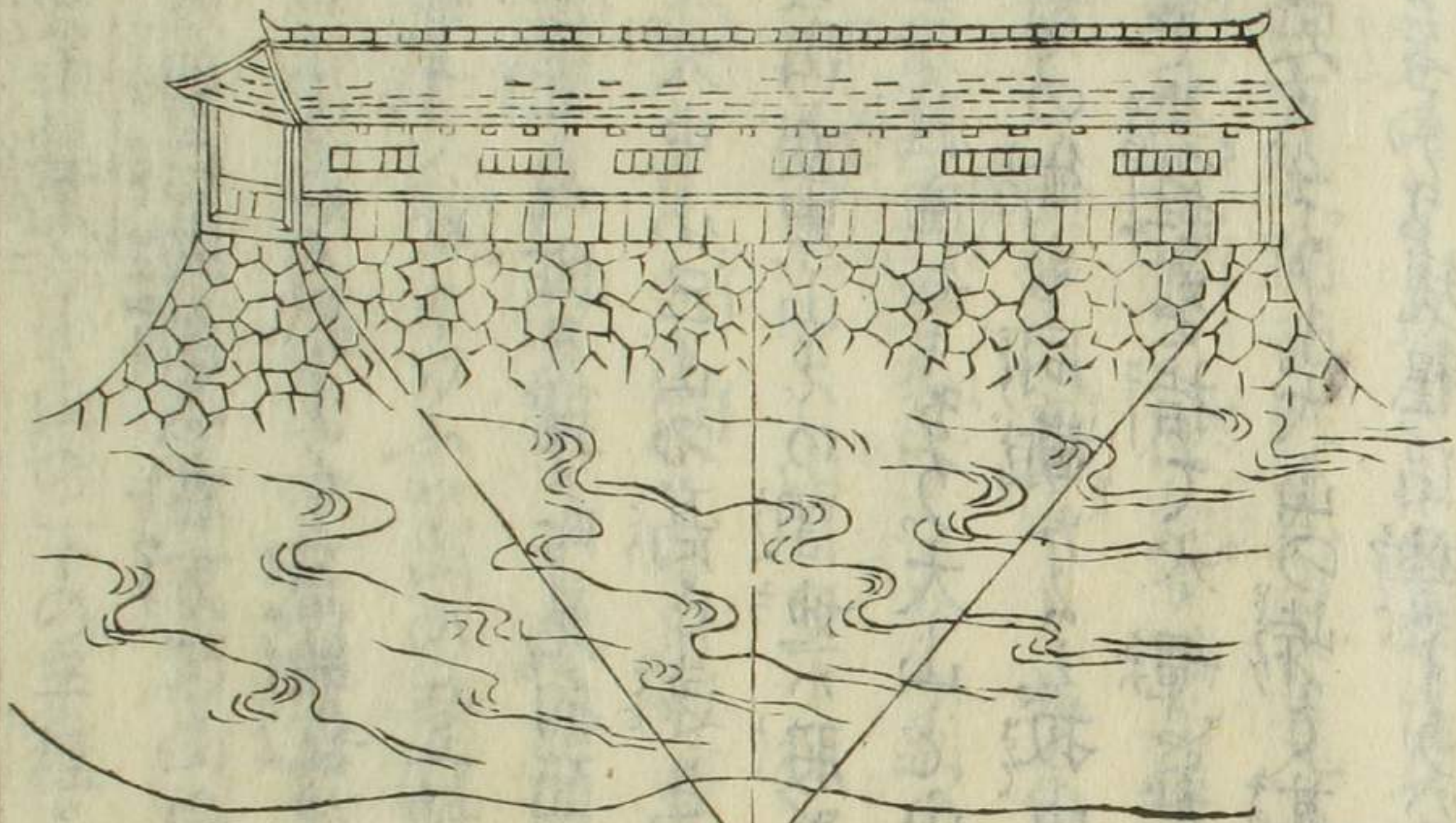
甲ノ通り向ニテ
間ヲシルナリ



廣遠二術町見

或人問曰細道より是より向を望み見せし。堀と隔て正面小長屋あり其長屋の廣さ長屋までの遠さ如何

術曰先狭き間尺を隨て水繩を張り平町見して向までの遠さと知り扱細道の先へ出て道の右の方へ添て水繩を筋違へ張り左迄の遠さを知らる。又左の方へ添て水繩と筋違を張り右角迄遠さを知らる。右のびく。然して左角迄の弦の遠さを自乗して其内の向迄の遠さを自乗して去を余と開平方に開き倍之して此数即向面までの廣さ。道の左の筋より左角迄也。右方も同術ありて道の右筋より右角までの向面までの廣さも是に細道の幅二間から三間三間から三間を加へて向面の廣さをなす



量地指百後篇卷四

乱面町見

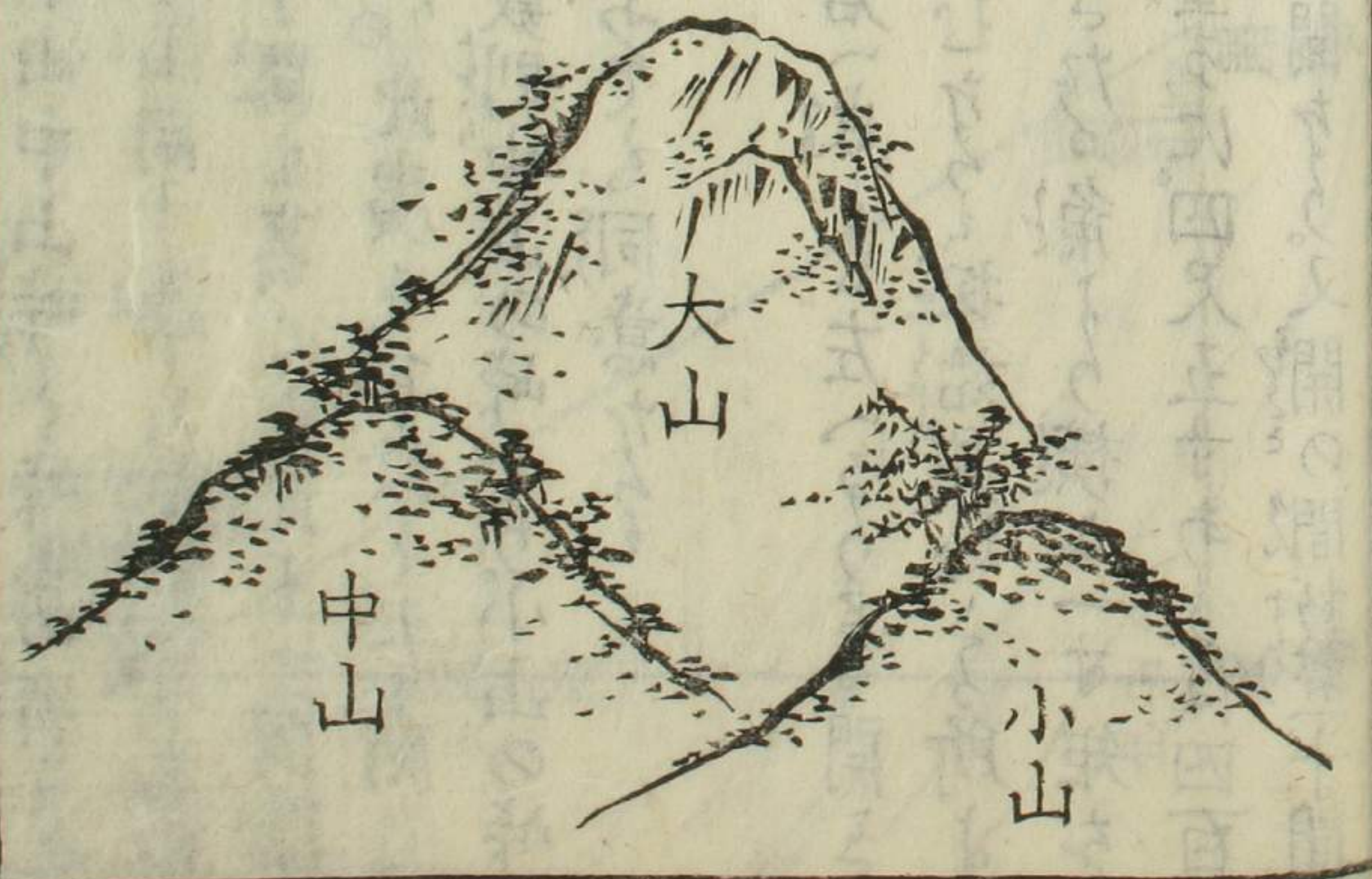
或人問日向面小右方に小山あり左方小中山あり正中に
大山ありかくれごとく目的乱にせ其高下と彼三山間の経
地幾干

術曰先上町見平町見向面の町見高とる町見四色を
以て大中小三山の高と遠と各知之也

扱大山と中山との間地ハ股ケケ也大山と中山との高下ハ勾也
然もバ弦も知るなり大山と小山と此術と同断なり中山と
小山との術も同断なり扱中山と小山と正當なるは斜曲
わつむ其斜を指て水繩とるなり或ハ一山づ或ハ二山づ
分てみるがごとく大山の峠と其間ハ廣くはべし是ハ山ハ登斜
ありふより規程づ棊よりの廣く中山と小山との棊の間の

狭きものなり小山の棊にて

山の西方と向面町見あり見る
時ハ棊ハ指渡の徑知るなり棊
の幅廣くも棊の真中と棊の
外端と此間を知てさなり別の
山と同断然もハ山々の下徑と
知て半して勾う股うふ用て其
山の高と弦勾う股うふ用て弦ハ
知るなり弦とよハ山の登斜
規のこもつと小山中山棊あて
の廣さ弦甲と名付く中山の
下の半徑と小山の下の半徑と

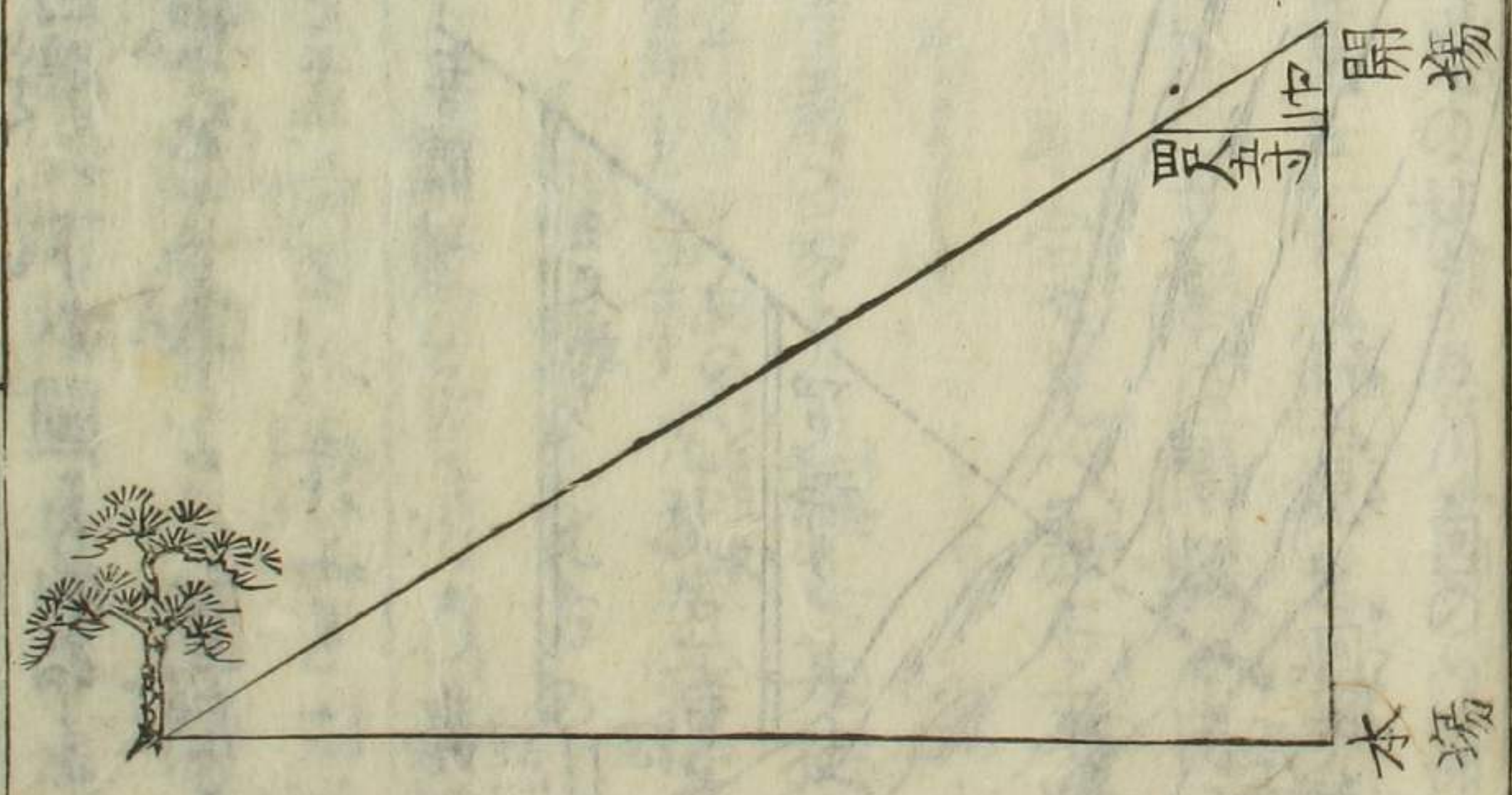


和して是へ甲と加へるの數ハ小山中山峠と峠との廣さ也
別の山も同斷然ととも小山中山同高と見れば右の
ごとく中山假令バ小山より五十間も高くとも此五十間際
迄の廣さを知らば。但上までの廣さより此廣さ自乗と五十間自
乗と和して開平方開て此數則中山の峠より小山の峠
迄の弦にその廣さあり別の山あても同意なりと

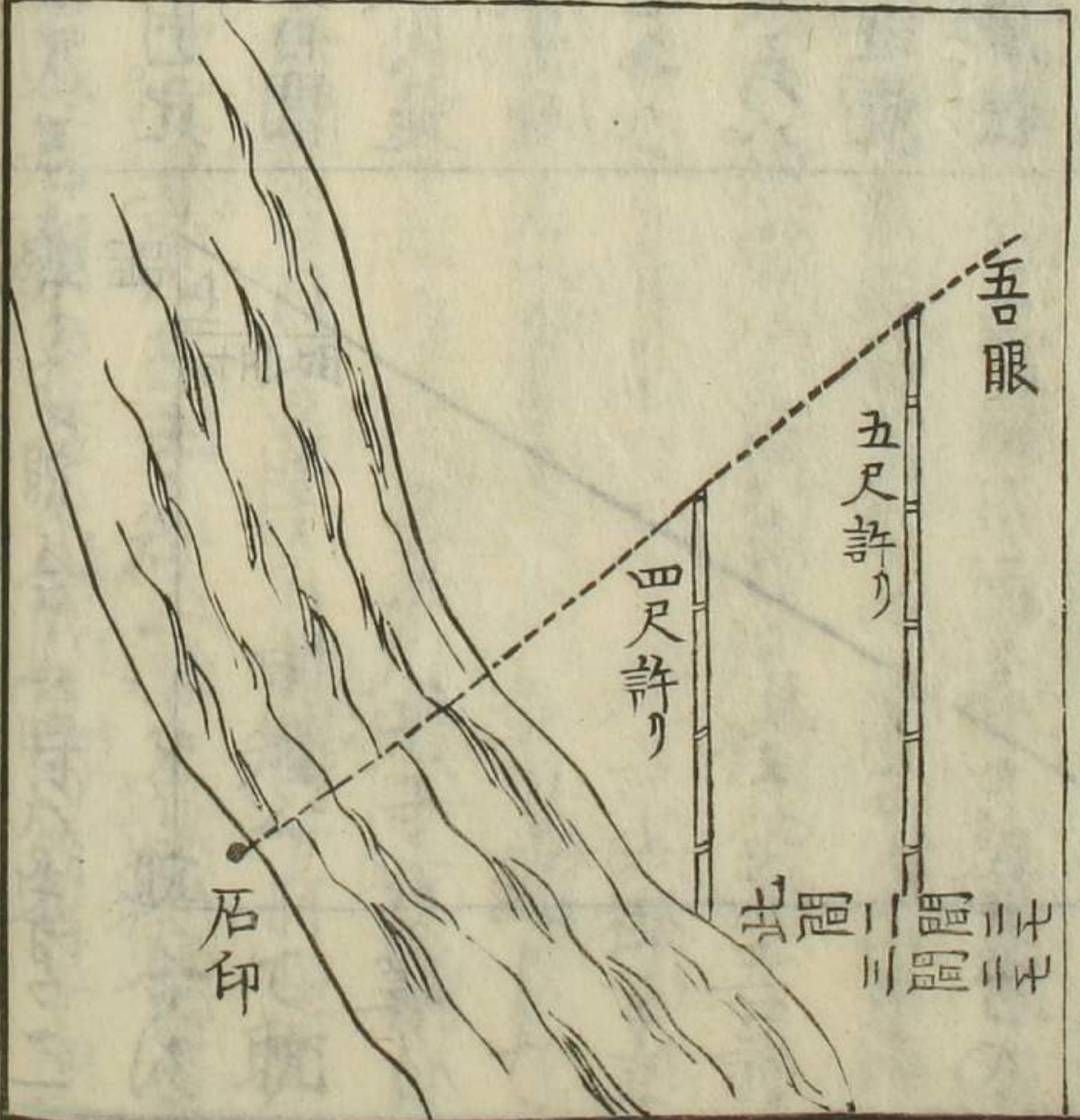
知遠近

術曰先正面の目的を見込右へ成とも左へなりとも開さ
て又其所よりと目的と見こむなりと扱始見込る所よ
り十間際へ開きたる角より横より一寸矩を
差出し其矩より豎の筋を量るに四尺五寸あれば四百
五十間なり五尺あれば五百間なり又開の間數二十間

なれば二寸の所より横より矩を
出し其端より豎小筋を引此
條を量る小九尺あれば九百間
又一丈あれば千間なり余ハ是
とつて考べし何時も彼方と
此方へ引さつて見る心あり
横は開くこと成るればともハ
豎に進退して見るべし其理規
矩術と違ふことなり遠近廣狭
高低淺深をけりて是又
同然なり故よ是を贅せざと



又遠近是移しつゝと何り。術曰譬如下圖よりさく。川幅を見るふ。川の前小四尺許の杖を立。夫より二三間も退き。吾目より少し下れも。又杖を立。向の川岸も心印を志て。二杖の杖と心印と三所不見て極免若見通不揃。手前の杖我目下杖十り。進退して三所眺合。処立。杖と杖との間。三間何れ。先の杖を左へあり。右へありとも。其身ハ動らばして杖をよりと立。又杖と杖との間。三間



わして。試合所の川原小印と付。先の杖より川向の心印まで間數程。川の廣と知る。杖を立替見る。ハ。田規を廻す理。但川端より一間やぐ前。先の杖を立。ば間數と内一間引。残り。川の廣と。答ふ。杖の抄。眺合。見へ兼。末に横竹と結び付。其竹の上より見通しとす。又術曰。杖を中。眺。鉄炮打の手前。のぞく。持て。其杖の抄。を向の川端へ見通し。杖の抄。上げ下げして。向の。杖。持。手前。動らぬやうに。我身と。田規。して。照へ開き。此方の川原へ見移し。其杖の抄の目的。ま。間數。わ。川乃廣。さ。知る。

又術曰。川堀等を隔て。其場。小。臨。紙を疊て。勾股弦の形と制し。是を以て。杖よ持。添。杖。合。則弦を正面の水の上

岸へ見通し。其杖と紙とを少しも離さずして。左右へかり
こと。後へかりとも見移し。其弦の尽る所まで陸地よりして
歩數をりつて間尺を極め。假令む百五寸跬あり。三跬
を一間の積りて五十間なり。是即向正面求る所までの
遠程なり。

又遠程を量るに。此方より彼方を見るとき。假令ハ吾前
に六尺の棹を立。丈より又一丈進んで五尺九寸の棹を立
向の目的と。二本の棹と三所一致ハ脱合するなり。然して
一分を一尺の割めく。前の棹六尺。先の五尺九寸を算し
て遠さ六十丈と知るか。或ハ先の棹二寸短くして脱
合ふと。遠さ三十丈あり。或ハ三寸短くして脱合は
時ハ。遠さ二十丈あり。又三寸短くして脱合ふ時ハ。遠さ二

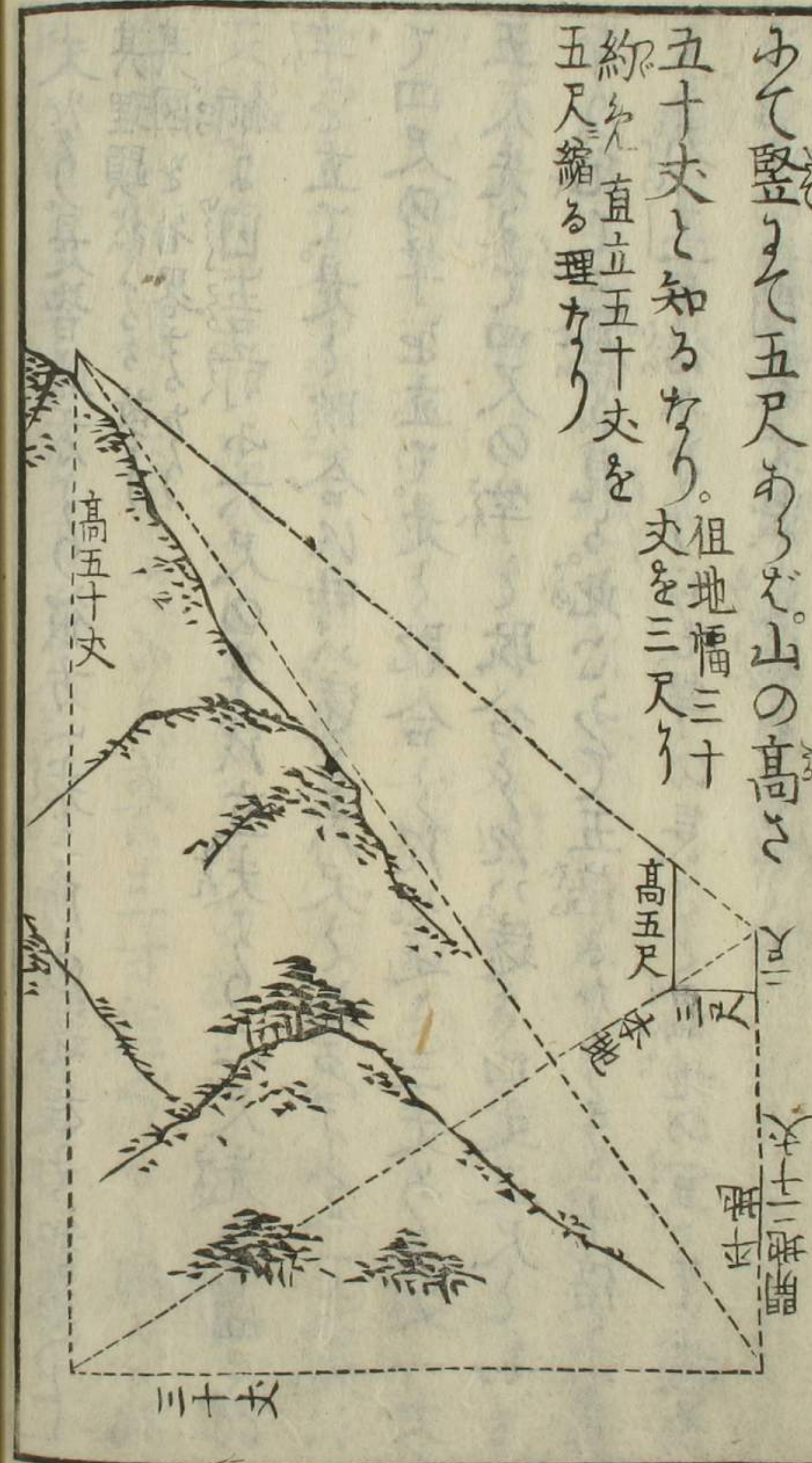
丈なり。是皆此方より彼方へ求る所の遠程と知るか。其理
顯然なるが故。其図を省畧するなり。

又術ハ曰。吾前ハ六尺の竿を立。丈より二尺先まで四尺の
竿を立て。是と脱合は時ハ。遠さ六尺と知る。又一丈先に
て。四尺の竿を立て。是と脱合は時ハ。遠さ三丈あり。又一丈
五尺先まで四尺の竿と脱合は時ハ。遠さ四丈五尺と知る
なり。凡て三倍も見る。此心めて五倍もなりとも。十倍も
なり。乃至百倍もなりとも。竿の長さと畧地の宜さと極め
次第に。間數丈數遠近あるなり。

或問山の遠程と直立と。二品を一同に量ること如何

術曰。本場は於て。彼方の山を此方より曲尺ふ合せ。三角に
見通し。三角ハ見通すこと。則術次は述より。其見通く形の動るやうに假

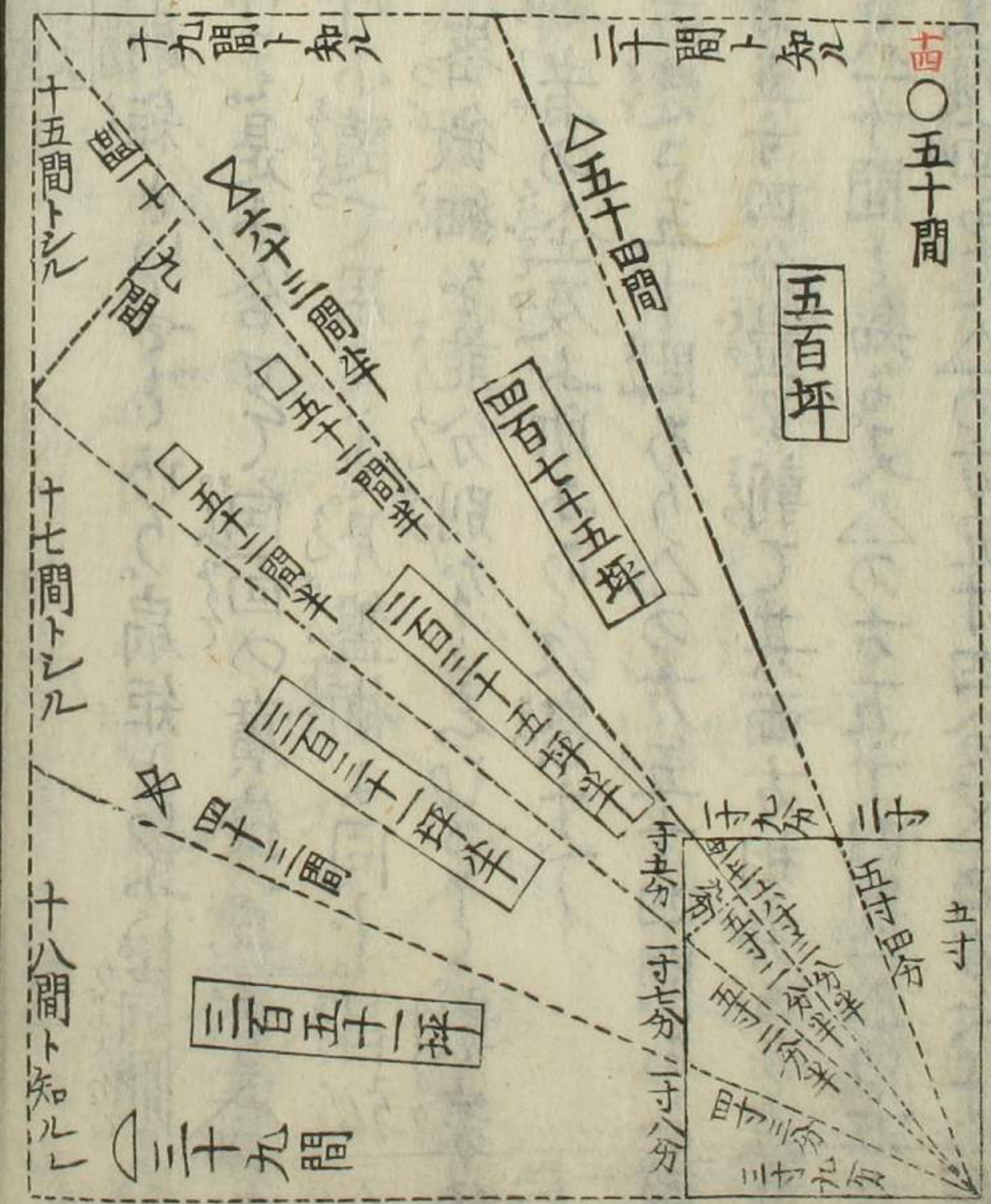
令ハ右の方横へ真矩に二十丈開きて見通し。又始の如く其所にて二尺の曲尺を出し。是も矩の手小合せ見るふ下より三尺あはれむ地幅の遠さ。二十丈と知る。又其所めて堅まて五尺あはれむ山の高さ。但地幅三十丈を三尺より約え直立五十丈を五尺縮る理なり。



知廣狹並遠近

廣狹を知るふ扇矩といふなり。扇矩といふハ扇骨のぞくた圖を作ると。是小合せて向面の廣狹を量る術也。尤彼方の正斜小隨て用ること。見盤術も同ト。昌弘云。わのぞくたに纖密微細を能分別なると志むること。數家の常はて規矩術者の企及ふ所あはれ。察すべし。其法ふ曰○の方遠さ五十間あり△の方五十四間ある時圖面にて○の方五寸四分を量り。其兩方相去ること二寸あはれむ。向の廣さ二十間と知る。又△の方五十四間△の方六十三間半ある時。圖面めて△の方五寸四分△の方六寸三分半を量り。其兩方手前まで相去ること一寸九分あはれむ。向の廣さ十九間と知る。又□の方兩方ともに遠さ五十二間半づ

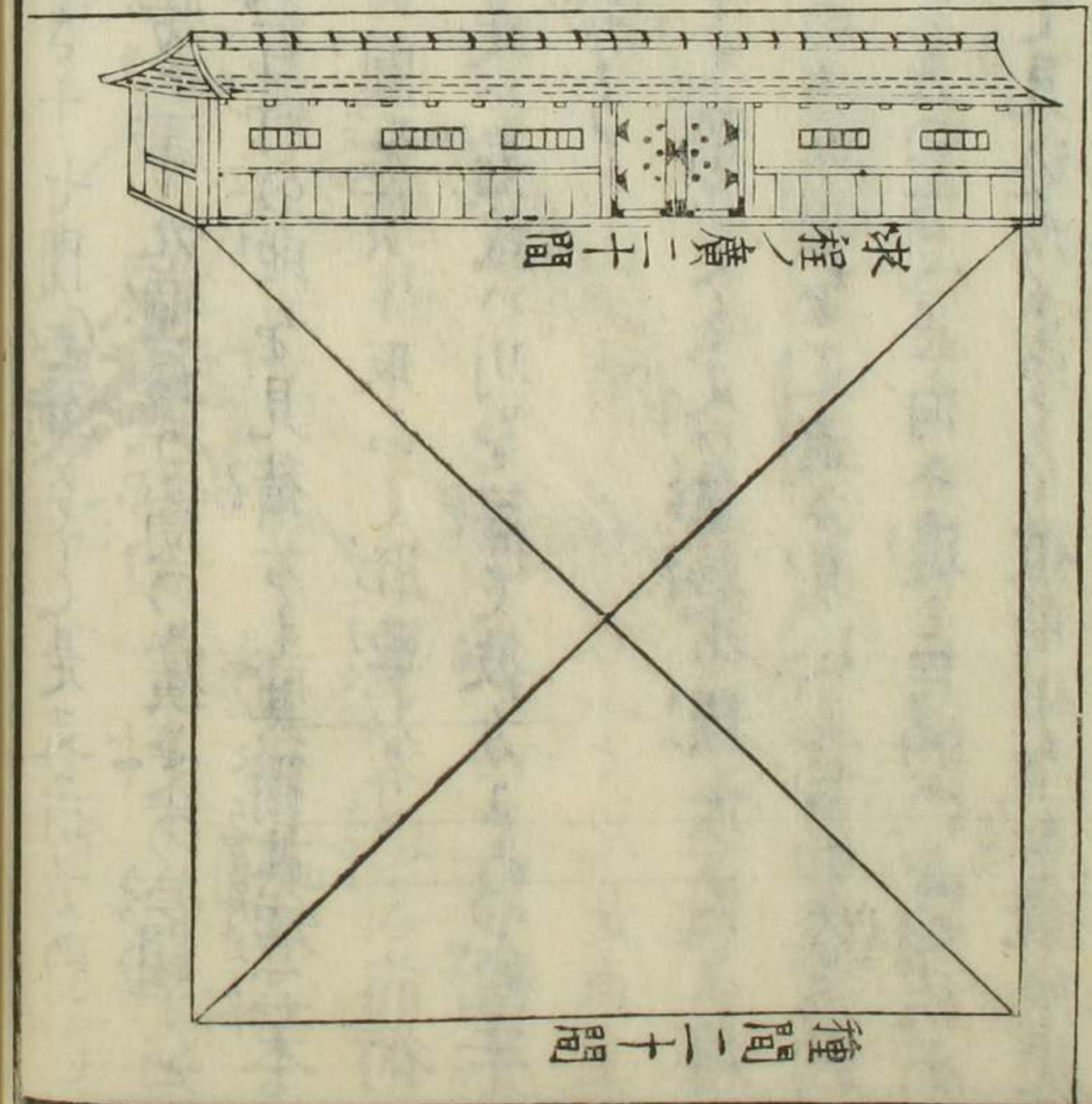
あり。圖面より右のどく五寸二分半宛量り朝う。其兩方相去るどく九分あり。是も圖の場あり。是も圖面小横し。左一寸一分。右一寸五分。廣さ九分あり。古法の如く。一分一間の積あり。左方十一間。右方十五間。徑廣さ九間と知る。又□の方五十二間半の方



四十三間あり。向の廣さ十七間と知る。是又前方の如し。又△の方四十三間。△の方三十九間。向の廣さ十八間と知る。同前なり。幾十町。幾百町の地を見積るも。其術其意替る。あてなり。遠町程手前の圖を廣く取て肝要なり。又廣狹を量る法あり。是ハ堀或ハ川を隔て彼方にある櫓屏土手石垣等を量る術なり。術曰其場小臨と杖にて扇くると。又ハ鼻紙の類めても。三角形を用ひ先目的の右の方の端を正直に見込。又目的の左の端見通し。扱其より左の方へ正向み進て目的の左端の正當み至る。右方にて見込たるどく彼所より。目的の左右を三角小見渡す。如此して此方の左右の間數十五間あれむ。目的の廣さも十五間なり。二十間あり。目的

の廣さも二十間なり圖を見て詳ふとべし

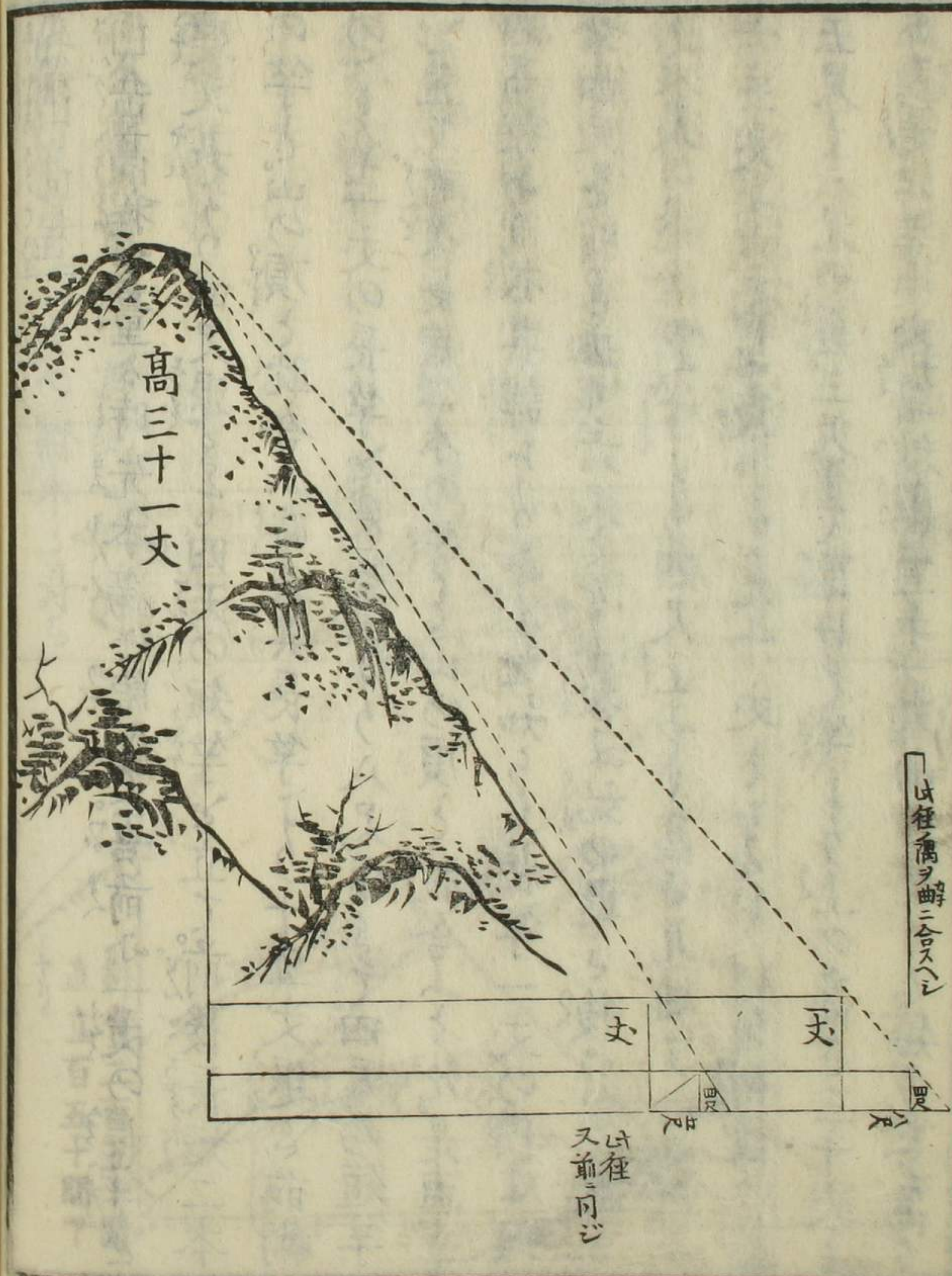
私よ云筭勘術ふ廣
狭を量る法如何かど
と書記たまども畢
竟同理同術なる哉
と煩く煩く煩く
省て載せ



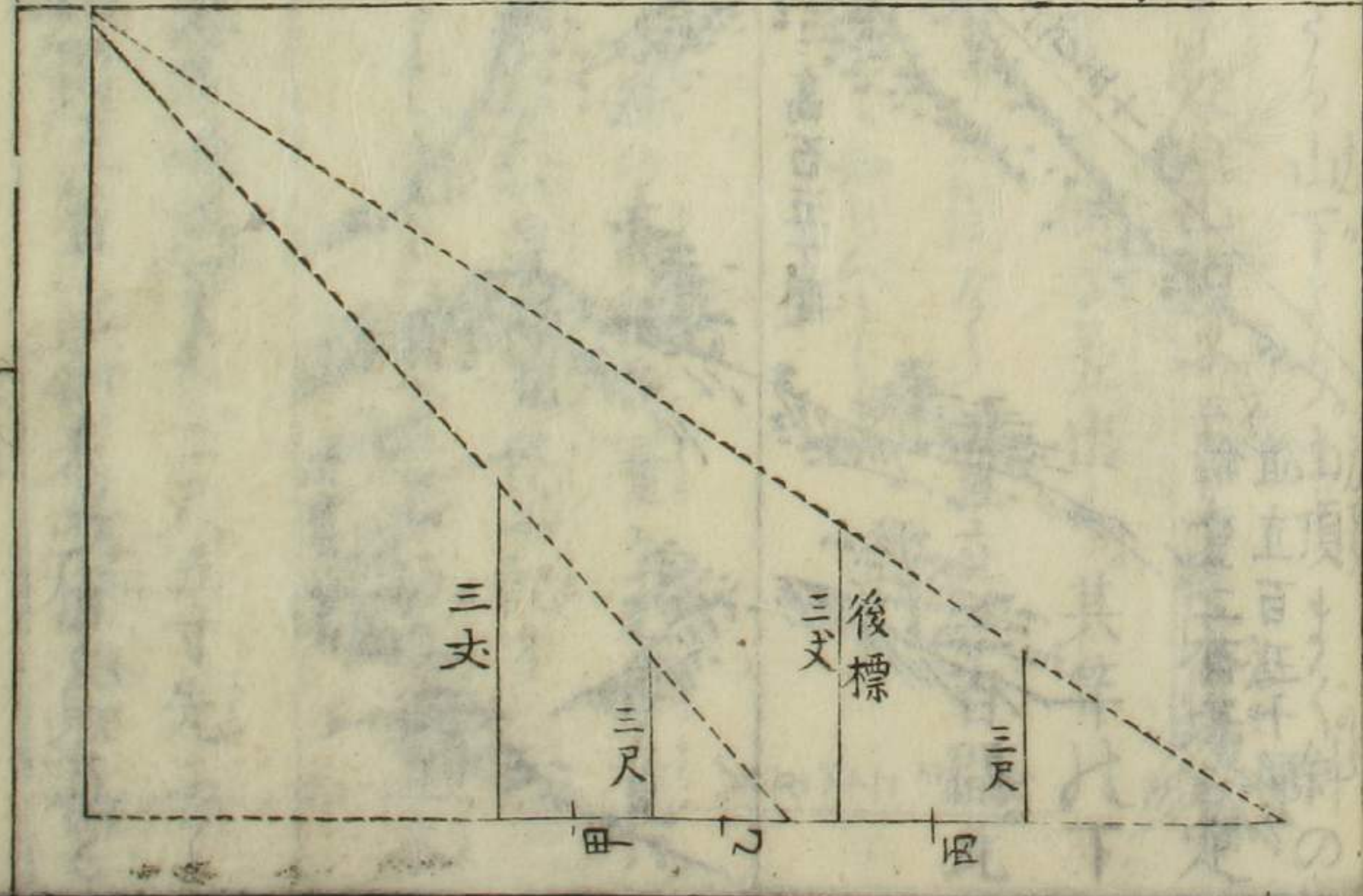
六五

知山高程

山岳高程を量る時先本場小臨して吾前小一丈の長竿と
建又其より四尺退きて四天の短竿と立て前後長短二本
の竿と山の頂と耽合ふ時又其長竿より十五丈退き前術
のごとく一丈の長竿と建又其より八尺退きて四尺乃短竿
と立て前後長短二本の竿と山の頂と耽合ふとた是直立
の高程あり叔其詳なるを知らむ長竿一丈の内は短
竿四尺を引きて去り六尺となり叔又始の退き後の退き五尺
と八尺の退きより下より四尺上より高さ見通す心之故小
十五丈小六尺を乗じて九十丈となるその初後の退
五尺と八尺の差三尺よき除けり竿より上の高さ二十丈と
なる是に竿一丈加へ都合三十一丈山の高さと知るなり



又術曰。長さ三丈の標木と。長さ三尺の標木と二本宛と以て。計るなり。圖のぶくく長竿の内短竿と去て。二丈七尺を丁と以て圖のひと相乗して實と以て。圖の内甲と去て。余二丈と法と以て實を除て。前の竿の長と加へく高さなり。別ふ甲と相乗と法をゆめく除て遠さなり。假令ハ前ふ竿は立て。短竿と退れ去ると。六十丈甲と以て。後ふ竿は立て短竿と退ると去ると。六十二



丈丙と云。前の短標と後標との間五百丈なり。是を以て高と
六百七十八丈遠と。一萬五千丈と知るなり

又山岳の直立と知る

術を問

答曰山上より平地迄

斜の間敷を別術を

以て兼て量るを知る。然

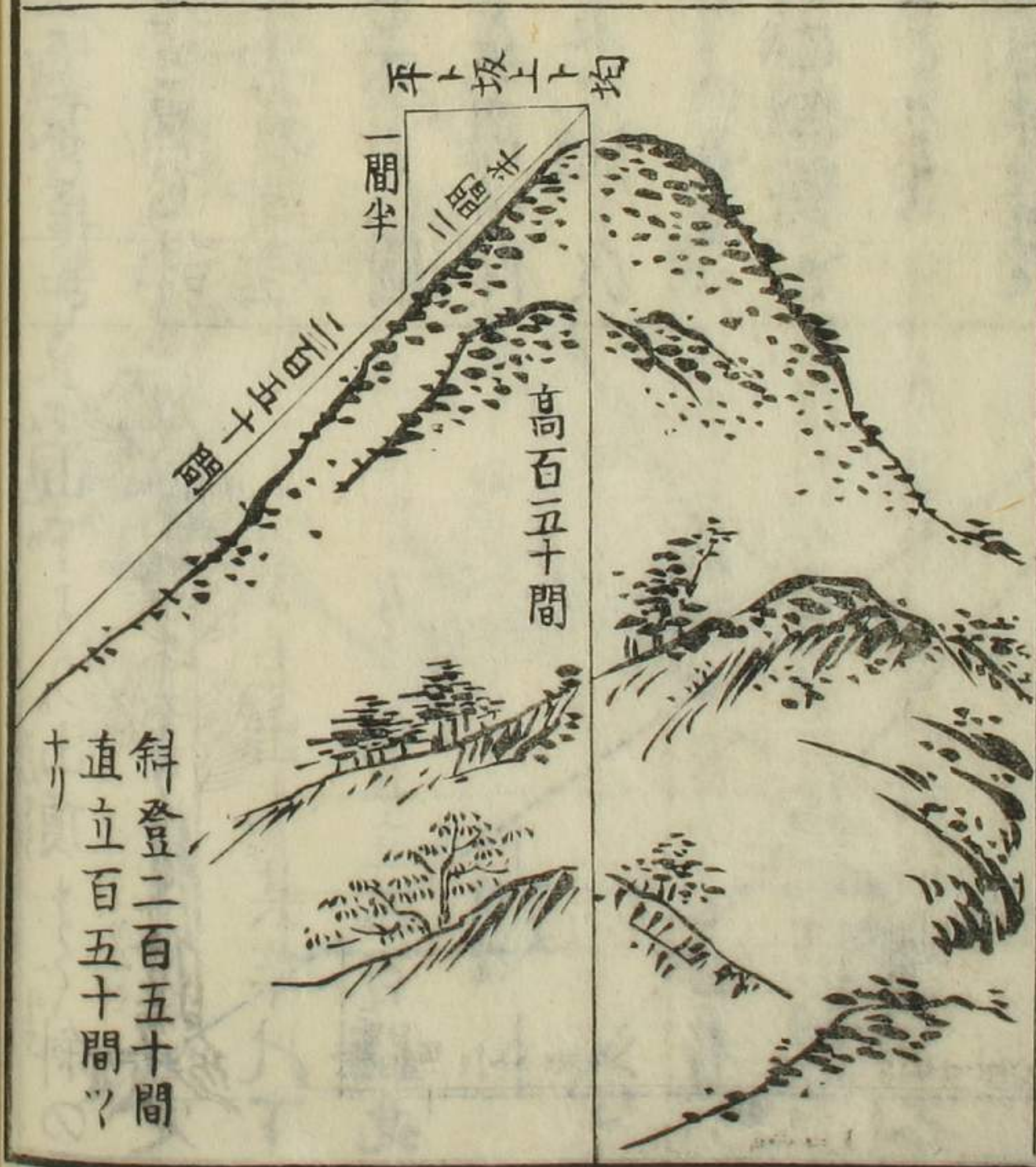
ちて後直立を知る也

平陸より山頂までの

斜登の間敷を量る

知る術は前件に詳

かる



斜登二百五十間
直立百五十間

術曰豫め別術を以て量るを知る山下より山頂まで斜の
間敷たくと二百五十間あるなり。山頂に至ると本場と定
め。それより二間半の竿を杖圖のまゝ斜に差出し。其竿は下
端より別ふ直立の竿と立させ。此竿二間半なり。直立二百間。此
竿一間半なり。直立百五十間と知るべし

知物高

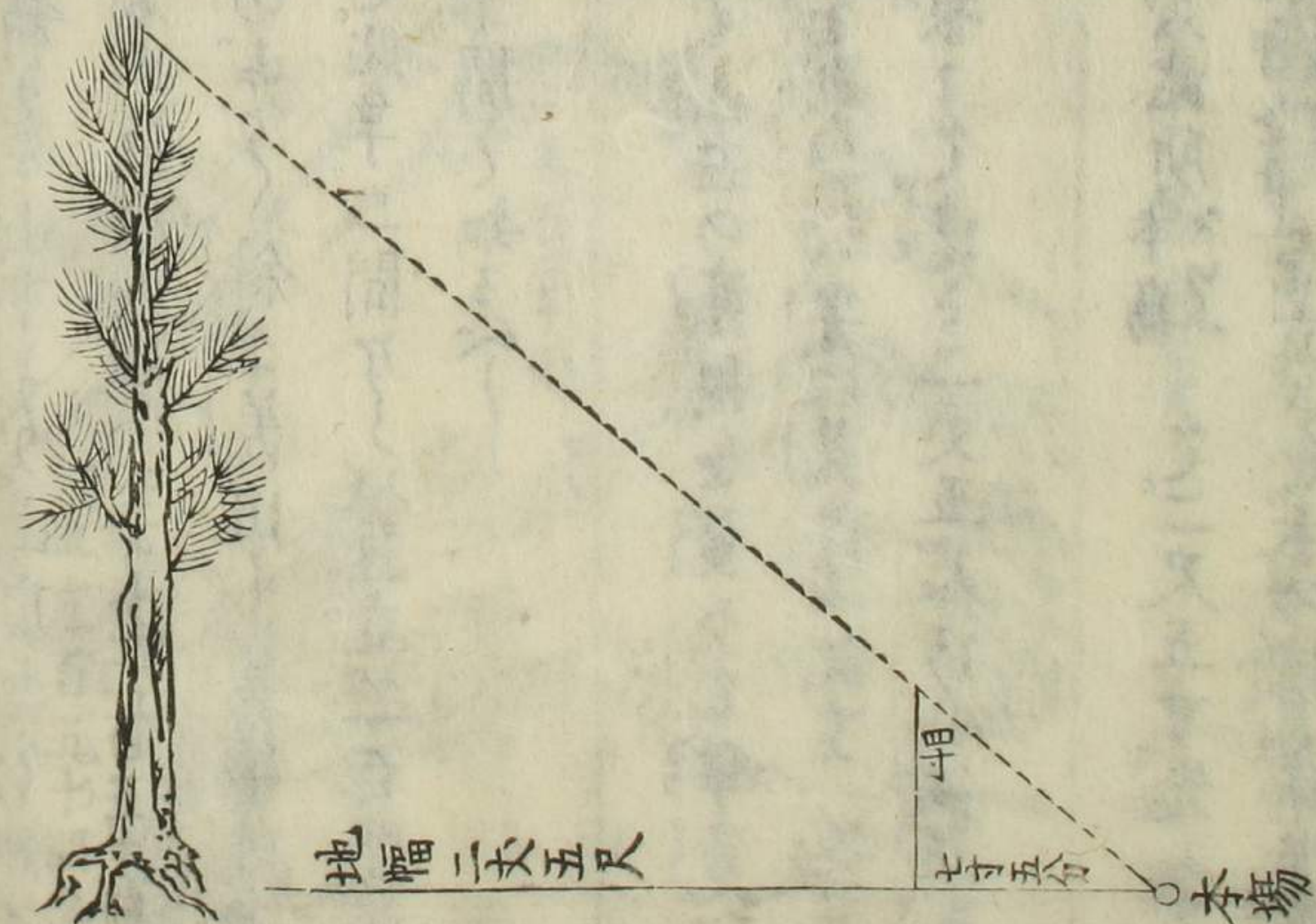
知物高といひ知木高といひも。山岳の高程を量るも。畢竟ハ
一術なり。其術名を別はれ。爰に其終ふ記す

或問曰今此所より向方木の根まで遠と二丈五尺なり。彼立木
の高は幾を知るの術如何

答曰術曰地幅二丈五尺あり。此所本場より二尺五寸先ちて
五六尺の竿。竿長く見通の所を印を付。短く勿論長き竿を継ぎ。を立させ。木の梢と見通と

三所一平小見渡す。此竿即木の高さなり。但二尺五寸の所より。竿五尺あり。木の高五丈と知り。又二尺五寸の所に。五尺五寸あり。木の高五丈五尺と知る。

又云木の根まで二丈五尺あり。時其所小一丈の竿を立。又五尺退る。竿の端と木の抄と三所脱合せ。地より四尺上目とあてて見通す。積りて。竿の高を六尺より相去る二丈五尺を



六

乗して後小退く。五尺を除けむ。竿より上の高さ三丈と知り。竿一丈加へ。木の高さ四丈と知るなり。

又別術云。晴天の時。木の日影地へ移る。一尺の矩り扇う。是を以て量る。其矩りても扇りても。一尺の物。日陰八寸あり。八寸の矩り量る。ハ二丈五尺あり。則木の高と知る。或ハ矩扇一尺の物の影一尺二寸あり。一尺二寸矩りて量る。此心を以て竿りても知るなり。

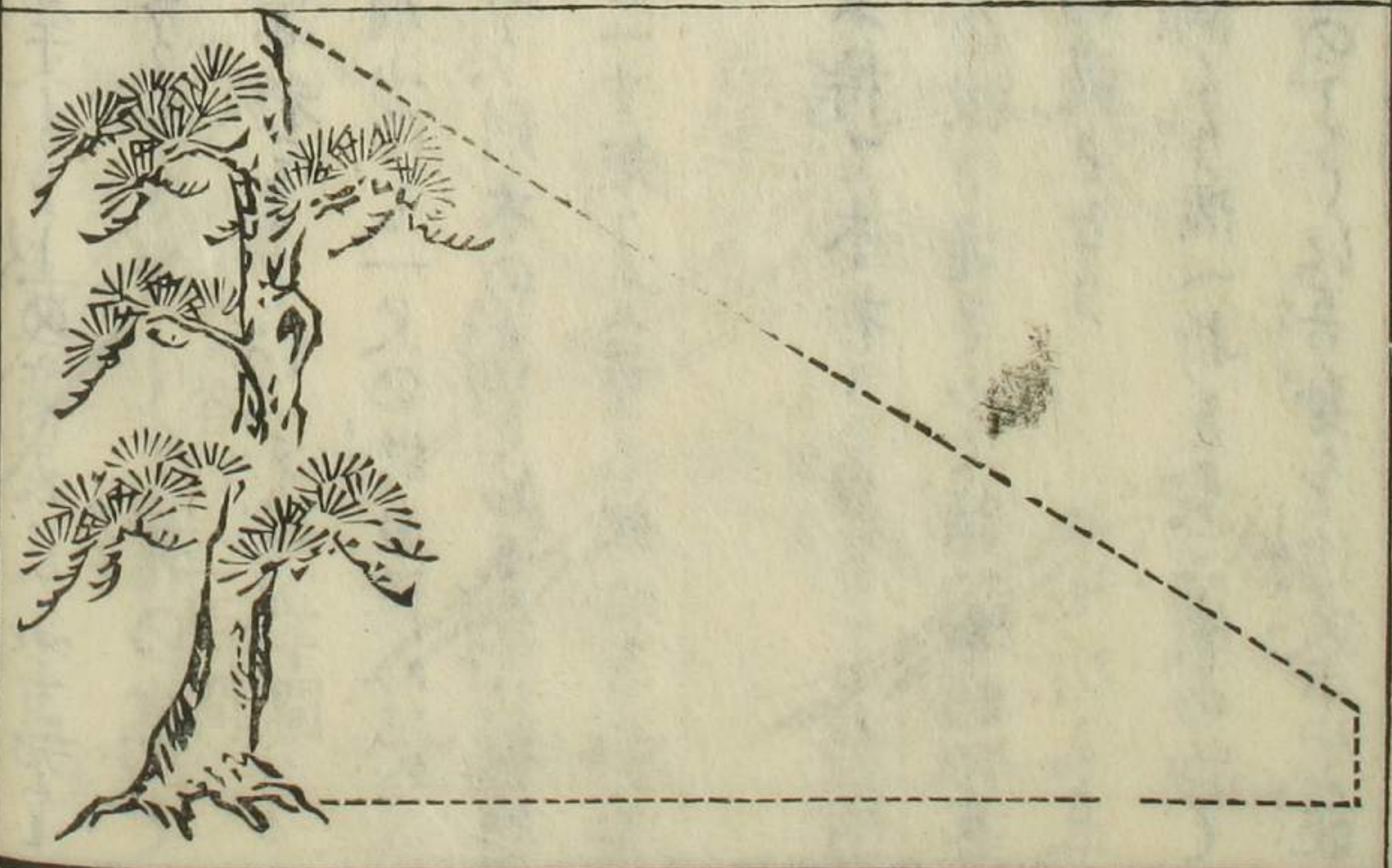
又別術云。吾目通ふ杖を向上より持て。木抄と吾拳と杖端と三所一平小見渡す。扱其杖を木の根の通るまで横へ打かへ。杖端よりある所まで間敷を。木の高さなり。

又別術云。紙を四角より折て。又其隅より隅へ折む。三角の物となる。是を我手より持て。木抄と脱金のくりに。吾身を進退して能

合所ふ止る。此所より木の根まで
即木の高さあり。四方になつて見ると
心なり。勿論又是小居長三尺と加
つて木の高と知る

或問曰向正面掘を隔て櫓より
此方より彼方の櫓の下まで。平町
見を以て量るふ。遠さ五町あり。此櫓
の窓までの高さ如何

術云前表と後表とと。右の堀の手
前して陸地ふ立て。右の櫓の窓と弦
よ見通して。則二表の間の地径の尺
と以て。前表の尺の長を除て得數と



甲と云。五町を間ふ直し。百八十丈なり。是を又尺ふ直し
千八百尺なり。此得數へ甲の得數を乗して櫓の高と
知るなり

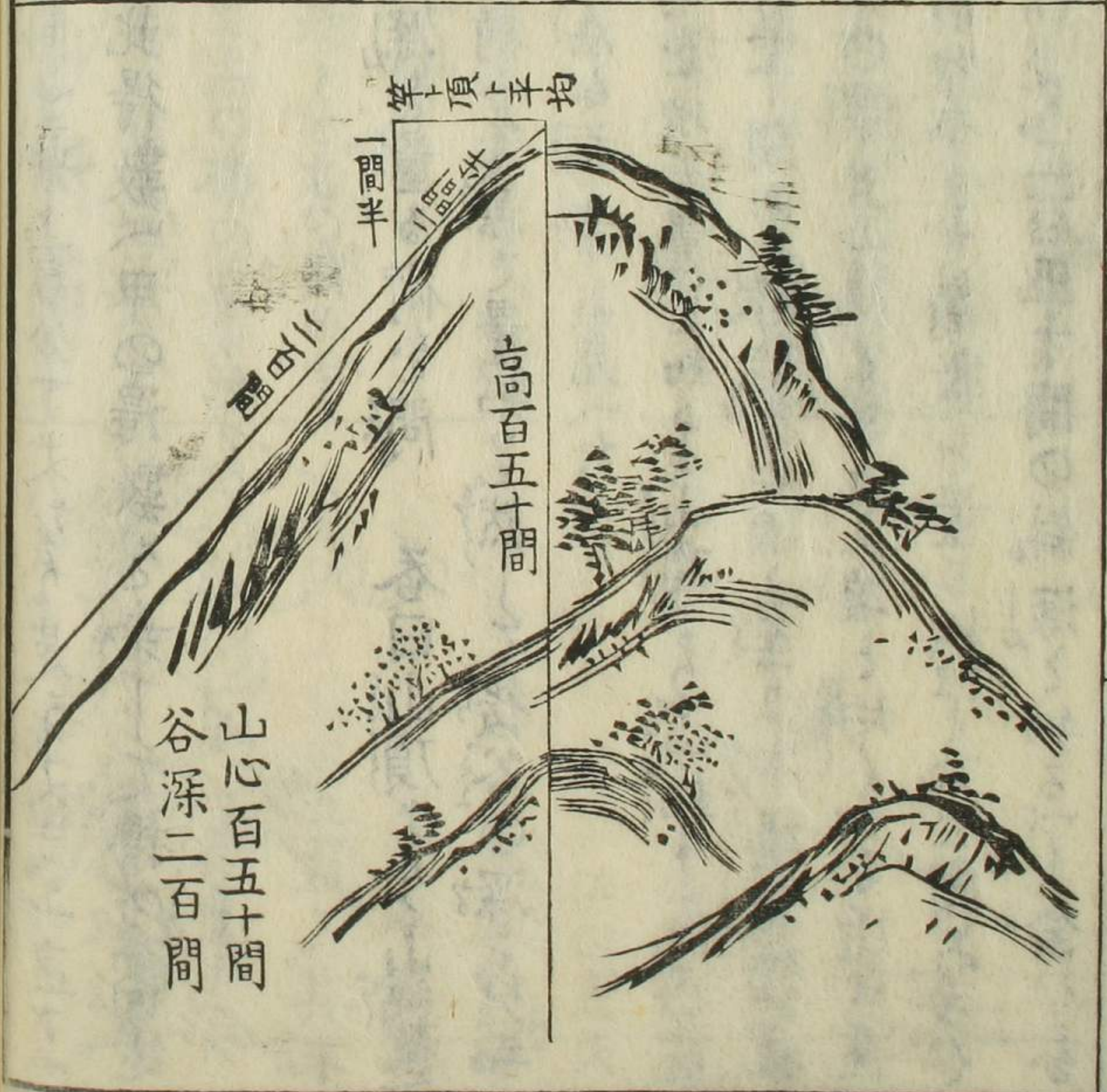
九

知谷深

或人谿谷の斜深を量る術を問。答曰山頂より山軸迄
直立の間數。別術みて兼て量知る。然して後谷の深さ知
なり。別術の作法を前章ふ見へたり

術曰兼て別術を以て量ると知る山頂より山軸まで。直立の
間數。たとへば百五十間ある時。先山頂に至り。本場を極め。扱
其所より一間半の竿と山頂と竿の上端と均くなる所。直
立に立させ。其竿の木まで間數を量るに。たとへば二間ありて
二百間。二間半ありて。二百五十間の斜深と知るべし。余はさ

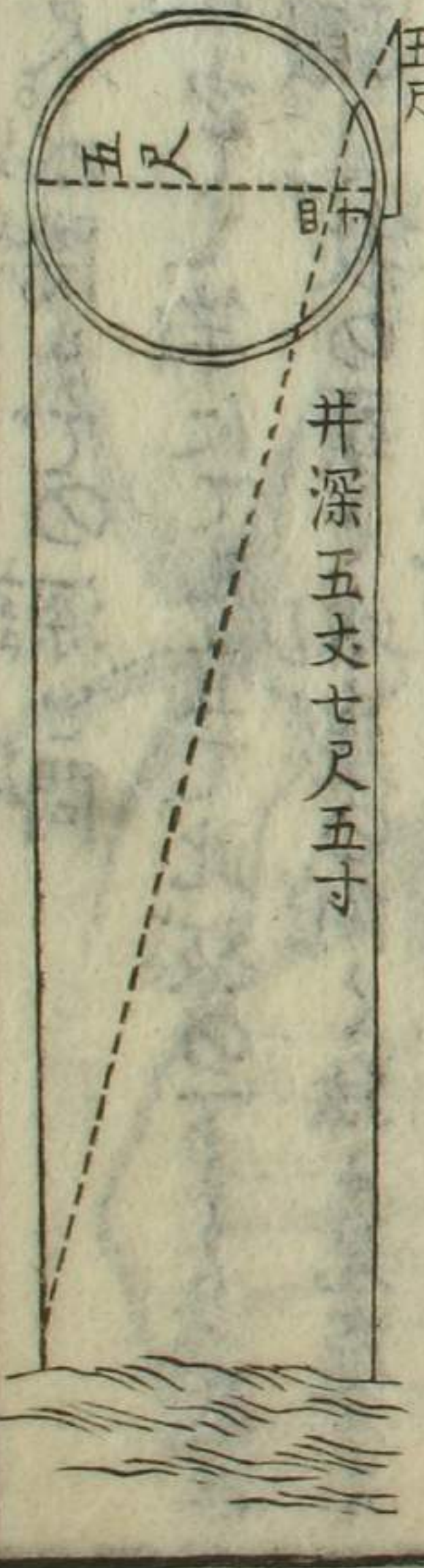
これより働よ
 私よ云々勘術
 に谷の深さと知
 法如何程も書
 記したことも畢
 竟同理同術な
 るを以て煩々
 々ハ省て載す
 覧者術のすく
 ぢれを訝くふ
 ろこなるもと
 りよ



三

量井深

或問曰茲よ水井あり。口径五尺。深底とさる。今其水面迄の深底幾乎。答曰深と五丈七尺五寸なり。術曰新小井幹よ添て棹めても杖めても正直よ立て。其末より。又假よ六七尺の弦ふなる。づとものを差出。此頭を杖の頭と水面の向と弦ふ見通。其立たる股の本五尺の本よて。弦四寸開く此四寸の勾口を以て井の徑惣勾の五尺と量せば。十二半なり。十二半ハ六丈二尺五寸なり。此内假小立たる五尺の棹を引。機五丈七尺五寸なり。棹杖ハ四也。股也。井徑ハ三也。勾也。假物ハ五也。弦也。



量也皆爾後篇卷四

十一

又問曰水井徑四尺水際までの深を問
 術曰井戸がはよ杖あても竿にても立て此杖の下より假ふ
 勾弦出し此勾の頭と杖の頭と水崖の向と弦を見通し
 則杖の長さ弦以て勾の長さ弦除くと勾配なり是をりて
 井の徑を除きて深さ弦知るなり

知水深

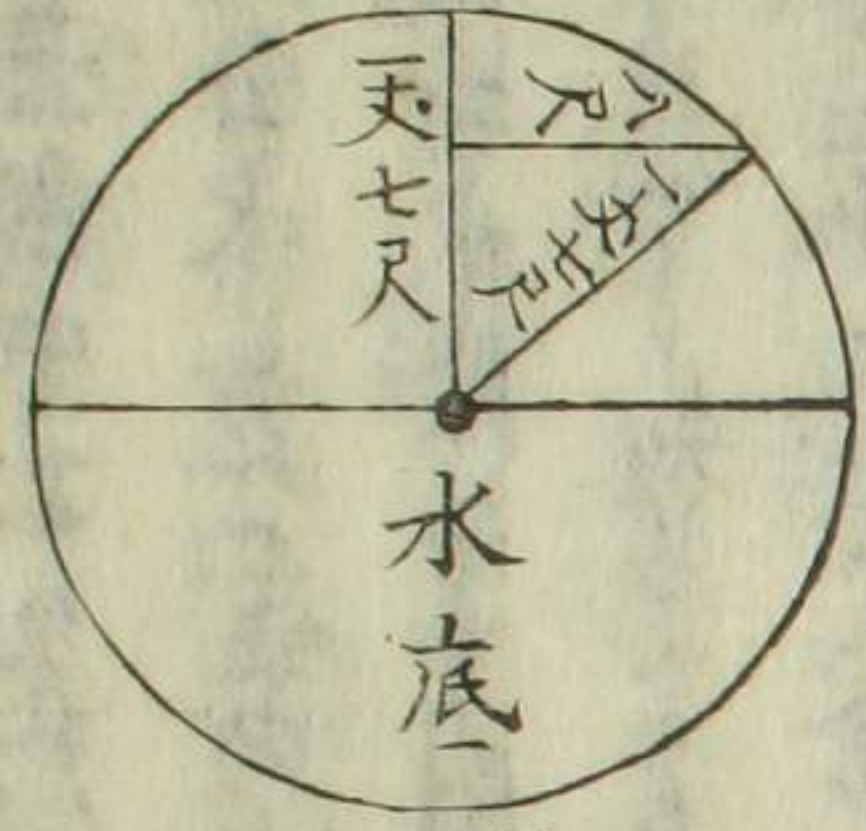
或問曰池中葭二本根を連結並びて生なり水底の深
 さハ知をくば水面よ出くる所二尺あり水底までの深
 さ幾す

答曰水面より池底まで一丈五尺葭の長さ一丈七尺なり
 術曰葭二本の内一本の稍を斜に引撓りて水面と除くと
 初直立の所を除き隔ると八尺あり叔圖の如く二尺

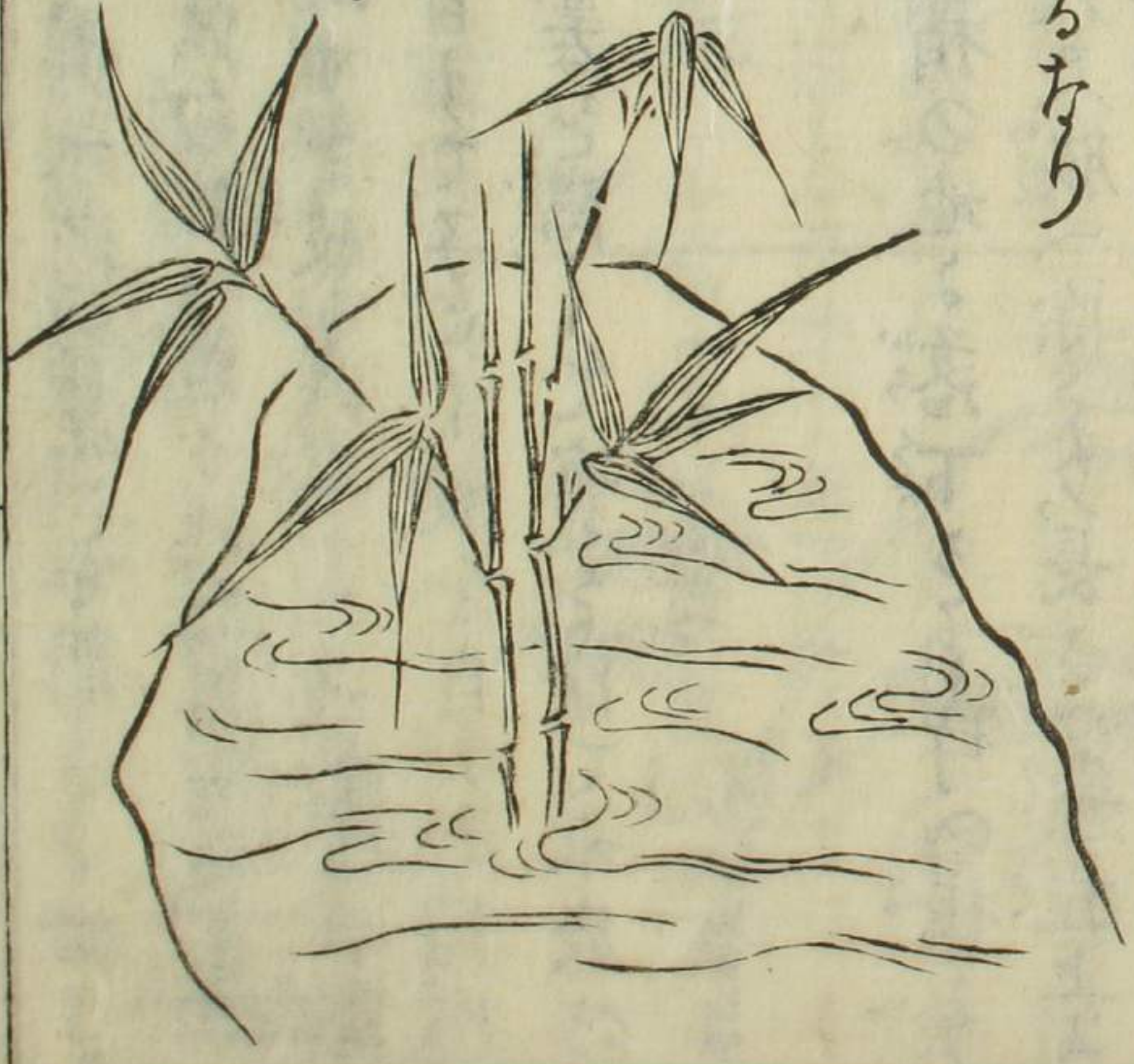
と八尺とと二寸と八寸小縮めて圖し是を渾莞ををりて
 規圓して量ると凡ハ其水面より池底まで一丈五尺也
 葭の長さ一丈七尺と速ふ知る方と是ハ機轉の術とも
 る一算數術も其法を述るなり

水深一丈五尺
 葭長一丈七尺

葭二莖



此圖ヲ按シテ
 知ルヘシ



量也皆爾後篇卷四

三

又云水中より芦生じ出る其水底の深さと問
 術云水より上の芦の長さ勾弦の差と比。則出所の芦の
 頭を水際まで引撓りて。此寸を股と比。土より水際迄芦の
 長ハ勾と知るなり。則差と自して子より股を自して其内
 へ子と去て余を實と比。差を陪して實を除て水底の
 深さと知るなりと

四

折竹術

或問云爰小雪折竹あり。梢の地より落たること。竹の根より
 上二尺の所まで。圖の如く八尺股へ除り。長さハ幾程上よ
 り折む。全竹の長さハ幾程と問
 答曰根より折目まで一丈七尺也。折目より梢も一丈七尺也
 術ハ池中葭の法と同じ

五

又問右小所謂竹の折目半なる積
 なり。折目若梢の方。短き時ハ如何
 答曰折目梢短き時ハ竹の根へ引
 付し心持して假令ハ根より一尺
 上ふあつて一尺上より前術の如く
 して後小一尺加へ知ふなり

六

又問折目梢の方。長き時ハ如何
 答曰折目梢の方。長き時ハ下ふ圖
 すとく。折目より下の豎を股とし



四と比。折目より梢の地より下る所を弦とく。五と比。根より梢
 のあたる所の間地を釣とく。三と比。圖の如く。釣六尺ある時
 ハ其間六寸の所まで。矩よ合せ。刺盤の法のごとく切て

ととむると。小股八寸と。弦九寸
八分あり。是を十双倍して。股八
尺弦九尺八寸。鈎六尺と知るなり
未安ハ圖を考ふる

量流物

或人問云爰小長流水あり。水上小流ふ木葉あつて流る。一眨ふ
道程何程流るといふ。答曰二千二百七十五間

術小曰流る木の葉呼吸一息は二間づつ流る積みして呼吸昼
夜一萬三千五百息といふ。是は二間を乗ずれば。四万令五百間
とある。是と十二眨を除くれば。一時三千二百七十五間とある

量行程

今旅行の人あり。大畧一日の行程何程と問

答曰一呼吸の間は三間づつ歩むれば。九里十三町半
なり

術曰呼吸一日一夜ふ一萬三千五百息と云。是を昼夜は折
半して。一日六眨の呼吸六千七百五十息なり。是は二間を乗
二万零二百五十間とある。是と一町六十間を以て除けば。三百三十
七町半とある。是を一里の町三十六町と以て除て九里十三町半
と知るなり

量雨高下

今左右雨所小火見槽あり。其高下と量る術如何と云

術曰手前の敷居上より向の敷居上と先上り。先下り
と疾と先見極るなり。樋定木の上と塞ぎ。定木と横
て。樋の内より見て。先上り。高くと知る也。上

町見ましく則向の高さは知る。平町見まて向の遠さを
るを先下りし。下町見まて見通の弦を知て甲
その向の敷居より上に目付として。平町見まて遠さを知
て。股をひくと。甲乙をとりて鈎ハ知るなり。此鈎ま
則手前より向ハ低よりして。線知るなり。

量地指南後篇卷之四終

量地指南後篇卷之五

勢南 處士 村井昌弘編述

渾發術

渾發切要

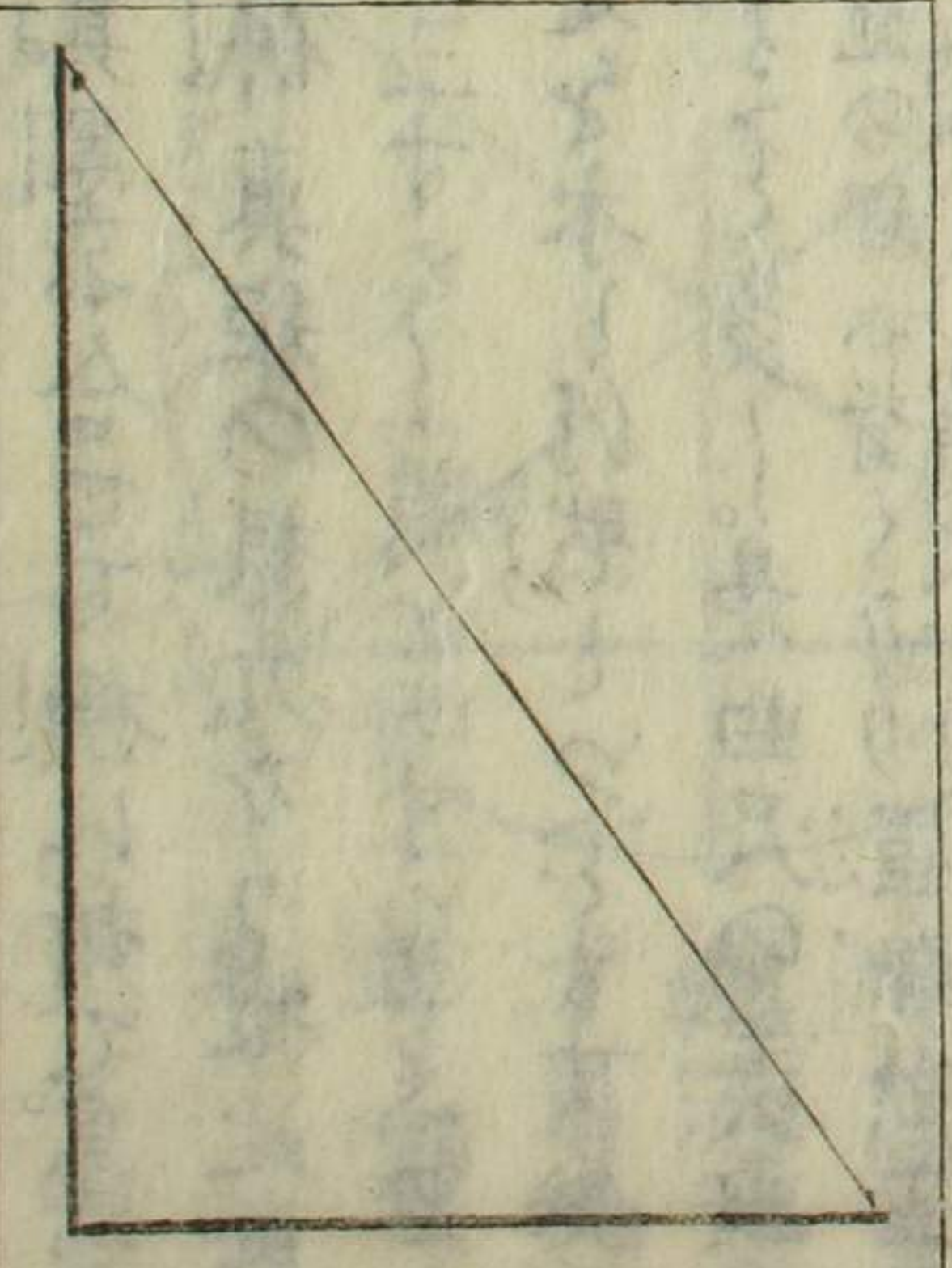
量地術小器械と用て。廣狹遠近高低深淺を量る。初
中終の二段あり。學習すること。亦是小隨ふ。其初ハ見盤
と用て。一切の形と盤面小摸。其中ハ元器を用て。大小の
事業を十字に顯し。其終ハ渾發と携て無量の妙術を
一本に盡と。蓋見盤の業ハ此地の種を以て。彼所の形
知る。諸の地勢と摸し取術なり。元器の業ハ當支の順逆
と野帳道作ふ記し。分度の矩を以て方角を糾し。圖画に
顯す術なり。扱渾發の業ハ見盤元器の両術を。此一本に畧

きて遠近廣狹高下淺深洩す所なく。詳し摸す妙術あり。故に俗に本術ともいふ。其此渾癸を用ゆる修練の切要八箇あり。一曰堅体之法。二曰射形の習。三曰頰尺之定法。四曰物見之次第。五曰摸手之定寸。六曰右手頰尺。七曰左手揮癸。八曰縦横之習。以上是なり。最其切要と審みずべし。抑又渾癸の妙用たるや。鈎股弦三四五の形。法は萬象と立所を摸し出すは神器なり。此器元來量地術一用の為し。制する非ずといふも。諳ふ量地の法。叶く微妙なるや。夫三四五の矩ハ陰陽合和の數ありて。量地術の根本なり。方圓曲直より。千形萬品此理ハ洩るることなく。因て其自在妙用の一二を左小記して學者を曉す。見るるべし。

算理渾癸發

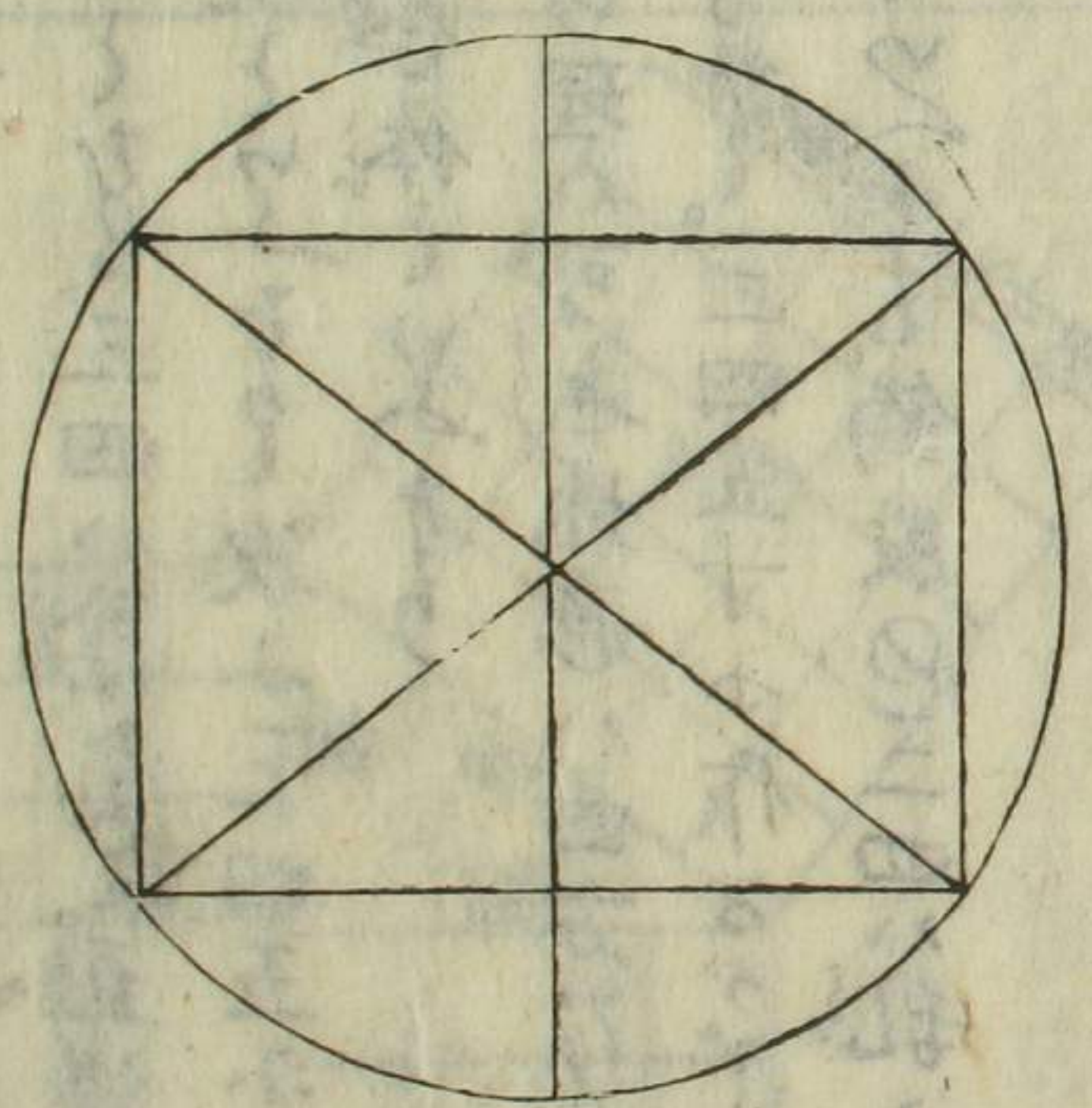
三四五矩

傳云算理渾癸といふ三四五の矩ハ本條。此ハ器物あり。眞矩の癸見規矩古傳ハ量地術を規矩術といふ。根元也。易傳序云數ハ易也。其理一といふ。即此理也。算法ハ此矩を鈎股弦といふ。凡規矩の術ハ三四五といふ。縦ありて直と物ハ垂繩なり。是を三といふ。鈎といふ。又横ありて直と物ハ水平なり。是を四といふ。股といふ。其縦横合して斜直なる物を五といふ。弦といふ。是を總て眞矩といふ。蓋是ハ其理といふ。實ハ眞矩尺と寫す器ハ即曲尺是なり。然といふも。其制廉ありて眞矩ふ叶曲尺あること希なり。故ハ量地術ハ於て其矩を求め極むる



法ハ紙を縦小折て墨と引る。其墨小合せて横に折て墨と引けむ。乃十字形となる。是併真矩の根元なり。叔此真矩を得る。圖の如く。釣を三寸と。股と四寸と。留て弦を引渡す時ハ五寸なり。是を本と。然と。寸尺と用ると。凡ハ三四五其寸小合ざる。是曲尺の誤ある所なり。三四五寸に合ざる則ハ天地の理小背くなり。昌弘曰此言古傳の云処なり。姑くこれ小隨て記す。渾癸の理ハ寸尺間町小拘らば。是を開て寸尺間町に名く。妙用其中小わり。今渾口を開て釣と三つ計る。又股と四つ計り而て弦を引渡す時ハ。此弦寸彼渾口あて五つあり。毫髪も差なり。故小寸尺間町に拘らば。唯三四五乃矩といふ意味深し。猶口傳云云

さて。陽小用也。即此理也。天文ハ陽をて。地ハ陰をて。方なり。故小股釣と陰と。即矩なり。見込なり。弦と陽と。即規なり。見返なり。故小首尾形古傳小見込見返の形といふと規矩合体といふなり。古傳云。或問曰。鈎股と真矩十字の本を。陰の理明け。弦を於て。陽の形なり。此理如何。答曰。天圓の中に地方の縦横を取て。四徑と引渡す時ハ。圖の如く。八段の尾首形と得。或ハ天徑一



鈎三股
四弦五
則天地
方圓規
矩之理
也

尺は結る。六寸八寸の縦横なり。正中より十字の徑といは
つゝいといは各三四五寸となる。三四ハ陰なり。五ハ陽なり。即
圓徑なり。故小見返を規といふなり。次小三四五寸満る理是
かり。故小尾首形の規矩合体といふなり

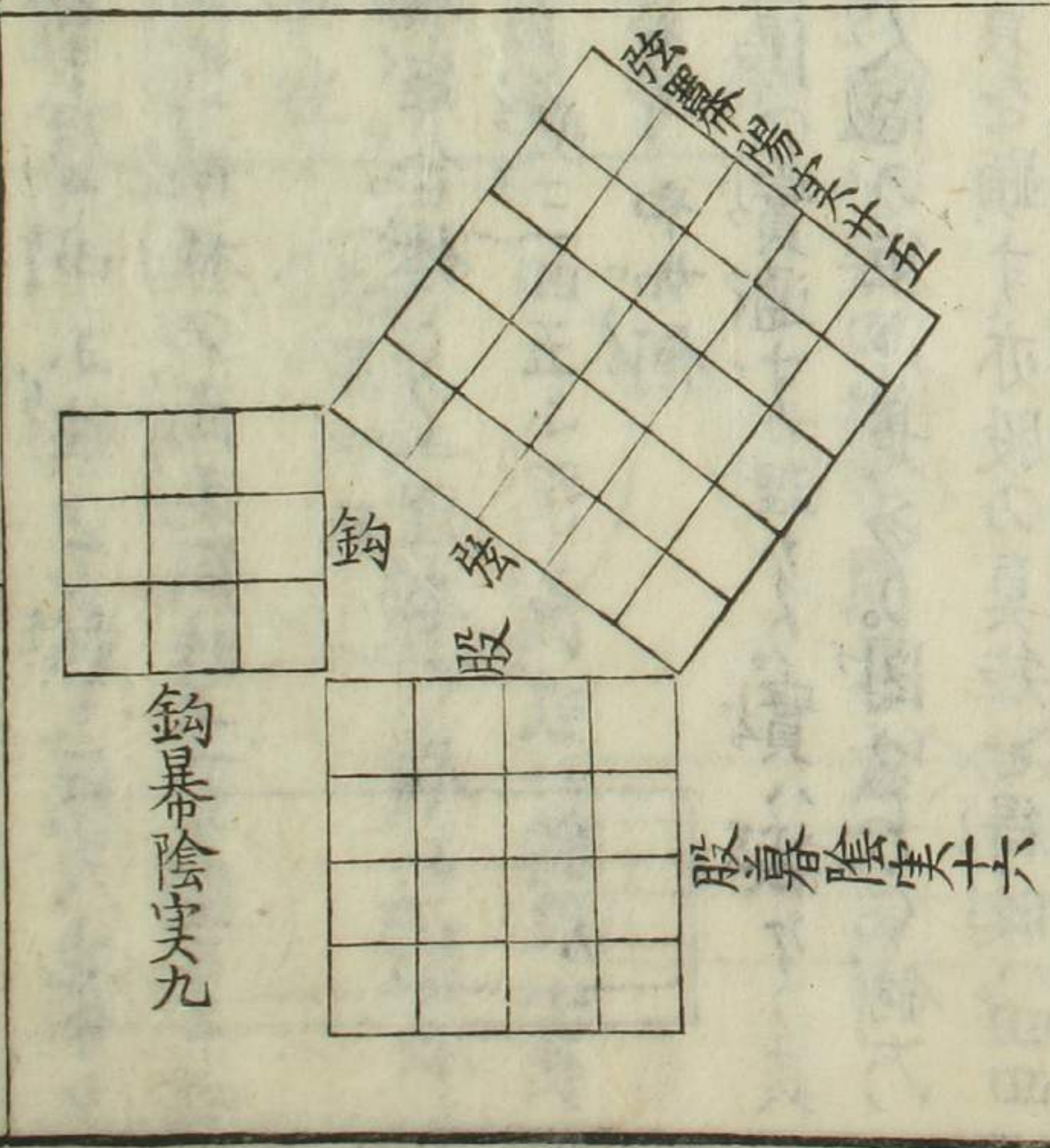
又問曰天徑一尺ハ鈎股の理ハ可也。地形ハ四方なるべし。縦横
取て而も六寸八寸小極る。二四五寸ハ作るがごとし。若四角
小取ハ則強ハ五小叶あつても鈎股の三四ハ乱るを。此
理如何

答曰六八ハ作る物小非す。自ら六八ハ満るの理なり。謂ハ
天一を生ずるの理形を以て是をいふ。又十分の一と下す
。然とば上下小一寸づつ生じて中と八寸自定る而して
其八寸小木を山て満る所の真矩を求とば。横の六寸自

出來す。是天地自然の理なり。然る時ハ各三四五寸と得あり
故小一よりして二三四五迄を生数といふ是なり。而して六より
まで七八九十迄と成数といふ是同也。右の圖小一よりして十数

迄是らり。並小四方らり。八
極あり。北極南極の氣徑
らり。黄道の徑あり。天地
合体理即是あり。天文易
道の理小同也。猶口傳
問曰上下小一を生ずる此
理如何

答曰東南の二洲西北乃
二洲。昼夜と分つ世界小



方あるがどし。地ハ陽ハ包まりて中ハ住して動ふ。天地分つ時ハ世界一同たり。故ハ北極南極の両天同時ニを生じざるの理有り口傳深しといふ

古傳云問曰尾首形を規矩合体といふ。理委く尽く。蓋平町の始より尾首を得る。必三四五ハ限らぬ。或ハ鈎股小長短あるも陰陽ハ合す理ありや如何

答曰此理至極なり。即陰陽の實通する理なり。實ハ誠なり其實を顯す者ハ真矩なり。人心の矩即是あり。圓のどし。鈎乃真矩を得時ハ三三九の實を顯す。亦股の真矩と得時ハ四四十六の實を顯す。鈎股俱ハ陰の体なり。故ハ鈎幕九つ股幕十六俱ハ併て二十五を得たり。是則陰實なり亦弦の真矩を得たり。五五二十五の實を顯す。是則陽實なり。然時

ハ陰陽等數を得たり。故に規矩合体する理なり。或ハ鈎股小長短ありといふ。弦幕の等なり更に甲乙あり。真矩小背ざるを以て本とむるなり。猶口傳

圓理

二術

渾發術を以て圓の周と知の術を問答左の如し

術曰丸器

益孟の類 假小用ふ

の中徑

小墨と引く。又別ハ板みくも

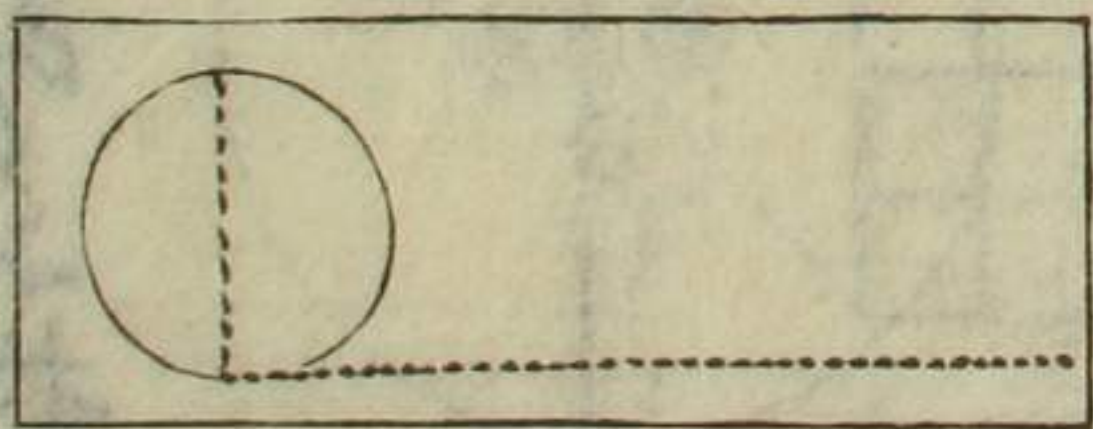
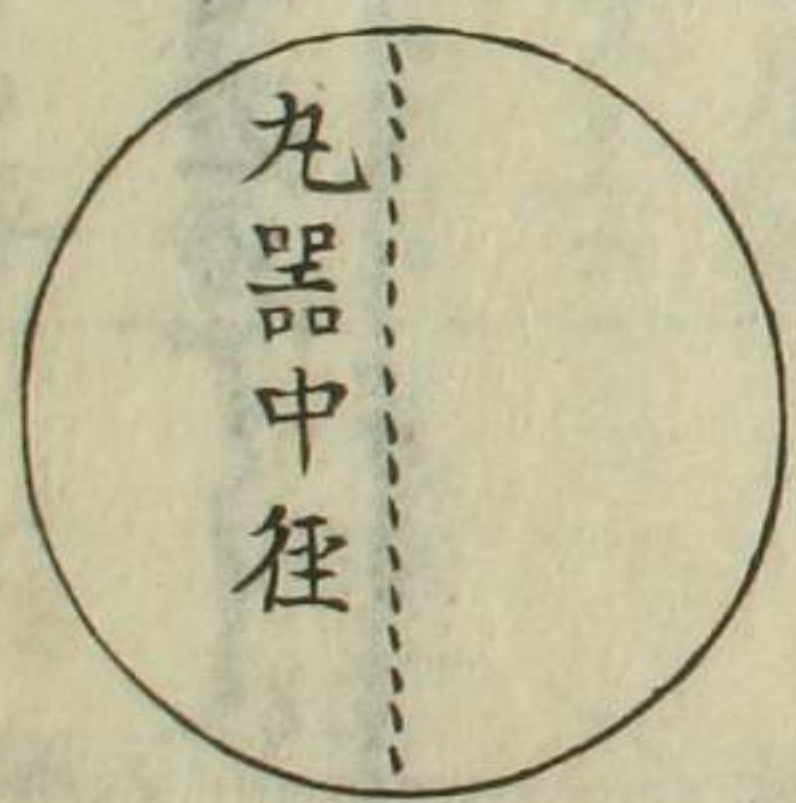
紙みくも。圓のどし。真矩ハ

墨を引。板下の直なる所

置。此墨條の留ハ丸器中徑

の墨を能合て而して半周を

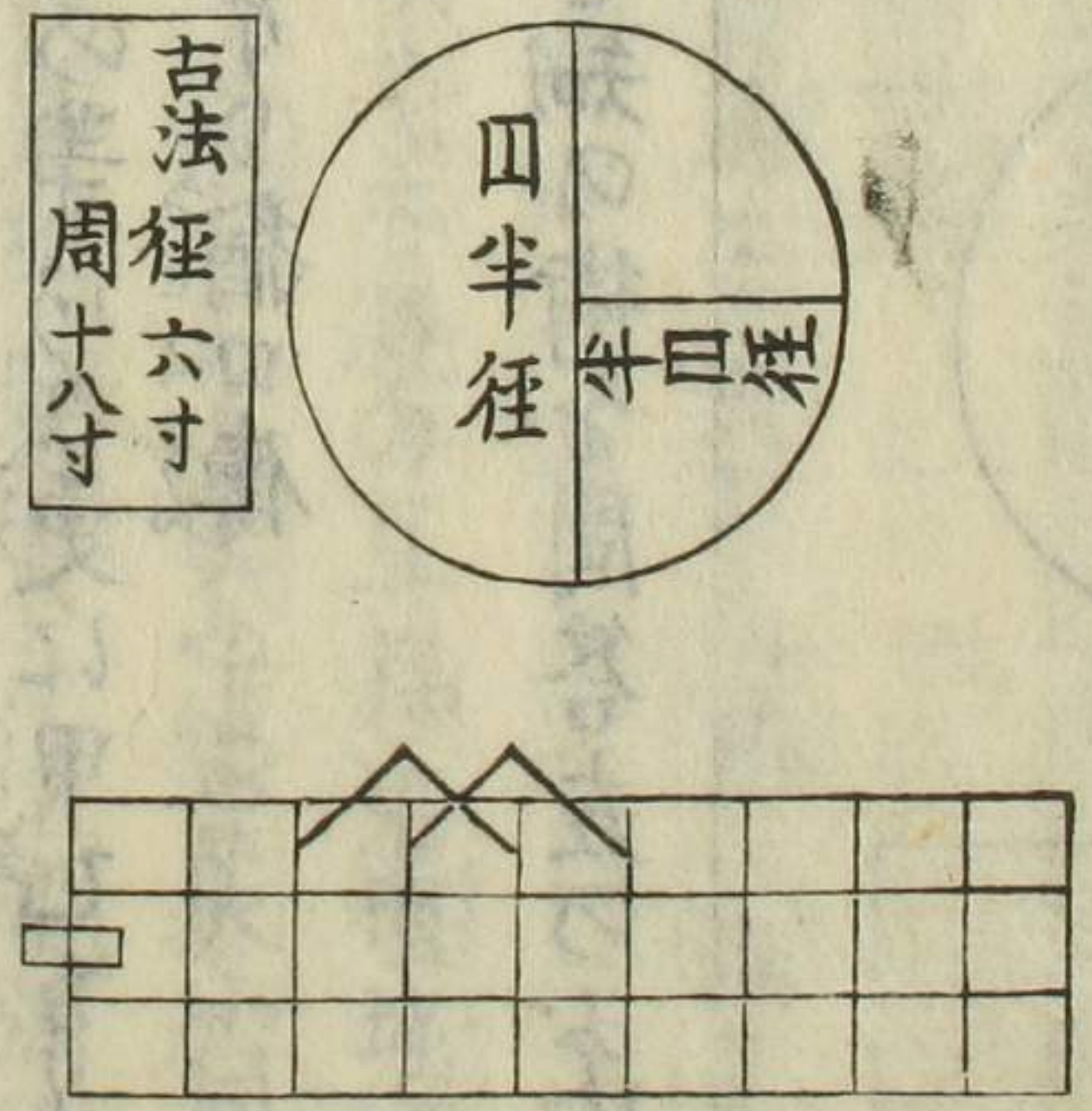
擗。盡し。中徑墨と又能合



すむを乃大成す。此半周を倍して四周なり。あふ於て問ふあつふ

圓の歩を知る術を問 答左の如し

術曰圓の半徑小圓の如く墨と付け。是を前術の如くして紙上小轉し半圓周して墨をつけ。是則長さなり。又圓の中より半徑を横ら。是と幅と。墨の長さハ圓の半周也。右轉したる墨なり。扱圓を得て歩数と知る。此墨の長さハ中より半徑なり。後小得る墨なり。茲小



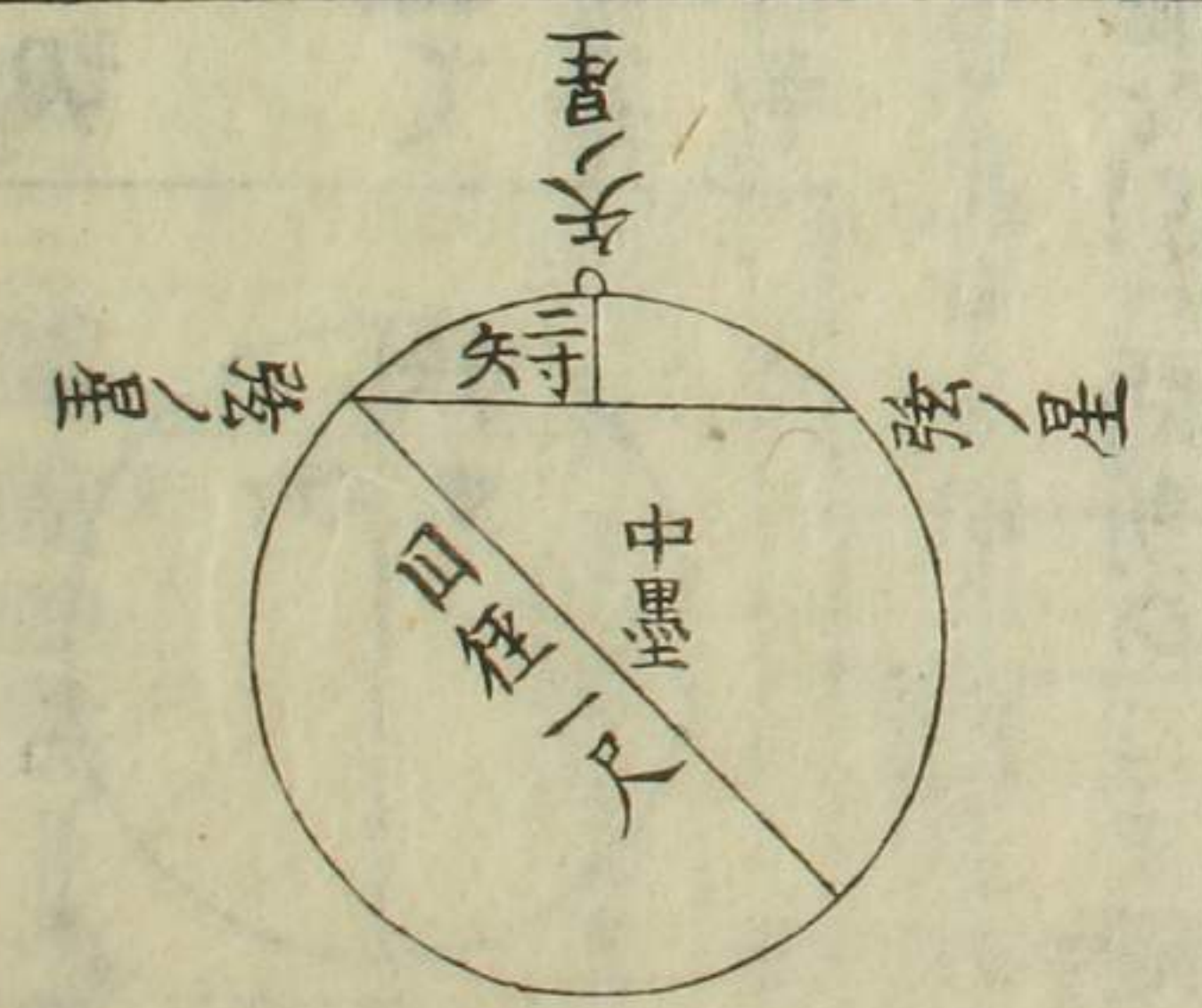
古法 徑六寸 周十八寸

おのて問ふこゝふ

徑矢弦 二術

徑矢あつて弦の寸と問。或ハ徑弦あつて矢の寸と問。或ハ矢弦あつて徑の寸と問。三術俱小渾発と用ること同意なり。今問平圓の闕矢二寸。弦八寸あり。徑幾乎。答曰一尺

術曰真矩と設て渾発の口一寸なり。真矩の正中より。左右へ四つ計て星と突。八寸の弦なり。又中墨より上へ二つ計て。二寸の矢と。然して。別小渾発を開く。中墨の條と。矢乃。苗め星と弦の苗の星と。合所より。平圓と廻し。實の圓徑一尺と得て問ふ。答



今問假令ハ口徑一尺めて。弦八寸小切て。矢寸幾干 答曰二寸

術曰真矩真矩といハ曲尺なりを以て渾癸を開て

一寸と。此口を以て中條より。五口量り其

五口を一口小合せと。平口を廻せば。一尺の平

口を得るなり。扱別ハ真矩八寸口を設け。此口を以て口周の合

所乃ハ八寸の弦なり。是より真矩ハ矢の條と引ハ問所の二寸顯る

坪誥

坪誥といハ。或ハ錐形。或ハ菱形。片狭等。土岸石垣堀壕築山等の坪と積ると云。但平歩と誥ると云ハ少く異なり。大小同ト

今問土岸あり馬踏五間。敷九間。高三間。長十五間あり。此

坪幾干 答曰三百十五坪

術曰渾癸と開之。一間の口と定め馬踏

五間敷九間と計して俱小合さるしむ。

十四を得る。此十四段折半とせれば

七とかり。此七つと豎と。右の高三間

と横と。坪小誥と。即小口平面乃

坪廿一坪あり。是を長く引と延ぶ

と。凡ハ廿一間なり。即是と豎小口らひ

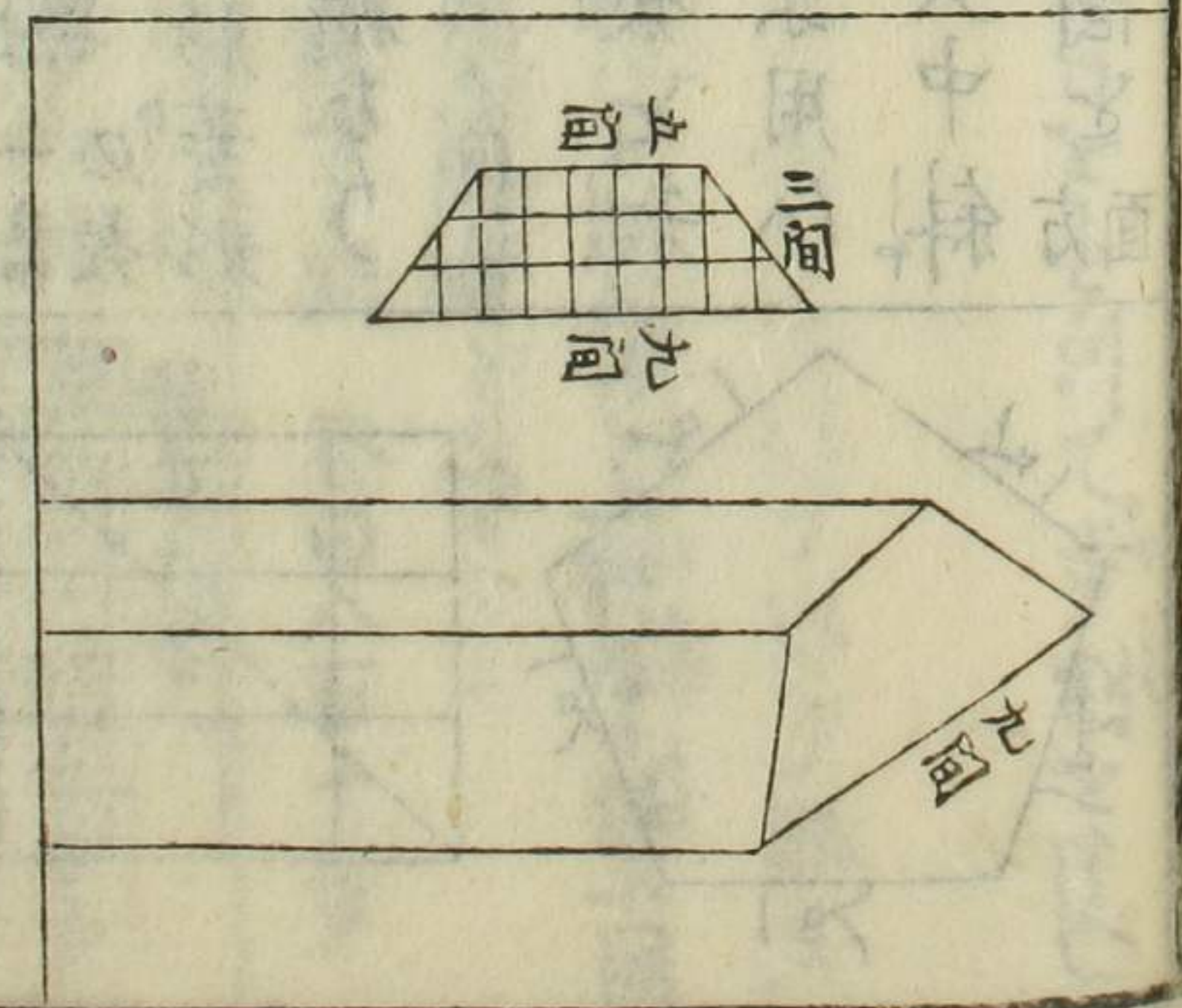
扱土岸の總長十五間を横と。と

量と。坪數三百十五坪となる也。図を見て辨る。餘とまこと

是ハ準とどる

歩誥角形 二術

今問曰三角形歩誥 四角縦横の歩 誥ハ記小及とす 鈎三間股四間あり。其



歩幾干 答曰積歩六歩也

術曰渾發を開き。間尺真矩の尺なり但今の一間をり

用て股四間鈎三間計つ。縦横小形と極

る時ハ積歩十二歩あり。是を偶より偶へ斜

小半減して歩積六歩と得て問小答一倍の教

と得る故小図のこゝ半減して歩数を知らず或ハ平錐山形菱形

斤發等の歩積と知ることも各同術なり

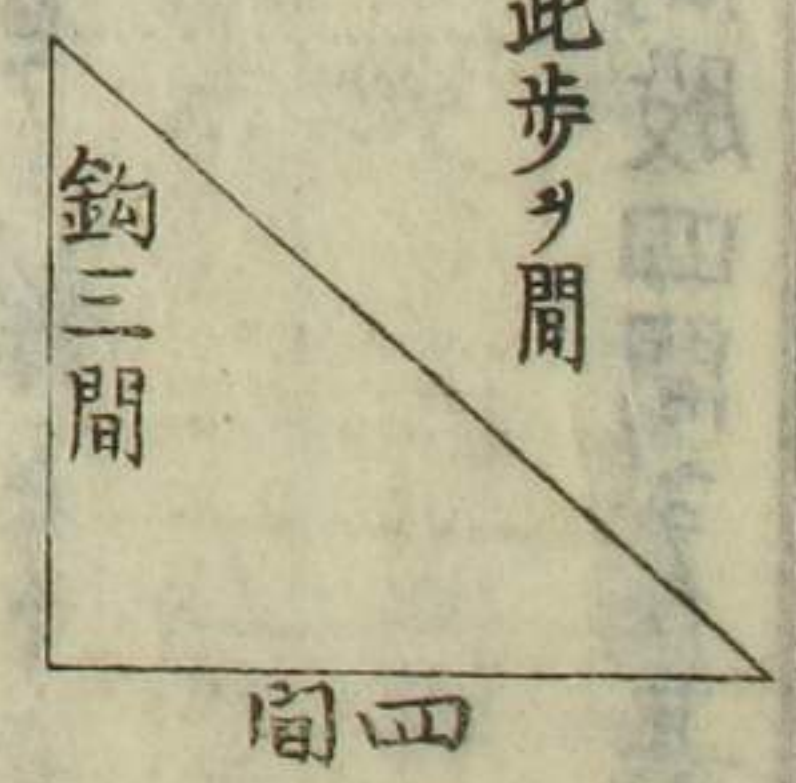
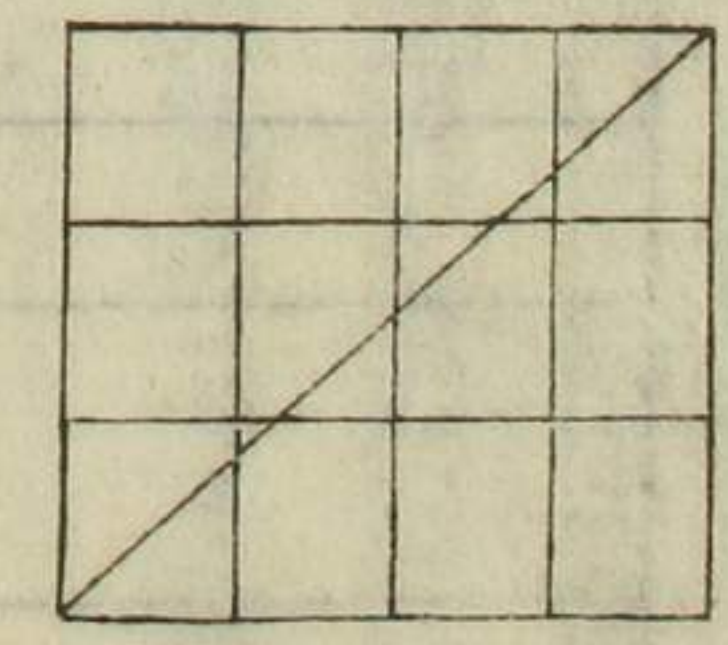
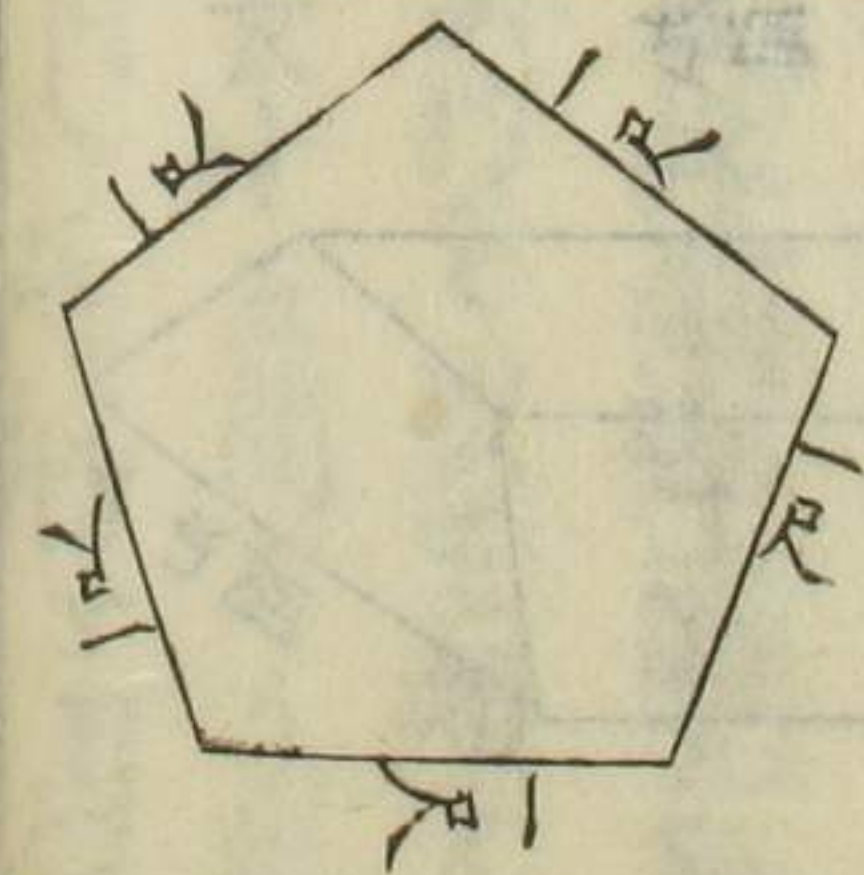
又問五角形の歩積如何

術曰或ハ一面一尺づの五角の歩数と知

し。五角の形と極め。其一面と一尺ふ用ひ

十小割て寸の口を定むる。扱其中斜

と得て。是を五つ計て長りて。半面と面方



此歩ヲ間

士

錐形

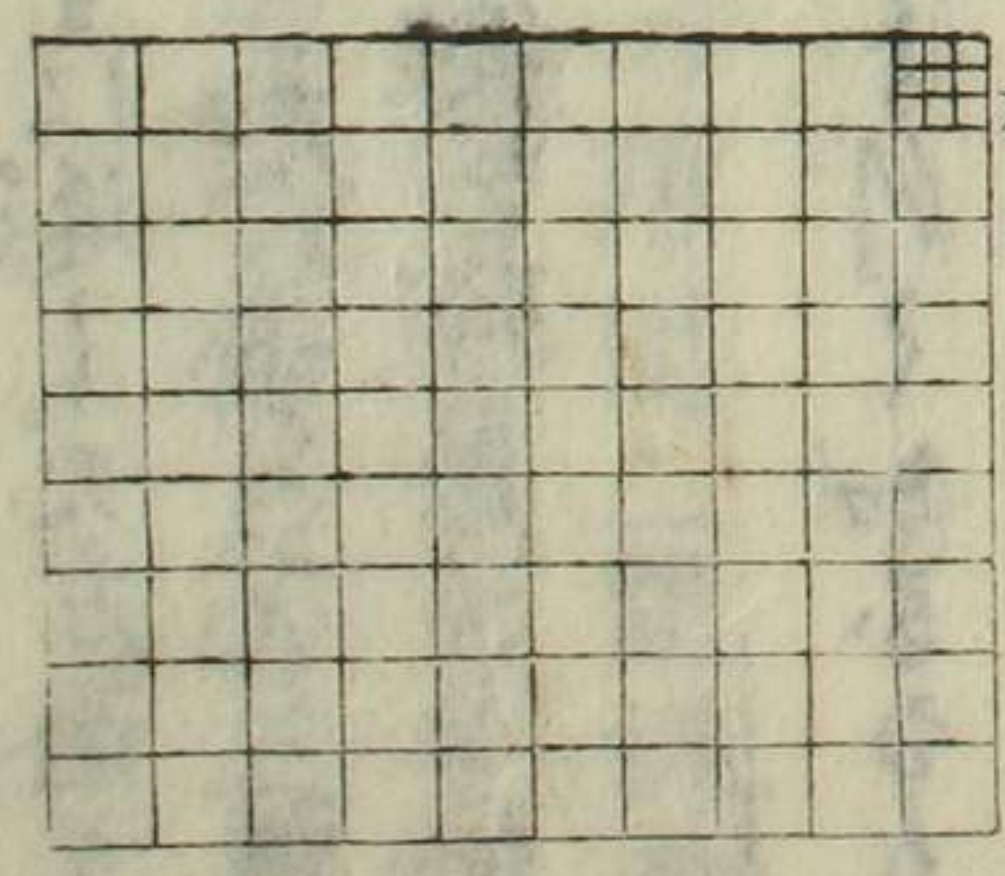
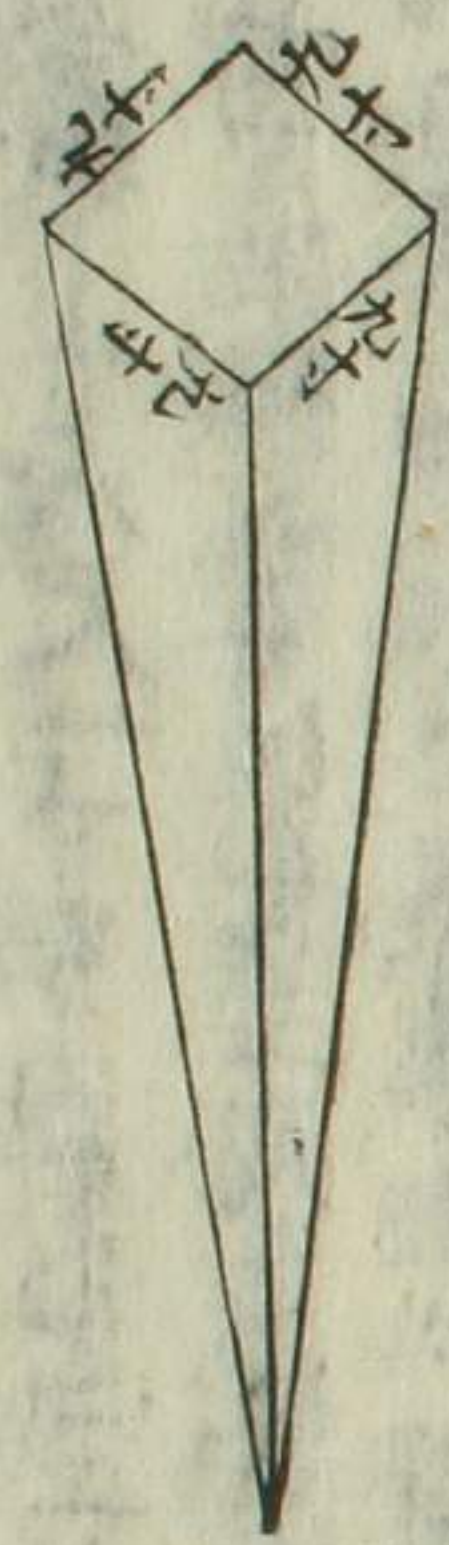
一尺の横横にして右の十小割する寸の口とを以て歩割せば

錐形といふ。或ハ上方めて下鋭小。或ハ下方めて上鋭る俱小同

理なり。四方錐あり。三角錐あり。楔形あり同術とさる。

今方錐あり。四面九寸。長三尺也。其積幾干と問 答曰八百十歩

四面方錐

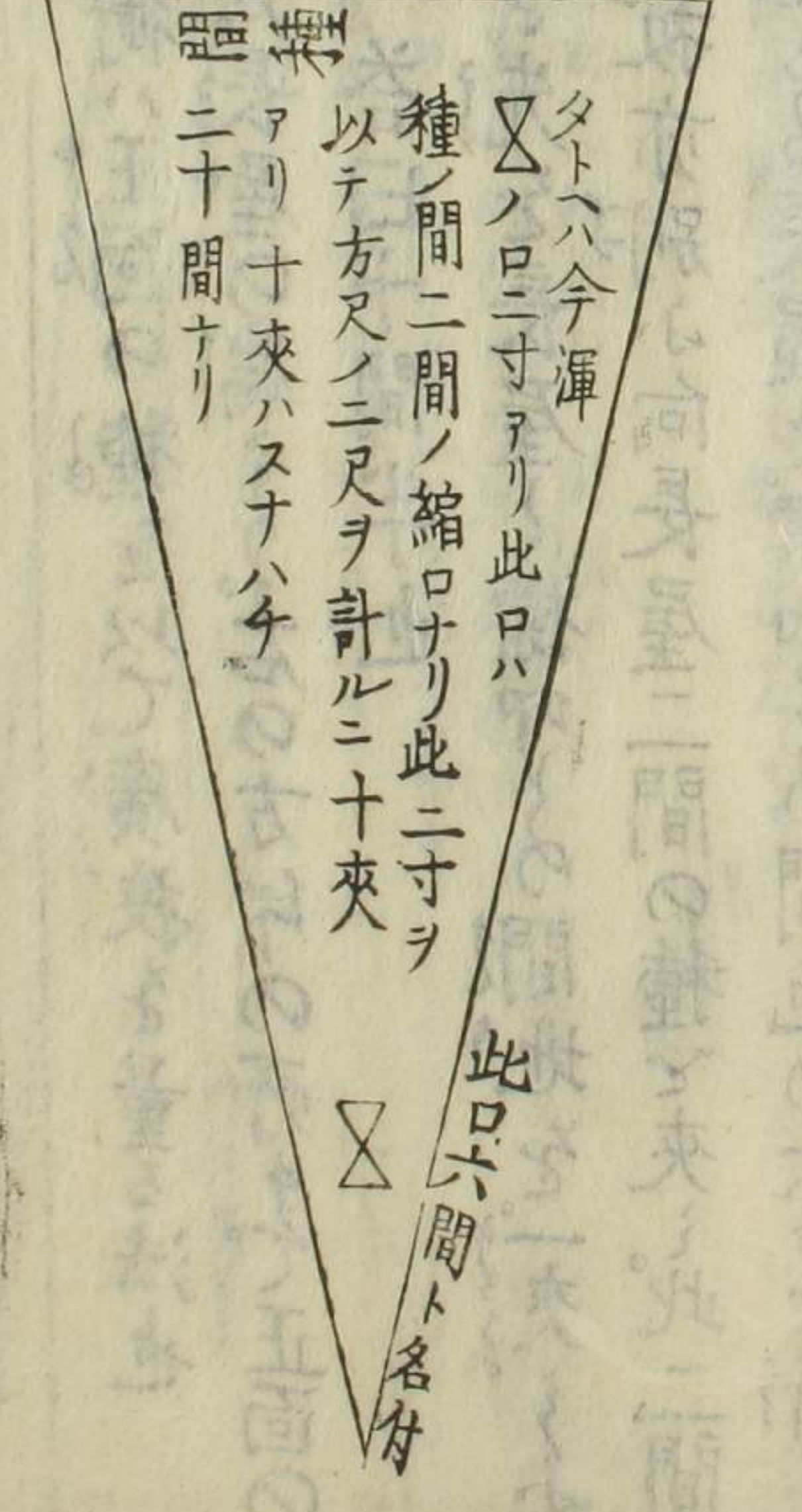
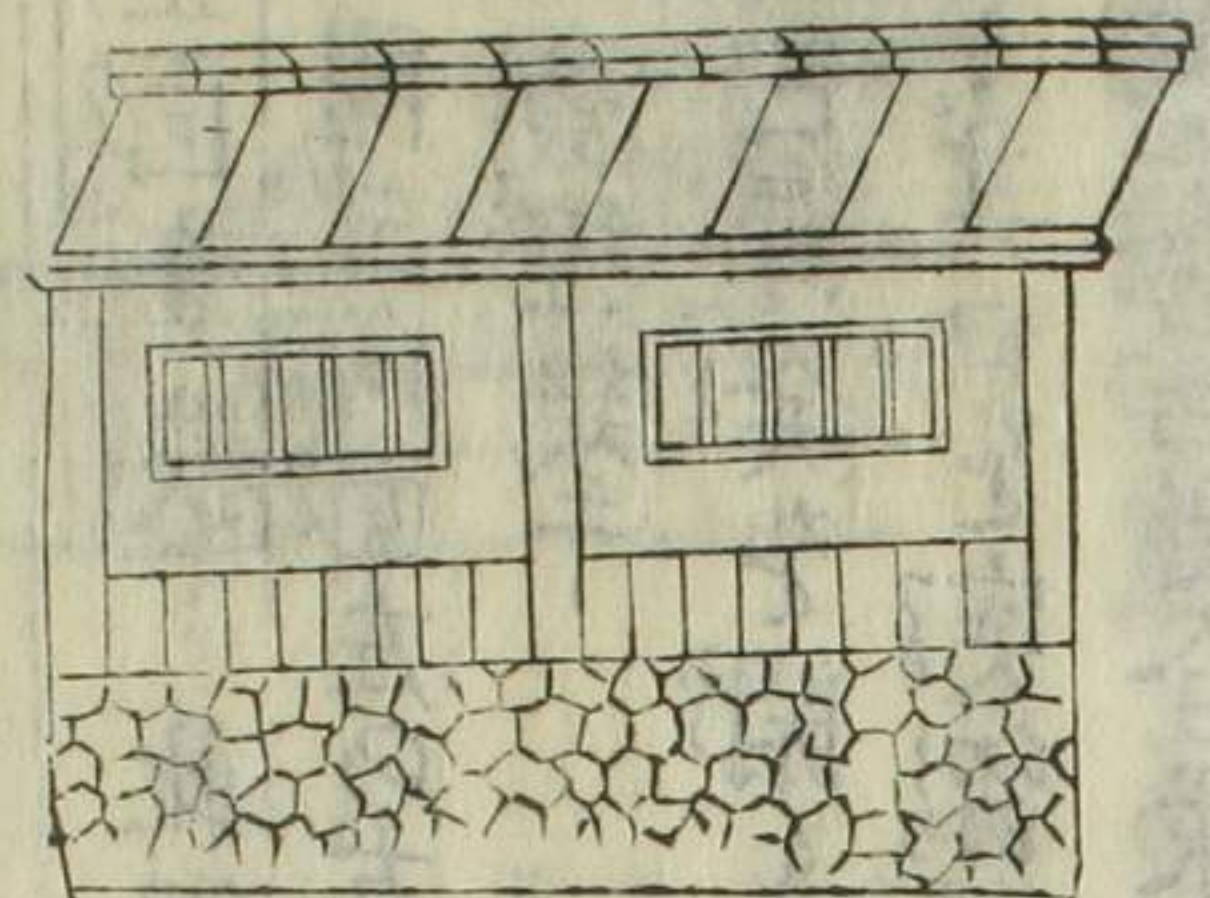


積每九歩

術曰渾癸を開之。一寸此口と定め。是を方面九寸に延し。又方面九寸と合和して八尺一寸なり。是を二小除す。二尺七寸となる。即二尺七寸と横小用ひ長三尺を豎小用ひて墨線を引く。八百十歩と得て問ふ答ふ。圖を見て知る。

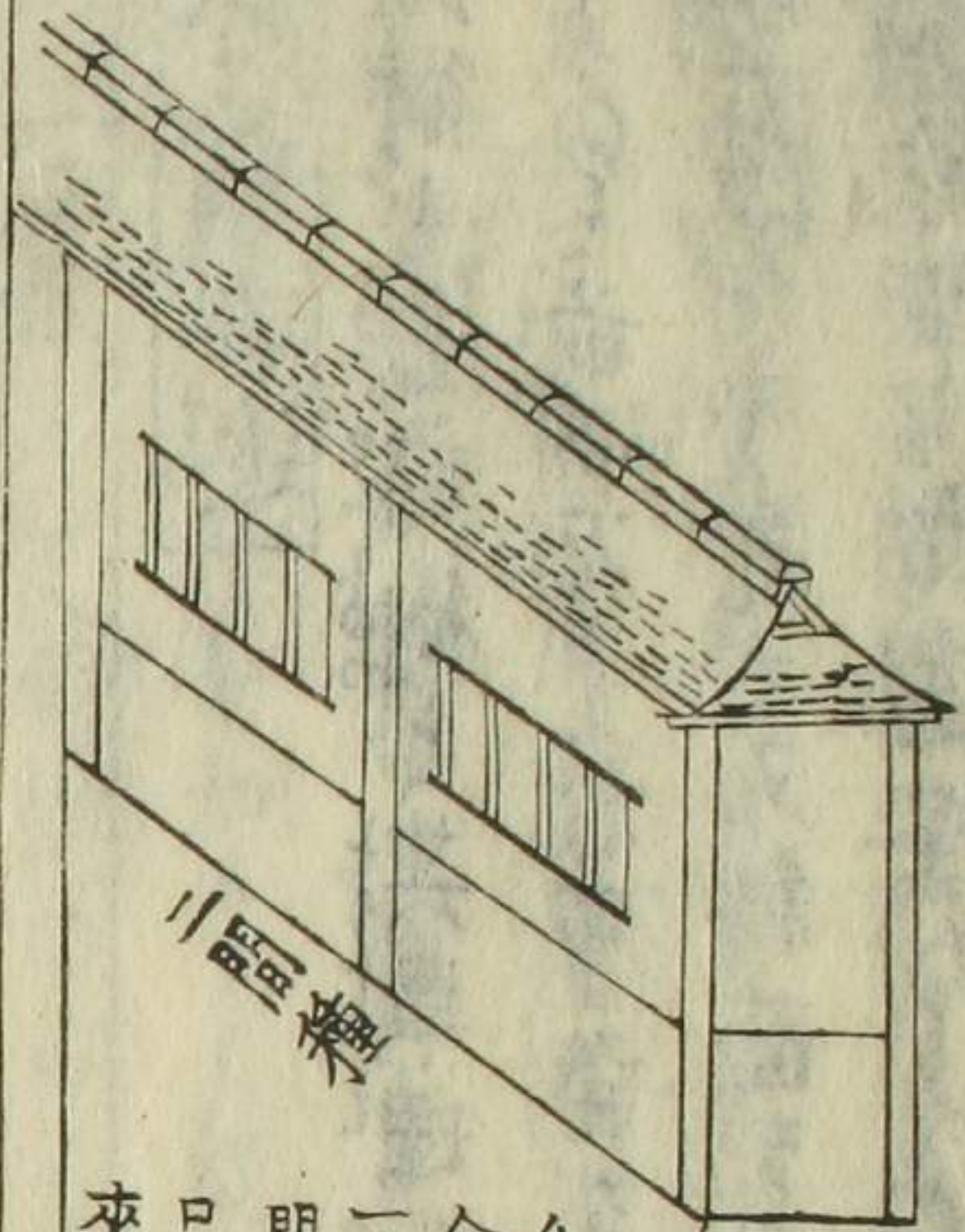
平面遠近

此術ハ向面の種を以て遠近を量の法なり。術云向の種間二間の左右と本座より渾癸の両鋒より夾く。其渾口を種間二間とらる。げを以て頰尺二尺と量て遠程を知らる。



斜面遠近

此術も亦前術と其事理一致なり。只向の種間二間斜面なるものを前小反す。尤渾癸を斜ふかりて向の斜面は合如働す。是も又斜面を夾く。口を以て頰尺の二尺と計るなり。即遠程わらる。



タトハ
今此渾ノロ
一寸アリ此ロハ種
間二間ノ縮ロナリ此一寸ノ
ロヲ以テ方尺ノ二尺ヲ量レハ二十
夾ナリ二十夾ハスナハ千四十間ナリ

正面廣狹

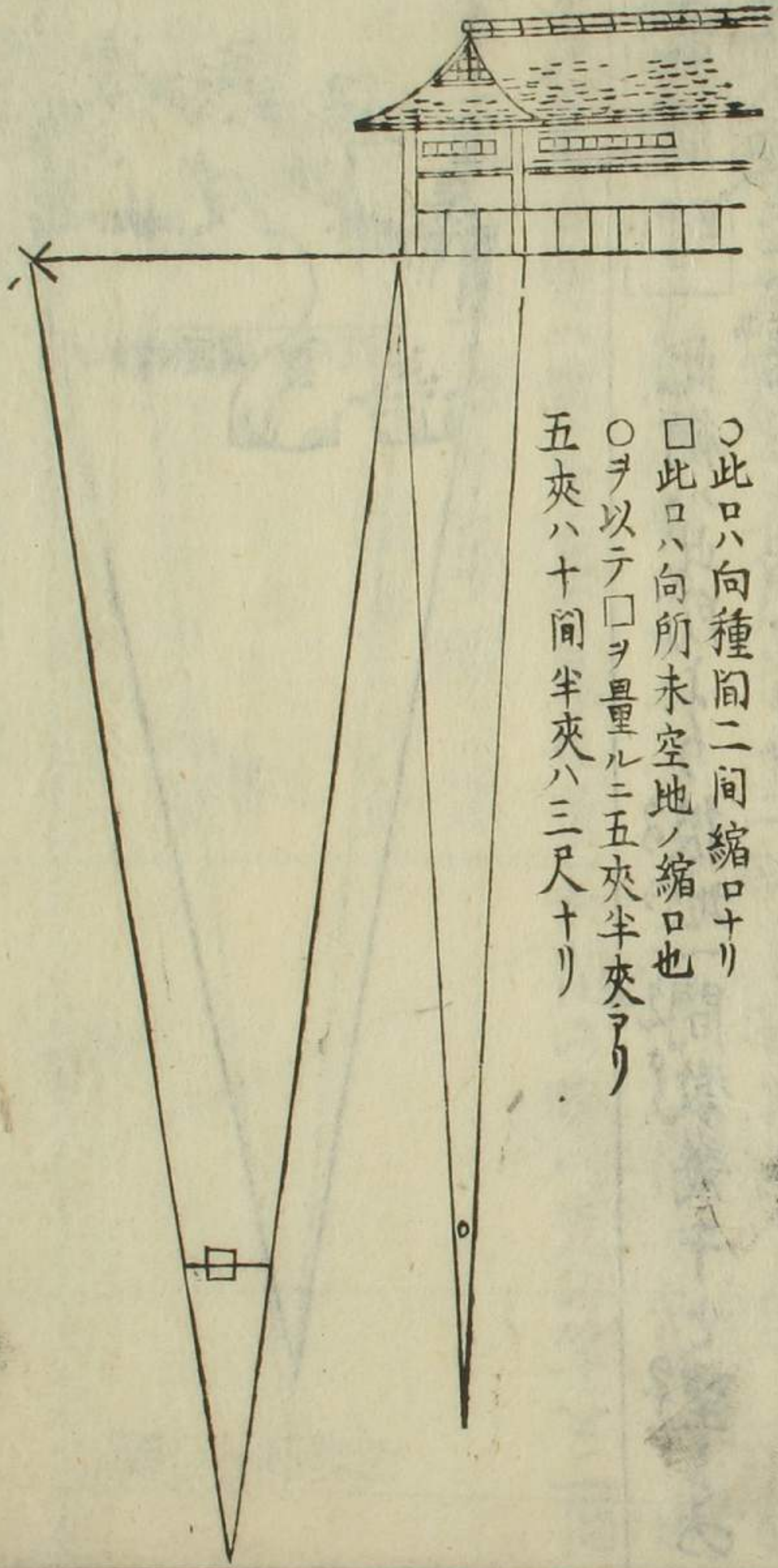
此術ハ正面ノ種を以て廣狹を量る法也

問云向面左の方長屋の端より右の方印の所まで正面の
廣程幾干
答曰十間半也

術曰渾癸を開き先を長屋と標印との間地を一夾とふ
夾と其口を突留扱亦別小向長屋二間の種と夾と此二間
の種の口めて合求くる長屋と標印との間地の大口と計る

て前面の廣と幾十間半と知ふなる也

○此ロハ向種間二間縮ロナリ
○此ロハ向所未空地ノ縮ロ也
○ヲ以テ方尺ヲ量ルニ五夾半夾アリ
五夾ハ十間半夾ハ三尺ナリ

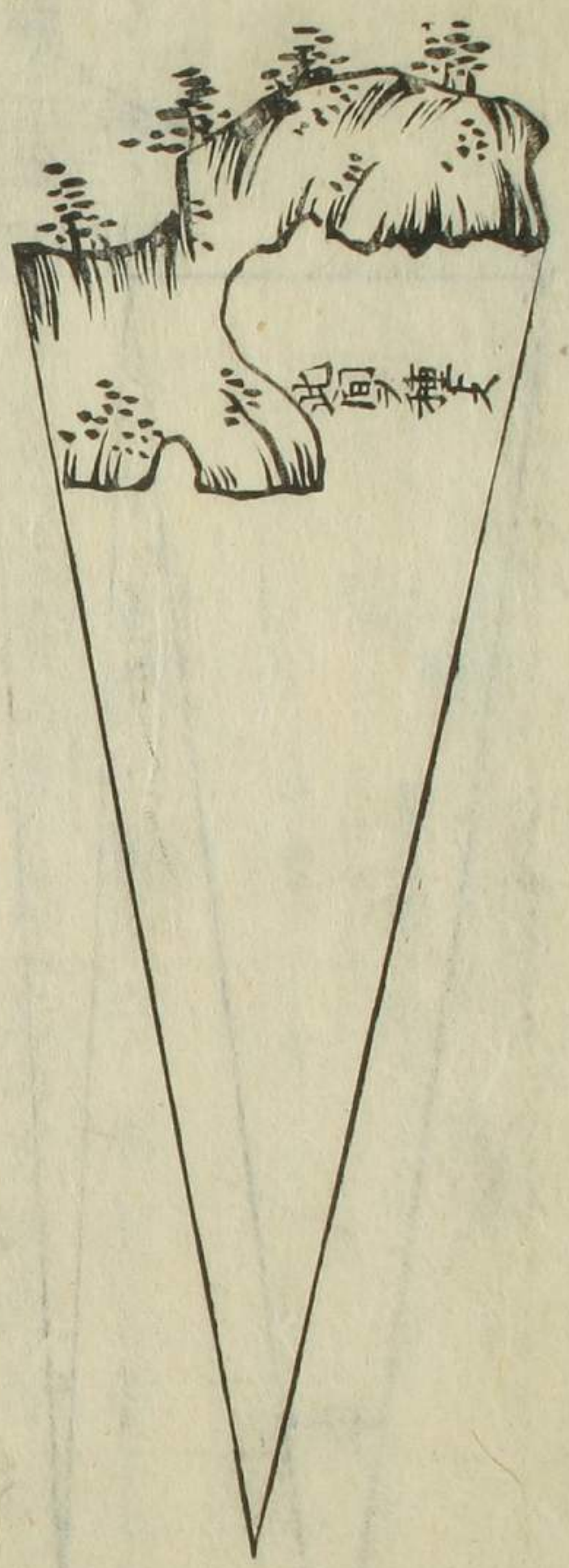


五

斜面廣狹

此術も亦上ノ所謂正面廣狹の法小同ト。因て其巨細を贅

す。其術大成の理ハ前件ハ所謂正面廣狹の術。又斜面遠
近の法を照し考ふべし

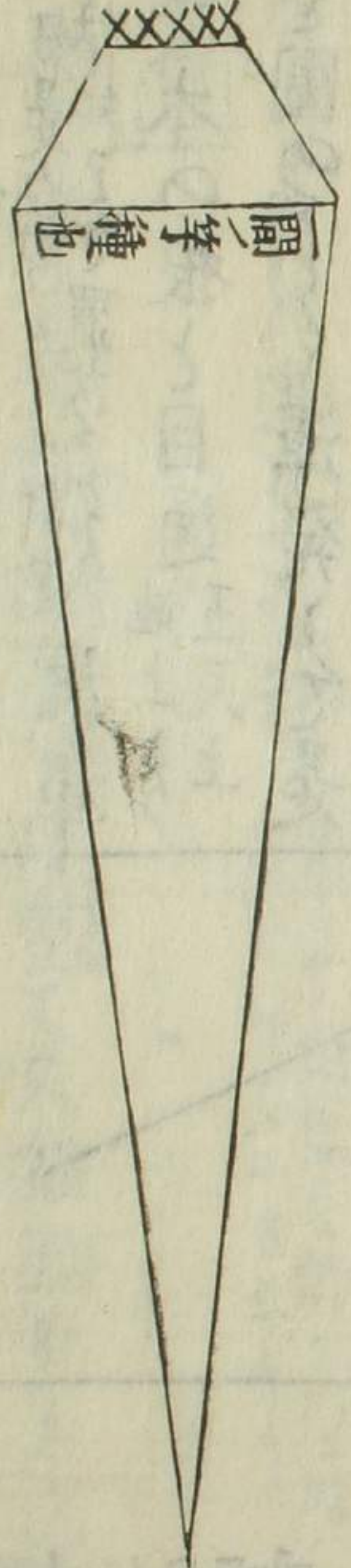


横望間町 此術ハ此所より彼地へ間数幾干と望むの

あゝ時。是ハ應ずる法なりと

術曰渾発を開き間を是を以て方尺の横手より望程

計て。其留小渾発の鋒を以て見る也。今十二間先と望ハ
渾発以開き。其口めて方尺を十二計り。扱其所よ至り。一間掉
と持せ先へ遣す。右渾発の口ふ合くる所十二間と知る。尤違
くらくを見る時ハ。竿を立て見也。若長間の時ハ。先の竿を二間
あゝ二間あゝすべかりと



知諸高下

此術ハ城樓堂塔の高竹木家屋の高と山岳丘徑の高と
總じて高下と求る法なり。尤豫め地幅を量り知る

上の術なり。地幅とハ。此所より彼所へいづれをても。其量るべき物の地下までの遠程のこと也

術曰 今図する所を先地幅と四十三間と知

是ハありて計り 扱渾

癸を開て本の根と目通 地上より五尺上

とふ當と圖のどく。渾癸よて是

と夾と。其口を紙上小突留て扱

方尺ハ地幅なるゆへ新小方尺と

四十三間の地幅ふ計り合せその

今計合せたる渾癸の口をりつて

右夾と突留たる大口を計り其

小居する長を加入し木の總高と知るなり

若此術違ふるを試んと欲せば右の方尺ハ地中四十三間ふ

准たる方尺なるとは。則是を地中小用也。渾癸の口ハ方尺二

尺を地中四十三間ふ計り合せたる。一間の口を用て向の木本ハ

一間の竿と立させて。是を夾と見るふ。右渾癸の口小竿の一間

必至り合るとは。違ふると知る 尺よて地幅を計りたる時ハ尺をひくふ立ふなり

極諸高下

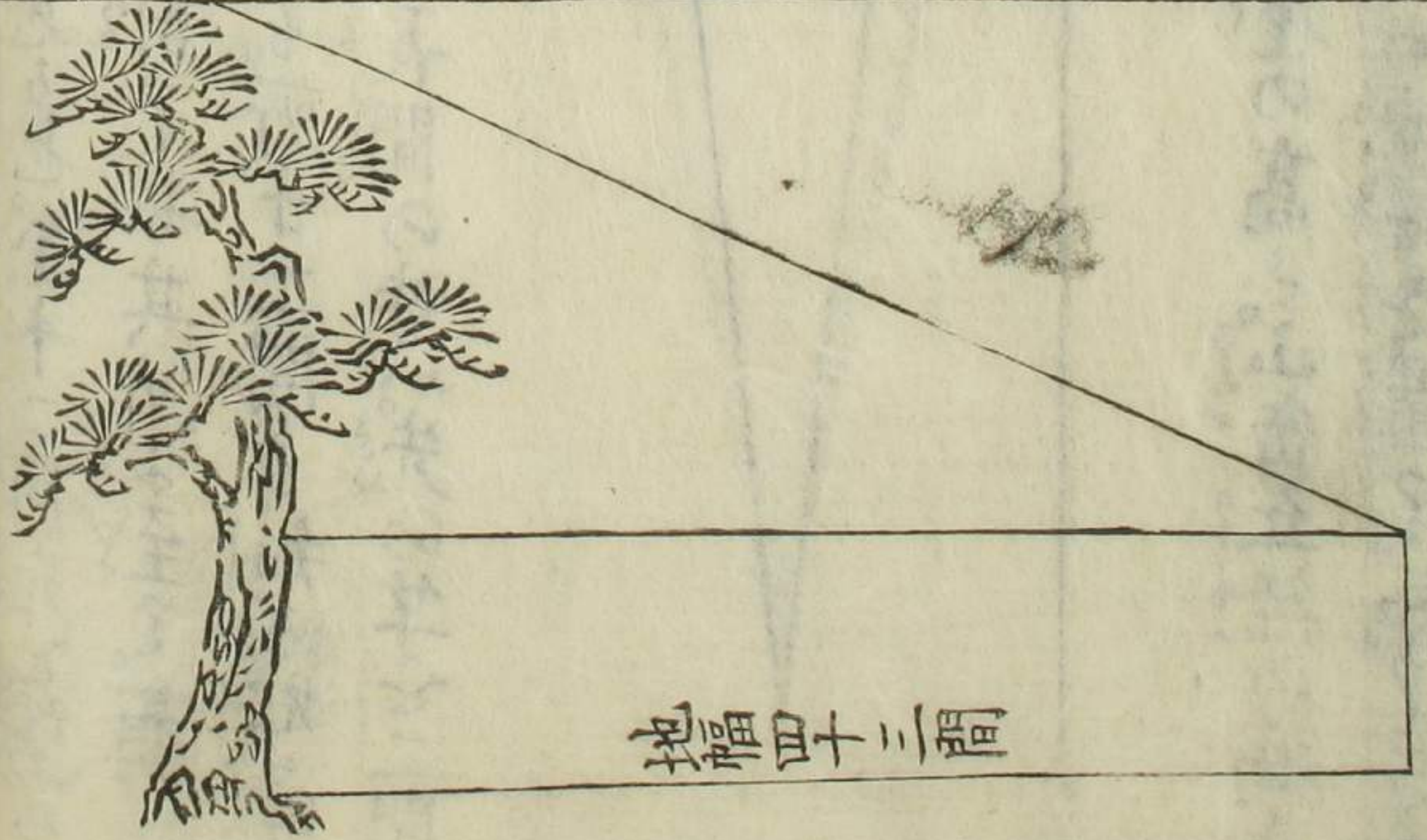
此術ハ兼て量り置たる諸高下浅重て又齟齬なるを試と

見る法なり。其事右も粗記したるを贅言ふ似たりとい共

旧法捨るふ忍す爰に贅す

今左ふ圖するどく。兼て地幅を三十八間と知ると。又高下の術に

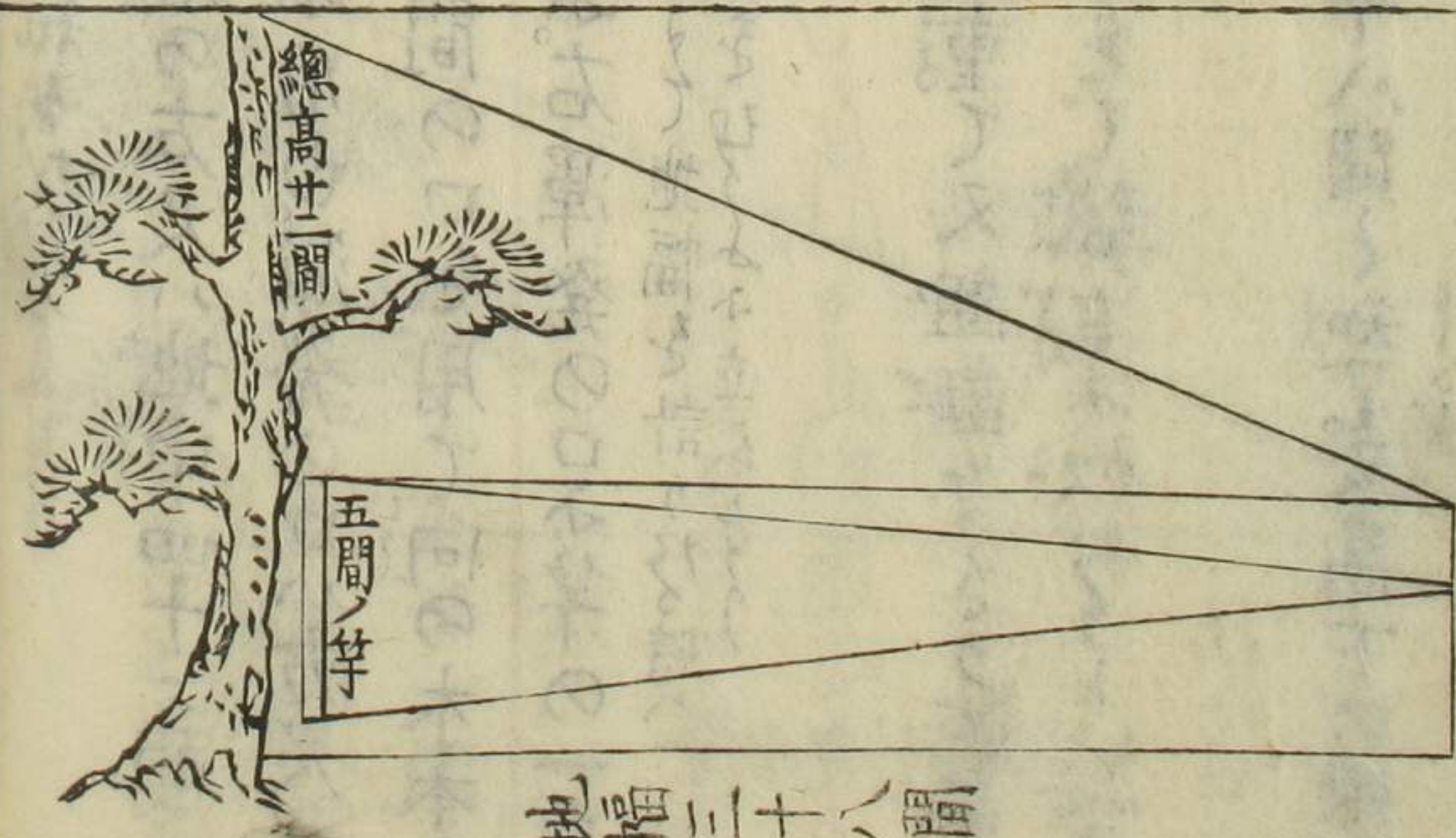
て木の總高をも廿四間と知るとなり。此術若違ふると改



圖川十目無

先見ふなり

術曰先木の高を廿四間と知り。板右の三十八間の地幅小方尺を計合せ。此口ハ一間の縮口と五ッ合と五ッ計合せ。其五の合する口を以て向ひ五間の竿立をせ。あつと夾む見るふ。其渾発の口向ふ立する。五間の竿小必至と合する。術小誤るなと知るべし。猶前件を照見す。一傳よ云。此術ハ片極を豎用り理かり。或ハ天守矢倉の重々と糾し。又三分一五分一等を求る所小答なり



量地指南卷五

九

故小指高何分ともふなり云云

天口

進で量るを天口と名く。陽ハ進むの謂うなり

此術ハ進で遠近を知の法なり

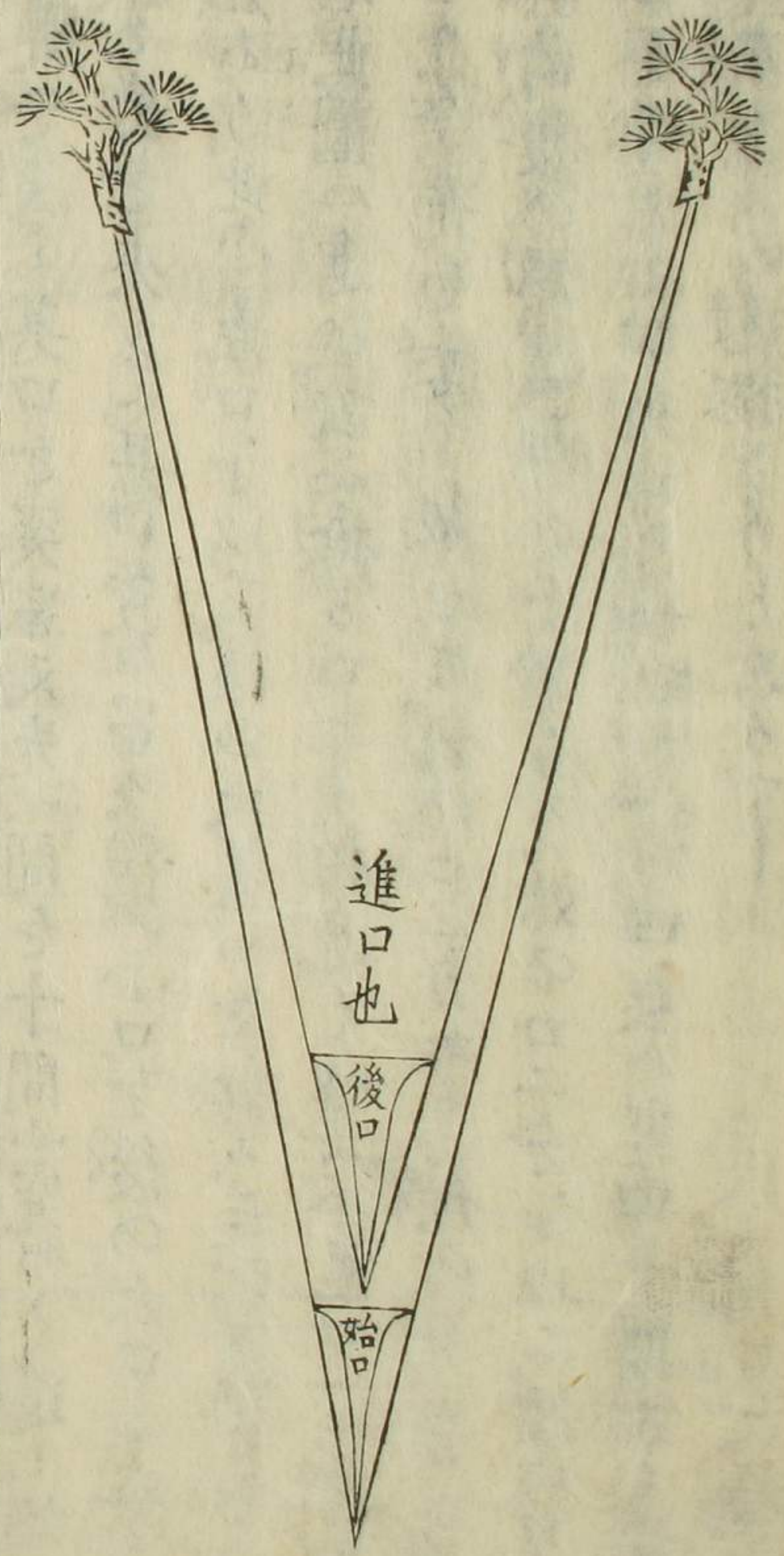
今図する所を以て云。向正面左右ふ二株の松あり。渾発と開きて。是を夾む。其口を突留。又先へ間を十間小突め。進め。始の如く。長を夾む。其口をも留る。始の小口を後の大口と大小の差あり。此小差口を以て。後の大差口を計る。是則遠さなり。尤此圖ハ進む故小捨る口なり。但退く時ハ小差口一ッ捨るなり。今是を委しく解せば。始の口二分あり。後の口八分あり。其前後の間進むと十間なり。始の口二分を以て。後の口八分を量るふ四夾なり。但一夾ハ十間なり。四夾ハ即四十間なり。是即求る所の遠程なりと知るべし

三

地口

退て量るを地口と名く陰ハ退くの謂り

此術ハ退て遠近を量るれ法なり。前術の天口と。其法同也。と意得べし。天口ハ進之地口ハ退之れ違あるに因て差口を用ると捨るもの別あるまでなり。天口地口互小考合すべし

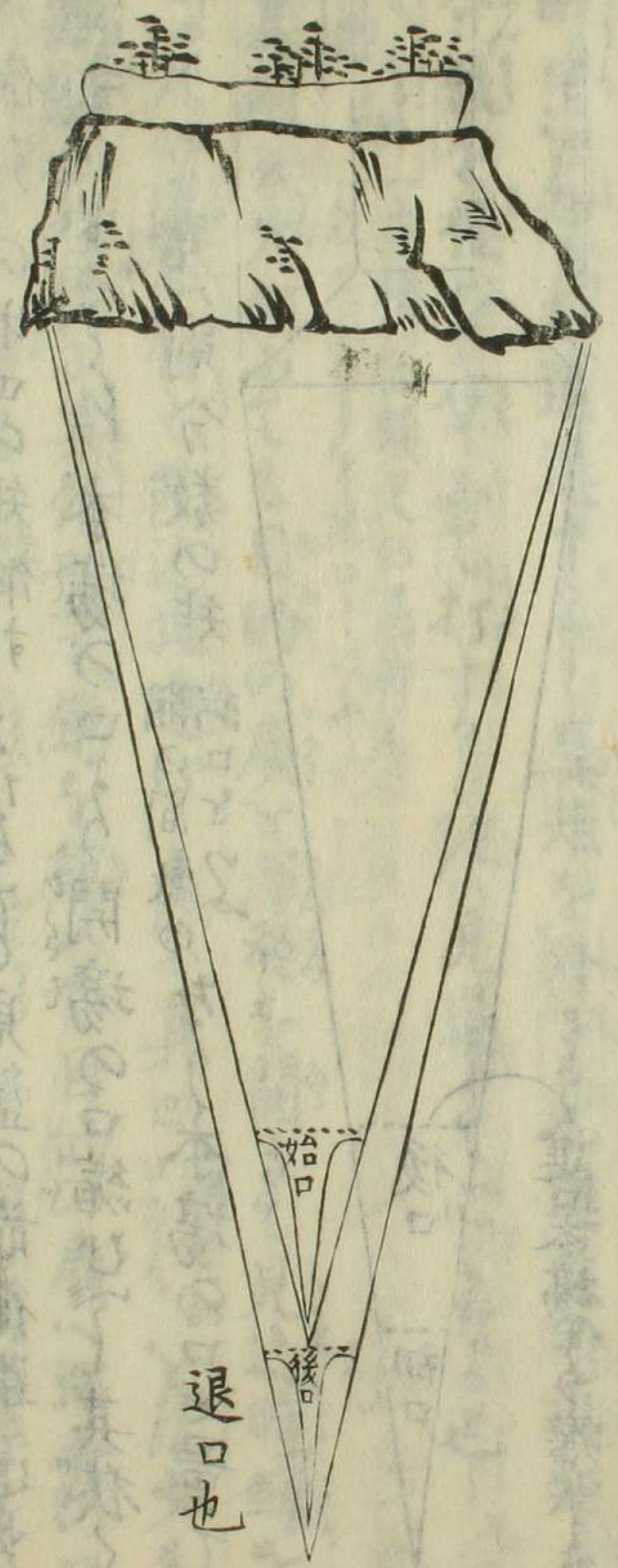


三

天口

或傳云渾発の差口を

傳曰本場より進退の分数間のハ見盤小倍して六十分一と用の。凡四十分の一なる時ハ差なり。術曰先目的を以て空眼を以て何十何町と考へ。叔録渾発指て目的の山あても。峯あても。木あても。或ハ村里の境より



境までなりとも幅のあるもの或渾発の口小合せて見込也。假令
 其口五分なり。五分と紙小突留め四十分一の分数を進
 て。又見込と見込。假令五分三厘ある。取前突留る口小ら
 びて。其廣分三厘即進所の分数開の間の矩と知る。其
 三厘の差口を以て本場の口五分と量りて。町里とハ求む。三
 格渾発の物。四の矩方尺とより見盤の前後進退を
 同意也。退くと見込。本場の口より開場の口縮むべし。其狭く
 なりたる差ハ。則分数の矩開の間の縮口を以て。本場の口を量りて



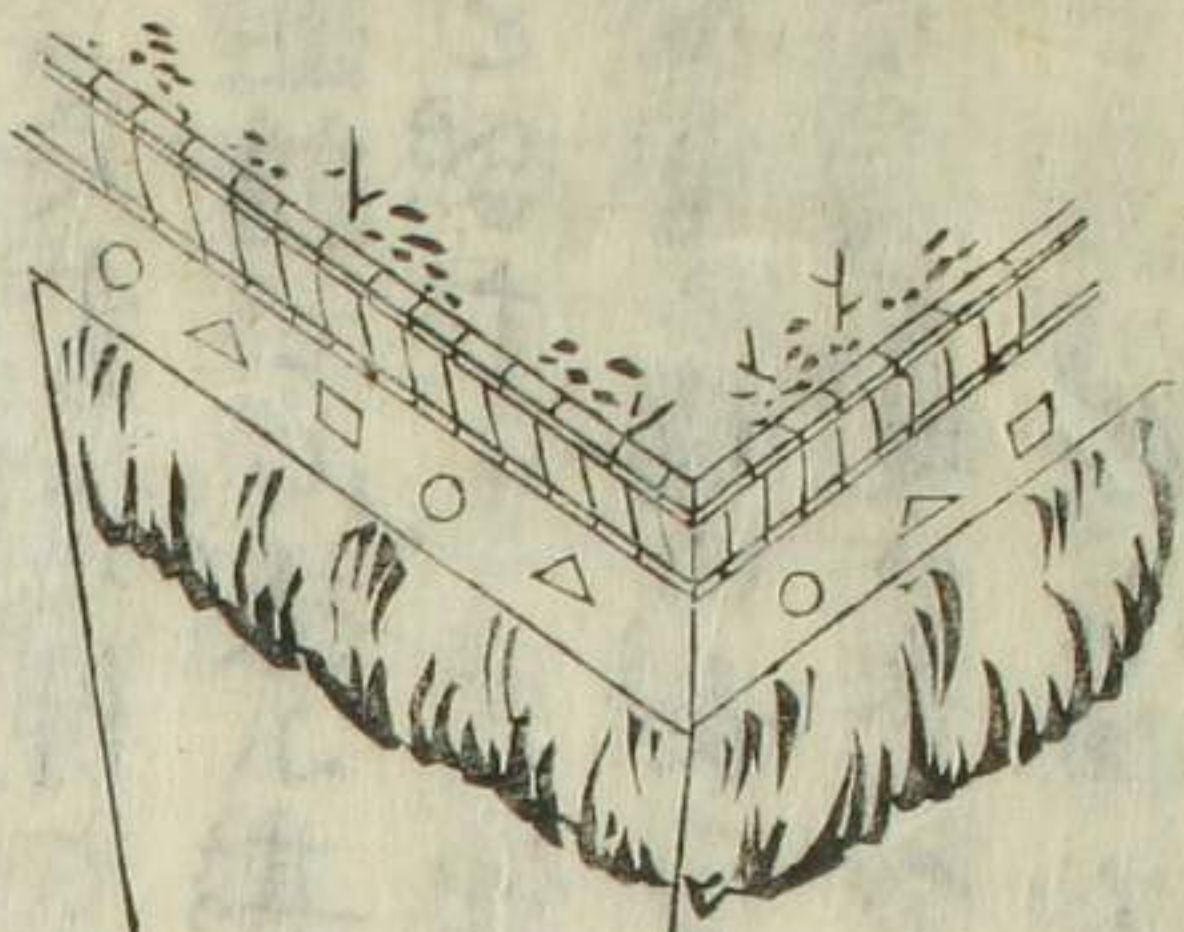
町里と知る。尤進退する。真矩を外さる也。進退の真矩を
 分数を極めて竿を打つ。見通して心より知る也。

地口

或傳云。頰尺の屈伸を以て量るを地口と云ふ。

其術云。先何れも目的の廣と渾発を開きて見込時。鏢を
 二尺小定め得と見込。扱進む。見込。其口渾発のとば少も
 齟齬そごせぬ様小。其俣置て。鏢を縮めて目的の廣へ渾発の口
 と合する。其鏢の縮る差ハ。即分数の矩開の間の縮を以て
 本場の鏢の長二尺。本場の鏢ハ二尺。開場の鏢ハ縮むを量りて。町里の遠程と知る
 又退く。見込。本場より見込。二尺と見込。渾発の口より合
 す。ハ。鏢を伸すか。其鏢の伸る分。即分数の矩也。此伸
 たる差の寸分を以て。本の二尺を量りて。町里遠程を知る。是れ
 向の鏢の差を以て量る故。地口と云。差の用や。天口と違

三四の矩の天ロハ三格あて三ツ量地ロハ四の差よて四と量る故なり。三四五の理を以て
真矩小進退するを考べ

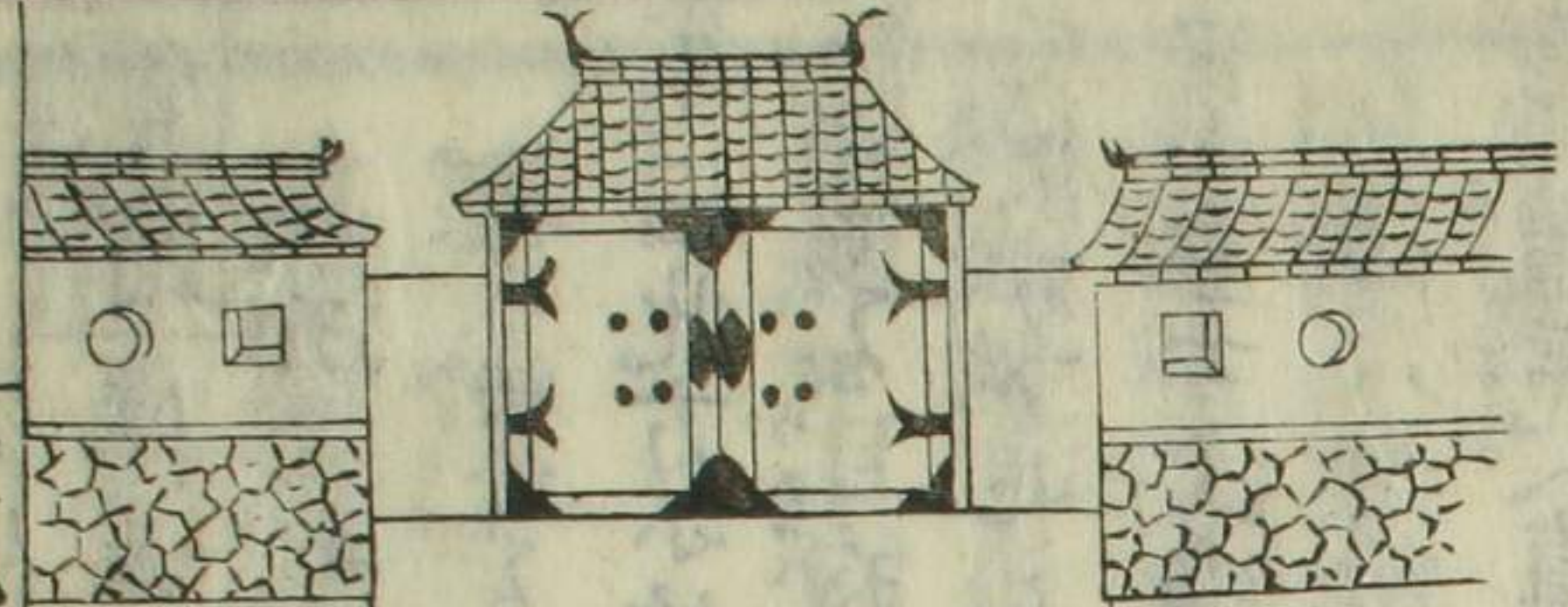


覓先

傳云此術を覓先といふ。先小覓るの謂也。此より彼遠程
を計る。此方は間数の知る種なり。故ふ。目的の方の目
と物と假の種小用い術を勤めて後彼所小至る。彼假の種

の間数と直よ計見て實の遠程を知也。国図等の節ハ此術多くあること

術云先此方あて向の假目的と夾きて。其渾発の口と其終小置
叔向望の場小行て彼假の種と篤直小量り。種幅三間あり
を。其初め渾発の口を三間と定て量るなり。故よ
下小回す所ハ。其三間の開の口よて。二尺の鎌と量
る。小十二夾ハ則二十六間なり。



覓跡 傳云此術ハ覓先の裏と頭したる術めて跡ハ覓の謂也
 其法跡小間数の知まざる種を残して先へ行先より一々
 残し置る跡の種を夾みて見て遠さを知る事なる也

術曰此方小竹木せても又ハ竿せても何せても左右の間数慥々
 知まざる目的なかり物を残し置て如何程なりとも心よ任せ
 て彼方へ進み此目的を彼方より夾みて見て而後ハ其渾発の
 口より二尺の鎌を計りて其遠程を知るなり

今云所ハ此所小間を一間隔て左右小標木を立て跡ハ
 残し置先へ真矩小行て跡なる種印を顧て夾み

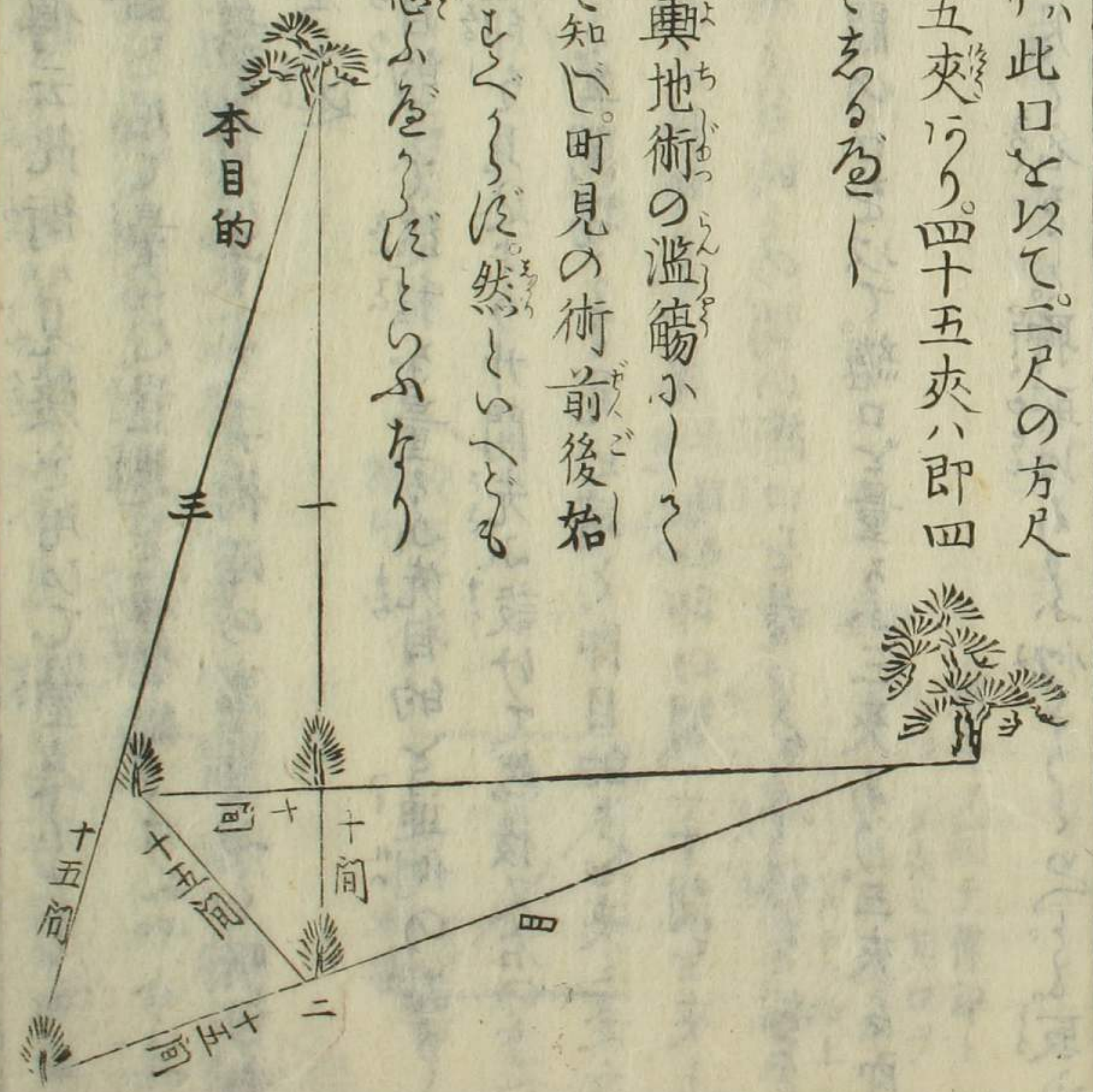


見る也其渾発の口五十分なり

此渾発の口五分ハ種一間の縮口なり此口を以て二尺の方尺
 と量る時ハ四十五夾より四十五夾ハ即四
 十五間なりと知るなり

草結

旧傳云此術ハ輿地術の濫觴なり
 又能旧格の本と知じ町見の術前後始
 終此理を外小とくは然といへども
 實測なるを惑ふるはとらふなり



三

水月

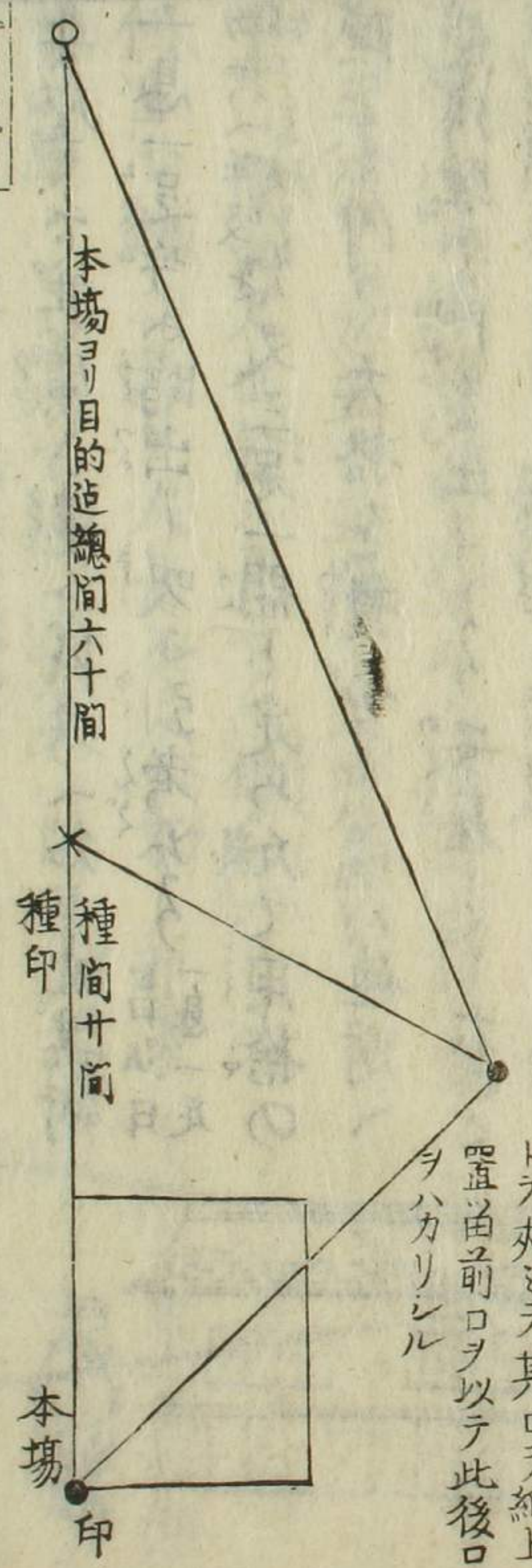
古傳云此術ハ見盤を用ひて量る〜云云
昌弘曰見盤を用て量らど。豈是を渾發術と云んや今按
ずるふ全く見盤を用ひずして其術渾の事業より明白也
くり〜左よ述

術曰今正面の目的まで遠程を量るふ。先目的と通例のおびく
見込板新小種印を見込より廿間先小設けて然後又右の方へ
横斜小進と開と。其開場より見込場と。即目的とを夾と。是を
紙上小突留置板又種印と本場見込の本場也印の間。二十間を夾と
此口と以て。本場と目的との間の總口を量つて。全体を知ら
今此種の間。廿間の口を以て。總口と量るふ。三夾あり。三夾を即
六十間なりと

或曰此術を水月と名ること。聊所以ありふ似〜と〜と。取小

足る説なり。古傳ハ嗚呼の〜多〜笑ふる〜

証
渾發ヲ開テ種印ト
本印トヲ夾ミ其口ヲ
留ヲキ入目的ト本印
トヲ夾ミテ其口ヲ紙上
留置前口ヲ以テ此後口
ヲハカリシル



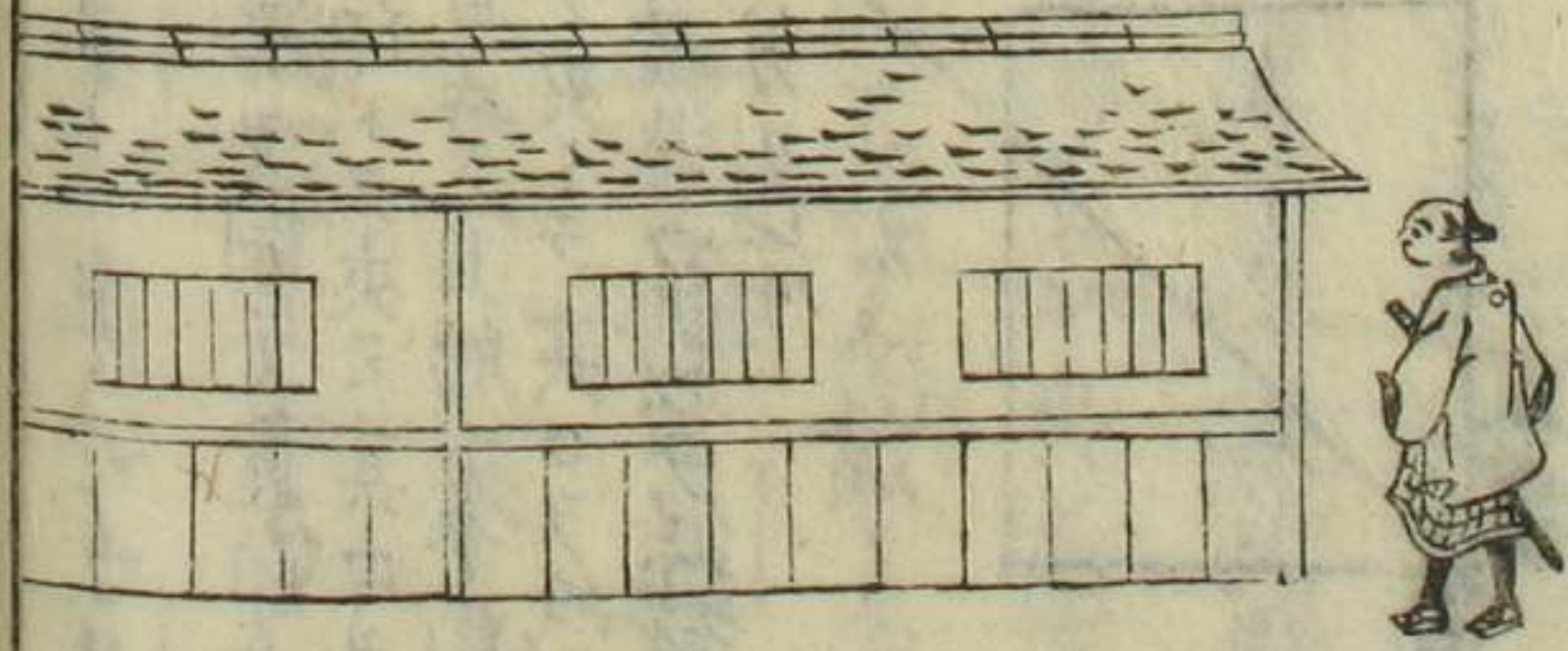
様脚

此術ハ向面の物陰を人の通行するを見て其歩数と試〜向
面の廣と幾手と知の術なり。古傳よいふ処なり

術曰古傳よ云。常歩歩数を呼吸小合せし試と置いて知るなり

三

大体一呼吸の間小遅さハ二三歩速さハ三四歩也。其中と考へ量りて。是を以て紉し試み。其廣程を知る也。と云
 又古法式傳云。森林の陰。土手の陰。長屋の陰。凡物陰を通る人を陰へ入さざる前小遠所より望見て陰を通る間安座して其廣さ遠さ必考へ知る也。其術一息一足呼み踏出し。吸ひ引考なり。昌弘日の考へ呼吸を知らふ似し又三足一間と定め。凡て用捨の理をのりて。大格を積なり。或ハ他所へ使伐馳る門を出し。より安座し。右のこゝ積し。大略飯來の刻限を知ると也。是古傳のつゝ。今のおゝ。さすふ

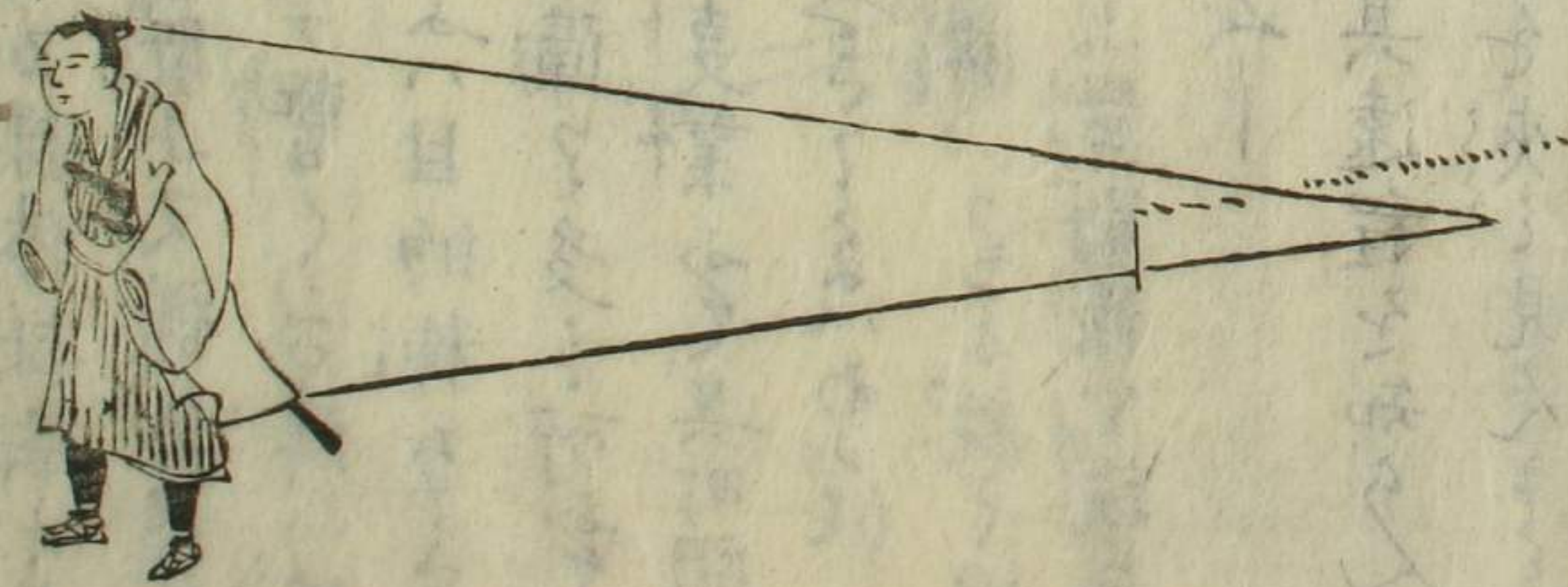


六

様休

此術ハ彼方小立る人を種とし

此方より其所までの遠さと知る術なり
 術曰渾癸を開き。向小立る人を夾み見て。譬く其渾癸の口二分めらば。八十三間二尺。三分なり。五十五間三尺。四分なり。四十一間四尺也。餘ハ是より。働知へ。右何れも録二尺を。人長五尺へ乗。即渾癸の顯る口を以て除き。扱又一間の法。六尺を以て除け。遠程何程と知るなり。凡人長を五尺とす。も大畧なり。殊り急なる場。すての業ゆへ。小用捨の格を。用ゆ。とす。



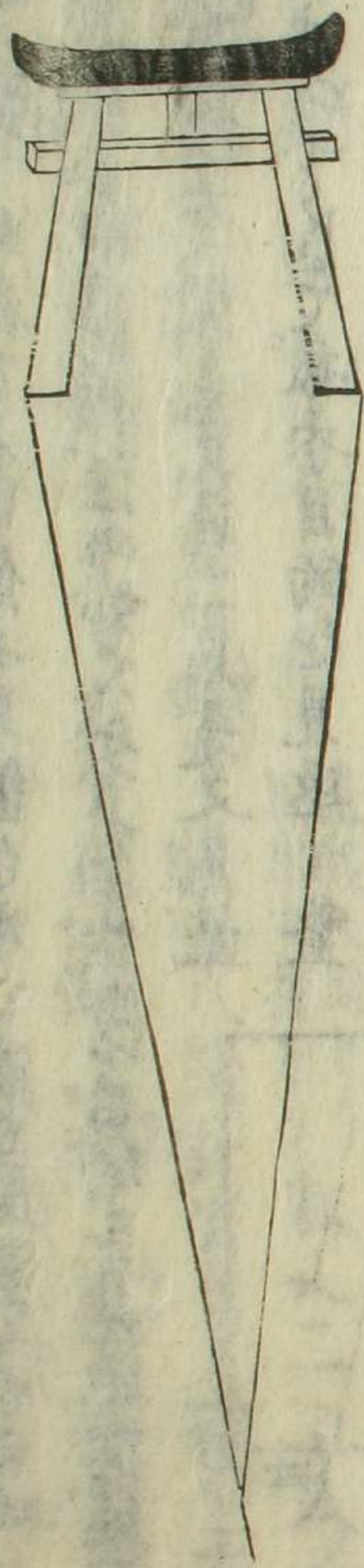
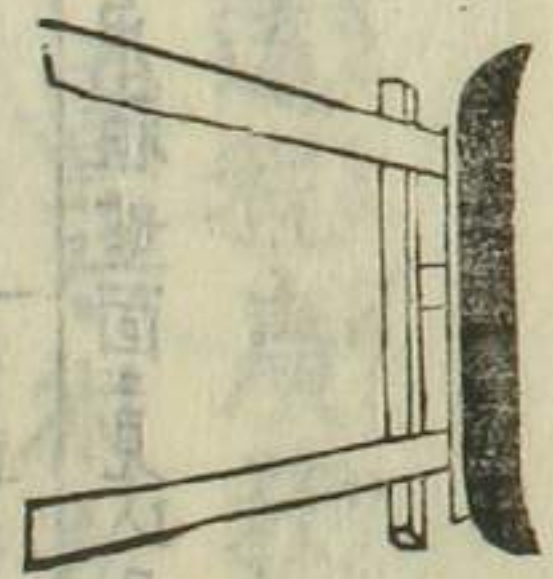
又旧傳小様程と云名目あり其術を考る様体様脚と其
壹一般なり根其名目を立たりと見ゆ既小又様体様脚
別術非ず是も一術となして然らん今暫く古傳小隨
て此小是を述ふ昌弘曰様体様脚といふハ目的種をさの
地と又ハ山陰土手陰叢中との諸の術障と多き所をハ
人の歩行の跬の数を以て種と一本れ壹業少て其町間と
量り知るをもても何とぞ好て試ふ用也とてハあはれ

元
白浪

白浪術といふハ旧傳小たげなる所なく故といふ
ことを知らぬ昌弘考ふる先術と同じ豈別條と設るふ
及へらんや是又好事の説なりと察す

術曰今圖するところの彼方の鳥居まで其遠程を知らんと
欲する向の鳥居其間数を知む故小是を夾と見んと

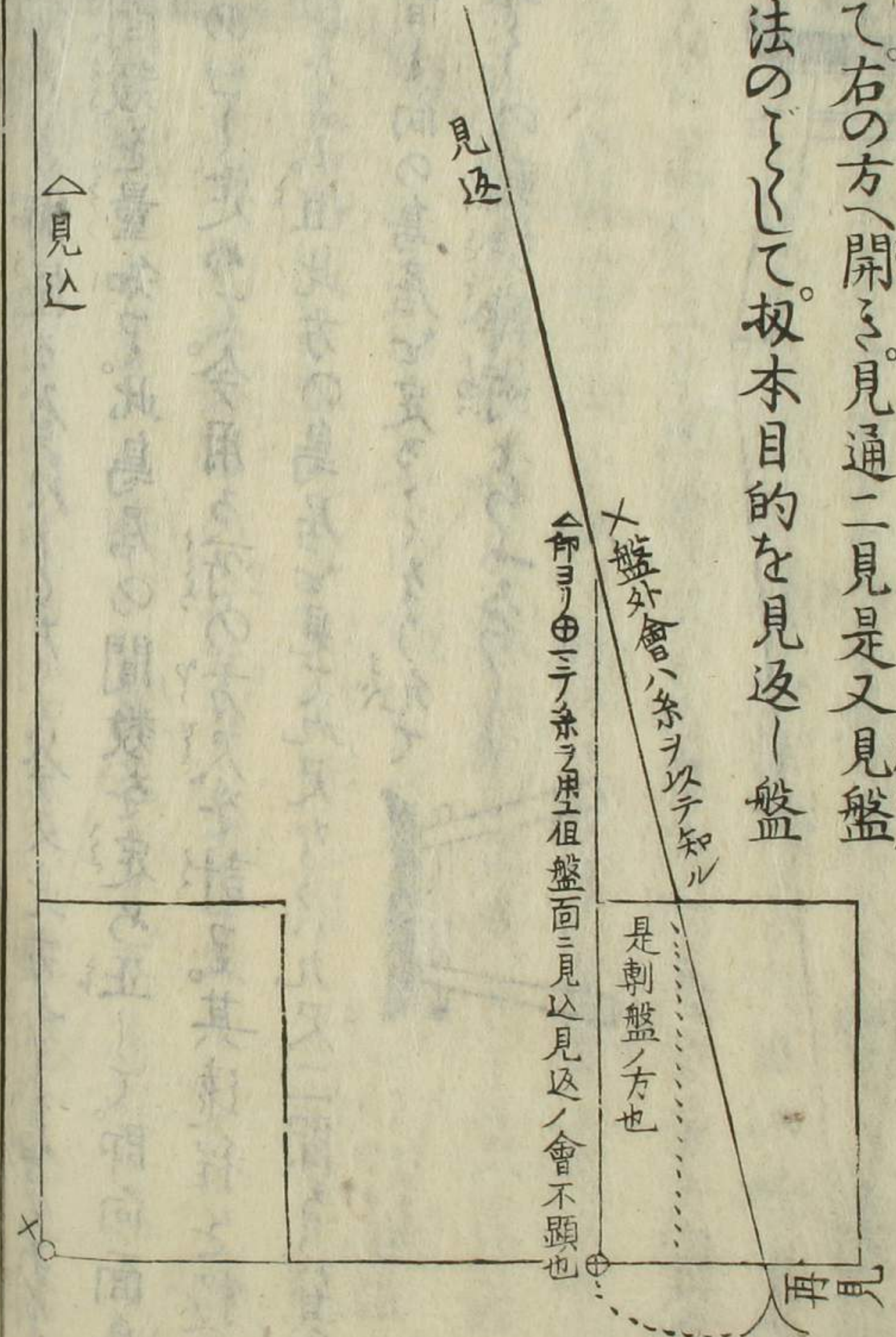
如何と云術極るるなり今又此方小鳥居ありを
其間数を量知る此鳥居の間数を定め正して即向面鳥
居の口と定めて今用る所の方尺を計る其遠程を極め
知らるる但此方の鳥居と見て九尺なりハ九尺二間なり其間
二間と向の鳥居と定るとなり九て
かやりの類機轉術とらるる



三

猿獲

此術も又旧傳小見盤を用て遠里と量ると云
術曰先見盤術作法の如くみて正面の目的を見込開地を
設て右の方へ開く見通二見是又見盤
術法のごとて扱本目的を見返し盤



面は墨線ぞくせんの會出來あきざる小因よて糸を引ひて盤外ばんがいの會を制せいし
是を量るとつゝ委あやしく小因よを見らるべし

昌弘まさひろ曰此術渾發こんぱつ術じゆつの法なり。例れい乃
嗚呼あゝ。詳くわしく小因よを按おずるべし

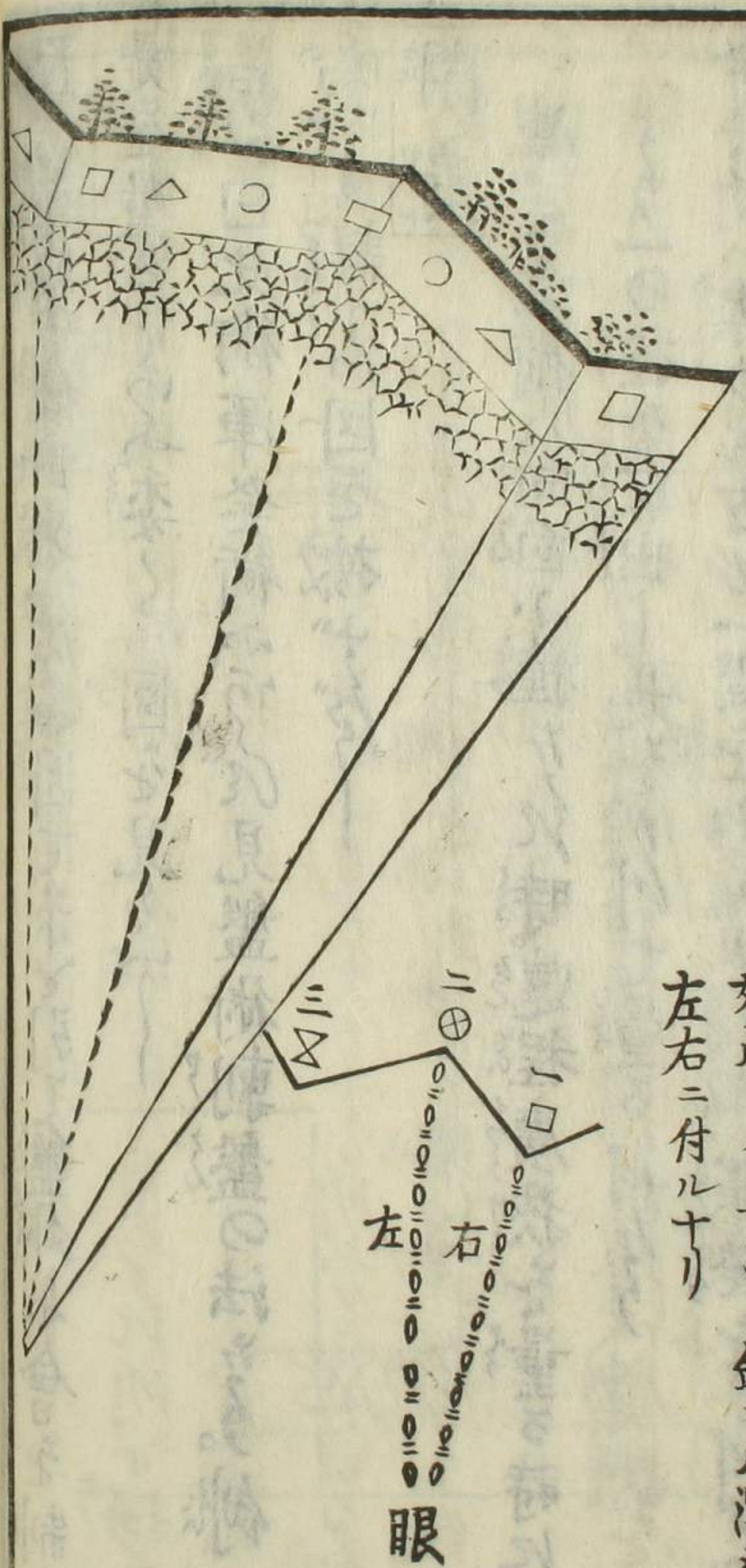
開扇

傳云此術ハ向面むかひ小種こしゆを以もつ時とき遠程えんぢやう廣狹くわうけつを量る時に外
より一の種しゆを取とり出だす。是を以もつて量る術なり

今云所ハ豫あらかめ此方こなたの一間いけんを知しる。扱あ當あ術じゆつの渾發こんぱつを以もつて此
一間いけんを夾くわむ遠えんく浅せん量りやうを以もつて知しる。遠程えんぢやう八間はつけんを以もつて扱あ又また二ふたつ
の分間ぶんけんを以もつて一の場ばの左ひだりの鏢せうを遠えんく八間はつけん計はかりたる鏢せうを右
に付け。二の場ばを斜しやに見みる。充分間ちゆうぶんけんの口くちを残り置のこ。此分間こゝぶんけんの
口くちを以もつて今見いまみる二の場ふたのばの左ひだりの鏢せうを計はかり。幾間いくけん幾尺いくしゃくと知しる

扱あつか二二の場ばへらめり。又三の目的めを見るも二の場の術と同意どういなり。場所何程あやうありとも。是こゝをて候まふる。此術ハ鏢けんと渾こん突とつの左右さうりゆうに付つるなり。

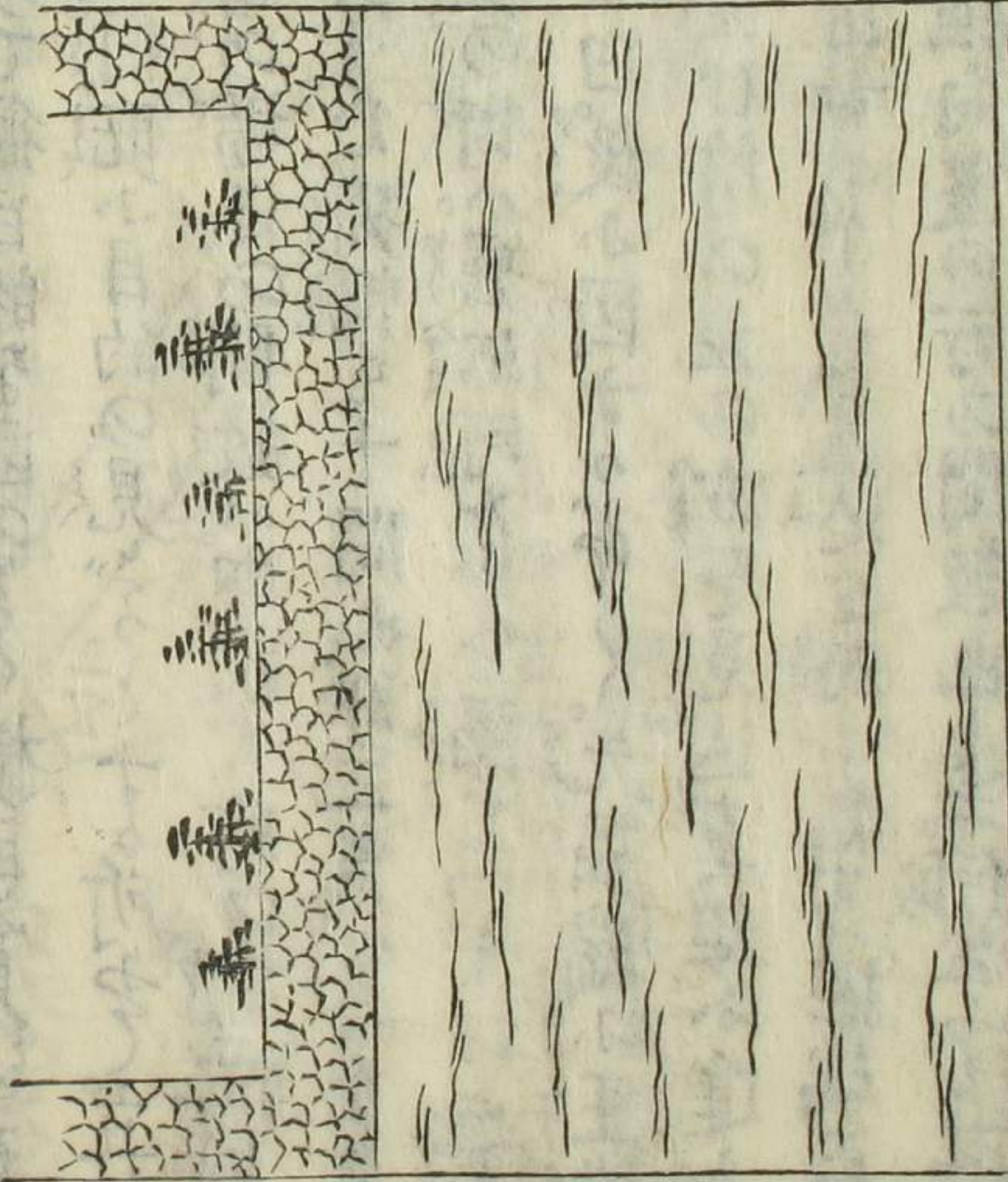
如此二見ル意ナリ鏢ヲハ渾突ノ左右ニ付ルナリ



方鏡

古傳云是ハ堀幅川幅等汝知るの術なり

術曰先堀端ほりはしハ臨のぞむ向の屏いせても石垣いしゐふても目めをる所ところを撰えんで目的め的てき。左眼さがんを以て彼目的かのめを因よづく横目よこめハ見込みこ。真矩まがたハ進すすむ。尻目しりめハ掛かけて行ゆ。既すでハ目的め的てきの見みざるとする所ところをて立留たてどる。初はつの見込みこの場ばより立留たてどる場ば迄の間数かんすうハ即求する所ところの堀幅ほりあなり。假令かじやうハ進すすむ間ま十間じゅうかんあり。堀幅ほりあも十間じゅうかん也。即二角にかくの心こゝろなり。一説いちせつハ曰い此方鏡このかへうきやうの術ハ堀沼河ほりぬまがわを隔へて向方むかひの廣狭ひろせを量はかる術じゆつなり。其法そのはふハ曰い後小図のちのこずする。先堀端まほりはしハ正當せいとうハ立たて。左眼さがんを以て望のぞむ所ところの左ひだりの方かたを見込みこ。真矩まがたハ進すすむ。左方さかたの望のぞむ所ところ。又右みぎの方かたの望のぞむ。見込みこせ。而しかして其堀端そのほりはしハ正當せいとうハ進すすむ。歩数あひすうの間ま即堀向望ほりむかひのぞむ所ところの間数かんすう也。何なんれも其理そのりをき。にわづ然しかども兩様りゆうさうとも。實側じやくせハ正當せいとうの術じゆつハ云いへば。



量地指南後篇卷之五終

跋

享保の季年。量地指南前編二卷と選集一
て。世上に擴む。繼て後編を述作らんとす。諸第
子乃需止まらず。既に許諾の志ありといへども。
公務餘力なく。心の外に黙止す。其後不圖病
疴ふ。罹るに苦惱程久し。卒に痼疾とありて。藥劑
無驗。起臥不遂。因て不得止致仕閑居す。茲に
十有餘年たり。予成童の昔より。武學兵術に癖を

主用繁務の中とくも。此道の一日も不棄し。其
 後病ふ沈む。講習と廢せんと。既ふ右よ云るに。況や
 其他の事藝。量地の小枝をや。誠ふ其術志ふ。4
 似たり。然るふ此頃。奥州乃山岸定則。予の閑隱の扉
 と叩く。量地前編の余意を索る。頻なり。予再三
 病を以て辭ふ。不肯強て請ふ不止。其深切
 他に超へ。其勉強人々勝たり。其為人。此道ふ俊
 發なること。世に又類少し。依て不顧前後點首

志す。直に愚息昌言ふ命し。予の弱冠ふ閱見
 する。彼の是の書五六部は内。前編ふ洩
 たる物を抜萃か。山岸氏に授て。暫く
 其責を塞く。元來此書予の全に編述は。諸
 本の訓詁補す。抜萃か。む。者たるも
 然と。的當に深理あり。幸に人の賞を
 り。予の譽ふ。又猥雜の齟齬。終に世に
 謗らる。予の耻辱を。終に世に謗らる。予の

量地抄再行卷五

覽者は以是をおとこえ

寶曆四甲戌夏六月 村井蘓道子昌弘書



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

